

考古学発掘資料による建物の復原方法に関する基盤的研究

(研究課題番号 10309004)

1998年度～2000年度 科学研究費補助金 (基盤研究A(1)) 研究成果報告書

2001年3月

研究代表者 玉井 哲雄

(千葉大学工学部教授)

千葉大学附属図書館



20001845157



002
KOU
学内図書
二一七

目次

まえがき

玉井 哲雄

I 建物復原の現状と問題点——研究会の記録

- 1. 研究会の主旨説明 玉井 哲雄
- 2. 発掘部材の検討による建物復原 宮本長二郎
- 3. 考古学発掘資料による建物復原 吉岡 泰英
- 4. 質疑応答の記録 討論参加者

II 中世から近世への町家建物
——近畿地方を中心に 研究会の記録

研究会の説明と記録

- 1. 豊臣期大坂城下町の町屋復元 佐久間貴士
- 2. 堺の町と町家 續 伸一郎
- 3. 兵庫津の町並の変遷一 内藤 俊哉
- 4. 市・町の形態と展開—平安京・京都を中心として 堀内 明博
- 5. 質疑応答と議論 討論参加者
- 6. 町家研究会へのコメント 宮武 正登

III 各論

各論の説明

- 1. 「ムラ」の建物、「マチ」の建物 飯村 均
——東国の発掘事例を考える——
- 2. 中世の町における建物復原をめぐって 鈴木 康之
——広島県草戸千軒町遺跡の出土資料から
- 3. 考古学発掘資料による建物復原の現状と課題 吉岡 泰英
- 4. 北東北にみる古代住居跡の一例 高島 成侑
- 5. 先史時代発掘部材による建物復原の試み 中田信一郎
——部材研究会の成果を基に
- 6. 考古学発掘資料による建物復原事例の日英比較 モリス・マーティン

千葉大学附属図書館



20001845157

CONTENTS(English Translation):

- Foreword Tetsuo Tamai
- I The present state of building reconstruction and related problems - record of research meetings
1. Purpose of the research project Tetsuo Tamai
2. Reconstruction of buildings from an examination of excavated fragments Tetsuo Tamai
3. Reconstruction of buildings based on excavated archaeological data—from the example of the mediaeval & early modern site of the Asakura family at Ichijodani— Nagajiro Miyamoto
4. Record of questions and answers Yasuhiro Yoshioka
Participants in debate
- II Vernacular town houses from the mediaeval to the early modern period
—centred on the Kinki region Record of Research meetin
- Explanation and record of research meeting
1. A reconstruction of vernacular town houses in the castle town of Osaka under the Toyotomi Takashi Sakuma
2. The town of Sakai and its vernacular houses Shinichiro Tsuzuki
3. Changes in the streetscape of Hyogo-tsu
—from the results of the 15th investigation of the Hyogo-tsu site Toshiya Naito
4. The form and evolution of town and city - centred on Heian-kyo/Kyoto Akihiro Horiuchi
5. Questions and answers: debate Participants in debate
- III A range of themes
- An explanation of the various papers
1. "village" buildings, "town" buildings
—a consideration of excavated examples in Tohoku—Hitoshi Imura
2. Reconstruction of the buildings of mediaeval towns based on the excavated material form the Kusado Sengen site in Hiroshima prefecture Yasuyuki Suzuki
3. Problems in the reconstruction of buildings based on excavated archaeological data Yasuhide Yoshioka
4. An example of the site of an ancient dwelling in northern Tohoku Seiyu Takashima
5. An attempt to reconstruct buildings based on excavated building material Shinichiro Nakada
6. Reconstruction of lost architecture based on archaeological datas
—A comparison of some examples in Japan and Britain Martin Morris

まえがき

この研究は「考古学発掘資料による建物復原方法に関する基盤的研究」と題し、平成10・11・12の3年度にわたって実施された。研究組織、研究経費、研究目的、そして研究の経過は以下の通りである。

■研究組織

●研究代表者

玉井 哲雄

千葉大学・工学部・教授

●研究分担者

高島 成侑

八戸工業大学・工学部・教授

小野 正敏

国立歴史民俗博物館・考古研究部・助教授
飯村 均

福島県教育庁文化課・主査

河野 眞知郎

鶴見大学・文学部・教授

堀内 明博

古代学協会古代学研究所・助教授

宮本 長二郎

東北芸術工科大学・芸術学部・教授

小泉 和子

愛知県立芸術大学・美術学部・客員教授

モリス マーティン

千葉大学・工学部・助教授

●研究協力者

吉岡 泰英

福井県立若狭歴史民俗資料館・副館長
佐久間 貴士

大阪府教育委員会・文化財保護課・主査
鈴木 康之

広島県立歴史博物館・主任学芸員

その他の研究協力者・研究会参加者は研究経過の項に示した。

■研究経費	平成10年度	8, 100 千円
	平成11年度	3, 800 千円
	平成12年度	3, 900 千円
計		15, 800 千円

■研究目的

近年、各地の都市およびその周辺部の開発にともなう発掘によって様々な遺跡が発見され、縄文・弥生時代から中世・近世にいたるまでの遺跡に含まれる多彩な建物跡が、その復原案とともに注目を集めている。建物の復原案によってその遺跡そのものの性格が大きく左右されるということもあって、考古学発掘資料による建物復原は、ますます重視されているとあってよい。ところが現実には、現場の発掘担当者、ないし限られた研究者によって個別に行われる結果、その復原方法についての研究者相互の十分な議論が行われないうままに復原が進められることが多い。特に最近、各地の発掘にともなう遺跡整備の際に、実物大建物復原の試みがなされるようになってからは、これらの建物復原方法についての学術的な検討は避けて通れない重要な課題となっている。

本研究は、これら建物復原に積極的に取り組むべき建築史研究者が、実際に発掘を担当し、やはり建物復原を重要な課題とする考古学研究者と共同で建物復原方法を、縄文・弥生から今まで比較的研究の及んでいなかった中世・近世にいたる遺跡までをも検討の対象にしようとするものである。

今まで考古学発掘資料による建築史的検討を十分に行ってこなかったという反省にたって、現在までに各地の遺跡で行われてきた建物復原の検討を行って問題点を整理し、次に、膨大な数にのぼる全国の考古学発掘資料の中で、建築遺構にとって重要な資料を収集整理

して、建築史・考古学さらに家具史など分野の違いを越えて共同で分析・考察を行う。実際の発掘現場に足を運んで現場担当者と遺構・遺物の検討を行うことも必要である。このような作業を積み重ねることによって、個別に行われてきた建築史研究者、考古学研究者などの建物復原に関する研究成果を共有できる形にまとめ、さらに、考古学発掘資料による建物復原に関する方法論の基礎を構築することが目的である。

なお、これまでも方法的検討が行われてきた竪穴住居復原や、古代の宮殿関係建物復原が重要であることはもちろんであるが、本研究ではあまり検討が行われていない中世・近世の発掘遺構をもとりあげ、その建築技術の階層性・地域性を重視する立場から、全国各地で実際に建物復原に関与している建築史学、家具史学、考古学の研究者が集まって総合的に分析・考察を行って復原方法そのものの検討から行うとしている。その際、個別の遺跡ないし個々の地域の範囲の考察にとどまりがちであった建物復原方法を、日本列島全体、さらに広く東アジア全体の視野から検討することも必要である。

また、考古学発掘成果の建築史学への援用は、石造ないし煉瓦造の組積造建築が主流であるヨーロッパなどでは古くから行われてきた。しかしながら、地上に見える形で建築が残りにくい木造建築を主流とする東アジアを中心とする伝統的建築の世界では、あまり試みられてきた方法ではない。むしろ、このような考古学発掘資料による復原作業を通じて、木造建築を主流とする東アジアおよび日本の建築の特質を世界に積極的にアピールしていく必要があると考える。

竪穴住居に代表される縄文・弥生の建物については各地で実際に復原が数多く試みられ、また例えば平城京内の建物については、奈良国立文化財研究所が既に様々な形で試みている。これら古代ないしそれ以前の、技術

的な多様性が少なく、階層的ないし地域的差異も認めにくい建物に関しては、その実態について学問的な検討が必要であるものの、一応の復原方法の考え方が定着しているといつてよいだろう。もちろん、近年注目を集めている三内丸山遺跡（青森県）や桜町遺跡（富山県）など縄文期の木材加工技術の再考をうながす遺跡も出現しているし、例えば各地の国分寺・国府関係の建物が、畿内の建築技術そのまま建てられたとは考えられない。まして、中世・近世の城館・城郭・集落・都市などを構成する多彩な建物については、建築技術にどのような階層性・地域性があったのかは十分にあきらかになっているわけではない。

いずれにしろ、各地で実際に進行している建物復原に関する資料を得ることができ、しかもその研究成果を実際の現場の復原などに反映させることが十分可能である。これらの成果は、現実に行進しつつある各地の建物復原作業にとって大きな役割を果たすはずである。

■研究発表

この間の研究成果で学会誌等に発表した主要なものは以下に示した。

●学会誌

玉井哲雄「『清明上河図』と日本の都市景観」
『アジア遊学』11号、1999年

玉井哲雄「都市空間に表現される首都性」

『年報都市史研究』7号、1999年

宮本長二郎「家屋文鏡の建築と機能」『家屋文鏡再読』（日本建築学会）2000年

宮本長二郎「出雲大社古代本殿の建築構造」

『東アジアの古代文化』106号2001年

宮本長二郎「祭殿建築などに見る高度な建築技術の達成」『縄文学の世界』

1999

高島成侑「北東北における古代住居の一例について」八戸工業大学紀要第9号1999

飯村 均「『館跡』『城跡』という遺跡」

『帝京大学山梨文化財研究所』第9集1999

飯村 均「遺跡かたち、都市のかたち—中世

前期の東国—」『中世都市研究6』1999年

鈴木康之「中世瀬戸内をめぐる陶磁器の流通」
『季刊陶磁郎』No.15 1998年

鈴木康之「教科書に登場する遺跡 草戸千軒
町遺跡」『考古学研究』1998年

モリス マーティン「中世政治都市鎌倉の中核部分の計
画の前例と意味」『年報都市史研究』6号、
1998

●著作

河野眞知郎「中世都市鎌倉の成立—源氏の都
市と北条氏の都市—」佐藤和彦・錦昭江編
『北条時宗の時代』（河出書房新社）2000年

河野眞知郎「ある郎等の鎌倉暮らし」石井進
編『物語日本列島に生きた人たち・2・遺跡
下』（岩波書店）2000年12月 p58-96

飯村均「Ⅱ村と町」「Ⅲ城と館」「Ⅳ生産と技
術」『図解 日本の中世遺跡』2001年

■研究経過

3年間にわたって発掘現場を中心とする各
地の現場を訪れ、担当者との議論を行った。
その経過は 表1 研究経過一覧 に示した。

また随時研究会を開いたが、その中で主要
なもの研究テーマおよび研究会参加者名は
以下の通りである。この中で1. と4. につ
いては質疑討論内容も含めて本報告書ⅠとⅡ
に収載した。またⅢ各論の内容もこれらの研
究会で報告した内容、もしくは討論した内容
が基になったものである。

1. 1998年9月25日(金)

テーマ：建物復原の現状と問題点

場所：生活史研究所(東京都)

参加者名 玉井哲雄 高島成侑 飯村均

河野眞知郎 堀内明博 宮本長二郎

小泉和子 吉岡泰英 モリス マーティン

佐久間貴士 鈴木康之

2. 1999年1月23日(土)

テーマ：研究討論

コンピュータグラフィックによる建物復原の可能性

場所：古代学協会(京都市)

参加者名 玉井哲雄 高島成侑 飯村均

堀内明博 宮本長二郎 モリス マーティン

吉岡泰英 鈴木康之 佐久間貴士

河野眞知郎

特別参加 大上 直樹

(滋賀職業能力開発短期大学・住居環境科)

3. 1999年10月16日(土)

テーマ：惣利遺跡部材の検討

場所：惣利遺跡整理事務所

(福岡県朝倉郡夜須町)

参加者名 玉井哲雄 高島成侑 飯村均

堀内明博 宮本長二郎 吉岡泰英

特別参加

宮武正登(佐賀県立肥前名護屋城博物館)、

渡辺晶(財団法人竹中大工道具館)

石井扶美子(夜須町教育委員会)

4. 1999年11月27日(土)

テーマ：近畿地方の町家

——中世から近世への転換

(町家研究会)

場所：古代学協会古代学研究所(京都市)

参加者名 玉井哲雄 高島成侑 小野正敏

飯村均 堀内明博 モリス マーティン 吉岡泰英

佐久間貴士

特別参加者

續伸一郎(堺市立埋蔵文化財センター)

内藤俊哉(神戸市教育委員会文化財課)

宮武正登(佐賀県立肥前名護屋城博物館)

5. 2000年11月25日(土)

テーマ：草戸千軒遺跡発掘資料の検討

場所：広島県立歴史博物館

参加者名 玉井哲雄 高島成侑 飯村均

河野眞知郎 堀内明博 小泉和子 吉岡泰英
カス マーティン 佐久間貴士 鈴木康之

6. 2000年12月16日(土)

テーマ：研究討論

場所：古代学協会古代学研究所(京都市)

参加者名 玉井哲雄 高島成侑 飯村均

カス マーティン 吉岡泰英 鈴木康之

特別参加

岡田雅人(草津市教育委員会文化財保護課)

坂本??(中主町教育委員会)

長谷川??(古代学協会)

■謝辞

上記研究経過で協力していただいた方々の
名前(敬称略)を列記して感謝したい。

●1998年度

広島県では小都隆(広島県教育委員会文化課
中世遺跡調査研究室)三浦正幸(広島大学文
学部文化財学科)、十三湊では鈴木和子(青
森県教育委員会文化課)、榊原滋高(市浦村
教育委員会)、野木遺跡では中嶋友文(青森
県埋蔵文化財調査センター)、肥前名護屋城
では宮武正登(佐賀県立肥前名護屋城博物館
学芸員)、吉野ヶ里遺跡では七田忠昭(佐賀
県教育委員会文化財課吉野ヶ里遺跡保存対策
室)、惣利遺跡では石井扶美子(福岡県夜須
町教育委員会社会教育課文化財係)、沖縄県
竹富町では仲盛敦(竹富町教育委員会)、石
垣市では下地傑(石垣市教育委員会文化課文
化財係)の方々。

●1999年度

荒井猫田遺跡では高田勝(財団法人郡山市埋
蔵文化財発掘調査事業団)、勝尾城遺跡では
石橋新次、鹿田昌宏(鳥栖市教育委員会社会
教育課文化財係)、惣利遺跡では石井扶美子
(福岡県夜須町教育委員会社会教育課文化財
係)、湯築城遺跡では中野良一、柴田圭子(財
団法人愛媛県埋蔵文化財センター)、豊後府
内では 木村幾太郎(大分歴史資料館館長)

吉田寛(大分県教育庁文化課文化財資料室)
高島豊(大分市教育委員会文化財室)、伊仙
町では義憲和(伊仙町歴史民俗資料館館長)
笠利町では中山清美(笠利町歴史民俗資料館)、
宇検村では名越健一(鹿児島県宇検村教育委
員会社会教育課長)、瀬戸内町では町健次郎
(瀬戸内町立図書館・郷土館)の方々。

●2000年度

出雲大社では池淵俊一(島根県教育庁文化財
課)、福山城では園尾裕(福山城博物館)、
沖縄では前原信達(都市科学政策研究所)、
安里進(浦添市教育委員会)、上江洲均(名桜
大学)の方々。

この他にも多数の方々の協力を得た。あら
ためて感謝の意を表しておきたい。

■研究成果と本報告書の内容について

この報告書は3年間の研究成果を2000年度
末の時点でまとめたものである。個々の内容
とその背景を簡単に説明する。

「第1章 建物復原の現状と問題点」

共同研究を始めるに当たり、基本的な問題
点の確認と方針を定めるために1998年9月25
日に開いた研究会の記録である。玉井哲雄に
よる基本方針の説明と、テーマの柱とした「先
史時代の発掘部材の検討による建物復原」に
ついての宮本長二郎報告、「中世・近世の発
掘遺構による建物復原」についての吉岡泰英
報告があり、質疑応答、討論が行われた。建
築史学の立場からの説明に対して、主に考古
学の立場からの質問、問題点の指摘があり、
建築史が対応しないし反論するという経過で
あった。

ここで論じられた二つのテーマは、建築史
学にとっても、また考古学を含む広い分野に
おいても近年話題になっている現実の問題に
直結しており、以後のこの研究会もこの二つ
のテーマに即して調査対象を選び、研究討論

のテーマを設定した。

この最初の研究会で論じられた内容は、その後の研究会活動の指針になったのみならず、今後のこの分野における研究課題についての方向性を与える重要な契機を含んでいると考え、この報告書に収載した。

「第2章 中世から近世の町家建物——近畿地方を中心に」

中世・近世の発掘事例としては、京都・大坂・堺・兵庫など近畿地方の都市に関する発掘遺構が多く、また関連の発掘資料が蓄積されている。都市の重要な構成要素であり、建築史学の立場から見ても重要な研究対象である町家を取り上げて、考古学発掘データによって町家がどこまであきらかにできるのかを試みた佐久間貴士コーディネートによる研究会の記録を収載した。

各地の城下町を中心とする近世都市の成立過程で都市の屋敷割と町家建物の関係がどのように形成されたかは都市史においても重要なテーマであり、当日は貴重な事例報告による熱心な討論が行われた。

報告者は、京都一円の発掘現場を長く担当してきた堀内明博、大坂城下町の発掘を担当してきた佐久間貴士の研究分担者以外に、協力者として、堺の現場経験豊富な續伸一郎氏、兵庫の現場を担当した内藤俊哉氏に報告者に加わっていただいた。さらに佐賀県肥前名護屋城で現場を担当している宮武正登氏にも参加していただいた。

ここに収載した報告内容は当日の発表のテープ起こしを基に修正、ないし大幅に書き直していただいたものである。質疑応答の部分はテープの内容を基に玉井哲雄の責任で編集したもので、当日の白熱した議論の一部分を伝えている。

なお、当日の議論でも積極的に発言していただいた宮武正登氏には全体的な内容についてのコメントをいただいた。

「第3章 各論」

研究会の発掘現場で現場担当者と討論し、また研究会の場で議論した内容の中で、重要が内容については研究分担者に論文の内容でまとめていただいた。

飯村均、鈴木康之、高島成侑各氏の論文は、いずれも研究会の場で報告された内容を基にまとめていただいたものでいずれも事例報告としても、また研究論文としても貴重な内容である。吉岡泰英氏の論文はIの報告の内容を受けてあらためて考えをまとめられたものであり、内容的には重複した部分があるが、研究会全体のテーマにもかかわる内容を含んでいるので収載した。

研究過程で福岡県夜須町の惣利遺跡現場整理事務所に2回うかがっている。特に2回目には石井扶美子氏の協力の下、宮本長二郎氏を中心に水槽に収蔵されている発掘部材を取り出して詳細な検討を行った。ただ現時点で、研究成果をまとめることが困難であったため、当日の研究会に参加して実測記録をとり、研究討論の内容を基に千葉大学卒業論文をまとめた中田信一郎（千葉大学学生）の卒業論文の一部を指導教員玉井哲雄の責任で収載した。この論文は当日の多彩な議論の内容の一部をかなり忠実に伝えていると考える。

最後に、研究分担者であるモリス・マーティン氏に発掘・整備現場の経験、研究討論の内容に触発されて考えた日本とイギリスの建物復原事例の比較を論文にさせていただいた。今回の研究会は日本列島内に対象を限定したが、テーマとしては全地球的に普遍的な内容を含むものであり、今後国際的な比較研究がさらに重要になるはずであり、その準備作業としての意味もあると思われる。

I 建物復原の現状と問題点 ——研究会の記録

1998年9月25日（金）に第1回の研究会を生活史研究所で行った。

当日の報告者は

玉井哲雄 宮本長二郎 吉岡泰英

質疑討論の参加者は

高島成侑 飯村均 堀内明博 佐久間貴士

鈴木康之 小泉和子 モリス・マティン

他に

高杉論吏 斎藤知恵子 平野裕丈（いずれも千葉大学大学院生）が参加した。

報告内容は以下の通りである。

1. 科研全体方針の説明

研究会の主旨説明 玉井哲雄

2. 発掘部材の検討による建物復原

宮本長二郎

3. 考古学発掘資料による建物の復原

—中近世一乗谷朝倉氏遺跡の実例から—

吉岡 泰英

4. 質疑応答・討論

5. 研究の可能性についての意見交換・討議

報告についてはテープ起こしを基に作成した原稿を報告者が訂正・修正した内容であり、質疑応答部分については同じくテープ起こしを基に玉井哲雄の責任で編集構成した。図版も当日のレジメ資料を基に玉井哲雄の責任で編集再構成している。

なお、平野裕丈（千葉大学大学院生）、長川良宣（千葉大学学生）がテープ起こしを分担した。

1. 研究会の主旨説明

玉井哲雄

文部省科学研究費補助金による『考古発掘資料による建物の復原方法に関する基盤的研究』という申請を、三年前から始めました。本年から採択されて、今日から本格的に研究に取りかかるということで集まっていたきました。

私の専門は建築史ですけれども、建築史の立場からみても、最近、考古学的な発掘資料、例えば建築部材や礎石、そして掘立柱の柱穴など、建築史にとって重要な資料がたくさん出てきています。しかし、それらに関して、従来、建築史の側は学問的に必ずしも十分対応出来ていないという現状があります。そこで何とか対応する方法を考えなくてはならないと考えてこの科研の申請をしました。

その時に建築史の側の何人かの研究者、それから、建築史の立場に関心を示して下さっている、有力な考古学の研究者の方々に参加して頂いて、建築史と考古学の両方の立場から、考古学発掘資料から出ている建物の復原そのものないし復原方法を検討しなければいけないと考えました。それで、今日お集まりいただいたメンバーに参加をお願いしました。

おそらく同じ内容ないし同様の主旨のテーマを考えた研究、ないし研究会は既にいろいろとあると思います。したがって、この研究会の独自性をどこに求めていくのかももう少し検討する必要があると思っています。今の私の考えは、出来る限りそれぞれの立場などにこだわらずに自由に、建築史それから考古学の現状、表も裏も含めて現状を踏まえて、建物の復原方法を考えていただきたいと思えます。またそのようなことのできるメンバーが集まっていると思います。

まず今日が研究会として最初ですので、研究代表者として私が考えていた事を簡単に説明させて頂いて、あと宮本長二郎さん、それから吉岡泰英さんに、研究報告をお願いします。その後で、質疑、そして皆さんと意見を交換して今後の方針を決めたいと思います。

私は研究テーマとして二つの柱を立てました。一つは、古い時代を扱います。縄文とか弥生とかといわれている、歴史時代に入る前の古い時代の建築部材、発掘遺構から出てきている様々の建築関係資料、主にそういう物を使って、古い時代の建築を復原していく方法を一つのテーマにしていかなければいけないと考えました。これは、ここにいらっしゃる宮本長二郎さんが既にや精力的に研究を進めていらっしゃるようです。ただ、現状から言うと、宮本さんのやってらっしゃる復原方法ないし復原の成果というものが、建築史研究者の中で必ずしも十分受け入れられているわけではないような気がします。私は宮本さんのやっていらっしゃる研究成果を建築史学の立場で正当に評価しなければいけないと考えています。そこで宮本さんには出来る限り、具体的な資料事例に則した形で話をうかがって、その方法を出来る限り学びたい。なおかつ、その内容を継承し、さらにそれを研究者のみならず広く一般の人たちにも広げていかなければいけないというのが一つです。

もう一つは、もう少し新しい時代を扱います。最近盛んになってきている、中世ないし近世の発掘遺構から建物を復原していこうという現実的な動きを題材にしたいと考えています。各地の遺跡で、復原建物がどんどん建てられているという現実があります。そのような動きに対して建築史学の立場でどの様に対応していくか考えなくてはなりません。もちろん、発掘遺構に関する解釈とか発掘遺構から建物を復原していく具体的なプロセスとか、そういう基本的な問題があります。

それからこの場合には、建物が実際に作られるわけですからより現実的に、社会的な意味も持ってきます。そういう事まで新たに視野に入れながら考えていかなければいけないという事があります。そちらの方もこの研究テーマとしてあると考えています。

恐らくこの二つのテーマからいろいろな形で問題が派生していくと思いますが、そういう事はここで色々議論させて頂いて、考えていきたいと思っています。

最初の研究である今日は私が考えた二つの柱に対応する、宮本さんの報告と、それから吉岡さんの報告をまずはお聞かせ頂いて、その後で色々皆さん議論をして頂いて、今後の計画方針を立てたいと思っています。前置きですので、簡単に終わらせて頂きます。では、宮本さん吉岡さんの順序で話をして頂きます。

2. 発掘部材の検討による建物復原

宮本長二郎

私の仕事は考古学の発掘資料を使って、考古学の研究者相手に話す機会の方が多いので、考古学の方には評価されていますが、建築史の方では評価する人は少ないようです。私の研究は境界領域ですので、評価しにくいということが一つの理由です。また、建築部材発掘遺構という面で、それらの評価付けを行い、建築の歴史を組み立てるという作業ですから、そういった資料が報告書として出るのが短くても2～3年、長いと10年以上掛かることがあります。したがって私の使っている資料の殆どが未報告で、そういう意味でもなかなか評価しにくい。ともかく私の役割は最新の情報をいち早く伝えることにあると考えています。

ここでは発掘資料に関する考え方を、①から⑩まで区分けをして、発掘遺構や建築部材を見る時のチェックポイントとしてお話しします。

①埋蔵建築部材の種類

縄文から古墳時代、奈良、平安時代までの建築部材で、炭化した形で出てくる焼失竪穴住居は竪穴住居を復元するための有力な材料です。加工木材については、時代的には弥生時代後期から古墳時代前期にかけての出土材が特に多く、この時期は災害が多かった時期と思われれます。また、この時期に新しい、構造的、意匠的に大きく変わる事が加工木材から窺えます。

五平(ごひら)材というものがあります。これは、縦と横が1：2ほどの長方形断面の材のことで、古墳時代までの角材は五平材が多い。そして丸太材、半割丸太材、板材の大形材が建築の主要部材です。その他建築に関わるものでは、屋根材、壁材としての草や樹皮

があります。草では葦、茅、クマザサなど、樹皮は檜・杉・栗・樺が出土しています。

②出土状況

建物が倒壊、あるいは火災焼失の場合、そのままの状況から、構造・平面の状況が分かることが多い。高床建築で貴重なのは、第二次大戦中から戦後にかけて発掘調査された登呂遺跡です。高床建物が一棟、倒壊した状況で発見されています。ただ残念ながらを収納した倉庫が焼失してしまい、写真だけ残されて、今の登呂の高床が復原出来たのです。

倒壊例は少ないですが、シラス洪水や火山灰による埋没住居例は数例あります。災害等により河川や沼に堆積した材。それから転用材、建物の廃材としては、井戸枠や溝の堰材、掘立柱下の沈下防止の為の礎盤、水田畦畔の下に廃材を敷き並べる地下地業(ちかじぎょう)などに利用されています。最近特に有名になったのでは、縄文時代の桜町遺跡の水場遺構です(図3参考資料参照)。

建築部材は、建築材として何回も使われることも特徴です。例えば、台輪なんか裏返して使い、表に2回、裏返して2回、都合4回位使ったりしています。そういう、一本の材に何回も痕跡がある例は時代が新しく、奈良・平安時代になるとそういった例が多いです。

③部材の形状

転用材は元の形を残していないので、部材形状の復原を行なわなくてははいけません。柱材は半割、四ツ割、みかん割、など板取する例が多い。角材の場合は加工面と割れ面の区別がつき、その状況に応じて、半割か四つ割かを判断します。それから、繊維と直角方向に分断する場合は2分割、3分割、あるいは細分割など転用する時の長さに応じて、等分割する例が多い。自然災害等による折損の場合、広葉樹だと、断面が非常にきれいに折れ

るので、ホゾの折損を見落とすことが多い。人為的に分割する場合は、斧で切断した先端が尖頭状になって、そのまま杭材として使う場合もあるが、加工材の場合は、尖った部分を削り取って、面を残す例が多い。転用時の分割材か、当初の仕事として実際に生きているかの判断は切口の精度でつけることができます。

部材の状況で多いのは、腐食・腐朽です。水と酸素による腐朽菌の繁殖によって、木はすぐに腐ってしまうので、水と空気に同時にさらされる場所では、木は残らない。ですから、地下水下に埋まっている部材は、そこに置かれた時期以降の腐食はないという事です。虫害や風蝕など建物が使われていた時とその後の転用時腐蝕の状況を見極めながら、元の部材の形状を、正確に判断しなければなりません。

④樹種の同定

木の種類の同定です。縄文時代以後の各時代を通して、建築材はクリ・クヌギ・コナラ等、広葉樹が主です。クリ材は柱、桁、梁などの主要材に使われ、垂木とか小舞には、クヌギ・コナラとか、集落周辺の広葉樹を使っています。弥生時代に入ると、スギ・ヒノキが弥生の環濠集落、古墳時代の豪族居館に使われます。

弥生時代以降、鉄器が各地方首長層に専有される形で普及します。スギ・ヒノキ・マツなどの針葉樹は鉄器でないと切れない。鉄器でも常に研ぎながら使わないと、針葉樹は切れないので、縄文から弥生中期にかけて石器が主流の時は広葉樹が使われていたのです。奈良・平安時代以後でもそうですが、材の加工は、現在のように乾燥させてから行う事はまずない。伐採後1週間以上おくと皮は剥ぎ難くなるので、針葉樹も広葉樹も同様に、まず山で皮を剥ぎ、製品としての長さを揃える。生木で加工すると、石器は鉄器と殆ど変わら

ずに、広葉樹の場合は削ったり切断したり出来るので、木が乾燥する前に仕事をするのが事実らしいという事です。

材の表面仕上げに蛤手斧を使いますが、削った表面仕上げを見て、鉄器と石器の見極めはつきません。弥生の中期位までは、両方使われていますから。表面仕上げで見分けるのは難しいが、ホゾ穴などの仕口では明らかに鉄器と石器の差は認められる。

樹種の使い方の違いに、時代差あるいは工具の差以外に、建物格差がある。環濠集落や豪族居館の大型建物では太いスギ・ヒノキを柱材に使っている。同時代の農村集落の場合は、クリ・クヌギ・コナラなどの広葉樹を建材としている。鉄器が普及したといえども、一般集落ではそういったもので依然広葉樹は中・近世広く使われていた様です。

部位による樹種の使い分けは中世以降にかなりはっきりしています。例えば土台にマツやケヤキ、梁はマツとかの使い分けは、奈良時代以前は、今のところはっきりしていない。恐らくそういう使い分けも弥生時代位までは遡る可能性はあると思います。

⑤痕跡の復原

一本の材を何回も使う場合、仕口痕跡が幾つもある、形式を変える事が多い。そういった場合、2次以降の仕口の仕口が汚くて、最初の仕口がきれいです。そういった事は、修復建築家の間では常識です。ただ、2回目以降の新旧は仕口からは分からない。材が乾燥した後は、鉄器を使っても非常に切りにくいので、仕口が汚くなる、少なくとも当初の仕口か、その後の仕口かという仕分けが必要です。

それから、よく見落とすのは、風蝕差と当り痕跡です。2本の材が接触している場合に材が接触している事によって、風の当たる面と当たらない面の風蝕差が出て材の断面が分かる。また土台や壁板などの場合、家の外側

に向いているのか内側かは、材側面の風蝕差で決まる。材の上面か裏面かについても一般的に、上面は風蝕が大きく、裏面は少ないと言える。ただし、風蝕差は、2次転用以降の風蝕差が、腐食と間違えやすいので、注意する必要があります。

⑥表面仕上げと工具

表面の仕上げは樹皮を剥いた状態の面皮で使っているもの、蛤手斧で仕上げたもの、更に槍鉋で細かく仕上げたものがあります。角材の場合は、面を取る例が多い。材端部を直角に切り落とす例は全くないという事はないが、面を取る例が、建築材の場合多い。

仕口の仕上げは相欠仕口の場合、入隅部に鋸目が残る場合と、ノミの跡が残る場合がある。弥生後期の材で鋸目が残る例がある。鋸は古墳前期以降に、古墳に納められた形で残っていますが、建築材では鋸目として、鋸の存在が分かる。材端部にはノミのあたりでホゾの痕跡が残される場合がある。広葉樹のホゾのない普通の丸太と思わずに、よく木口を精査しないと見過ごしやすい。

⑦部材の建築形式

部材の形あるいは仕口の状況等から、建築部材がどういう建築を造っていたかという事です。炭化部材の場合は、殆どが堅穴住居で、土葺堅穴住居の場合は、建築部材の残りが良く、草葺屋根の場合は、部材が残りが悪い。草屋根や壁立式の堅穴住居の草壁は火災中の上昇気流で、飛散してしまうという状況があります。焼失住居社から垂木、桁、梁などの太い材の断片しか残さないものは草葺屋根だという事です。逆に非常に垂木の残りが良く、垂木の配列間隔が狭く、垂木上部の桁の位置の垂木間隔が殆ど接して、裾の方はせいぜい20cmほどの間隔しか空いてないもので焼土を垂木の間を含む例は土葺屋根です。この場合は草束を垂木と直行する方向に敷き並べ

て、その上に土を葺く例が古墳時代にあります。

土葺住居というのは、弥生時代以後、全国的に分布しているという事が、最近の報告例で明らかになりつつあります。富山県の弥生後期の下老子笹川遺跡の、直径10mの土葺平地住居は沖積平野微高地にあり、住居のまわりに壕をもつ、いわゆる周溝式平地住居です。北陸に多い住居形式で、焼失住居社の直径が10mもある大形のため、柱配置が二重になっています。柱から内側の床中央部は炭化材がなく、柱が二重にめぐる部分には垂木と焼土が多いことから、屋根上半部を草葺、下半部を土葺とする二段伏屋式平地住居に復元できます。弥生後期の大型平地住居に土葺があるというのは意外です。土葺は中世にもあり、一貫して、日本の住居形式の一部分を占めていたということです。

加工木材による建築部材は高床建築が多い。縄文時代の高床建築は、いわゆる祭殿建築として拠点集落に出現し、拠点集落以外では高床の住居集落として北陸地方では、縄文時代後期から晩期にかけて存在する。弥生時代には、その傾向が続いて、弥生中期にかけて、高床集落が沖積平野や河岸などの低地に営まれる。稲作の普及に伴う高床倉庫と、環壕集落や豪族居館の高床祭殿として普及します。これに対して平屋建物にも大型の住居や祭殿建築があるけれども、平屋と違って、二階部分を造るために精度を高く仕上げ、仕口も多いのが高床建築の特徴です。また、高床の建築は、沖積平野や河岸に立地している場合が多いため、台風、大雨、鉄砲水で流されやすい。それから、高床建築の場合は、太い柱と細い柱、規模の大小などバラエティに富み、軸部形式の違いから、高床建物は、5種類に分類できます。

⑧部材の認定

部材の形状、或いは仕口によって、どうい

う材であったのかが分かる訳ですが、現時点でどのようなものがあるかという、縄文時代は桜町遺跡からの出土例が特出しています。桜町遺跡は、約4000年前（縄文終期末）の川の堆積中、或いは川岸の水場で使われていた2次転用材で、柱、桁、梁、棟木、壁板、床板、壁板、屋根などが出土している。桁は丸桁と平桁があり、弥生時代、同じように平桁が出ています。それからは、桁は梁と直行して組み合わせる同じ断面の材で、組み合わせ部分で相欠仕口の中央にホゾ穴がある形状です。

仕口としては貫ホゾ、穴は大入ホゾ、柱を抜き通しているために貫穴かホゾ穴か分からないが、穴の大きさからみてホゾだと思われます。これに対して、ホゾ穴が貫通していない大入ホゾ穴で、縦15cm、横7cm、深さ7cm位の大きさのものがああります。棧穴は壁の横材を受ける浅くて小さい穴です。渡腮（わたりあご）仕口は丸桁でクロスする梁を受ける桁の仕口で、対応する梁は欠込仕口が付く。輪羅込仕口というのは束の下端、柱の上端の中央をくり抜いて、横材を受ける、或いは横材に渡し掛ける仕口、樋布倉矧は横板壁の板と板の合わせ目に、鑄形の凹凸をつけるのを言い、矧合わせは材と材の側面同士を合わせる事を言います。

目途穴は材の角や平面に二つの穴の両方からノミで突いて、縄掛りを作るものです。弥生時代以後は柱の下端部の上面、或いは五平桁の角に設けます。10世紀位、法隆寺の大講堂の桁下端に設けるのが一番新しい例です。復原でこれをやれと言われるとなかなか難しく、釘で打ったりして見える所にそれらしく作ることが多い。

弥生時代以後は縄文時代の仕口の加工精度は鉄器で良くなる。角柱は後期後半にならないと出てこないのですが、台輪で、上屋の角、下屋の丸柱、分ける構造が発生します。登呂遺跡では、円柱から五平の柱を造り出す形式

で、角柱の下に太い長ホゾを造り出して、台輪を置いて下の丸柱のホゾ穴に差し込む形式が成立します。鼠返し円盤の中央の穴が、弥生後期前半まで五平形で、後半になるとホゾが大きくなる。つまり造出柱型から角柱長ホゾ型に変わる構造上の変化を示します。平屋で角柱はまだ出てない、桁と梁に丸・平が存在するのは縄文時代と同じです。

棟木は丸太だけでなくこういう半円形、三角形断面が、弥生・古墳時代に出現する縄文時代は出現してないもので、扉口材が非常に多い。窓材では板葺があり、扉と間違えるケースが多い、扉と葺の違い、扉の上・下軸の長さ比が大体2：1、葺の軸は同じ長さでしかも長い。扉は建て込みではなくて後でつり込むので、だから必ずつり込んだ後に、下軸の長さだけの隙間が扉上部に生じる。これを塞ぐ為に？の板材の断面をT字形に突起を造る。蹴放しには突起がない。だから突起の有無で？か蹴放しかの違いが分かります。扉板は2種類あって、門穴付き把手のあるのは両開き、無いのは片開きです。西日本に出土例が多く、北限では仙台で弥生時代中期の未完成品が出土しています。縄文時代の仕口は全部弥生以後にある。弥生時代で出現するのは板溝で小穴とも言い、相対する柱の側面に溝を穿ち、柱の上から横板を落とし込み、板壁を造る。横板の場合は木裏材を木表材で反りが異なるために交互に壁板を重ね、矧合わせ面に雇ホゾを入れたり、樋布倉矧（ひふくらはぎ）にする。三刃矧は板の合わせ面が傾斜しているもので、横板壁と両開扉に例があります。板壁の時には穴を開けて縄で括って反らないようにする。鼻栓・込栓・吸付棧・蟻ホゾ、は机などの、家具調度品に使われ、込栓のみ床大引材の柱仕口に使用例があり、他は建築に使っていた可能性があるかもしれませんが。

⑨具体的復原

以上は個々の建築部材を見る時の予備知識です。こういった材料を用いてどのようにして具体的復原するかですが、私の場合は韓国、中国の南方、或いは東南アジアです。タイ・インドネシア・フィリピン辺りの、現存の少数民族建築が参考になります。稲作文化圏としてこの2000年以來、日本も含めて共通のディテールを持っていたようで、特に高床建築に関しては2000年前のわが国のディテール、全体の形は分からないが、少なくとも仕口形式や平桁、平梁は2000年前の日本と変わらない。それから2000年前から1000年前の日本も含めた各国の建築を描いた絵画やレリーフ、家形埴輪を含めたそういった家形の土製品、石製品・金属製品があります。奈良時代の建築は丸ホゾで、平安時代になると角ホゾに変わる。確かに現存の建築ではそうですが、縄文・弥生・古墳時代に平桁・平梁があって、それに伴って角ホゾ・平ホゾが使われ、丸ホゾを使っていない。平桁・平梁、角ホゾ・平ホゾというのは、南方に現在も分布していて、これを南方系とすれば、丸桁・梁、丸ホゾは、確かに奈良時代は北魏・隋・唐、という大陸の北方文化を取り入れて使っているのだから、北方系の可能性があります。縄文時代以來そういった南北の文化が交流して常に日本に入ってきている。そういった外来文化との関わりも常に考えることが、日本の建築を考えるには必要で、それは古代に限らず中世、近世までそうだとはいえます。

⑩発掘遺構

私は復原する時に、一番重視しているのはこの項です。まず建物の復原をする必要があるかどうか、必ず施主があって我々デザイナーがいる、これは今の建築界も同じです。デザイナーは施主の言いなりという場合もあります。市町村、都道府県が施主になる事が多いんですけど、施主がただ経済効果だけ、或

いは立派に復原したいために、デザインにも注文をつける。恐らく、堅穴住居の復原の場合、私が“これは恐らく土葺ですよ”って言うと多分ノーと言う施主が多いはず。日本人的な考え方をすると土葺の文化は廃れているから。だから復原に当たっての理念、或いは原理・原則といったものを施主側もデザイナーも、はっきりさせてないといけない。

それから施主側から出てくる遺構平面図を貰ってデザインする訳ですが、私はそれを信用しない、それは確かに失礼ですけども、調査者と直に話して、トコトン疑問をぶつけて、実際には遺構として図面として出てなくても、これは後の攪乱で柱穴が無くなっている場合とか、遺構面の残りが良くても“この場所の土は見やすいか？”“いやっ、見にくいです”“じゃあ見落とした可能性は？”“あります”“じゃあここに柱を立てよう”って事になる。ここに柱がないと建物が建たない時に、我々が判断するのは構造ですから、その辺が考古屋さんと違うところです。

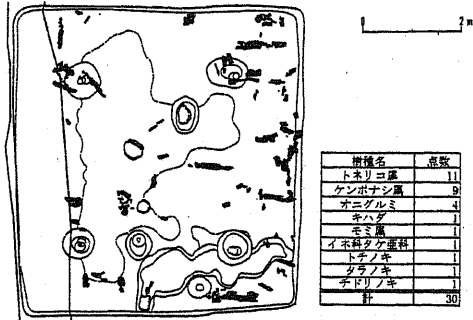
次に遺構の解釈で、掘立柱の建物があるとすると、それが集落の中でどの様な位置付けになるかという事ですね、祭殿も高床倉庫も全く柱配置が同じで、ただ、集落内の位置関係や、建物が大きく特に柱が太いとか、或いは周りに祭祀的な遺構・遺物があって、その関連で性格付けをするなど、集落全体の変遷と個々の遺構の機能を突き詰めて考えないと個々の復原は無理です。実際に設計に入る段階で、元の地形の復原をする必要がある。例えば遺構の柱痕跡が当初は1m位あったのが盛土部分の流失とか、或いは現代の削平で浅く残る例が部分的にしる常にある。傾斜面の場合、柱穴底部のレベルが同じだと旧地平面も水平になる。また、傾斜地を切り土、盛り土を行い、テラスを造成して床面にする場合は、まず100%盛土部分は流失している。こうして元の地表面を復原して、柱穴の深さを復原し、建物高さを想定します。柱穴の深さ

が1に対して地上柱高は少なくとも3倍はある。私が設計した経験上と、江戸時代の木割書でも、根入れの3倍に高さを取るというのがあって、これは力学的に合理的な基準だと思います。それから柱の太さは柱穴深さと柱と柱のスパンに比例します。

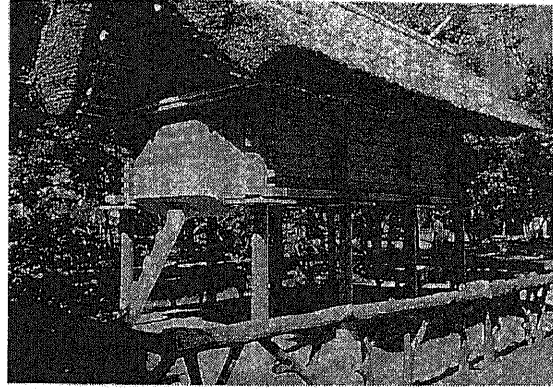
⑪建築遺構の変遷

図1 住居建築変遷図は一万数千年を横軸にしました。縦軸は建築の種類です。平地住居・竪穴住居・掘立柱建物の分類と変遷を示しています。図2 掘立柱建物類型別変遷図は掘立柱建物の平面形式による分類です。詳しい説明は省きます。各時代によって大きくダイナミックに変化し、地域差、地方差、集落間の格差、集落の中における建物の格差なども念頭において建物形式が決まります。

大体以上の様な事が私が建物を復原するにあたって、留意している点です。



代継富士見台遺跡26号住居跡炭化材出土状況図
 (古墳時代前期) 東京都あきる野市



登呂遺跡復元高床倉庫 (弥生後期) 静岡市



桜町遺跡出土高床柱材 (縄文中期末) 富山県小矢部市



桜町遺跡出土屋根材 (縄文晩期)
 富山県小矢部市

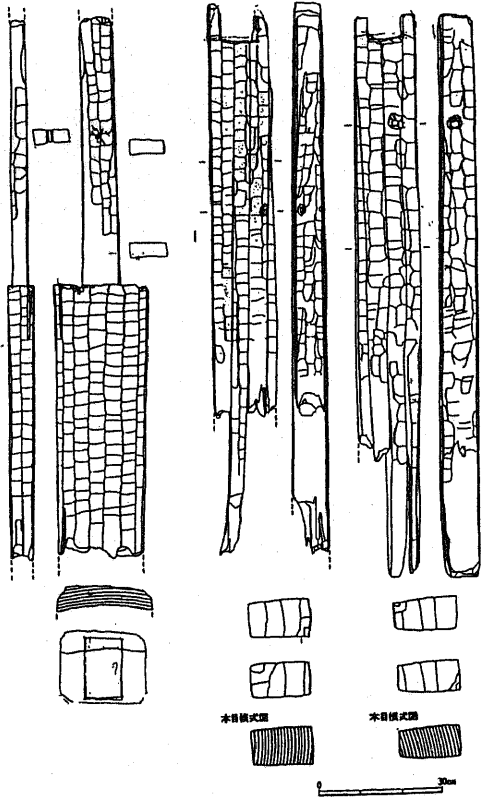


桜町遺跡出土五平材 (縄文中期末)
 富山県小矢部市



桜町遺跡復元高床建築 (縄文中期末) 富山県小矢部市

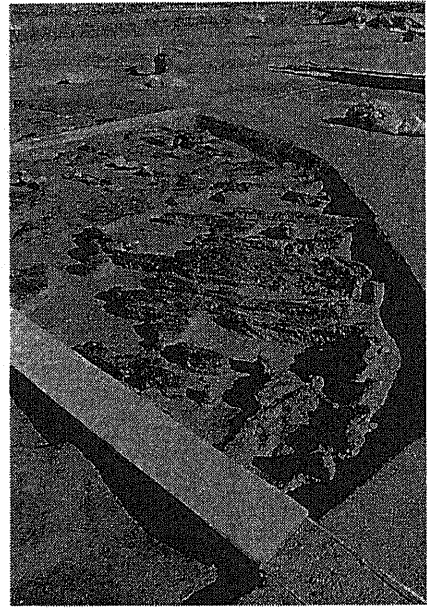
図3 参考資料 (1)



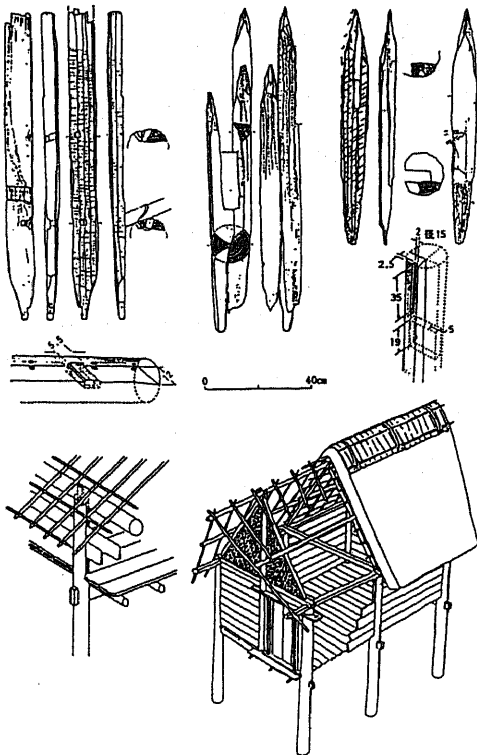
上土遺跡出土材（弥生時代後期）静岡市



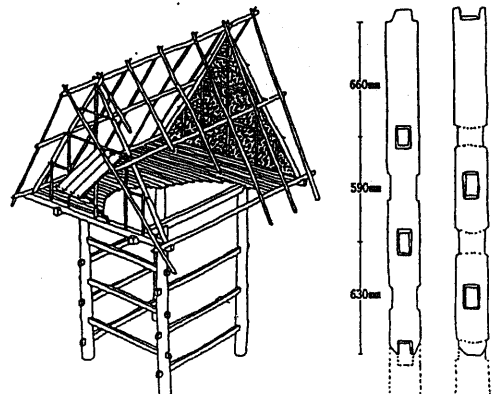
下老子笹川遺跡大形平地住居（弥生後期）
富山県豊岡町



下老子笹川遺跡焼失住居（弥生後期）
富山県豊岡町



上小紋遺跡出土材（弥生末期）
島根県松江市



有年原田中遺跡出土柱材と屋根倉式高床建築（弥生後期）
兵庫県赤穂市

図4 参考資料(2)

3. 考古学発掘資料による建物の復原 —中・近世 一乗谷朝倉氏遺跡の実例から—

吉岡 泰英

宮本先生が古いところをしゃべられるから、私には新しいところを中心にといいことだと思いましたが、そのように話をさせていただきます。

まず一番初めに、中世後期の建物を一乗谷で復原したときに、いろんな問題を指摘されています。そういったことを先に課題として言っておきたいと思えます。

最近山岸常人さんが文化財の復原無用論をいろんなところで展開されています。また、私も彼と一緒に「建築史談話会」と「建築学会近畿支部」との合同で復原について連続討論会を行ったときにもそのようなことについて話をさせていただきました。こうした中で、玉井先生の最初の方針でも言われたように、近年、遺跡の整備の中で、復原ということがクローズアップされているわけです。

ここで最初に考えなければいけないのは、いわゆる「学問としての復原的研究」と「遺跡整備手法としての復原事業」というのは、かなり違うのだということ、そこだけは押さえておかないといけないのだと思えます。遺跡の整備手法としての復原ということではいいですと、山岸さんは、基本的に発掘資料というのは解釈の余地が非常に大きくて、根拠もまた少ない。学問的に正確な復原は不可能だという言い方をしています。このような点が、反対論といいますか、問題提起です。しかし、彼も完全に反対と言っているのではなくて、反対を言うための論文を書いているのであって、その辺のところは、話しているとニュアンスも違うのですが。

まず、いうならば、復原というのは基本的に、研究者を前にして釈迦に説法ですが、ひとつの残されたものを手がかりとして、学術

的な調査研究に基づいて、元の形に戻す、復する、ということです。だから、やっぱり実際仕事でやる実物大復原だけではなくて、模型だとか図面だとか研究論文だとか、そういうものを全てひっくるめて、復原成果の一つの表現方法としてあるのだということは押さえておかなければならない。その復原研究、いわゆる論文に代表されるようなものと、実際の復原事業という仕事のところには大きな違いがあります。その間に図面としての表現、復原図だとか、それからもうひとつは復原模型だとか、そういうものが中間に位置しているわけです。実際にもものを建てる時には論文とは異なり、かなり大きな思い切りをしないと出来ない。実際建物として存在させようとすると、構造物として安定性がない限り建物として現実的には成り立ちません。ですから、論文ではわからないことを明らかにすることも一つの意味があるのですが、実際に建物を建てる時には、全て決めなくてはならない。わからないところを雲で隠すわけにはいけない訳で、そういうところでもかなりの思い切りが必要になってきます。ですから、よく復原建物を原寸模型とおっしゃる方もおられるのですが、私は違うのではないかと考えています。模型というものは、構造的な整合性を持たなくても、極端に言えば、吊ってでも、隠してでも可能ですが、実際に復原するというのは、構造的に部材を組み合わせる造るのだから、原寸模型と実物大復原との間には、大きな違いがある。という意味で、原寸模型という呼び方に私は賛成していません。

宮本さんが言われたように、実際に復原する時には、明確な理念とか目的といったものがきちんと整理されていないことには成り立たないのだという事は明白だと思います。そういう中で遺跡の整備という意味での表現手段としては、イメージとしての復原だとか、それは戦後一時期に行われた鉄筋コンクリートによる城の復原に関してもあるわけで、イ

メージとしてどういうものをやるのか、それから一部分ではパーゴラであるとか、柱の桁までだとか、いろんな形での部分復原であるとか、屋根だけやるとか、博物館の中に於ける断面だけ取り付けるといったように、いろんな復原の表現方法があります。先程言いましたイメージ復原におきましても、外観だけを復原するような場合がありますし、更に原寸模型として部分を復原するとか、現地に実際にそれなりの考証を加えた上で建てるという行為まで、いろんな段階があると思うので、それらをどういった目的で、どのように使うのかによって選択する必要があるということも言っておきたいと思います。そういう中で、復原という仕事はあるのだというふうに考えています。

では、考古学の発掘資料から建物を復原する時に、どのようなデータ、考古学資料としては何があるのかという本題に入ります。

まず、考古学資料の中には「直接資料」という意味で、遺構があります。この遺構には、いろんな種類があって、礎石、柱穴、地覆石、狭間石、基壇、礎石、土間の形状がわかる土間叩き、張り床、転ばし根太、これは痕跡もひっくるめてですけれども、それから建物の平面に関わる遺構としては、竈、囲炉裏、炉、井戸、厩なんかもひっくるめていろんな種類があります。これらは、具体的に個別の機能を直接示したり、それから土間叩き、転ばし根太、束だとかで床構造までわかることもあります。更に付け加えれば、雨落ち溝だとか雨垂れ線だとか遺構の状態が良好であれば、軒の出がそれで決定されます。そういうような事が直接資料という遺構からわかります。

これらは先程言いました若干の基本構造を別とすれば、いずれにしても基本的には平面的な資料だろうと思います。それから付け加えておけば、先程宮本さんがちょっと触れて

おられました様に、礎石の大きさだとか柱穴の大きさなどから、それから三内丸山遺跡でも何か一部言われておりますが、柱にかかっていた圧力、圧密計算とかの研究によりある程度建物規模を類推できる場合もあり得るだろうと考えています。

もう一つは、直接資料の中には遺物、先程宮本さんが非常に細かくいろんな例をおっしゃいましたけれども、そういった直接建物に関わる材料、構造材、柱、梁、敷居のような造作材、そういったもの、それから壁、建具、その部材にくっ付く金具、瓦だとか直接的に建物に関わる遺物というのがあります。

また、これらから、ある意味では稀な例かも知れませんが、具体的な構造形式だとか寸法といったような色んなことがわかる場合もあります。まあ、こういった例は非常に少ないし、一つの遺跡でいうならば部材の一部が出るというような事であって、断片的なものが一般的です。たまたま、近世なんかですと、近年、埋没したとか火砕流だとか色んな理由によって全体がそのまま封印されるというような例外的なものもありますが、一般的には断片的な部材であり、こういったものが直接資料と呼べるのではないかと思います。

それから、もう一つは、間接資料と言うべきものがあります。建物には直接関わらないのですが、遺構的な面でいうと、宮本さんもおっしゃったように全体地形がどうであったか、そして建物の配置がどうなっているのか、周りの色んな建物との関連、そういったものを大きく見ないと建物のプラン、3間×4間の建物がありますというだけではそれによって具体的なプランも決められないし、構造もなかなか決められないという意味で、全体地形、どういう場所にあって全体の配置の中でどういう事になっているのかという意味で、これも間接資料の遺構としては極めて重要なことです。これは、ある意味では、建物の用途、機能を考える大きな材料となります。

それから、遺物の方では、間接的なものとしては、直接建物に関わる遺物ではなくても多種多様な遺物があります。出土品もあります。そして、それがどういう状態で出てくるか、どんな遺物がどこに集中するのかとか、そんなことによっても建物の用途、機能が決まってきます。

中世の例でいえば、茶道具のようなものが出てくる場所と日常雑器のようなカワラケなり茶碗のようなものが集中するような場所によっても建物の機能は変わってくるのだというように、遺物の出方もかなり重要な意味を持つと思います。それが建物の機能であり、それから、利用者とか住人が、そのようなものをどのように持っているのかによって、彼らの階層だとか文化だとか社会的な背景がある程度わかってくると思います。このようなものを総合して、一般的には全体的な年代観、どの時期に、どういう階層の人が、どのようにいたのかということが決まってくるのだと思います。

ところが、こうした遺構や遺物は、この一般の遺跡の調査という意味でいうならば、これは考古学的な現地調査によって出てくるわけですが、先程宮本さんもおっしゃったように、これらは今のところほとんどが考古学の専攻者（考古学といっても厳密に言えば本来の考古学だけではなくて文献だとか色々なことをやられた人も中には含みますが）の方でやっていて、建築の人がなかなか関わっていないという問題点があります。ですから、宮本さんは絶対にそれを信用しないというふうにおっしゃったのですけれども、柱の穴にしても何にしても、結果の図面だけ見て、その判断は出来ない。それがどういう状態が出たのか、その柱は本当に絶対無いのか、二次的なもので無くされたのか、それとも調査担当者が見落とししたのか、色々な場合があるのだから、その状況をきちんと把握しない限りは最終的な復原はかなり異なってくると思

います。

ですから、その辺を考えると、今後の問題としては、一般論として、調査現場に直接建築の人間が参加するなり、調査担当者が建築的な考え方をもう少し入れた段階で調査しないと、資料の信用度も解釈の仕方はかなり異なってくる。そういうことが、一般的に私が今まで感じているところです。

では、一乗谷で具体的にどういうふうに行ったのかということ、一つのケーススタディとして説明しようと思います。

今回、町並復原ということで200メートルにわたるストリートを中心に再現したわけで、その中には武家屋敷と町屋（言葉は色々な解釈の問題もあって、町屋と呼ぶべきかどうかという問題点も一部にはありますが）部分の復原をやりました。それとあわせていうならば、館の模型を作る中で、そのための設計図も考えました。そういう中で、私は20数年復原研究をやってきましたが、ここでは具体的に現地で復原したものについて説明していきたいと思います。

まず、出てきた遺構をどのように読み取っていくのかという意味で、実際に現地で復原した武家屋敷の門についてみます。図1に一つの例が示してあります。門ですが、遺構実測図でちょうど横に伸びているSA981と書いてあるのが塀のラインで、そこに石段で塀を切り取ってしまして、その中に礎石があるということから、門の全体的な平面がわかってきます。

武家屋敷では門は二種類あって、一つには礎石を用いている建物、これは一乗谷の中で何種類かあるのですが、塀の中間に礎石が2個しかないものもありますし、この例のように礎石が基本的には4個並んでいるものがあります。この平面形式として礎石4個あるものについてどのような門の構造が考えられるのかということがあります。この場合には、

私自身は現地では最終的には図に示してような薬医門という形でいきました。遺構図を見ていただいたらわかりますように前の柱の礎石、正面側が若干大きいという感じがあります。後ろ側が少し小さい。そして、一般的にはこの正面の礎石の間隔が8尺、そして奥行きが5尺というのがかなり標準化されたパターンで、8尺×5尺という寸法になっていることが多い。そういう中から薬医門というような推定をしました。けれども、一方では柱4個であっても高麗門とか色んな考え方も出来るだろうと思います。これを考えていく上には、当時の門には実際にどんな遺構例があるのかとか、現存する例、絵巻物などの絵画資料に描かれている例、そういったものから想定する必要があります。実際の建築遺構からだけでは決められません。それが一つの例です。

それからもう一つは、掘立柱で、角柱だったのですが、それが二つある例も出ています。柱が2本だけ建つ訳ですから、棟門形式と考えるのが一つと、もう一つは冠木門のように上に貫を渡すか渡さないかは別として、柱2本だけが建っているという考え方も出来ないこともない。とにかく掘立柱が2本あるのだということですが、これを私が棟門というように持っていったのは、やはり大きな土塀がずっと続いているところに柱2本だけで、屋根をかけないという状態では少し寂しいかなというのが正直なところで、決定的に決める根拠はありません。門に関してはそういうようなところでは

それから、塀に関していうと、基礎部だけが、石積みの部分だけが残っており、上部構造を示すものはありません。石垣が積まれているわけですが、道路に面する正面側が非常にしっかりしていて、屋敷の内側には無い例もあれば、ある程度の高まりだけが残っている状況が多く、土塀の厚みというか幅はどのくらいだったかをはっきりと示す例は

少ないですが、場所によってはわかる例、1尺5寸位の幅で両面がきちんと出ている例とか、4尺位の幅できちんと出ている例だとか、屋敷境でももう少し広い例とかいろいろな例があります。そういう中で考えざるを得ないので。具体的にはその先をどうするのか、じゃあ、石垣はわかるのだけれども、その上はどういうようなものなのか。一つは、その上にそのまま土を積むのか、練塀のようにして土塀にするのか、上は平らで板塀のようなものを置くのか、あるいは石垣だけで上に若干の盛り土をし、芝土居のような格好で何も構造物をつくらないのかというように、大きくは3通りの考え方が想定できると思います。

それから、町家の方では、どうかといえますと、図2に礎石配置を出してありますが、色んな礎石配置の例があります。こうした礎石配置と同時に井戸が出ていたり、図2のMB7としたところでは中に甕が、一越前焼きの直径90cm位の甕なのですけれども、それが6個位、ここでは8個なのですが、並んでいる例とか、色んなものがありますし、それから後ろに四角く石を積んだ枳のようなものがあって、これが一乗谷ではこの中から金隠しがでてきたりする例などから便所だとわかってきているのですが、そういうものが外にあります。MB4と書いてあるものは上方の溝の真中に石が伏せてあるのですが、また、ここには礎石列もあり、その脇、入った所には井戸があります。溝に架かっている大きな石は溝の渡り石、踏み石でして、それがきちんと元位置を保って残っています。そして、井戸があるとか、ここに柱筋があるという格好から、ここに入出口を設定せざるを得ない、入出口までが平面的には決まってくるというような例もあります。

それから、上の例、MB7でいうと、左手の方に溝があって、それから下にも溝があるのですが、この左手の方が道路で、道路の側溝

がこの溝になります。それから少し入るのですが、この建物が全体でいうと2間半、一乗谷の6尺2寸の間とするものの2間半の寸法ですが、これをちょうど二つ割にする位置に前後とも少し大振りの礎石があって、どうもこの礎石は他の礎石と若干の違いがあるということ、それからちょうど二つ割にする位置であることから、ここに棟筋を持つてくるのが素直ではないのかというふうに思いました。

それからもう一方、隣との境にも溝が入ってくるのですが、(こういった溝を入れる例と溝を入れない例がありますが)、この例では、溝を隔てた隣の屋敷内の礎石もまた接近して出ています。従って隣棟間隔が非常に狭い、また前に言った様に、二つ割する礎石配置から、これは妻入りと考えざるを得ない、棟持柱の妻入りの構造がある程度平面から読み取れてきます。それから雨落ち溝をどう解釈するのかということ、こういったことから一乗谷の小さな建物(町家)は平入りと妻入りの両方が想定できます。また、この雨落ち溝から軒の出を想定します。

この例(MB 7)では、隣棟間隔は1尺強しかない中で、妻入りとし、これを茅葺にすると、おそらく軒を出さなくても、茅の葺厚で柱の外には1尺位は出ることになり、この間隔では隣との間に屋根が葺けないこととなりますので、やはり、屋根構造もこういうことから想定できることとなります。実際は板葺きを想定しましたが、このように隣棟間隔から軒の出などを決めていくことも可能だろうと思います。このように、平面的な遺構をどう解釈するのかということが一つありました(図3)。

それから、もう一つは、出土遺物をどう検討していくのかということで、一乗谷の中では建築に関する色々な部材が少ないながらも出ています。柱でいうと色々な柱の断片なんかが出ていまして、その柱も、一つには材質

がヒノキの柱とマツなどの柱があり、この材質によって若干加工法も違います。先程宮本さんもおっしゃったようにヒノキの柱は非常に平滑にできています。

図4に示した例、これはちょっとスケールが違うので誤解をうけるかも知れませんが、四角いようなのが、ヒノキの柱のある一面をおそらくホゾを作るためかと思いますが、欠き取ったものです。柱の一面と面取りの状態がよくわかります。また、そこには一部刃こぼれの跡がきれいに残ってしまっていて、台鉋でその表面を仕上げていることがはっきりとわかりますし、柱の寸法なんかも4寸2分と測れまして、面も10分の1面取りという大きなものであることもわかります。その横の細長いものがマツ材の柱で、番付けが下の方に書かれていて、少し不整形な角といった形状です。これは手斧で加工しています。

それからこれも図4に出しましたが、偶然礎石の上に非常に明確に柱痕跡が残っている例もあります。また、これでも大体、真中にちょっと色を着けているのですが、その礎石の上に一乗谷ではかなり刻線を入れているものがあります。これから柱据付の中心位置なんかを出すことが出来ます。この刻線にも、単なる一文字の場合と十文字の場合、更に田の字形といいますか、十文字は外に出ているのですが、柱の大きさまで示すような例もあります。こういった色々なことから柱の寸法がわかってきます。

それから、もう一つは敷居が実際出てきていまして、図4の中です。ちょうど一間分に近い位の敷居が出てきている例です。これは三本溝なのですが、2本の溝は幅が比較的狭く、また深い、これに対し、1本は幅が広くて浅い。そして幅の広い方の溝の底には擦り痕があって、狭い方には上面に擦り痕があって溝の底はそうした痕跡がみられない、加工したままという状態です。そして同時に下に想定した復原図がありますが、二箇所穴があ

いていて、これが込み栓を入れる穴、戸締りをする穴と考えられます。そうすると、このことから敷居の内外もはっきりしてきます。そういうように考えていきますと、外が板戸で、この板戸は板をガイドレールとして底を擦らない、敷居の上端で擦るということになり、そして内に障子を一本入れるというような想定ができるのだと思います。

それから、畳に関していうとちょっと見にくいのですが、図4の下に示した畳表と畳床があります。それらが全部セットで焼け落ちたような状態に出ている例もあります。また、畳表に関しては何箇所かから出ており、その織り方の幅までわかる例もいくつかあります。こういったことから畳が使われていたことも明らかです。

また、非常にきれいに土蔵の跡が出てきています。礎石とその外の壁受けの石列などもはっきりしていて、礎石の上には柱の圧痕もあり、大壁構造で、その壁の厚みまでわかります。火を受けたようですが、外側の溝などに茅の断片がかなり出ていて、どうもこの土蔵は茅葺きであったと思われれます。おそらく、絵巻物なんかにみられるように、完全に土で塗りこめて、上に馬乗りの茅屋根を置く形式、(これは今でも実際に民家なんかで見られませんが)が一番素直な考え方だと思います。

また、図5の上に示したように、壁土についても何種類かあります。ちょっと見にくいのですが、下の例では、布着せまでやり、その布の目まできれいに残っており、この上に砂壁としており、色砂壁であったこともわかります。これは亡くなられた山田幸一先生にもお見せしたら、ぜひ発表しないとイケないなあと言われていたのですが、亡くなられてしまいました。

桃山時代といわれている色壁の問題はもう少し遡るだろうと思います。また、壁の仕上げにも色々あって、粗壁のようなものもあれば、中塗り仕上げもあります。これらが焼け

落ちた状態で非常にきれいに残っていて、小舞がどんな状態であったかもわかります。茅を組んで小舞としたことがわかります。

また、図5に示したように、金具には建具に取り付けるもの、箱金物から戸締りのもの、また釘隠しのようなものまで色々あります。また、棧唐戸の焼けた状態が出たものがあります。これは少し小型のもので、建物に直接取り付くものではなくて、塀なんかの栗戸のようなものではないかと考えています。

柱の寸法については先程も言いましたが、場所や建物によっていろいろあって、当主の館ですと6寸位の大きな痕跡がわかりますし、先程言ったマツの柱ですと4寸位ですし、武家屋敷の中で復原しているのもですと4寸2分位のものもあり、また門なんかですと8寸角位の掘立柱と思えるものがあつたりします。建具の形式は先程言いました敷居から考えられるものや先程の棧唐戸から考えられるものなどがあります。

壁の構造に関して言うと、先程言いましたような色んな壁の種類から、小舞とその外の仕上げから壁の厚みはある程度決まってきました。それからこの壁と柱の関係を考えていけば、貫がどの位置に入るのかという問題は若干ありますが、先程の土蔵のような大壁を例外として、基本的に多くは真壁と考えざるを得ないと思います。また、壁の下地は茅小舞だと言った通りですし、仕上げも先程言った通り、色々です。屋根材としては、一乗谷では瓦は一切出ていません。出るのは棟に乗せた笏谷石や笏谷石の鬼瓦、そういったもので、平のものは出ていません。そして、どうも屋根葺き材だと思われる幅が4寸から5寸くらい、長さが4尺から6尺近いもの、途中から折れたものもありますが、いずれにしても4尺以上で、厚みは3分以上あるようなもので、表面がかなり風触を受けているような、そういったものがあります。こうしたものが館の

堀からもかなり出ていますし、たまには溝から出てくる例もありますから、私自身はそれらが多分屋根葺き材の板ではないかと考えています。それから茅も先程言いましたようにかたまって、燃え残りのような状態が出る例がありますから、茅屋根もあつただろうと考えられますし、更に言えば、あり得るのは杉皮とか檜の皮も少ないながらも溝などから出てくることから、こうした植物性の材料も屋根葺き材としては頭に入れておかなければならないと思います。瓦のようなものは、あれば必ず残るはずですが、残らないものもやはり想定しておかなければならないと思っています。

それから、加工技術という意味では、先程触れましたが台鉋や鑿鉋のわかる例や、大鋸で引いた鋸目が非常にきれいに残っている板の例、柱や礎石に番付けが入っている例があつたりします。こういった番付けを付けるような建物は大工がやるということですし、また、先に言いましたように、礎石にかなり刻線が残ってしまつて、たとえば、非常によく残っていて復原した武家屋敷の6間×4間の建物の例だと完全に礎石と刻線が残っていて、それを私がトランシットを据えて測つてみたら、秒の単位でしか狂いはなく、多少の不陸はあるものの、ほぼ正確に矩の手に刻線が刻んである状態でした。こんなところまでわかつてきました。

それから、材料としては先程も言いましたように、台鉋が雇つていたのはヒノキの材料でしたし、それからスギの板やマツの柱や板もありますし、寺の正門の1尺角位の掘立柱ではケヤキ材でした。また、クリ材も柱などにあります。こういうように色々な材料が使われています。また、金具については先に言った通りです。これらが直接的に建物に関わる資料です。

出土遺物には間接資料として色々な生活用具が出ています。一つには、文化水準を示す

ような意味で、茶道具が非常にたくさん一乗谷ではでてしまつて、これは町屋もひっくり返すので、天目茶碗だとか茶入れだとか色んなものがあります。同時に、色んな花生けの類ですとか、そういった文化的側面を示すものがたくさん出ますし、町屋の中からも硯がたくさん出ているようなことから見ると、文字まで中に想定することになります。ですから、その辺が、一般的な外の世界、村の文化との違いがかなり顕著なことが、遺物の出具合いとかからわかります。ですから、ここにも書きました通り、都市としての文化をやはり想定しておかなければならないと思います。また、少ないのですが、建築に関わる色々な工具がでています。壁塗りの鑿とか金槌とか鑿、それからちょうど一番上の遺構面と水田面の間から出たため後世のものと当時のものと区別がつかないので、まだちょっと保留していますが鉋の刃が出ています。この刃であれば当時のものであつてもおかしくはないと思っています。

一乗谷でいうならば遺跡から出ているのはこんな位ですが、それ以外のことをどう組み立てるのかということが一つあります。

文献資料として直接建物に関わるという資料はありません。指図だとか写真だとかそういう例はありません。じゃあ、参考になるものとしてどのような類例があるのかということを考えてみる必要がありまして、現存する建物を見るわけですが、類例としては、時代性を見ること、地域性を見ること、用途や機能などの種類をどう考えるのかといった、そういった点から考えることになります。で、同時代資料をある程度見ました。少し古いところや近世になるものも含めて、まったく同じ時代だけではなくて、前後も含めて見たということです。また、この地域がどうなつているのかということ、まあ、特に現在の我々の見るところでは、雪の降る所とそうでない

所ではかなり建物が違うという感じがありますから、その辺のところをどう見るのかということがあります。そういう中で時代・地域・種類を見ながらどんなものを見たのか具体的な名称を言うと、武家の住宅としては東求堂だとか大仙院みたいな京都の方丈関係ですとかですし、都市部の問題としてはこれらは最先端ですけれども、この技術がどうなっているのか、部材の比例関係を含めて建物の木割りなども参考にし、建物全体がどういう形でまとまるのかを見ました。民家という意味では、実際残っているものでは箱木だとか古井だとかそういった例で、室町時代といわれている建物の例、こうしたものは実際に現場に行ってみました。それから、地域の問題としては、近世の民家しかないのですが、17世紀前半にいくだろうと思われている福井の坪川家ですとか、屋根の形式一板屋根という意味で少し新しくなるのですが小倉家ですとか、板の少し長い神社なんかも若干見ました。それから、土塀では近世の例になるのですが現実に残っている金沢にある武家屋敷の塀の例などを参考例として調べています。そして、絵画資料としては一番よく使われる洛中洛外図ですとかその他にも色々な絵巻物の例などを見ました。

それからもう一つは、その他というところで書きましたが、大工、技術者がどうだったのかということとか、都市部において社会的な背景がどうだったのか、それから先程も言いましたように、施主が誰であったのか、どういう目的で建てるのかなど、そういうものも頭には入っていますが、なかなか具体的には難しいところがあります。こういうことを考える上で、一つには基準寸法があります。ここでは越前間、6尺2寸という書き方をしました。一乗谷のほとんどの建築は基本的に6尺2寸に収斂します。一間の柱間はこの6尺2寸前後のものがほとんどで、当主の館に

おいてもあれだけ整然とした平面配置を取り、庭園とかも含め京都というか管領邸などを意識しながら造っていながら、基準寸法はあくまでも6尺2寸という近世で言う越前間を使っているところに地域性なり、技術の体系とか、そういうものの違いをやはり意識しておかなければならないと思います。そして、そういうものを入れた上で、どういうふうを考えていくかということなのですが、一つには都市、先程も何回も言いましたように、一乗谷の場合には農村ではなく都市で建築するのだということが、一番重要なことだと言う風に私は意識しています。というのは、一乗谷の中では今まで農地的な場所は一切出していない、全て宅地化された状況にある、そういう場所ですから、やはり、勝手に山に入って木を切ってくるというようなことはなくて、専門の大工が、ある程度流通してくる材料を使って建てるのだという意識を持つべきではないかと考えています。一つの市場性と言いますか流通材を使って建てられる事を基本的に置かないといけないと思います。そうすると、ある程度は規格品があり、具体的に設計をやる時にどうかと言うと、無制限に長い材料は使わないでおこうと考えました。それで、これは何の根拠も無いのですが、基本的に私が押さえた寸法は10尺を超えるような部材は使わないという前提をかけた上で構造を考えようと思いました。ですから、桁でも一本で全部を通すのではなくて、途中で継ぐという風なやり方をしました。もちろん、それには人力で上に載せていくとか色んなこともありますから、あまり重い材料ではなかなか仕事がやりにくいとかいったことも想定にはあります。こうした市場性とかそういう制限をどうかけていくのかという問題があるだろうと思います。この私が言った10尺が適当かどうかは別として、何らかの制限を加える必要があります。それと同時に、都市ということで当時の技術的な背景、先程の宮本さんの話で言

うならば、中心とそうでないところ、全部建物にも見られる違いがあるあるという事と同じで、掘立と礎石建ではやはり大きな違いが構造的にもあるべきではないだろうかというふうな考え方を描いています。それから、文化とか社会性なんかで、どういう技術があり得るのかということでは、お茶だとか色んな事で当時の最先端というか、そんなものがここには入ってきている、町屋の中でも畳が出てくるといった状況だとか、そういう文化的な水準というものを考慮に入れる。そういうような諸々の背景を考えた上で、最後は実際の図面を引いていったということになります。この辺のところはものを見ながらでないと具体的に言葉で言うのはなかなか難しいと思います。

以上、具体的に決まるのは何かという例も合わせて、非常に早口でしたが、私のやったことを説明させていただきました。

最後にまとめとしては、何度も繰り返しになるのですが、実物大復原と復原模型というものは最初に言いましたように考え方がかなり違うということ。それから、もう一つは、復原整備ということで実際やっていることの問題点ということでは、まず、世間で言われている話でいうなら、最初にも言ったようにかなり目的が曖昧というか、逆説的にいうなら町興しだとか立派に見せたいということではっきりしているということがあって、実際の学としての目的という意味ではかなり問題がある場合も多いと思います。それから、内容については、一乗谷の場合はたまたま私が20数年そこで実際発掘なんかをやりながらものを見、考えてきたということがありますし、それを複数の人間で20数年継続的にやってきたという意味で、色んな材料を組み立てることが出来たわけですが、その中でもまだ根拠として言えるのは今説明した程度しかないのだということ、ましてや、それを1年2

年、緊急調査で掘った状況で復原するという中には、かなりの根拠不足があるだろうと言う感じは否めないと思います。

もう一つは、みなさんご存知のように、私と歴史の石井先生とかなり解釈の違いがあったのですが、これは歴史の方とかがおっしゃるのは、復原に反対される一番大きな点は、復元という時には色んな選択肢がある中で、いわば、一つの結論を具体的に出すわけですから、それで特定の解釈が固定化されるのだということであり、このことは我々も常に認識せざるを得ないと思います。ただ一つ言っておきますと、私自身の考え方として、学問として研究している部分ではそれで良いのですが、そのためあまり慎重になりすぎて今までやってこなかったこともあって、それは、表現方法は色々あって必ずしも復原することが全てだとは思いませんが、それをやらない限りにおいて、一般の方に知識も与えられないと言うか、一般の方のデータも入ってこないということがあります。具体的な一乗谷の例を言えば、たとえ根拠があって学問的にきちんとしていることであっても、実際はそういう情報を得てなくて、生半可な漫画だとかテレビのドラマとかいったそうしたものの影響力が非常に大きい訳で、こうしたもので得ている間違った知識といいますか、建築史の方から言うならば明らかに間違いだと思うことであっても、一般にマスコミなどを通して流布している情報から間違った知識を得ているために、ある程度ものを考えている人に限って、一乗谷でやっていることを、「ここが間違っている」というようなことがあります。こうしたことをどう是正していくのか、我々は情報をたくさん出さないといけないのですが、その多様な情報を出して一般の人が解釈出来るところまで情報は出していないと思います。その辺で、もうちょっと我々も色んな情報を与えるといたら語弊がありますが、知っていただいて皆さんが判断できるだ

けの材料は提供すべきではないのか、我々の反省すべき点ではないのかと思っています。そういう意味で、一つ一つやっていくところに意味があるのだと思います。

それから、もう一つは、私自身が復原をやった時、たとえば鍮鉋なら鍮鉋を実際に大工さんにやってもらう、手斧も道具を作って、今の平刃の手斧ではなくて蛤刃の手斧を作って、それで加工してもらう、こうしたことを大工さんにやってもらいました。こうした加工が残っている建物に行って、「それを使った仕上がりはこうなるんだよ」と言う風に見てもらいました。そういうことをやることによって、これを使った大工さんが生きている限りにおいては、少ないながらもその技術というものは伝えられるので、そういう技術の伝承というか、本物をやる場所にはそういう背景も意識しています。ですから、ドラマのセットであれば、壁をベニヤでやることも可能ですが、それはやらずに高いお金を出して手仕事をやるということの意味があるのだと思います。そういうようなことにも意義があると思います。最後は、繰り返しになりますが、遺構把握が基本的に、一般論としては非常に不足しているだろうと思います。それは調査体制などの問題もあって、必ずしも望めることではなくて、緊急調査の中でどうやるかという難しいことと思いますが、こうした不備の問題が残っています。発掘調査に建築の人間があまりにも関わってこなかったのではないかという反省があります。それから、事業として復原をやるものですから、設計期間が非常に短いと言うのが一般論だと思います。私自身は今まで20数年間やってきたから言えるようなもので、それが無い状態で、半年、1年だけで設計図を描けと言われてたら、それは出来ないだろうと思います。毎日それを少しでも考えていたからまとめることが出来た訳で、この設計期間をどう取るのかという一般的な問題点もあるのだろうと思いま

す。それから、もう一つは、こうしたことをやった結果の報告書というか、そのデータがきちんと出されていないということがやはり問題だろうということ、勿論色んな仕事を抱えている訳で、そのことだけに係りきりきれないのですが、最低限、まず事実という意味での報告書は絶対に出すのだということを私は一番言っておきたい、事業をやりながら、最後の半年も無いような2、3ヶ月で自分一人で報告書を書いて出してしまうということをやった訳ですけれども、そういうことをやる、報告書は学問的なものですし、それからもう一つは、それを理解してもらう為に、一般への解説書的なものもやはり考えなければならぬ。そういった色んな情報を通じて、どういうことを考え、どうやったのかということ、やはり公開していかなければならないと言う風な反省も持ちながら進めてきたところです。

非常に早口で申し訳ありませんでしたが、時間との絡みもあり、この辺で私の話は終わりにさせていただきます。

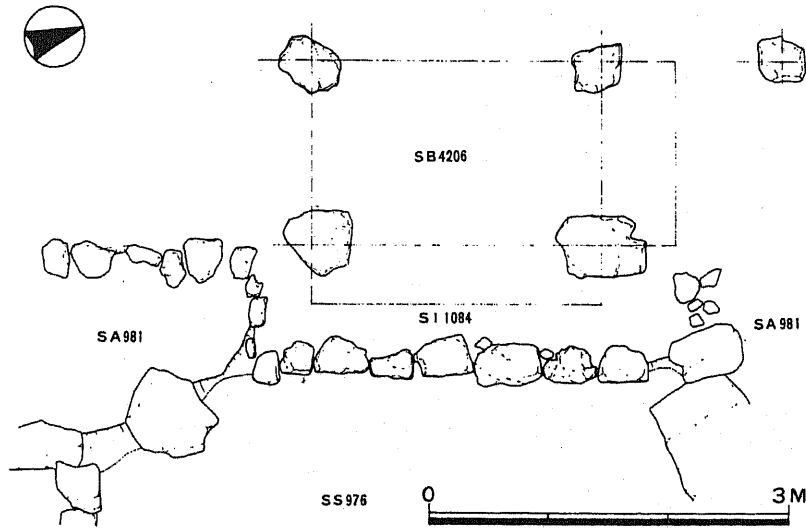
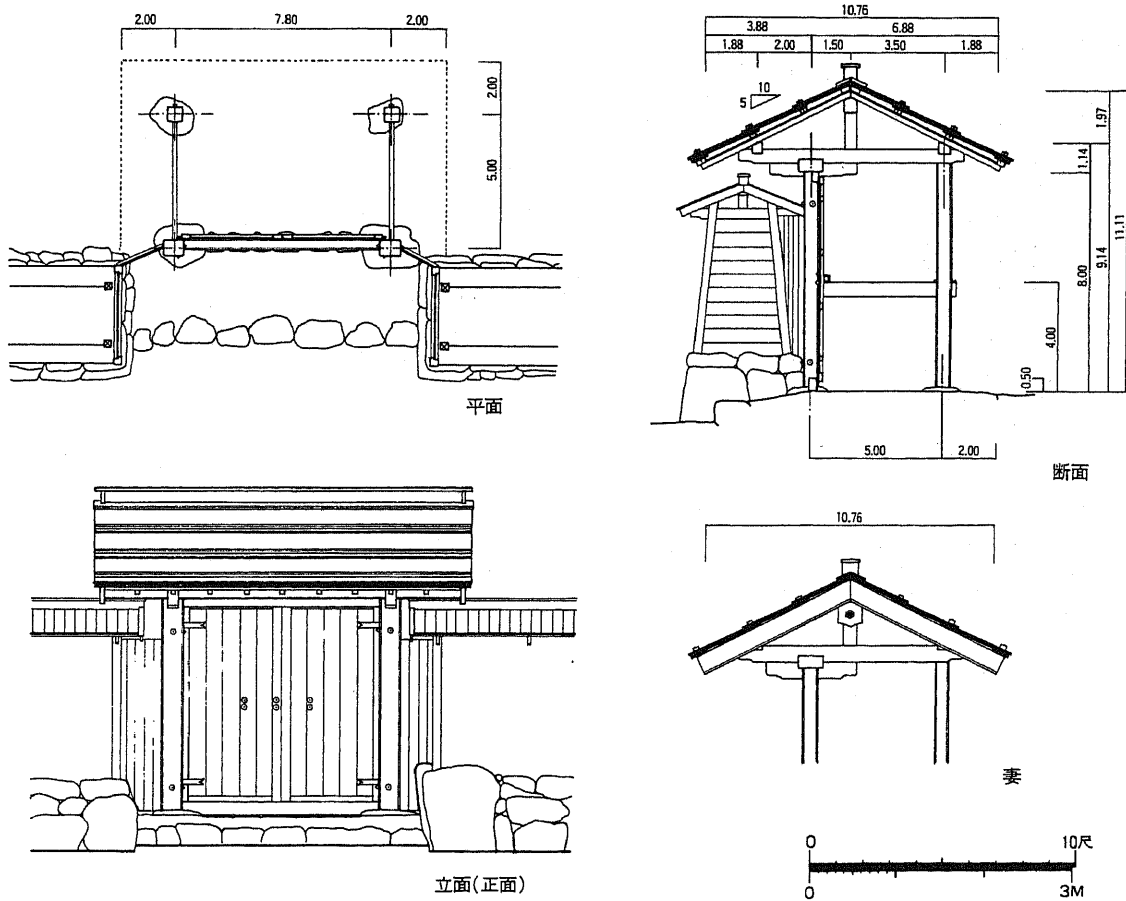


図1 門の復原 門A1 (S1 1084 · SB4206) 遺構実測図



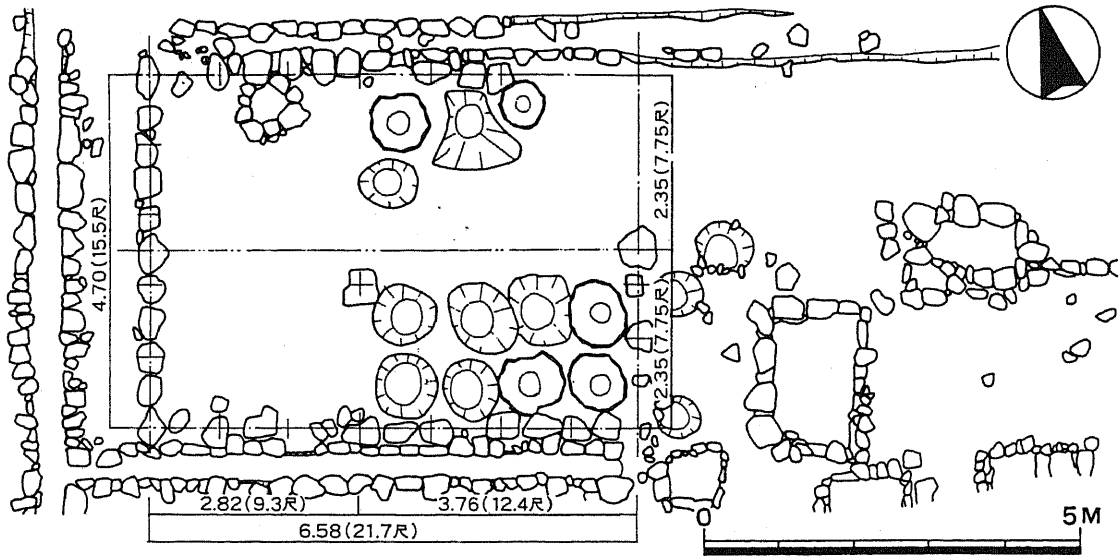


図2 町家の礎石配置 建物MB7遺構平面図

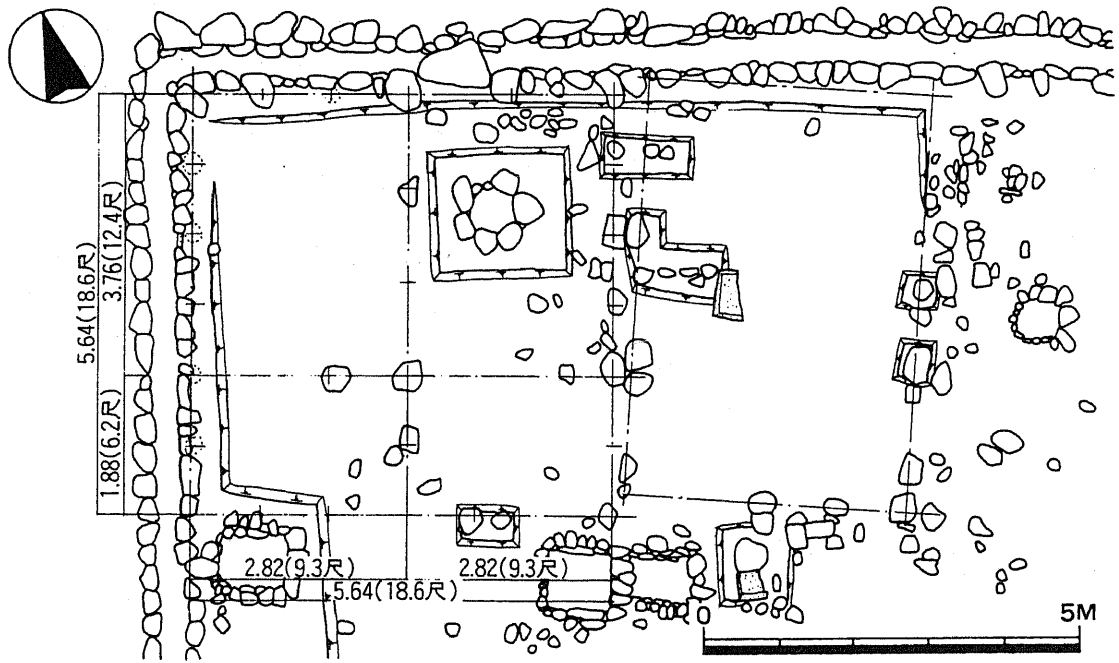
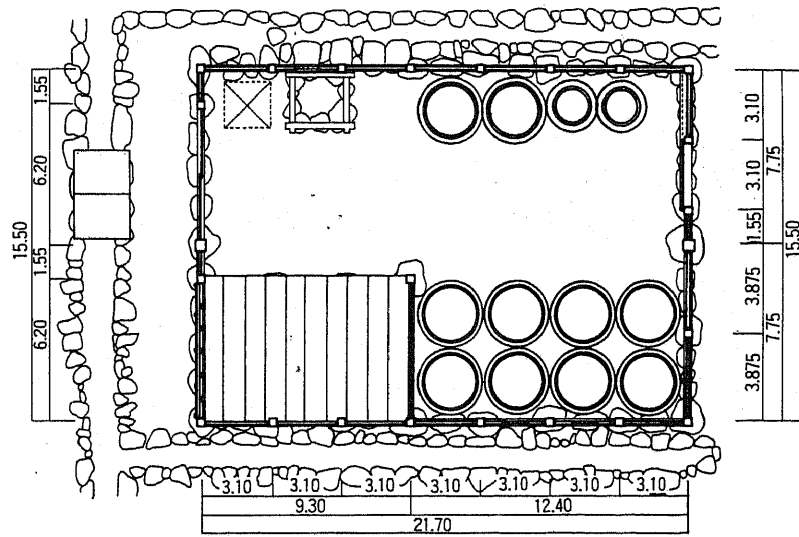
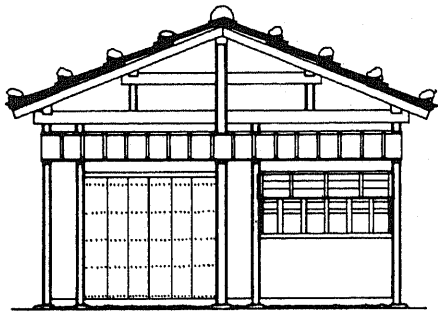


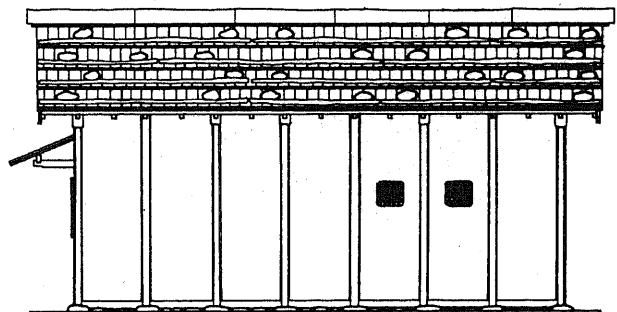
図2 町家の礎石配置建物MB4遺構平面図



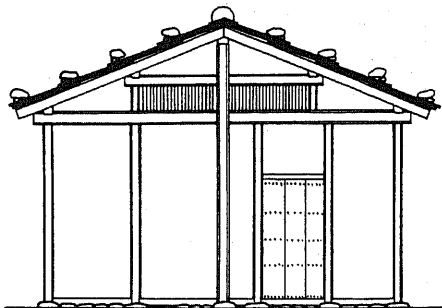
平面



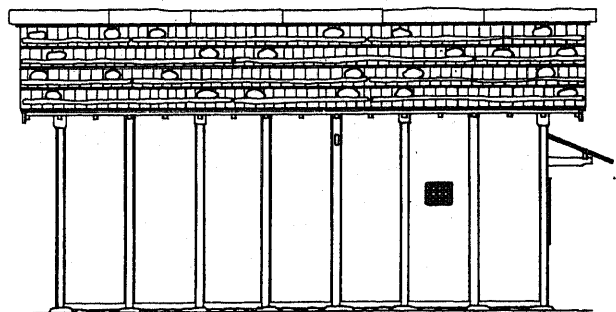
正面(西)



側面(南)



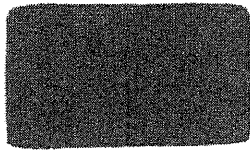
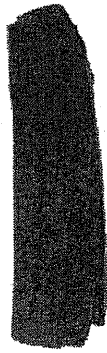
背面(東)



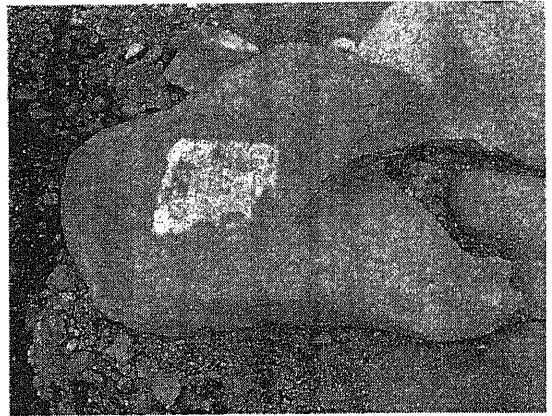
側面(北)



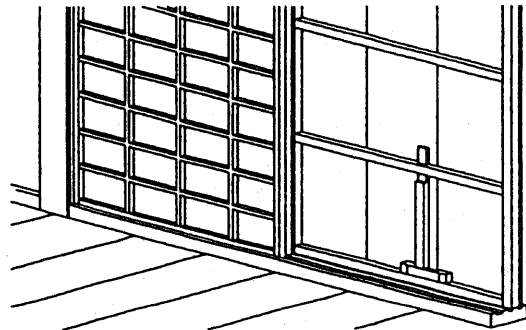
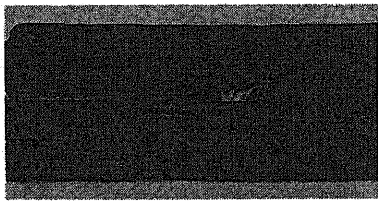
図3 町家の復原



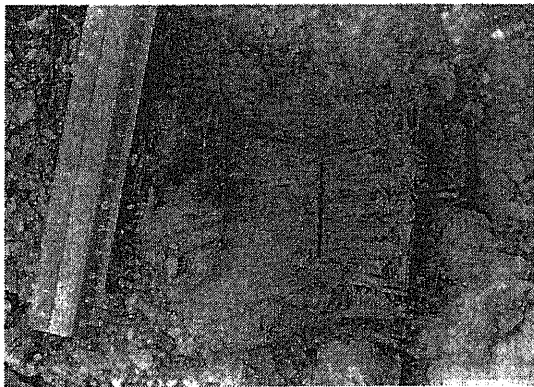
出土した柱材 (左、松材新仕上げ、右、桧材台匏仕上げ)



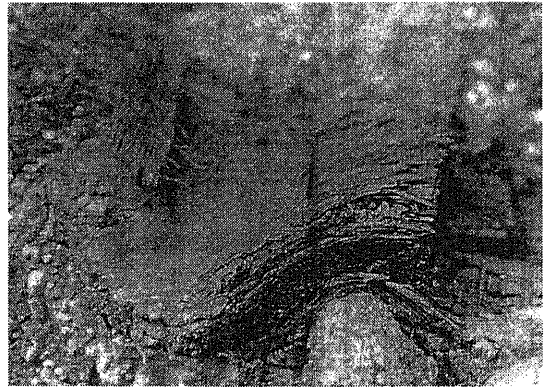
柱痕の残る礎石



出土した敷居と推定される建具形式

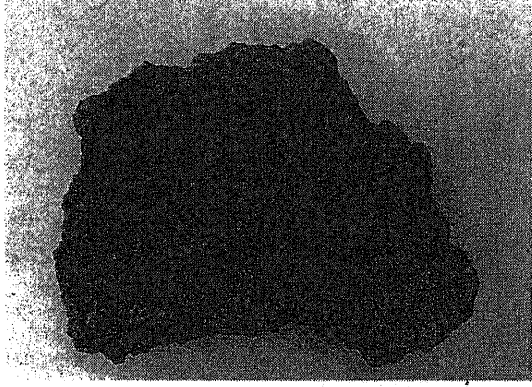


畳の出土状況

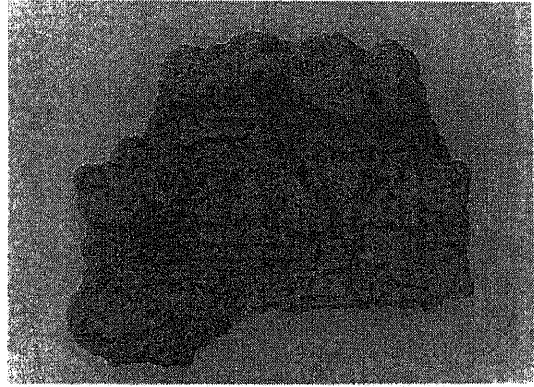


同左 (断片)

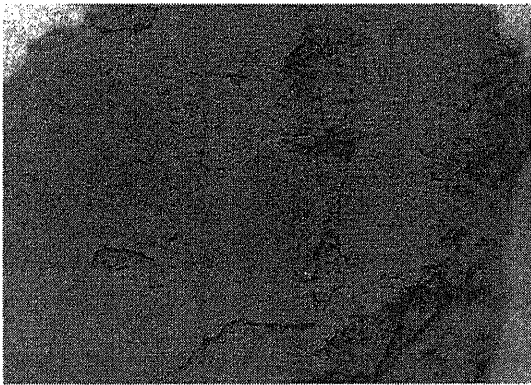
図4 出土遺物 (1)



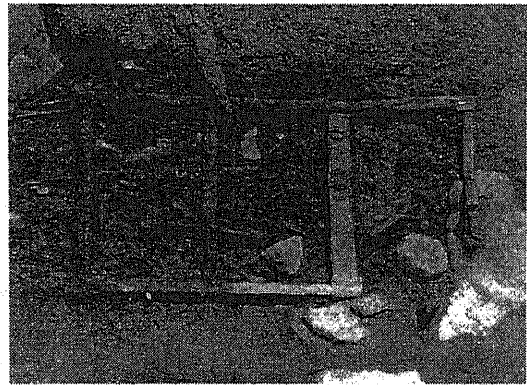
出土した壁断片（中壁仕上げ）



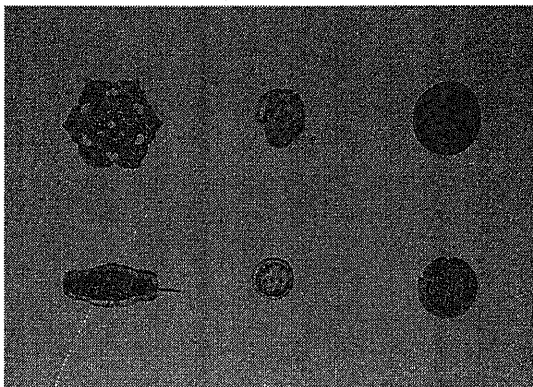
同左（裏面、芽小舞）



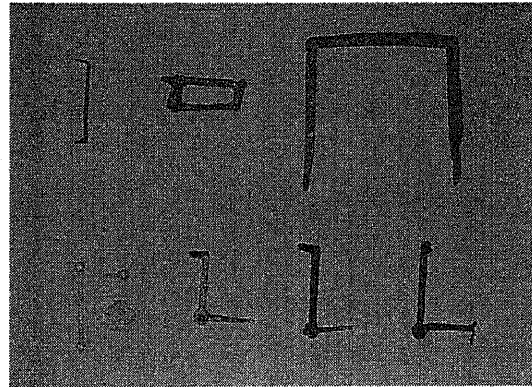
同上（布着せ、砂壁）



出土した棧唐戸



出土した様々な金具（釘隠、引き手、饅頭金具等）



同左（箱金物、煽り止め等）

図5 出土遺物(2)



妻入町家群（北西から）



同上（南西から）

図6 妻入町家群

4. 質疑応答の記録

■宮本報告

玉井： どうもありがとうございます。宮本さんの研究の本当に短いエッセンスでした。皆さん質問したい事がたくさんあると思います。時間も十分とはいえませんが、この際是非聞きたい事、それから今聞いた範囲で分からなかった事、特に専門用語でわからないこともあるかもしれません。質問から始めましょう。

堀内： この住居建築変遷図（図1）で斜線は土葺きですか？

宮本： 斜線は土葺、ドットは草葺きです。

佐久間： この土葺の場合は、土を実際に付け加えているのですか？

宮本： 焼失住居址には必ず焼土が出て来ます。

佐久間： その焼土の下には草葺台みたいなものは入るんですか？板だけ？

宮本： 草はもう殆ど残ってないでしょうねえ

佐久間： そこで土だけで葺ける様に見えるけど、実はその土の下に草が入ってるものもあるという事なんですね、

宮本： 草かあるいは樹皮ですね。垂木の間を塞がないと土が落ちてしまうからね。

この住居建築変遷図で存在を示す横線は、毎年古い方に伸びています。今日あわてて書き加えたのは総柱式高床です。総柱式はつい数年前までは古墳時代以降だと言われていました。弥生時代後期の例が吉野ヶ里になっていたのが、この間、静岡県下と奈良県下で弥生中期の総柱が発見されて、高床建築はどうも弥生早期まで遡る可能性もあります。中国の河姆渡遺跡は約7000年前ですから可能性は十分あります。日本に同時存在的にあってもおかしくない。

玉井： 建築の年代が遡って起源が古くなって

いますね。これは、早くから発達していたのが、今まで遺跡が出てなかったから分からなかったということなのですか。

宮本： そうですね。建築形式というのはピンからキリまであり、ピンの方の建築というのは特に少なく、いわゆる拠点集落にしかない。鉄器もそうだけど、高度な技術は専門家しか出来ない、そういう技術者を使うのは拠点集落です。

玉井： 発掘そのものの内容も変わってきたという訳ではないですか。大規模に掘るようになったからとか？

宮本： 大規模に掘って、そういう拠点集落も見つかり出したこと、今の郡か県の単位を統括する集落は各地に一ヶ所しかない訳ですから、発掘して当る機会が今までは少なかったことはあるとおもいます。

堀内： 宮本先生が言われた鉄器の問題でも、近畿地方では鉄器の弥生時代の前期はまだ出てないんですが、家屋の丸太材の切り口の中で、どうしてもやっぱり鉄器と思われるものがかなり出てきてるんです。だから鉄の存在がなくても、そういう仕口の存在から逆に鉄器の存在を推定できる。

宮本： そう、特にホゾ穴でね、ピシッと掘る仕事は鉄器でないとできない。石器だと穴の縁が丸くなってしまいます。

堀内： だから、従来の発掘資料の再評価というのでも“無いから無いんだ”ではなくて、逆にそういう加工痕跡から推測される研究も最近出てます。それから、実際はこの間の滋賀県の熊野本と言いまして湖西の遺跡なんですけど、そこでも中期の鉄がやっぱり20数点出てきました。

宮本： 鉄の材料が出てきたの？

堀内： 材料と製品と両方です。それとヤリガンナも出てます。だからもう従来の九州と畿内は違うんだという表現もかなり変わって来るとおもいますね

高島：住居建築変遷図のこの一番最後の例はどこですか？

宮本：土をサンドイッチにして屋根を葺く形式で、黒井峰の例があります。群馬県赤堀村の戦前の民俗調査例では農家の庭先に同形式の竪穴作業小屋がある。これが戦後まで残っていた、今のところ群馬県下にしか発掘例はなく、全国的に展開していたかどうか分かりません。

小泉：土葺の屋根というのは、全部壁みたいに塗ってあるの？それとも木材が見えて間が埋まっているの。

宮本：垂木が見えてその上に草があって、その上に土を置くだけです。ただ、中で火を炊く場合は、煙の逃げる穴を作らないといけない。伏屋根の、一番上に穴を開けないと煙が逃げないんですよ、屋根の真上に穴が空いているんですよ、窓が。

高島：そうですね、それで、そこから出入りするとか

宮本：そうそう出入りします。

飯村：土屋根だと耐久性はどうでしょう。例えばかなり湿気を持ったり、雨降ったり雪降ったりってのがありますからかなり土自身に湿気を持って、材を腐らせて早く朽ちてしまうって事はないんですか？

宮本：どうでしょうねえ。年間雨量の多い鳥取県の妻木晩田遺跡で、弥生後期の土葺竪穴住居が出ている。ああいう雨の多い所でさえ土葺だからそれ程耐久条件が悪いってことではないと思う

飯村：耐久面ではそれ程影響がないと考えていいのですか？

宮本：一番の理由は経済効果というか、造り易いという、縄で草を結ぶ必要がない、ただ草を並べて土を置くだけ、これは誰でも出来る。

飯村：誰でも出来るというのは大きいですね

宮本：大工が必要ない訳だから、というより

垂木材選んで切り並べて置くだけです。それだけで出来るから

飯村：余り考えないで建てちゃうんですかね？ 中で火を炊いたりしないとかなり早く朽ちちゃう様な気がしますけどね。内側から乾燥させれば大分もつ様な気もしますが

宮本：妻木晩田遺跡の弥生後期の、一般の住居は全面土葺で、首長居館は大型で、竪穴も浅くて壁立式住居です。壁が立上って屋根が円錐形で草葺ってことで、際立っているんですよ、低い土屋根マウンドとで。今までの復原だったら全部草葺で大小の違いだけだったけど、非常に顕著な違いですね

堀内：そうすると壁が仕切るのは規模が大きい。径が10m位のとか、それから柱の列が2重構造であるとかそういった特殊なものという様な評価は出来るのですか？まあ中心的な建物として

宮本：必ずしも直径10mでなくても5～6mでも集落の中心的な建物の場合、そういう評価ですね、まあ権威の象徴みたいなところがあるかと思うんです。それと祭祀ね。

飯村：外観でどう見えるかが格差を表現しているんですね

宮本：そうです。

堀内：この掘立柱建物類型別変遷（図2）の中で多角形平面型というのがありますね。弥生に下がる例ってございませんか？

宮本：ないです。いや少なくとも大型では無い、群馬の黒井峰では多角形より円形平面に近い。黒井峰は作業場みたいなものです。

飯村：サイロみたいな感じのものですな。

堀内：あることはあるんですね？

宮本：倉とか作業小屋程度ならね

■吉岡報告

玉井：どうもありがとうございました、吉岡

さんのご苦勞の一端が非常に良く分かるという事です。質問が色々とお有りになると思いますが、まずは先に事実的な話と、それと理念の問題とありますので、一応ちょっと分けて考えますか。色々技術的な部分で復原の根拠の様な事を、実際現場に行かないと分からない事も多いと思いますけれども、ここでお聞きになって聞いておきたい事があれば

飯村：壁の構造なのですが、私ちょっと良く分からないので教えて頂きたいのと、後この壁の構造によって例えば町家ではこういう壁だとか、蔵ではこういう壁だとか、武家屋敷ではこういう壁とかがあったのかどうかもちょっと教えて頂きたいと

吉岡：ひとつには仕上げで言うところの布着せが出たのは寺なんですね、寺の屋敷で出るので特殊な例なんだろうと思います、勿論残り具合もある訳ですからそれが全てではないのだと思いますが、そういう所から数点ままとまって出ていることから布着せは高等な仕事だというふうに考えます。

飯村：布着せっていうのはどこに布の面が出てきているのですか？

吉岡：仕上げをする前に中塗り仕上げをした段階で布を着せて、それから仕上げをするんですね、だからそれは壁のチリだとか割れを防ぐとか今も高級な数寄屋でもみんなやるんですけど、そういう様に非常に高等な技術だと、念入りな仕上げだと、まあ特殊な上等な仕上げだとみえています、後は塗り方で漆喰の様な白土を塗った様なものなんかの綺麗なやつと、粗壁なんかでちょうど仕上がりが非常に粗っぽいものもありますし、一回調整してるんだろうと思われる、私は中塗りと考えているのですが、そういう風なもの、大きく分けて3種程あるんだという事です

飯村：この中で出てくる真壁というのは？

吉岡：真壁というのは外から見ると柱が見えないのは大壁、柱の間を塗っているのが真壁

です、柱が外から見えるんです。ですからそれは柱の寸法があって、貫は普通まあ真ん中付近に貫を通して、その貫の外側に小舞をやる訳ですからそれで塗りますから、普通まあ箱木（千年家）でもそうなんです、中側には貫が見えるんです。室内には貫は見えて外側には貫は見えない。そうして壁の小舞があって外の仕上りが分かれば壁の厚みが分かりますから、それと柱の寸法とを考えていって貫が芯にあるとすればその厚みを想定すれば柱が出てたか出てなかったかは一般論としてある程度決められる

飯村：基本的には小舞はどんな種類の建物にもあって、仕上げのやり方が違うという理解で良いのですか？

吉岡：はい

飯村：それから後、砂壁・色壁という話があったのですが

吉岡：いわゆる数寄屋の少し砂っぽいもので、ザラっとした様なその壁、砂壁とか色壁、その土の種類によって赤い色だとか緑っぽい色だとか、近世だと色んな使い方があるのですが、そういうものの走りがある様だという事です

飯村：これは何か特定の建物とかそういう

吉岡：ですからその布着せしたやつがそうだったんですね

飯村：あー、なるほどね

玉井：高級な特別な建物のみに使われているという事です

吉岡：はい、それは一般論ではないというふうに思います。

玉井：京都なんかで残っているものでもそういうものは

吉岡：はっきり分かってないんですよ、その辺が。

玉井：一番古い例かもしれませんね。

吉岡：壁は塗り直してるんで、下地をどれだけ落とさないでやれるかっていう事を修理のところで色々と言っているんですが、その辺

が余り良く分からないところもあるんだろう
と思います、オオバラシなんかでやって、茶
室の様に壁の仕上がりが非常に重要視される
ところだと当初の形を残すのですが、一般
の建物であれば壁は平気で落としてまた塗り
直してしまいますから、その辺で壁が当初ど
こまでいけるかというのは非常に難しい。

飯村：寒さとかは余り関係ないのですか？

吉岡：あるかもしれない

飯村：雪で埋まったりしますよね

吉岡：報告書の例の中に、壁の断片が出てい
る報告書の中でも、壁の断片が出ているとい
っても壁の厚みとか、仕上がりにまではなかな
か書いてないものですから。

飯村：すいません、書いてなかったなあ。

吉岡：だから実際は仕事やる時には今の材料
を使ったりしますが、町家の方ではもうそ
こまでは実際にしない、中塗り仕上げ、粗壁
とか中塗りでおさえてますので、ですから現
地では柱の間に隙間が見えることもあります。
マツとかクリの材で今だとほとんど製材
して角材を作ってしまうので、そうすると味
がなくなるので“少し曲がっている材料でもい
いぞと、それをはつってくれ”と、そうする
と柱が少しは曲がって面側の部分が大きく出
るものがあるという事を言うんですが、なかな
かうまくはいかない。大工さんとの掛け合い
があるんですよ。

玉井：草戸でも壁は出てますね？

鈴木：はい壁あります、壁ありますけど布着
せのは全然ありません。分かるのは表面が、
私が見て何も仕上げてないと思うのは、芯か
らずっと同じ砂で塗ってある様に見えるの
と、それを表面を化粧、胡粉ですね、白く化
粧したものは何点か見つかっています。

吉岡：その白土、胡粉みたいなそれを塗った
やつはあります、それからもうひとつは壁の
中で寸紗、中に入れる寸紗が違うんですね、
粗壁でわりと粗っぽい藁を切った様な寸紗が
入ってるものと、細かくしたものが入ってい

るのとやはり寸紗の種類も違う、それから粗
っぽくて粗壁の中に瓦笥の破片が入り込んだ
様なある粗壁も訳で、砂利と言うか小石が少
し混じる位の壁もあれば、色んな例がある

宮本：これは漆喰は使っていないの？

吉岡：漆喰だと思っんです、漆喰らしい表面
が火を受けてとろけて変形した様な例もあ
りますから、多分漆喰だろうと思っのもあ
りますけど、何種類か場所によって違います。

玉井：やっぱり火を受けて焼けたからそうい
う壁がうまく残っていると考へた方が良く
すね？

吉岡：そうですね

玉井：他の遺跡で壁がこれ程うまく出ている
所はないんでしょうか？

飯村：火災に遭った城館なんかでも出ます、
ただみんな捨てるだけですけど

佐久間：壁の知識がないからね、そんなに書
かないですよ、壁が出て

飯村：土の固まりとしかね。捨てちゃうん
ですよ

佐久間：実測図にもならないから、写真で記
録がのこるだけ

飯村：だから気づかない

吉岡：だからやっぱり考古の方でいうと、焼
き物の破片とかそういうものは意識するの
だけ、壁だと調査担当者もある程度は思
うので、写真から実測図から付けると
いうなんて事は少ないですね、ままとって綺
麗なものが出てくればまた話は別ですが

佐久間：それから建築材は大きいものが多い
でしょ、あれ保存しないんですね。現場で実
測図を書くけれども、草戸なんかはいい方
ですけど、なかなか保存しきれないんです。
そうするとやっぱり、正確な観察をしないま
まに図面と写真だけ残って現物はなくなるん
です、そういうのは多いですね

飯村：大きいものは大体なくなりますね

鈴木：吉川元春の館の溝があるんですけど、
溝から出てるんですよ、まあ井戸の中とかよ

りもやっぱり溝の方が多いですよ
玉井：何でそんな所に捨てるんでしょうね？
不思議な気がするなあ

鈴木：草戸を見ていると全然加工技術の体系が違うんですよ、私は草戸しか見てなかったんで、元春館を見て全然違うんです。草戸の場合資料的に多いのは14世紀位なんです、14世紀と16世紀とはまた全然違う。例えば草戸ですとダイガンナの痕跡、加工跡は全然見られなくて縦引きの鋸の、縦引き方向に入った木片というのをひとつも見た事がないんですが元春館の方では結構出ます。

吉岡：その辺できちっと見れば、宮本さんの話じゃないけど、材料から得られるその断片であってもね、それから加工技術とかその背景的な大きな考え方がかなりわかる。

宮本：だからやっぱり建築の技術体系、そういう目で見ないと、ちゃんと残してくれないっていうのがあります。報告もちゃんとしてくれないし、報告してなくてもちゃんものが残っていれば後から見て解釈が出来るんですけど、ものが残ってないと全然後から分からないですからねえ

飯村：一乗谷の場合は吉岡さんが考えて多分専門の大工さんが組織的に作ってると思うのですが、武家屋敷とか同じ寸法で町全体を作ってる訳ですよ？しかもどこも礎石建物でそんなに変わらない建築部材を使っているというお話だった、そうするとある程度統一性、統一的な施主が統一的な大工を使って統一的に作ったとみた方が良いのですか

吉岡：いやあ、そうじゃないとは思いますが。やっぱり大工の集団はあって、朝倉の当主が町家まで全部作れって言うかっていったらそれは違うと思う。下の部分でも、例えば溝でも明確に言うと、屋敷毎で溝の積み方、若干石の大きさとか違うんですよ、やはりそれぞれの家が自分所の前は積んでるという感じだ

ろうと思うんですけどね
飯村：じゃあ石を積むのは誰なんですか？大工さんではないの？

吉岡：それは車力なのかどうかは別として、石ぐらひは、あの積み方だと自分で積めるんだらうと思いますよ、つい最近まで。発掘に来てくれるおじさん達でも田んぼの畦なんか全部積んでるのと一緒に、積みって言ったら積む位で、だからそういう積み方ですよ

飯村：でも組織されたある一定の集落では統一された寸法では作っている・・・

吉岡：だから大きな石垣なんかになるとそれがあるんだと、石の加工もひっくるめて石の積み方というのはやはりある筈なんで、

宮本：たくさん出てきた？

吉岡：うん、一乗谷においてもそうだし、大きな武家屋敷の石垣なら基本的に大きなものがある一定間隔で上までいく位のものを置いてその間を詰めるという考え方ですね、だから一様にいくんじゃなくて、だからあれはやはり石垣に端から端まで同じ調子でやろうとすると、全て順番にやらないといけなくて、大きい石をドーンとやればその間で縁切れが起きちゃうから間を常に詰めていくという考え方で同時並行でいけると思います。工期の問題だとか、色んな事も考えないといけなくて、吉川の館でもねえある程度大きな石があると思います。大体あの辺の石垣もそうだし、中世くらいの石垣は基本的には大きな石をドンドン置いて間を詰めるという感じだらうと僕は思うんですけどね。

それと同じで、建築はどうでしていくか、色々あるんだと思いますけどね。ただ大工の系統とかいう意味ではやはり、勿論向こうの技術を入れるというのはあっても、ひとつの集団の考え方というのは、その寸法とか色んな所に特性を持っている。

飯村：そうすると朝倉は町のプランだけ決めたのですか？

吉岡：大きな町割り位までだと思えますけ

ど、分かりませんそれは（笑）

飯村：“じゃあ君ん家”とかって決めて、後空いた場所に町家ができたと考えた方が良いでしょうね

吉岡：一乗谷もそうですし、それから城山の麓のあれは近世まで石を切り出していますから、あの基盤の石が全部地形をなす石がカクレキ溶解岩でアンザンガンと言ってる石なんですけど、あれが殆ど庭石も礎石も、基本的にはあれが一番多いですね、だから地山で露頭するやつとかそれから川で出てくるやつとか、谷筋で出るやつとかそういうものを使うと、だから城戸口で3トン越す石であってもあれは全部地の石ですよ

飯村：武家屋敷が確か町家になったのもあったんですけど？

吉岡：ありますね

飯村：武家屋敷かどうかまだ本当は良く分らないでしょうけど

吉岡：いやっ塀がまわってますから

飯村：大丈夫ですか

吉岡：そして百尺四方が基準の屋敷が当初で、それが途中で分割、再分割されていったという

飯村：あとさっきの木材なんですけれども、木材、流通品になって一定の大きさにして流通したんだろうと、町の中でもそういう大して切り材とか出ないし、そういう事だと思うんですけど、ただ、そういう流通体系みたいなものはどういう地域で？

吉岡：やはり基本的にはそれほど広くはないにしても、近世初頭になればかなりの部分が越前でやる時には、福井城郭の土台の、石垣の土台の石までヒバとか使っているんですよ、それを考えるとかなり日本海海運の中ではそういう針葉樹とか色んなものが入っていると思いますけど、ヒバの角材がきれいに石垣の土台に入ってますし

宮本：そんなもの土台なんかに使ってどうするんだろう

吉岡：針葉樹でも強い方ですからね

飯村：くさったら困りますものね

吉岡：それとやはり上に山城がある事を考えれば、裏山にそんなに幾らでも木が生えている訳ではないし、あれだけの中がざっしり町になってたら、その材料で家が建つ訳がない、そんな量じゃないですから消費するのは。上流から切り下ろすのもあれば、引き上げてくるのもあるだろうという事です

堀内：板壁の上から壁を塗るのがあるでしょ、そういう痕跡は一乗谷ではないのですか？

吉岡：ちょっと分からないね、そこまでは

宮本：板壁を芯にして？

堀内：そう、外見からしたら大壁に非常に良く似るんですけど、ただ町家の場合なんかでは柱の寸法なんか非常に小さいですよ、だから出てくる壁土の厚みが非常に薄いですよ、だからその場合に結局後は判断出来るのは壁の裏側のねえ、板材の筋目があるのか小舞の跡がどうなのかという位の判断でしか出来ないから、その辺がまたどの辺まで調査してみてるのかという事があるんです。

前から気になっていたのが、私は京都をやっているからよく言われるのが、ああいう板壁の大壁風の建物には絶対ある筈だと、

吉岡：どこまであれかは別として板小舞というか、東求堂（慈照寺）だって内法から上は板付きですものね、板をバーンと埋めて壁を塗る訳で、現に宮本さんが言われたように柱に板溝が掘ってある柱もある訳で、板壁もあり得る。その外に壁を塗ってたかどうかまではその材料からは分からないと

宮本：壁の小舞の素材は殆どカヤ？

吉岡：いやっ分かっているのはカヤですね。

それで民家でいうならば明治期位のものまで

雑木とかカヤ小舞の民家が大体越前では多いですね、

高島：青森もそうです、津軽でもどこでも
吉岡：だから竹小舞、あんなのやるのはやはり
時期的にちょっとずれるのかなあというふう
に思うんですけどね

堀内：京都なんか古い所は割木ですよ

鈴木：草戸も殆どが割木ですね

堀内：だから竹が出てくるなら時期が下がりますね、町家の中で。あの大きい町家なんかでは時たまですけど割木を使った例もありますけど

吉岡：ただもうひとつは土塀の関連で言うならば、金沢の武家屋敷の土塀が最初は練塀というか土団子をドンドンと積んでいくやつで、それが途中でその外を塗るんですけど綺麗に仕上げをするんですけど、それが途中で完全にマルだけ組んだ土筒の大壁の仕事で、中側から裏返しはしてないんですけど、外から団子をかなり分厚く付けてそして仕上げをするという様に、金沢の土塀は近世でも変わってきます、だからそういうのから言うと竹小舞なんていうのは土蔵なんかではマル竹というののはあって良い気はしてるんですけど

佐久間：竹小舞というののはどの位の太さのものを使うんですか？

吉岡：やっぱりかなり大きいものまでやりますよね、この噛み合わせをしっかりしてやろうすれば裏返しをしないで形付けしようとする、かなり厚くないと裏へ土がまわっていかないのから壁が外れちゃうから、ある程度厚みがないといけない。となると4分とか5分位の竹なんか縦と横によって変えたりするんですけど、使う時に。今回復原してなかったけど先程言った土蔵なんかでは非常に残りの良いやつだと、礎石がダンダンと並んできてその柱の跡もあって、そしてその外に小さい石でダーっと並んでくる壁じり、下の地面と壁とを縁切る為に壁付けるライン

を出す石まで並んで出てくる、そうすると大壁だという事がはっきりと分かるので、そしてそれから柱心に貫を入れてやっていくと壁の厚みもほぼはっきりと分かる。そういうのまで分かる遺構によっては特殊なあるいは火事に遭ってそれが廃棄されたというのもあるんでしょうけど、そういうものによってはかなり注意して見れば分かる。

堀内：それは推定でどれ位の厚みがあるんですか？

吉岡：20cm近いんじゃない。もうひとつは2、3カ所でてるんだけど、床にグニャグニャグニャーってした溝的なものスーっとが出てきて、そしてその間が何な磔みたいなもので詰まっているという、どう見てもそれは土蔵の所なんですけど、転ばし根太を置いてその間に石みみたいなもので詰めて床板を張っている、だから空洞を付けずに石みみたいなもので押さえているという様な事になります。住宅的な所でも転ばし根太の跡だと思える様な、その細い溝みみたいな所の下にチョンチョンと小さい石なんだけどあるとかね、そういうものによって単に“溝が出てきたよ”じゃなくて建物の場所とかそういうものによってはそれは根太の圧痕だとか、そういうところまで見方で多分発掘する時に考えていけば分かるだろうと、それが途切れ途切れで出てきても、勿論自然の木を大きなものをドーンとおいて転ばし根太、それで上だけを不陸調整をちょっとやって板を張れば良い訳ですからそういうものもあり得る。だからやはり上を常に意識しながら発掘をやれば色々な事が読み取れる例はあるんだと思いますけど

玉井：建築史は考古の現場担当者にもっと色々な事を言わなきゃいけないんですね。

復原の考え方ですね、根城でも復原をしています。中世の建物で一乗谷に対応するものとして大きいのは根城です。

吉岡：根城ではすごくもめて、なかなか検討委員会です承が出なかったんでしょ

玉井：だから根城は吉岡さん程の研究の実績もないし、データもないんですよ一乗谷ほどは

吉岡：どうなのでしょうねえ、私もそこところは良く分からないんですが、あそこで分かるのは宮本さんがかなり指導された、全体の発掘調査で出た穴ほこからの建物のプランの問題

高島：はい、柱穴からの建物列ですね

宮本：遺構の解釈なんですよ

吉岡：それだけでそこから上の所のデータは殆どない

高島：ないですね、ええ

吉岡：だから僕自身は恐れずに言うならば、僕は堀立と礎石はかなり違うんだらうと、建築の考え方が違うんだらうと意識を持っているんで

宮本：うん、構造的には根本的に違うからねえ

吉岡：ね、だからそれで、あそこに建っているのが堀立であるんだけれども、京都の方丈というものを意識した建物小屋ができてるんで堀立にしながら上が礎石建風の建物ができているんでかなり気になるなあというのはあります

宮本：全くその通りです

吉岡：それがなかったら仙台の伊達にしてもあれだけ大崎八幡でも何でもやる時に、鶴にしても何にしても関西の大工を連れっていつて建てるというのはないんじゃないか。わざわざ礎石立のがパーっと出始めるあの時期にねえ、関西から大工を連れてくる訳でしょ、伊達はずっと居ながらね、その辺に技術体系の違いが僕はあるんだという意識は持ってます

宮本：要するにピンの方からね

吉岡：まあ建てる側は立派なものを建てたいというのがあって、だから根城の場合、横に工房である竪穴住居的な部分とあそことの間にはものすごいギャップがあるんです

吉岡：その話でいうと本当、奈良の文化財研究所で整備の研修の講師をやらされていた時にも、全国の考古屋さんに言ったんですけど、どうのこうの言っても偉い先生を集めての委員会は非常に良いけれども、色んな参考の意見にはしても、最後は自分で判断してこの意見は取り入れる入れないをきちっと思った上で自分で責任を持たないかぎり、誰が責任取るのかっていう委員会のまずい点が出る事があるから、その辺はよく考えないと駄目だよっていう事はよく言ってたんですけどね(笑)

玉井：吉岡さんが一乗谷でやった復原というのは、ある意味では幸せと言うべきでしょう。理想に近い条件で、あえて言うと設計吉岡による復原という話になります。良いも悪いもそれははっきりさせておかないといけない訳ですよ。あれは吉岡さんによるひとつの案であるという解釈であって、それは絶対正しいという訳ではないという言い方を常にしておかなければいけないんでしょうね、吉岡さんが悪いと言ってるのではなくて、考え方として吉岡：やっぱり最後の復原をやろうとしたら、色んなデータを積み重ねてきて分かる事分からない事を積み重ねるんだけど、最後はそれらを組み立てる訳ですから、もう最後はどう考えたって設計だと思っんですよ、あの一、偉い先生に話を、私は建造物の修理の方の話で講習を受けた事もあるんですけど、建築史の大岡実先生がおっしゃったのでも、建築の修理をずーっとやっていて、最後それはデザインだとおっしゃった。あれだけ頑固に建築史のきちっとしたデータを以て考証をもってやられる先生が“最後は修理もデザインだよ”と。だからさっき言ったけど論文なら、学術論文なら、これは分かります。これは分かりません。で良いんだけど、ものを作る、存在させようとする、最後はそれらを全部飲み込んでしまっってデザインせざるを得

ないというのがあります。

モリス：デザインにも段階があるのですよね、例えば武家屋敷の方は一乗谷では早い段階で復原しました、そして町家はごく最近やったんですね、その間に色々と考えも変わったんでしょうか？例えば今、武家屋敷をやるならば、何を違った方法でやるのかというのはおもしろい問題ですね、それは？

吉岡：ありますね、それは

モリス：それも何らかの形で、“あれっこれはちょっと違ってたのかな？”ということはありませんか？

吉岡：ありますよ

小泉：そういうのをみんなで出し合ったりとかね

吉岡：いやあ良いと思いますよ、簡単な例で言うと、僕、復原の時に報告書の最後のまとめにならない感想みたい部分をちょっと書いた中にも、柴垣の例を挙げといたんですけど。絵巻物にはポーポーの上がワーツとなっている柴垣が基本ですし、その柱が一本ボンボンとある様な柴垣っていうのをやったんです、それでやってみてその材料としたら、その辺にある基本的な色んなもので使えるっていうので、竹の枝だとか雑木だとか多いのは萩なんか、茶室では山萩とか割とやりやすから、そういうものでやるっていうのでやって、上は揃えずにポーポーにしといてってやったんですよ、そしたら一乗谷の場合雪が降ったら雪が乗って上がもうボキボキに折れてひどいんですよ、やっぱりそれは上を切り揃えてやらないと雪に対して対応できないんですよ、あれはだから絵巻物のは雪の降らない地域のやり方だなあというのはやってみて分かりました、だから実際やったのを翌年切り揃えました、そういうのがありますね。それから材料でも山萩はちょっと粘りが無いんで弱いなあとかね、あれ毎年入れ替えればそれで良いんですけどね、だからどこまでメンテナ

ンスをやるのか、実際は当時ならこうやったという事と、実際復原してどこまで後の手が入られるのかというのも若干材料には関わりがあると思います。

飯村：吉岡さんが実際現場に出て調査して、我々東日本から見てると一乗谷の遺跡というのは石で遺構が分かりますよねある程度、勿論生きている石と死んでいる石とを選ぶのは大変しょうけど、割と遺構は見つけ易いという我々の印象なんですけど、我々堀立柱の地域の人間からするとですね（笑）、そういう遺跡で掘ってられて感覚の違いとか、例えば建物を建てる時なんか、というのは何かありますか？

吉岡：いやっ、むしろその前提で言うともまだ一乗谷の方が、僕に言わせると分かりにくいんだろうというふうに思います。今言った様に生きてる石死んでる石というのは非常に難しい場合もある、うん、関東ロームの様にきれいな面の中に穴を掘り込めたのはもう、明々白々でかなりはっきりと分かると思うんです（笑）

飯村：それはちょっと違うと思います（笑）

吉岡：だから礎石の抜き取り痕というのが条件によっては非常にはっきり分かる場合と分からない場合がある、地形によっては

高島：そうですね、はい

吉岡：礫層の様な、瓦みたいな所に礎石を据えたらもう全然訳が分からないですね、だからそういうところはあるでしょうし、それはもう礎石であれ堀立であれ関係ないと思うんですよ、その土地の条件によって分かり易い所分かりにくい所が、だから、発掘するという意味においては、考古屋さんも建築屋さんもさわるものは全然変わらないと

飯村：建物を、タテルと我々はよく言いますが、建て方という・・・

吉岡：だからそこなんですよ、常に意識して建物の形なり何なり意識して、礎石がここ

にあったら上屋を意識しながら、この辺には礎石なり柱の痕跡があるのかなにかというのを意識して掘る場合と、ただ単にズッと見て、そりゃ結果では非常に純粹理論としたら、分かるものは全て丁寧にやれば分かる筈だとおっしゃると思いますが、それは多分恐らく理想論の問題で多分違うんだろうと、まして表面が何らかの意味で少しでも削平されたり、色んな状況で出てくる訳で、その中で建物を、上を意識しながら掘るという感覚をどういうふうに持つのかというのは、考古にとっても必要なだろうなあとは思いますがね

宮本：だけど意識ながら掘るという事はその建物が既成概念としてある場合で、全く無い場合で新しい形式の場合は意味が分からなくて、ただ見ただけで掘っている状況が非常に多いんですよ。だから解釈しきれてないという遺構の方が多い。全ての穴とか石とか解釈しきれてるのが少ないでしょ、それはそれで100%掘りきれていれば資料としては使えるんですよ

飯村：結局本当に分かるのは1、2割とか3割くらいなんですよ

吉岡：だから柱穴が何百とかあるけど、建物としてまとまるのはありませんとかね（笑）

飯村：大体3割建てたら多分良くやったと。

大体7割が建たないですね、建物として

吉岡：だからそれを後で、宮本さんの様かなりのフィルタリングの目を持っておられると出来る部分もあるのかもしれませんが、出来上がって穴ほこだけ並んだ図面だけを見せられただけで、その中から建物を組み立てるとするのは至難の業だし、恣意的に考える以外にない

飯村：だからさっきの根城の話に戻るんですけど、根城はそういう傾向が強いんじゃないかと私は思うんですね、何かいつの間にか整備報告になったらあんな建物になって、“あれ何だろうこれは？”

宮本：だからあれは、佐々木さんと3年越し、最初は10数期で彼良くまとめてたんだよ、それ結果的に17期に、で90%以上掘りきった

吉岡：だからそれにしても検出した形がどうか、遺構の切りあいはどうとか、柱穴の深さがどうか、そういうデータがどこまで資料として取ってあるかが問題です。後で復原可能な場合もあるけど一般的には、考古の人なんか良く分かると思うけど、報告書を読んでも担当者を見て、あっ信用出来る出来ないというのがある位で（笑）、じゃあ現場をどこまでどういう状態で見てるかによっては、柱穴の深さって言うけれども、深さだってその時に本当に厳密にそれだけ分けようとしたら、正確に深さを掘っているのか掘っていないのかっていうのがどこまでチェック出来るかっていうのがあると思うんですよ

飯村：それは難しいですね

吉岡：うん難しい、だからやっぱり現場で掘ってる時に解釈するのが一番正確な解釈が出来るだと思いますね。だから現に遺構の解釈だって、考古の人間と僕と現場と一緒に出て同じものを見てもその場では議論が分かれる場合がありますよ

飯村：そうですね、でもそれはお互い考えるから良いですよ

吉岡：だからそれを意識した上で、この石はおかしいんじゃないか生きてるんじゃないかということ、死んでるんじゃないかっていうの、じゃあそれを意識的に確認してみようというので、タチ割でも断面半面でタチ割でも入れて、やっぱり死んでたという例とやっぱり生きてたと、そこまで確認した上でそれをどう理解するかっていうものと、何にもそれをやらずに、ただそこにありましたでは後の結果は違ってくると思うんですよ

玉井：繰り返しになりますが、建築も、とにかく現場に行かないと話が始まらないということですね

II 中世から近世への町家建物

——近畿地方を中心に——

研究会の記録

1999年11月27日に古代学協会古代学研究所(京都市)で開いた研究会の記録である。

報告者と討論参加者は以下の通りである。

玉井 哲雄

千葉大学・工学部・教授

高島 成侑

八戸工業大学・工学部・教授

小野 正敏

国立歴史民俗博物館・考古研究部・助教授

飯村 均

福島県教育庁文化課・主査

堀内 明博

古代学協会古代学研究所・助教授

モリス マーティン

千葉大学・工学部・助教授

吉岡 泰英

福井県立若狭歴史民俗資料館・副館長

佐久間 貴士

大阪府教育委員会・文化財保護課・主査

續 伸一郎

堺市立埋蔵文化財センター

内藤 俊哉

神戸市教育委員会文化財課

宮武 正登

佐賀県立肥前名護屋城博物館

当日の報告内容は以下の通り。

1. 豊臣期大坂城下町の町屋復元

佐久間貴士

2. 堺の町と町家

續 伸一郎

3. 兵庫津の町並の変遷—

内藤 俊哉

4. 市・町の形態と展開

—平安京・京都を中心として

堀内 明博

5. 質疑討論

ここに収載した中で、續報告と堀内報告は当日のテープ起こし原稿に訂正・修正を加えた内容で、佐久間報告と内藤報告は当日の報告内容をタイトルも含めてかなり大幅にあらためた内容である。図版ないし資料も前者はほぼ当日の内容、後者は再構成している。

質疑応答部分は当日の発表内容と資料に基づいているため、内容的に対応しない部分がある。それでもあえて掲載することに意味があると考えた。ご了承願いたい。

なお、報告と質疑応答部分のテープ起こし原稿は大石真巳(千葉大学大学院生)長川良宣(千葉大学学生)が作成した。質疑応答部分は言い回しの調整も含めて玉井哲雄の責任で編集再構成している。ただし用語など必ずしも統一しているわけではない。

1. 豊臣期大坂城下町の町屋復元

佐久間貴士

1. はじめに

小論は、豊臣期大坂城下町で確認されている町屋の形式について述べるものであり、江戸時代の町屋のルーツがどのようなものであったのかを探るのが目的である。発掘調査で確認されている建物は、かなりの数に達しているが、建物全体がわかった例は調査件数に比べるとまだ少ない。調査の現段階では町屋の全体像に迫ることはできないが、豊臣期の大坂の町屋の特色をいくつかとりあげてみたい。

はじめに大坂の都市形成史を概観してみたい。城下町の建設は豊臣秀吉によって天正十三年(1583)に開始された。文禄三年(1594)町の西側に東横堀川が開削され、北は大川、東は猫間川、南は空堀をめぐらして、大坂の町を囲む惣構が建設された。慶長元年(1596)には大地震があった。先年の阪神淡路大震災と同じ活断層が京都から兵庫まで動いたもので、被害の範囲はずっと大きかった。しかし大坂の復興はめざましく、またたくまに同じ様な町並みが再建されている。慶長三年(1598)には大坂城三の丸の新設により、一度造った城の西と、南側の城下町の広い範囲が撤去された。この時の町屋は惣構の西にひろがる船場に移されたと考えている。船場は城下町築城期に一部が町場化し部分的に町割があったが、本格的な形成は慶長三年である。

豊臣期は天正十三年(1583)から慶長二十(1615)年の大坂夏の陣で焼亡するまでであるが、慶長三年を境に豊臣前期・豊臣後期とよぶ。前期は都市の建設が急ピッチですすめられ、町造りが躍動していた時代であり、後期は町場の範囲が確定していった時代である。慶長三年(1598)は豊臣秀吉が死去した年でもあり、前期が秀吉の時代と、後期が秀頼の時

代でもある。

2. 敷地の形状と町屋

町屋の形式を決める上で、大きな要素となるのは、敷地の形状である。江戸時代の大坂は、東西の通りと、南北の筋と呼ばれる道路によって碁盤目状に区画されていた。そのことは、江戸時代に多数出版された各種の大坂図によって良く知られている。この道と道で囲まれた長方形街区の中には、地口(敷地の入口)が狭く、奥行きが深い短冊形の敷地が並んでいた。そしてこの江戸時代の町割が豊臣時代から引き継がれたものであったことが発掘調査から明らかになってきている。

江戸時代の大坂城下町の町割と敷地の地割の研究は、敷地の大きさを記した江戸時代の水帳をもとに、矢内昭氏によって精力的に進められた。矢内氏は1984年に大阪府教育委員会が大坂城下町の発掘調査を開始すると、担当者の私のところへほぼできあがりつつあった大坂の内町部分の全体図をもってこられた。調査に役立ててほしいとのことであった。その時いつか出版しましょうと約束したのだが、矢内氏は一部を公表されただけで亡くなってしまった。この全体図は、矢内氏の手書きの状態のまま1995年、帝京大学山梨文化財研究所で行った『「中世」から「近世」へ』というシンポジウムで内町部分を公表させていただいた。図は私の発表した「近世都市から中世都市へ——大坂城下町成立の意義」に所収し、シンポジウムと同名の題で翌年名著出版から刊行されている(注1)。

この図からは、豊臣期に惣構で囲われていた大坂の地割は、江戸時代には南北通りが基本で、南北通りに向かって敷地の地口があいていたことがわかる。何本もの南北通りで挟まれた区画の敷地は東西通りに面して地口があいている。豊臣期の城下町も南北通りに面した敷地がいくつか確認されており、発掘調査からそれが江戸時代まで引き継がれたこと

がわかった。

江戸時代の船場の町割はそれとは異なっている。船場は江戸時代には東西通りがメインで、東横堀沿いを除けば、地口はすべて東西通りにあいていた。発掘調査からは、豊臣期の船場でも東西通りが地口と考えられる敷地が、いくつも確認されており、これも豊臣期の地割が江戸時代まで踏襲されたと考えられる。

このように豊臣期の道路をそのまま生かした町割やどちらを敷地の表とするかといった基本的な地割は、豊臣期から江戸時代に引き継がれた。しかし、長方形街区内の個々の敷地割は豊臣期と江戸時代で異なる場所が船場の道修町の調査で見つかっている。大坂城下町は慶長十四年(1619)の大坂冬の陣、翌年の大坂夏の陣で焼亡した。それゆえ江戸時代の復興の時、道路の区画はそのまま生かしたが、長方形街区の中の敷地割は改めて見直したと考えられるのである。

矢内昭氏の「大坂図」では、地口の狭い短冊形地割が多数みられるが、城近くには広い敷地を多く見ることができる。これらの敷地は城代・与力・同心屋敷と、奉行所や各藩の蔵屋敷である。それ以外にも広い地口の敷地を少なからず見ることができる。これらは有力町人の大屋敷と考えられる。こうした大屋敷は豊臣期にもあり、いくつかそれらしい屋敷の遺構も検出されているが、まだ大屋敷全体をとらえることができない。それゆえこの小論では、狭い地口の敷地に建てられた町屋を対象としたい。

3. 城下町の町屋復元

豊臣期大坂城下町の町屋の多くは長方形をしており、江戸時代の町屋と比べると比較的単純な造りの建物が多い。ここではこれまで知られている町屋の形態の幾つかをとりあげ、その特色を述べてみたい。

(1) 一間どりの町屋

1984年北区内本町橋詰町の中小企業振興センタービルの建設予定地内で、豊臣時代前期の南北の道路と町屋が検出された(注2)。建物と井戸やゴミ穴の配置から、道路の東側に三か所の敷地を復元した。地口7から8間、奥行き13間である。(これから使用する1間は6尺5寸=1.97mと考えているが、きちんとした寸法にあっていないものも多い。この敷地は地口が大きく、隣あった敷地の建物はかなり離れているのが特色である。

屋地1では建物3棟検出されている。建物1が道に面しており、2間×2間の建物を復元した。一般の町屋に比べて礎石がやや大きい。礎石がなくなっていたり、動いているので正確な形はわからないのだが、南側に井戸があって、建物が大きくできないので、一間(ひとま)だけの建物と考えている。

一間だけの建物と推定される遺構は、近年いくつか確認されている。いずれも小規模で土間の中に方形の炉をもつことがある。建物1では炉は確認されていないが、道に面しているので主屋の可能性はあるが断定できない。建物2は1.5間×3間の長方形の建物を復元した。礎石の残りが悪いので間取りは不明である。この規模の長方形の建物は道に面して主屋となっている例もある。この敷地での主屋がどちらなのかは、今後の調査例の増加をまって判断したい。もう1棟は1間強×2間の掘立柱建物である。柱間の寸法は規格にあわない。掘立柱建物は豊臣期の「大坂城下町」ではめずらしく、納屋のような小屋と考えている。

屋地2は道に面した部分が破壊されているが、ここに主屋があったと思われる。その後ろに1.5間×1.5間の建物3が検出された。内部に二個の礎石と二つの礎石抜き取り穴があり、床の束石と考えられる。板張りの床がついた蔵と推定した。

(2) 平入りの町屋・二間どり

屋地3は道に面して2間×3間の長方形の建物がある。建物内部の礎石は、南側の2間×1間の部分に配置されている。この建物はこの部分が板張りで、寝起きする部屋、北側の2間×2間が土間であったと推定できる。建物の出入りは道から土間へ入ったと考えられ、建物の長辺から入る平入り建物と復元できよう。

平入りの建物は1985年に調査された大手前高校の発掘調査でも確認されている(注3)。ここでは城下町の遺構は二面あり、下面が天正13年から慶長元年の遺構面である。この面は火災にあっており、地震の噴砂の跡があることから、慶長元年の大地震で焼失したと推定される。上面は復興された建物群で、同じ敷地に同規模の建物が再建されている。ここは城のすぐ西に接しており、慶長三年の三の丸建設に際し、町屋が撤去された場所である。建物は道に面して、両側に密に並んでいる。東側の敷地は奥に段があり、これが隣の敷地との境である。敷地の奥には井戸と多数のゴミ穴が掘られている。

平入りの建物は下面の建物14と同じ場所に建て替えられた上面の建物5である。短辺4間で長辺不明である。建物5は建物の東辺に柱と足固め貫が残っており、ここままで長辺は3間ある。想像だが長辺5から6間程度の比較的大きな建物であったと考えている。建物内部には小さな礎石がたくさん残っており、床の束石と考えられる。この家は全体が分からないが、北側に板張りの床、南側に土間があったと推定している。この家の竈は家の外で発見されている。覆い屋があったかどうかは確認できなかった。

(3) 妻入りの建物・二間どり

下面の建物13が妻入りの建物である。短辺2間、長辺5間の長方形の建物である。道に面して2間×2間と奥に2間×3間の二間ど

りの建物が復元できる。表側の部屋は中央に礎石がある。部屋の規模が小さいので、この礎石は梁を支える柱の礎石と考えるよりは、床の束石と思われる。この仮定に基づけば、表が板張りの床のある部屋、奥は束石がないので土間と推定できる。平入りの建物が、左右に板張りの床のある部屋と土間をもつのに対し、妻入りの建物は板張りの床のある部屋と土間が前後に配置されたものと考えることができる。

(4) 通り土間のある建物

(a) 二間どりの町屋

下面の建物13が通り土間のある妻入りの建物である。短辺1.5間、長辺4間程度と復元した。間口が狭く、道に面して前後に1間×2間の二間がある。南側に幅が半間の通り土間があるのが特徴である。土間の入口には細長い切り石が敷かれ、その上に土台となる横材が炭化して残っていた。通り土間の奥に竈が造られていた。

上面の建物4も通り土間のある建物である。短辺が2.5間ていど、長辺が3間程度である。礎石の残り具合から、道側に板張りの床のある部屋、奥が土間と推定している。土間の下には丸瓦を二枚合わせて筒状にした下水管が検出された。通り土間の一角は瓦が敷き詰められていた。瓦敷きの幅からすると通り土間は1間程度と広がったようである。建物14の奥には大きな礎石1個と、白壁の大きな残塊が倒れていた。敷地奥に白壁造りの土蔵があった可能性が強い。

(b) 三間どりの町屋

上面の建物6も通り土間のある建物である。短辺2間、長辺5間半の細長い建物である。表側に1.5間×2.5間の部屋がある。奥の部屋との境に土台の横木が残っており、板壁をはめこんだと思われる溝が切ってあった。奥の部屋は1.5間×4間と広い。通り土間との境の礎石をみると、軸が途中でずれて

おり、1.5間×2間の二間と復元したほうがよさそうである。これで道に面した部屋を含めて三間どりとなる。通り土間は半間である。中央の部屋からは道路側溝に向かって木製の下水管があり、通り土間の奥にも、庭の水溜めにつながる木製の下水管が埋められていた。こうした排水用の下水管は大坂城下町でしばしばみられる。奥の部屋には北側に半間×1.5間の張出しが付いている。

通り土間のある建物は、その部分だけ硬くなっており、土間であったことが比較的分かりやすい。前後に並ぶ部屋は地面が柔らかく、板張りの床があったと推定している。

(c) 張出しのある町屋

図5は船場の町屋である。(財)大阪市文化財協会 KOSJ87-153 次調査で検出された(注4)。建物 SB201 は短辺2間半、長辺3間以上の長方形の建物である。報告では、通り土間が「通路状遺構」とされており、庇がかかっていたと推定されている。この部分は建物の北から続いており、固く締まっていた。隣の建物 SB202 との間には「通路状遺構」に沿って礎石が残っており、板塀があったと考えたい。また検出されている範囲では、短辺に半間の張出しがあった。部屋には束石が残っているので、板張りの床のある建物と復元できる。

(5) 多数の竈のある町屋

図6も船場で検出された町屋の建物群である(注6)。北側が表で道路に面している。中央に建物1・2があり、建物3は長辺が長すぎるので2棟の建物の可能性がある。道に面していた建物1は短辺3間で、長辺は4間以上ある。建物内の東辺に沿って大きい竈2基、小さい竈4基、合計6基ある。短辺の狭い建物の割には竈の数が多い。その隣に井戸があって周囲に4個の礎石が方形に配置されていた。屋根付きの井戸であろうか。建物1は竈と井戸のある奥が土間、表に板張りの床

のある部屋があったと思われる。通り土間があったかどうか不明である。

奥の建物2・3は短辺2.5間で、建物1より半間狭い。建物2の東側に細長い石敷きがあり、敷地内の通路と考えられる。建物2の東側に石敷きの通路を挟んで、建物4がある。礎石がかなり大きいので土蔵と考えられている。土蔵は短冊形の敷地の真ん中あたりにあり、道に面した表側には建物の痕跡が認められない。建物1・2・3と土蔵が同じ町屋敷なのか、別なのかはまだよくわからないが、私はひとつの町屋敷で町屋と蔵の配置のひとつの形式ではないかと推定している。

この地点で特徴的なことは中国産四耳壺、唐津の四耳壺、織部・志野・伊賀・備前などの茶陶が大量に出土したことである。竈がたくさんある建物を有していることや、上物の陶磁器が多数出土することから、この場所は比較的上層の町人の屋敷地と考えられる。

建物1～3の西側には幅2間ほど建物遺構がみられない細長い空間がある。この空間は中央の敷地と西側の敷地との間の通路と推定される。その西には建物5があり、周囲を瓦磚で囲われていた。これは中世都市堺でよくみられる形式で、やはり蔵と推定されている。

(6) まとめ

この小論では、豊臣期大坂城下町の町屋の形式を復元することを試みた。主屋には一間どりの建物、平入りで二間どりの建物、妻入りで二間どりの建物、通り土間がある二間どり・三間どりの建物が豊臣期に存在することが判明した。

町屋の形式は、これから様々なことがわかってくると思われるが、当面の研究の一里塚になればと思っている。

(注) 及び図の出典

(1) 佐久間貴士「中世都市から近世都市へ——大坂城下町成立の意義」網野善彦・荻

原三雄・石井進編『「中世」から「近世」へ』
帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告
集、名著出版、1996年、図1。

(2) 佐久間貴士他『大坂西町奉行所・惣
構発掘調査概要』大阪府教育委員会、1985年。

(3) 佐久間貴士「天下一の城下町」佐久
間貴士編『よみがえる中世3 本願寺から天
下一へ 大坂』平凡社、1989年、図2～4。

(4) 埋蔵文化財研究会・(財)大阪市文化
財協会編『中世末から近世のまち・むらと都
市 第4分冊』1990年、図5。

(5) (財)大阪市文化財協会編『大坂城下
町跡——扶桑道修町ビル建設工事に伴う発掘
調査——』1994年、図6。

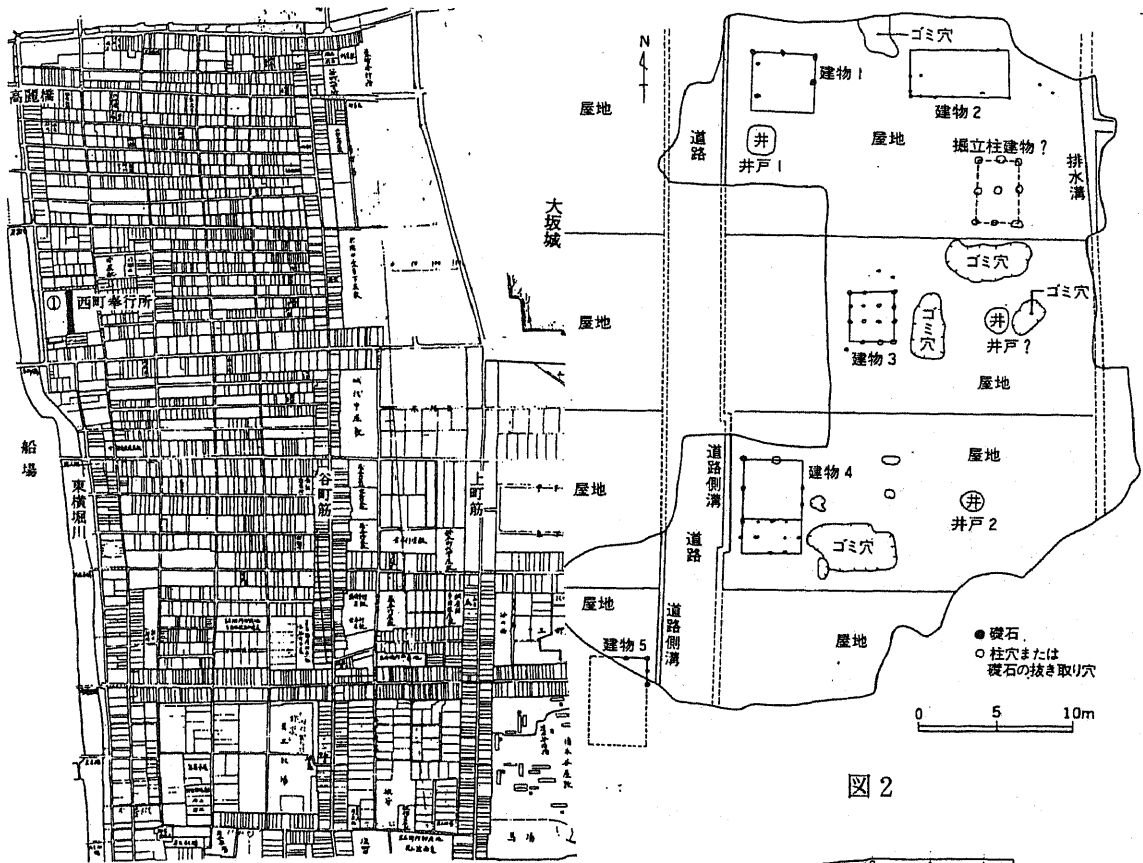


図1 江戸時代大坂の町割

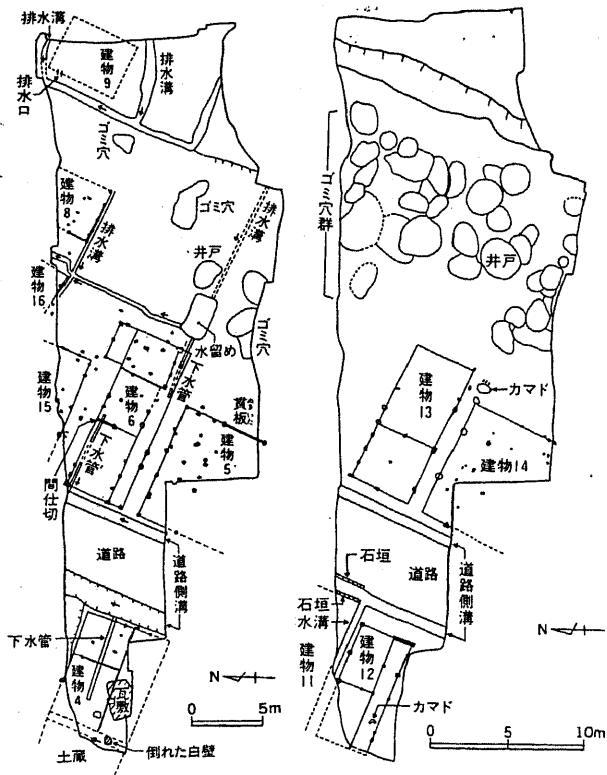


図3 上面

図4 下面

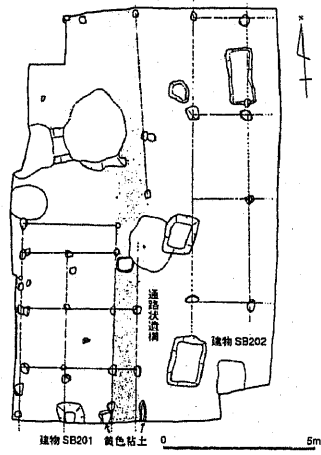


図5

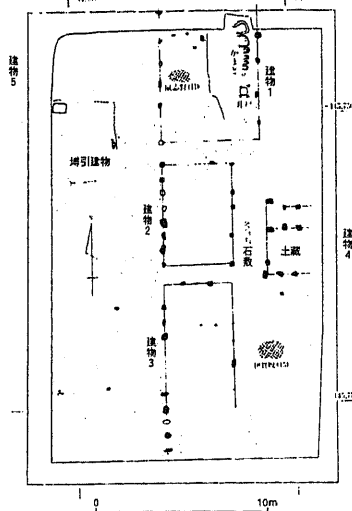


図6

2. 堺の町と町家

續 伸一郎

堺環濠都市遺跡では、発掘調査の方を約20年以上続けて参りまして、微々たるものですが町屋の遺構変遷等も、ある程度判って参りました。今日お話しする事も、以前から私がお話して、それ程変わってないし、自分の資料の方も基本的には以前の物をそのまま使っている様な状態で、また現在私が調整事務の方をやっておりまして、現場離れている事情もあって、余り最新の成果等盛り込めなかったというのも実状ですけれども、取りあえず話をさせて頂きたいと思います。

まず、レジメの2枚目の左上に堺の全体図を載せております。堺の町は、建物の遺構軸の方向で大体3グループに分かれるということが、今までの調査成果から分かってきております。

まずAグループ。これが海岸線に近い所の方になりまして、砂堆と同じ町割り方向を持つグループです。これは基本的に、砂堆の上に立地しておりますので、当然砂堆と同じ方向性を持っています。文献では、13世紀中頃以降に堺津が形成されてきたと言われておりますが、発掘調査の成果から少なくとも15世紀中頃位から、建物遺構が展開する状況が見られております。

次にBグループというのがありまして、これが堺南庄と呼ばれる地域にあたるわけなんですけど、長尾街道（大小路）より南に位置しております。ここが和泉国大鳥郡塩穴郷になりまして、そこに施行された条里とはほぼ同じ方向を持つグループ、これをBグループと区分しております。

もう一つ、Cグループというのがありまして、これは長尾街道（大小路）より北に位置して、洪積段丘の下位面の上に立地するグループであります。和泉国と攝津国の国境がこの長尾街

道（大小路）だと言われておりまして、これより北に位置し、攝津国住吉郡朴津郷に属すると思われています。段丘の下位面から砂堆に至る間に開析谷及び後背湿地が入り、その規制を受けてそれと同じ軸線をもっている、これをCグループとしております。ここは今まで大規模な開発がなかったせいもあるのですが、発掘調査が行われていないので判らない所も多いです。

以上、軸線によりA～Cに分けているのですが、町の発展・展開もそれぞれ違いがあります。先ほど申しました、Aグループは15世紀中頃位から町屋が展開し始めるんですけど、そういった古くから町屋が展開し始めるグループと、またCグループのように町屋に展開する時期が遅くなる地域があります。このうち時期的な事もありますが、B・Cグループの一部は農耕地だったと考えております。

このように、A・B・Cグループ、それぞれが展開して過程で、町を囲う環濠が掘削されるのは、恐らく信長が攻めてくる16世紀中頃位に完成したと思うのですが、それ以前には町全体を囲う様な濠は無かったと思います。特に南庄であるBグループでは、条理の坪境に合わせて濠が確認される場合が多いのですが、北庄であるCグループでは町中に濠が展開する例は少ないです。

またAグループでも濠が確認される例は少ないです。これは立地条件が大きな要因と思われます。Aは先ほど申しましたように砂の上にできた町ですから、砂を掘り込んで堀を作るといことも難しかったのかもしれないし、またBグループでは濠が多いというのは、条里に規制された農耕用の坪境溝（水路）を利用して新たに濠幅を広げて掘削したと考えられるのではないかと思います。

いずれにしても、町を囲う総構的な堀ができるのが永祿年間頃と考えております。それ以降、文献では天正14年になりますが、豊臣秀吉が堺の象徴でありました環濠の埋め立ての

命令を出します。発掘調査例から見ても、実際には濠全部を埋めるのではなく、濠幅を狭めるという状況が確認されています。また、この天正14年以降に農耕地だったB・Cグループの中に新しい町屋が建てられていくと状況が見られます。それは、発掘調査例からすると、少なくとも文禄末から慶長期に入っただと思われまゝ。またそれと共に、以前からあった砂堆と同じ軸線方向を持つAグループの中でも同じ様に新しく町屋が作られていったというのが最近の調査で分かっています。

屋敷地割と建物変遷についてお話したいと思います。図1に町屋を復元した変遷図を載せています。図の説明をしておきます。左側の一番下にSKT39と書いてあります。その39の横に■がありますけど、これが左上の全体図の■と対応します。また同様にSKT202、230が▼、●がSKT200、○がSKT361、▽がSKT448-2、□がSKT505と対応しております。

先程申しました様にAグループでは、砂堆の頂上部に形成された街道に面して町屋が展開し始めるのは早くも15世紀初頭頃からです。まだ小規模な礎石建物が散在する状況が見られます。表通りには側溝は認められず、道路面の方が、礎石建物が建つ遺構面より高いという状況が見られます。15世紀中頃になると、表通りから裏の方へ抜ける新たな路地状の道路が確認されます。恐らく裏側の開発というのを意図するのもあって、登場するのではないかと考えております。礎石建物が数棟散在する状況見られるし、また便所と思われる埋甕等も出土します。

15世紀後半から16世紀前半になると、先程大坂の例にも出ましたけど、■列建物（蔵と考えておりますが）、登場します。この頃に堺へ遣明船が入港するようになって、物資の流入が増加したためではないかと考えられます。この■列建物とは、瓦の平瓦に似た■を

使用して建物の周囲を囲ったものです。調査していても、礎石建物の範囲は判り難いが、この■列建物の場合は建物範囲が明示されるので助かります。この■は専用で作られたもので、■は地上には約1/3（10cm）が出る程度に縦方向に2段～3段分積む例が多い。これについては、後で詳しく説明しようと思えます。また、16世紀中頃になりますと、通り庭が登場します。また16世紀後半になると、竈が登場します。これは先程申しました通り庭に隣接する形で登場します。その後も17世紀前半になると、表通りに面して、礎石の主屋が建ち、通り庭・竈があり、裏に蔵が隣地するという状況が見られ、この頃には近世的な町屋と同じ様な状況が成立しているというのが分かります。ただ、生活面が焼失した後に整地を行い、また建物を再建するという繰り返しを約100年程続けて、町は変遷しているのですが、必ずしも焼失以前にあった道路がそのまま踏襲されることも限らず、表通りが突然消えて屋敷地が拡大されるという例も結構あります。この代表的な例ではSKT202、230地点の慶長20年の焼失面です。SKT202の遺構面の中央に東西方向の幅約1.2mの道路があります。恐らくこれで北と南の屋敷地は異なっていると考えられますが、慶長初年と考えられる下層の三次面では道路は無かったのです。つまり、それより下出土しておりません。また、SKT448-2では、これも同じくですねずーっと大体第4面が16世紀前半位になるんですけど、ずーっと第1面の1615年まで上の方に道路があって、その道路は表通りとしてずーっと踏襲されて来るんですけど、15世紀後半から二次面から第1面に至る途中にですね、真ん中辺に道があると思うんですけど、これが踏襲されずにですねこれ表通りと考えられるんですけど、踏襲されずにですね突然1615年段階ではそれが無くなって、また一件の屋敷地になっていると。反対に下の方にですねまた1本の道が登場するという様

なことも結構あります。これが基本的にA地区を中心とした町屋の遺構の変遷になります。

また6、7年前にB地区、C地区、A地区の縁辺部を調査した時に、表通りに面して便所を持ってくるという家が出土しました。図1の右端にSKT361の遺構図があります。ちょっと申し遅れましたけど、各図のスケールは異なっています。概念図とお考え下さい。そのSKT361では表通りに面して側溝がありまして、その表通りに面して便所が確認されている。便所は木製の四角い枡状、もしくは埋甕をが表面にありまして、その後ろに礎石建物が展開するという特異な町屋構造が発見されました。またSKT505でも、同様な状況が見られます。この構造は、16世紀前半頃には登場することが判っています。この特異な町屋構造については、菅原神社（堺北庄常楽寺）文書の中に、風呂跡の再開発に伴う禁制という形で書かれています。「田畠を作る者が肥灰を面に並べることを禁止する」とありまして、少なくとも表通りに面して肥灰、そういった便所を持つ様な建物があつたというのが確認されました。なお、このSKT361地点では鞆の羽口とか出土しており、鋳物師とかの職人層がここに居住していたと考えられます。また、それと共に耕作人兼職能集団が、このような場所に住んでいたと考えております。この町屋構造は町の縁辺部だけではなく中心部でも出土しています。

それでは、図2の左側の図面を御覧ください。これは、宿院(現在でも中心地ですけど)周辺の遺構概念図です。図の真ん中辺りに、北に向かってややカーブしている道路があります。幅約12mを測り、これが堺環濠都市遺跡で確認されている道路遺構の中では一番大きな道路で、これを紀州街道と言う人もいます。直線ではなく湾曲するのが興味深いです。またその東側に平行するように濠が発見されている。その濠は途中で屈曲して道

の方に入っていきます。この道路と西側で確認された同じ南北通方向の道路とは、約16間離れています。このことから、慶長期段階では南北方向道路(大通り)は16間間隔だったと推測されます。また、図2の右側に大小路周辺の調査で確認された慶長20年の遺構概念図を載せました。SKT39でL字型に曲がる南北方向の道路が確認されています。これは側溝を持つ非常に大きな道路です。その東側にSKT380がありまして、ここでも同じく南北方向の道路が確認されています。SKT39の南北道路と380の道路が平行する道路だとするとこれも約16間離れています。そうすると、これが慶長段階での町割りの単位になるのではと考えております。ただ、SKT39は道路に面して礎石建物が、その西側に■列建物が、そして39の道路の東側では礎石建物が展開して、またSKT380でも道路の西側に?列建物が展開します。ただSKT380の道路の東側部分に表側に便所を持つ家が建っています。さて、この16間幅ですが、これは元禄2年堺大絵図に記載されている東西の屋敷地幅と一致しています。ただこういった虫食いの調査地で、それを遡らせるのは非常に冒険だとは思いますが、そういった可能性もちょっとはあるのではないかと考えています。江戸時代には南北六辻制というのがあり、南・北庄にはそれぞれ本郷と端郷とに分かれて、セットになって町を形成していたと言われております。もしかすると、表通りに面して主屋と蔵を持つ本郷的な町屋と表に便所を持つ端郷的な町屋、これがその原型になるのかなとも考えております。しかし、調査例が少ないので、これからの課題になると思います。

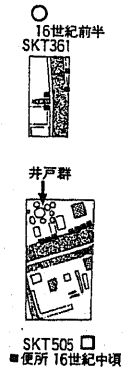
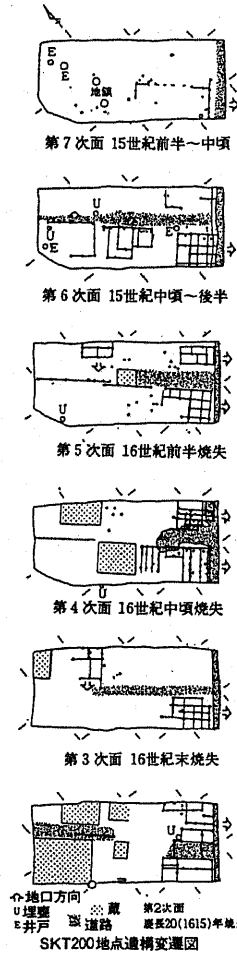
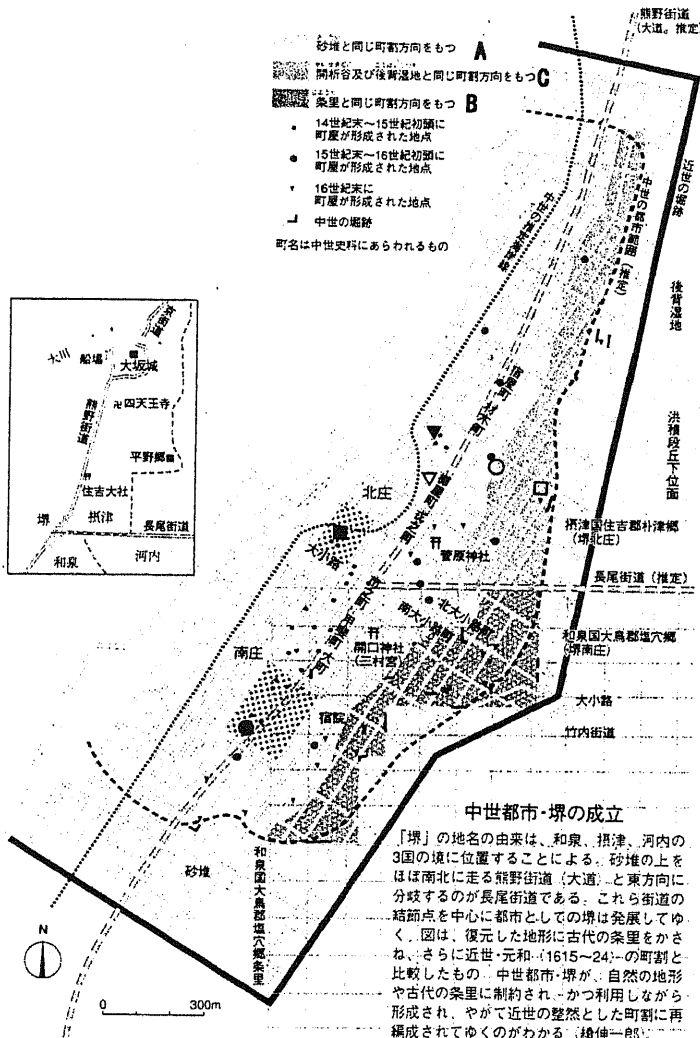
次に大坂でも話が出てきました?列建物、蔵と考えているのですが、これについて説明しようと思います。堺環濠都市遺跡では、?列建物が15世紀後半～16世紀前半頃に登場します。登場した段階では、建物の四周をせんで囲いその内側に礎石を密に敷き並べ、その

礎石の上に土台の木を置いて、それにホゾ穴を穿ち、柱を取り付けて建てるという構造になっています。初期は地上式のみで、慶長期に入って突然に半地下構造の■列建物が登場します。これが三層蔵ではないかと思われまゝ。今までに半地下構造の?列建物は約10例ほどありますが、出土品は茶道具の上物とか、非常に高価な物が多いです。ただ、堺は地下に物を収納・埋納するという習慣は無かったみたいで、京都とかである様な石組地下工作物とかは、中世段階では今の所確認はされておられません。堺では、慶長元年に起こった大地震の被災面ってというのは確認してないですが、恐らく大地震後に強固な構造の?列建物が要求されて半地下構造の建物が登場するのではないかと考えられます。瓦使用の状況とか考えても、恐らく城郭建築の影響で半地下構造が作られて来るのではないかという風に考えております。慶長20年(1615)年以後、半地下構造の?列建物確認されていないので、少なくとも慶長期に限られる建物と言えらると思います。構造的には、鎌倉の方形竪穴住居址と類似するのではないかと考えています。S K T 39地点、図3の方に掲げておりますけど、平面規模がですね約3.55×2.2m、?は4段・5段の縦積みで、東側に入口を作っています。ここの内側には、半裁した平瓦を約8段積んで、その間に粘土を詰めて補強しています。この建物の床面は生活面から?2枚分、約60cm程下がっています。壁下には約9cm角の角木を横向きに置いて、これにほぞ穴をあけて柱を取り付けております。北壁及び南壁には約13m間隔で約8cm角の間柱の痕跡が炭化して残っていました。また床面には地下からの防湿効果を兼ねて貝殻を約10cm程の厚さで敷き詰めていました。建物内からは、ほぼ原形を留めた唐津の水指・李朝の壺・備前の壺とか色んな物が出土しています。茶道具蔵と考えられます。S K T 230ではS B 04が半地下構造の?列建物でした。南

北3.7m、東西5m以上を測り、東側に0.3×1.97mの入口が付いています。これは、生活面から床面の下まで約30cm程下がっています。床下には貝ではなくて小石を混ぜた砂を敷き詰めていました。約15cm角の材で土台にして、それを組み合わせてその上に壁土を立ち上げていました。壁土の厚さが約20cm程ありました。0.13m角の柱痕が約0.4m間隔で残っており、6cm角の間柱が2本残っていました。この中から茶湯に使用する炉壇や茶湯関係の陶磁器も多数出土しています。また次のページの図5にS K T 241の■列建物を載せています。この241というのは39の北側になります。ここでは非常に大きな■列建物を確認しています。どうも当初作った後に何らかの事情で、焼失してはいないのですが建物を改造した状況が見られます。それは図5の左側の方に■を積んだ断面図がありますが、横から見たとき、下から2段目と上2段には積み方に違いが認められます。恐らく当初の建物は、下2段を積んだ段階で一旦せん列建物があって、その後何らかの事情で生活面が嵩上げされた時に、?2枚分積み上げて床を嵩上げしているという状況が認められます。こちら、礎石を密に並べてその上に土台の角材を置いて、それに柱を着けて立ち上げているのですが、なにせ途中で改造しているという状況もあって、この柱を取り込んだ形で半裁した平瓦等の間に柱を留める様な形で立ち上げるという状況が見られます。特に右側の241の真ん中辺に軒丸瓦があると思うのですが、その間に細い線がありますが、これが柱の跡になります。

図6のS K T 448-2の?列建物でも同じ様な形で、?2枚積んで平瓦を積み上げてその上に壁土を取り付けています。図7のS K T 573の?列建物では、床面に貝を貼った後に壁土と同じ様にスサ入の土を貝の上から塗り込んで、その上に■を敷き並べています。間口3.1m、奥行き3.4mで東側に2m×0.3mの入口が取

り付きます。土台に横木を巡らせてその上に瓦等を積み上げて行き、2枚分約60cm程生活面より下がります。壁土の厚さは約20cm程あります。柱は約12cm程度の角材で約40cm間隔、間柱は6cm角で10cm間隔と報告されています。以上のように半地下構造の■列建物は、慶長年間に登場します。図7の下に構造模式図と書いてありますが、これは■列建物の構造模式図ではなく、鎌倉の方形竪穴住居址の図をそのまま拝借しました。鎌倉の壁石が瓦質の■になり、地覆石が土間や貝等になったりしますが、基本的には同様な構造になるのではないかと思います。ただ板ではなくて土壁で立ち上げるという根本的な違いがありますが。また最後に図8に掲げましたのは、SKT47で出土した■列建物を蔵座敷（茶事空間）に改築した例です。現在確実に茶室と考えられる建物が、5例程ありますが、その内4例は?列建物を転用したものです。興味深い事に、全部とも床面を■1枚分約30cm下げております。発掘当時は「なぜこんな床を下げるのかな」と疑問に思っていたが、最近では「恐らく炉壇を据え付けるためにわざと床面を下げたんじゃないか」とい考えています。それはこの下がった床面に炉壇が残っている例が認められるからです。ではスライドの方でご説明させていただきます。



● SKT200

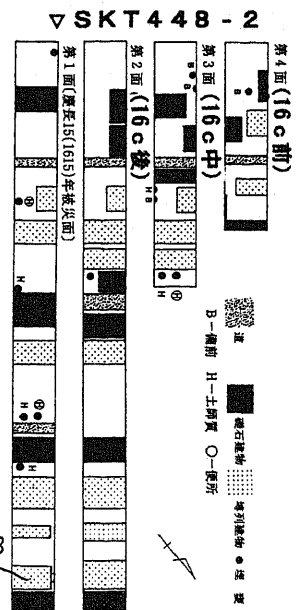
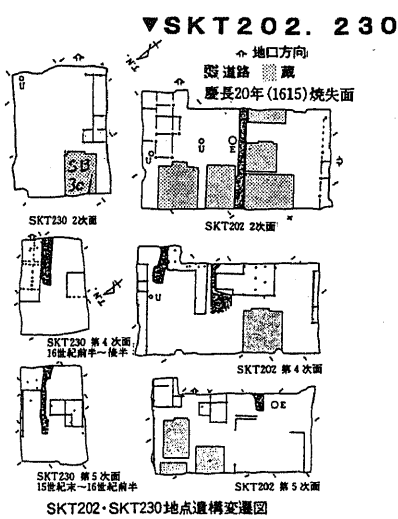
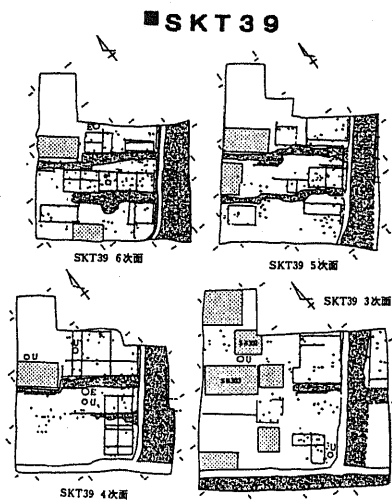


図1

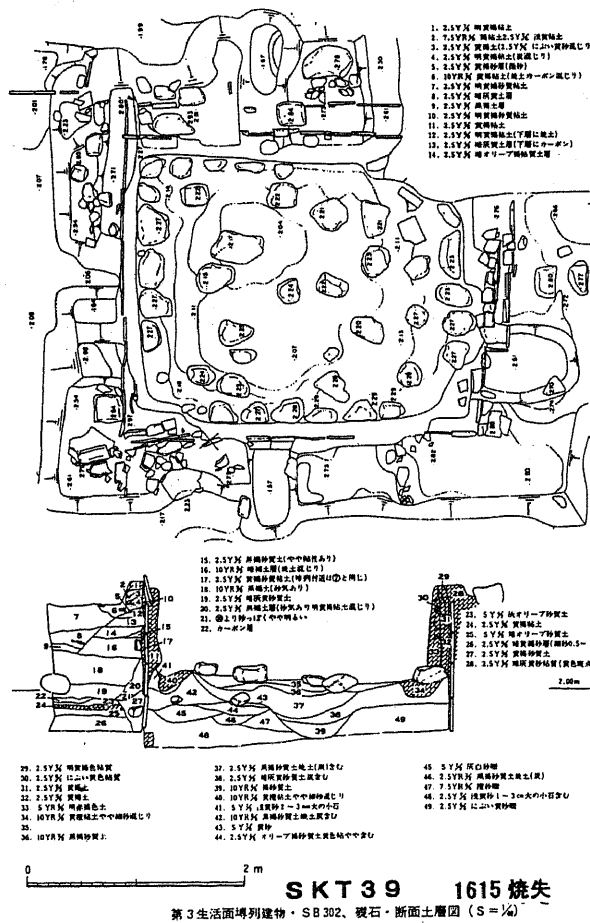
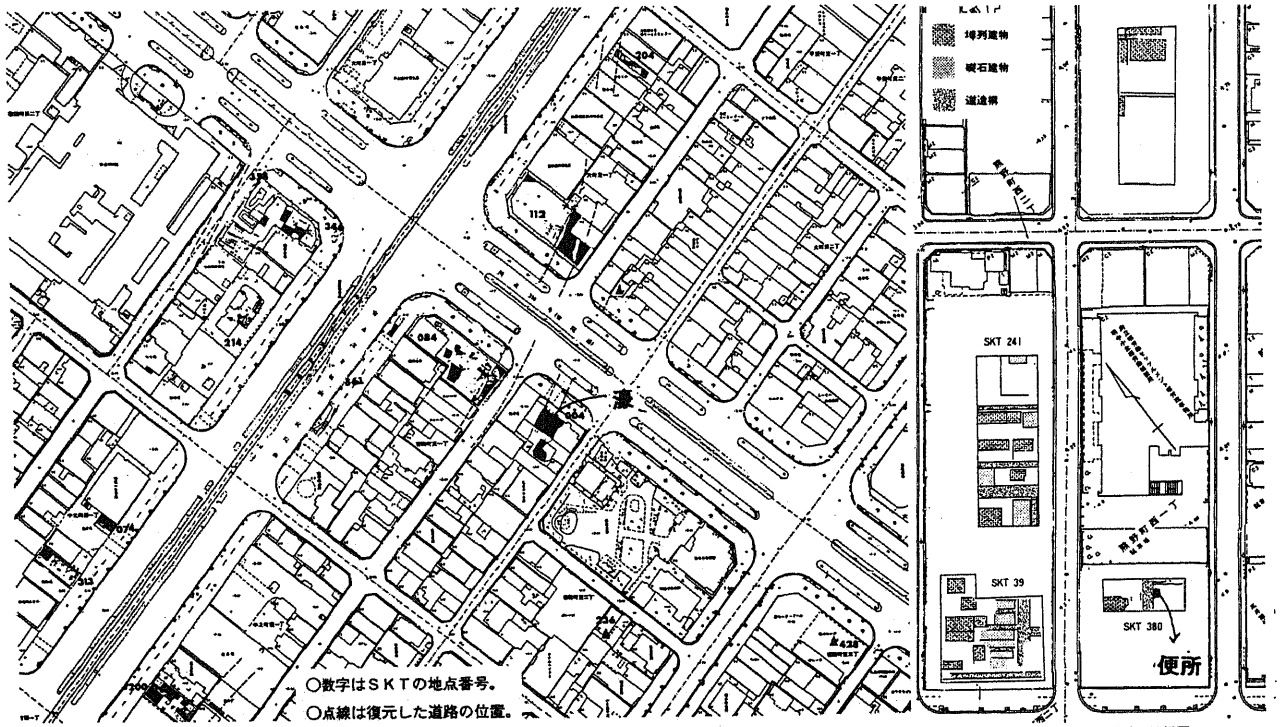


図3

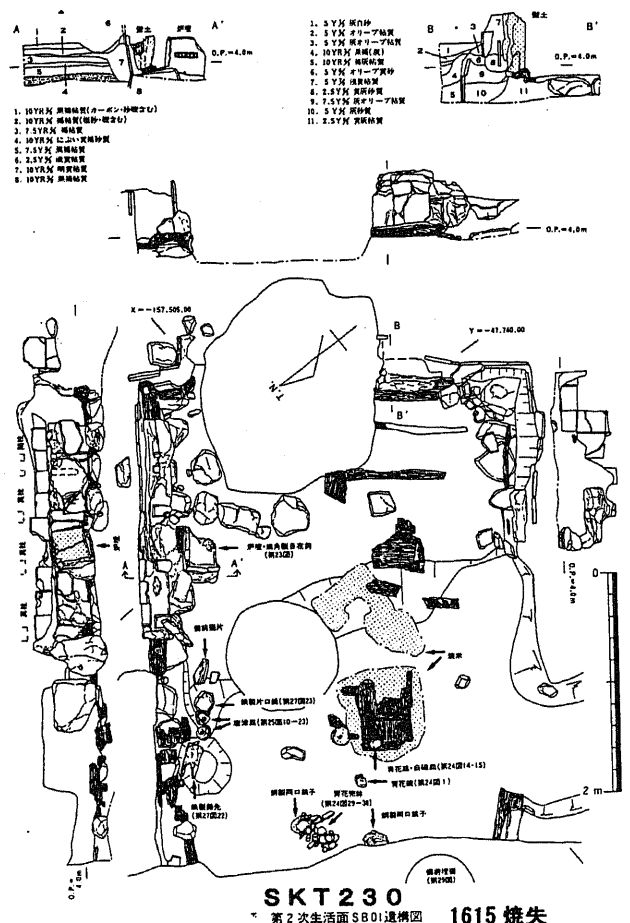
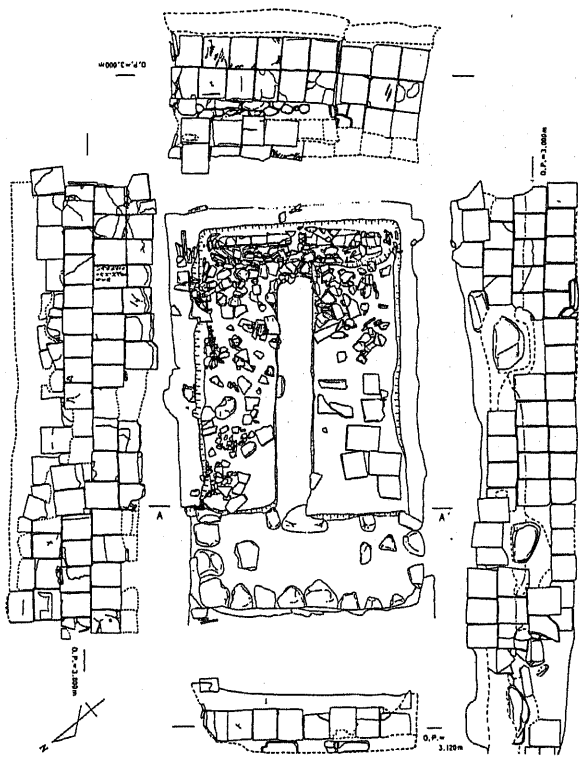


図4



1. 107R 瓦葺色絵土

SKT241 1615 焼失
 埴列建物 (検出時平面及び外周)

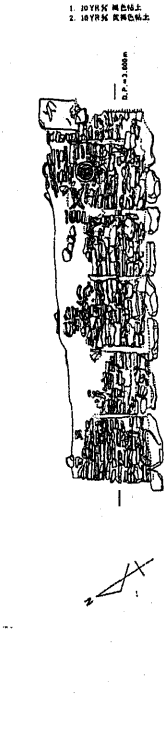
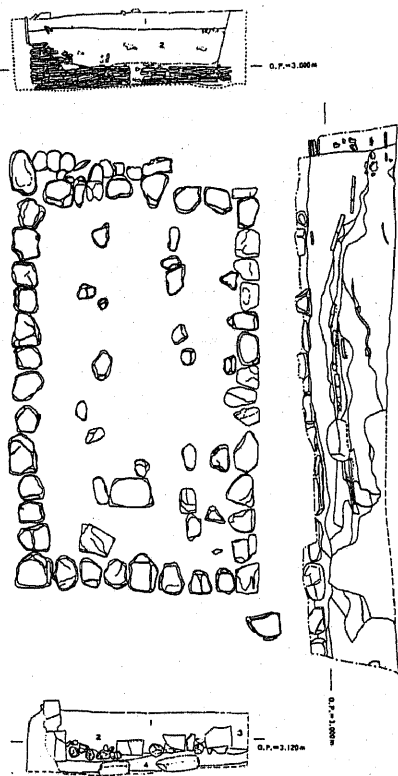
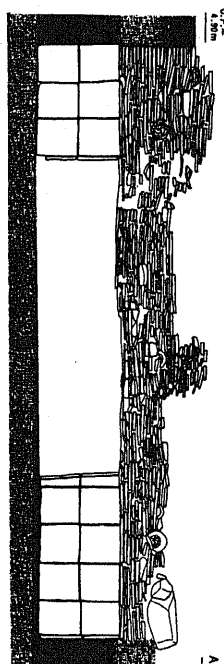


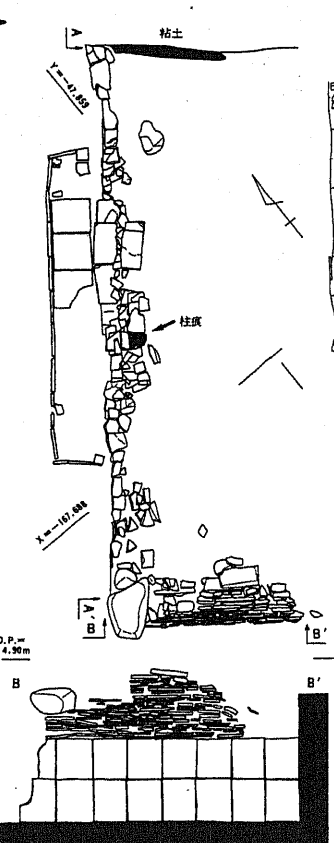
図 5



SKT241
 埴列建物 / 壁石配層及び外周

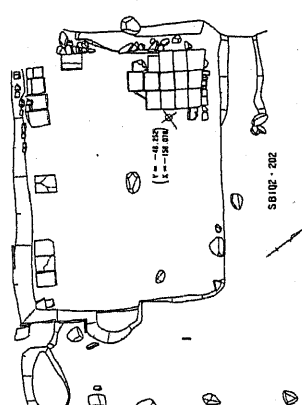


SKT448-2

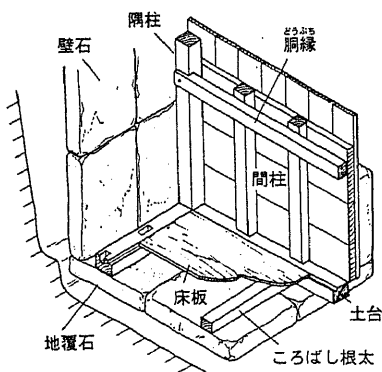


SBI9 平面・南・西壁立面図 1615 焼失

図 6

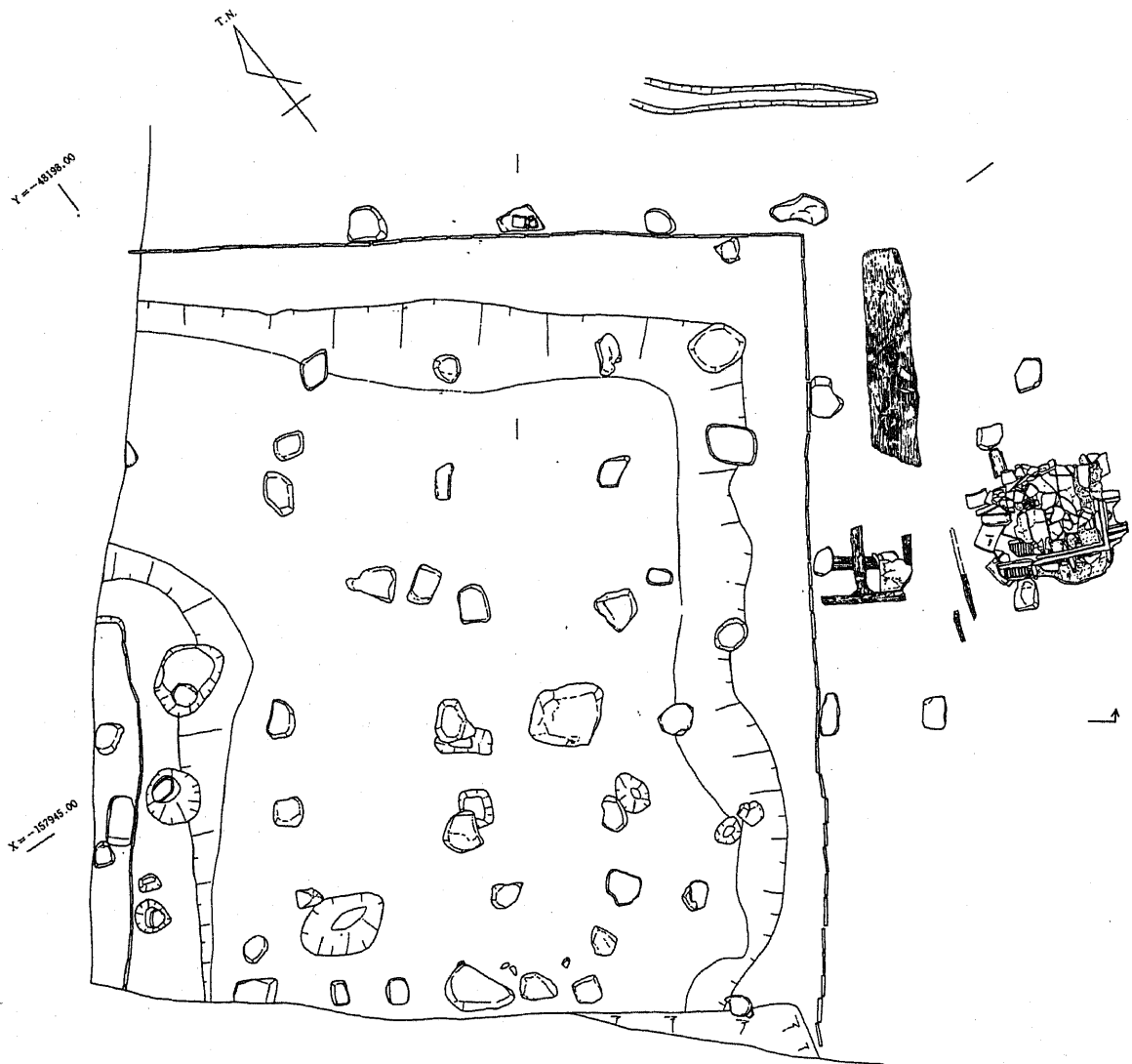


1615 焼失
 SKT573

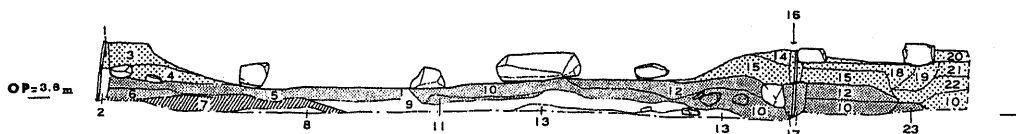


構造模式図

図 7

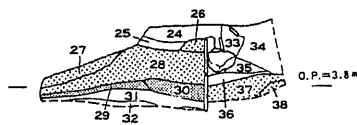


第2次貼床
 第1次貼床
 地土



- | | |
|------------------|-------------------|
| 1. 2.5V 灰褐色土層 | 12. 10V 灰褐色土層(中) |
| 2. 2.5V 灰褐色土層 | 13. 地土 |
| 3. 2.5V 灰褐色土層(中) | 14. 地土 |
| 4. 2.5V 灰褐色土層 | 15. 7.5V 灰褐色土層 |
| 5. 2.5V 灰褐色土層 | 16. 2.5V 灰褐色土層(中) |
| 6. 2.5V 灰褐色土層 | 17. 2.5V 灰褐色土層 |
| 7. 地土(中) | 18. 2.5V 灰褐色土層 |
| 8. 10V 灰褐色土層 | 19. 2.5V 灰褐色土層(中) |
| 9. 2.5V 灰褐色土層 | 20. 2.5V 灰褐色土層(中) |
| 10. 2.5V 灰褐色土層 | 21. 2.5V 灰褐色土層 |
| 11. 10V 灰褐色土層(中) | 22. 2.5V 灰褐色土層 |
| | 23. 2.5V 灰褐色土層 |

- | |
|-------------------|
| 24. 2.5V 灰褐色土層(中) |
| 25. 2.5V 灰褐色土層(中) |
| 26. 2.5V 灰褐色土層 |
| 27. 地土(中) |
| 28. 2.5V 灰褐色土層(中) |
| 29. 地土 |
| 30. 2.5V 灰褐色土層(中) |
| 31. 2.5V 灰褐色土層 |
| 32. 地土 |
| 33. 2.5V 灰褐色土層 |
| 34. 2.5V 灰褐色土層(中) |
| 35. 2.5V 灰褐色土層 |
| 36. 2.5V 灰褐色土層(中) |
| 37. 2.5V 灰褐色土層(中) |
| 38. 地土 |

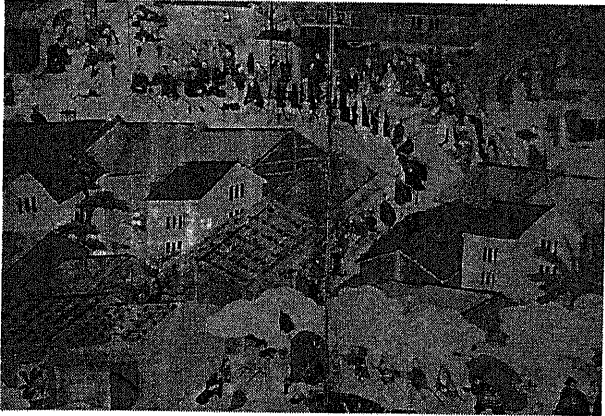


堺環濠都市遺跡 (SKT 47 地点)
 第2次生活面 SB 04 (II期)

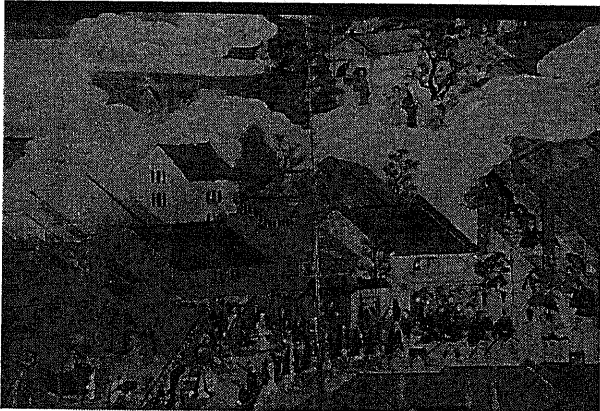
1615 焼失

図 8

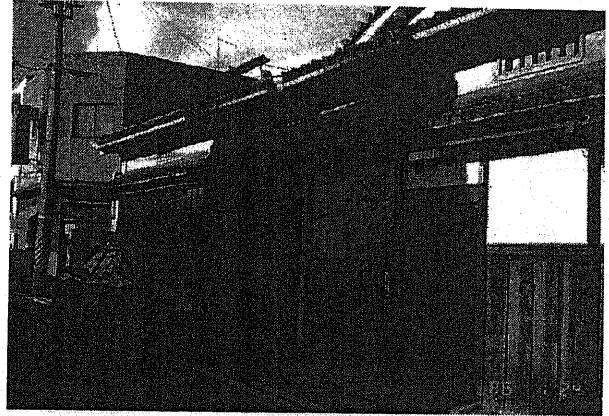
(スライド説明)



これが堺市博物館で所蔵しております「住吉祭礼図屏風」です。これは慶長20年に焼失する前の、堺の町の様子を描いたと言われております。面白いのは先程申しました三層蔵じゃないかという話をしましたが、屏風の中央部左側上に細長い形の建物がありまして、あれが三層蔵になります。



こちらも同じです。これは住吉大社を出発して堺の住吉大社頓宮、これは宿院にあるのですが、そこまで祭礼の行列がやってくる風景を描いた屏風になります。先程瓦の話もあったのですが、少なくとも慶長期段階では蔵は瓦を使用しております。礎石建物の主屋にも一部使用しているという様に申しましたが、絵図の方でもそういった描き分けをしているようです。



これは重要文化財の山口家住宅です。少なくとも元和以降になって建てられたのは確かですが、建立年代ははっきりしてないと思います。16世紀中頃だと言う人もいますが、堺の中に唯一残る古い町屋になります。



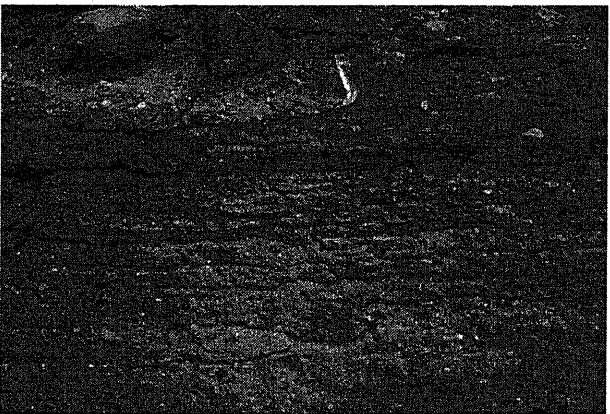
これが、慶長20年段階で良く見られる町屋の典型的パターンです。これが図2の方に書かれておりますSK T84地点という場所になりますが、先程申しました様に幅12m位の大通りになります。ここに道路側溝がありまして、中には道路を跨ぐ側溝状の溝が出土しております。道路に面して礎石建物が展開して、その奥に蔵が建つという形になります。



これが先程攪乱で壊されていましたが、その下層の?列建物になります。ここの○が凸状に出ておりますが、これが入口だと考えております。このように礎石を内側に密に並べるといふ状況が見られます。



これは基本的な?列建物のパターンです。生活面上に約1/3程度?が出て、その内側に礎石を密に並べる。これが土間形式で、半地下構造とは違うタイプの?列建物になります。



これがアップで撮りすぎて分かり難いとは思いますが、道路の土層断面になります。人が通るせ

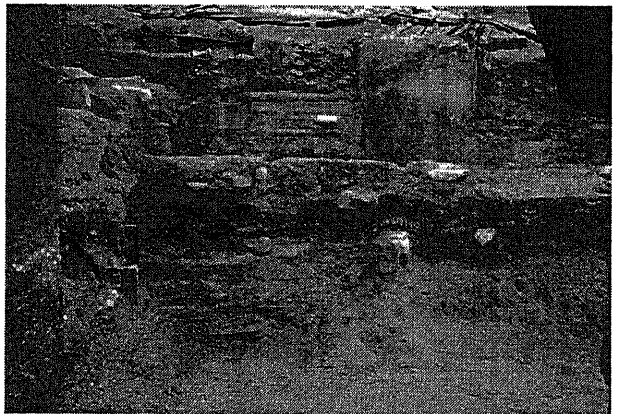
いでありましようか堅く締まっています。



堺の焼土層の状況ですが、厚さ約20cmで壁土材を中心とします。これが慶長20年の焼土層になります。



これも同じく土層になるのですが、間にあるのが焼土層になります。また、この上に○が見えますが、ここに?列建物があって、この黄色粘土が土間に相当します。町の中では、粘土は採れませんので、周辺の洪積段丘面等から粘土を採集して、運んで持ってきたと考えられます。



これも同じく土層断面です。焼土層の下に建築部材等が焼けて堆積した炭化層（カーボン層）が

あります。



これが、竈になります。堺では16世紀後半頃になると登場するみたいです。大坂と同じ様に瓦を流用して作っております。ただ大阪の例みたいに3つも5つも並ぶという様な状況ではなくて、堺の場合では1個単独であるのが多いです。



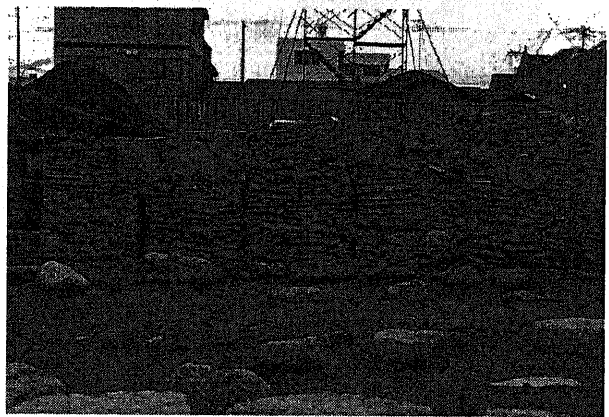
これが?列建物の基本的な平面構造です。○の内側に礎石を並べ、入口と思われる張り出し部が付く。これが15世紀後半～16世紀前半頃に登場した時からこの形で登場します。



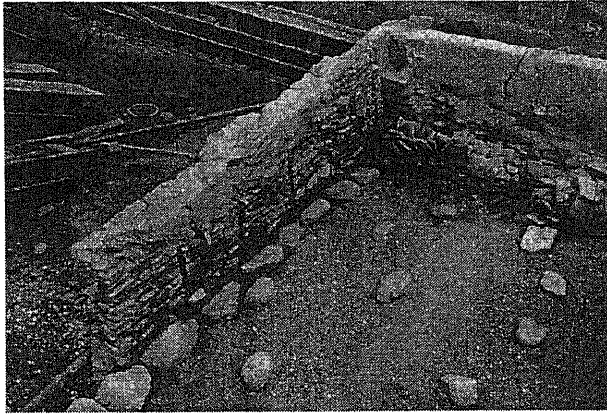
これは図5のSKT241です。調査方法が悪く、セン列建物だけを単独で残して掘ってしまったので、分かり難いのですが、2時期に区分されます。これが下層にあった築造当初のセン列建物の礎石で、その後に土間を貼って改修した状況が見られます。



これが築造当初の礎石の状況になります。これが入口部分に相当します。14



これは改修後の状況で半地下構造になります。築造当初の礎石の上に平瓦等を半裁横積して、その間粘土を充填します。柱は大壁形式にしており、これがそれに相当します。先程申しました様に、ある段階で生活面が上がったために、○を一枚上に重ねますが基本的には下層の礎石を再使用している状況が見られます。

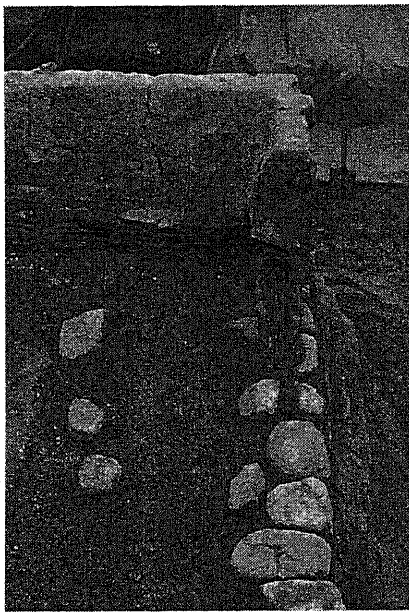


ここに○があったのですが、礎石の上に置かれた角材になると思います。粘土に充填され腐敗して空洞になっています。

角度を変えて撮った所です。瓦を半裁して積んだのではなく、下層の礎石から粘土だけ貼り込んで柱を立ち上げている個所もありました。



これが○を建物外側から見た所です。



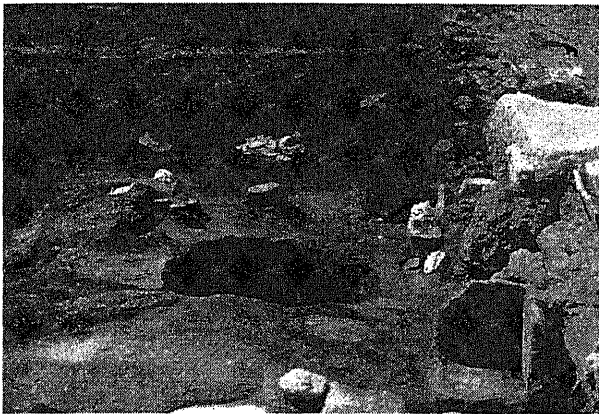
ちょっと方向を変えたところですが、これは全部柱になって、恐らくここから壁土が立ち上がったと考えます。ただ壁土の痕跡が見られなかったと思います。



これが、その積み方の状況です。このように瓦を半裁して積んでいます。



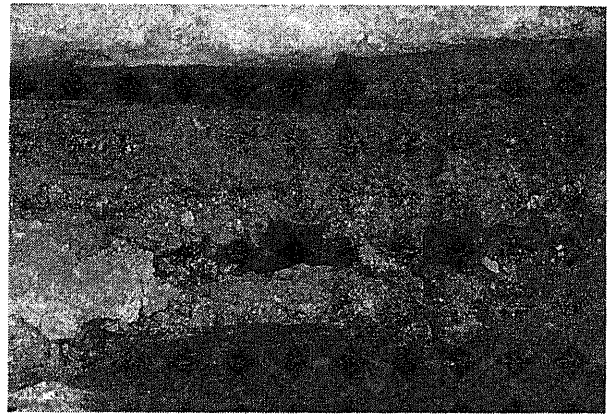
これがSKT230で確認された半地下構造の蔵です。慶長20年の生活面から約30cm程床面が下がります。後世の攪乱で壊されておりますが、○が凸状に突出しており、ここが入口と思われます。ここは先程のSKT241と異なり、壁土が礎石上の角材から立ち上がっていました。これが茶湯で使用する炉壇になります。この建物内に茶事空間が在ったのではなく、移動可能な形式なので茶事以外は蔵に収納していたと思われます。



これがセン列建物隅部の礎石上にあった角材が炭化した状況になります。壁の状況から見てここに柱があったとは思います。22



蔵内からは多数の陶磁器等が出土しています。14枚程セットで中国製兜鉢・唐津皿とか鉄先とか炭化米とか雑多な物が出土しています。



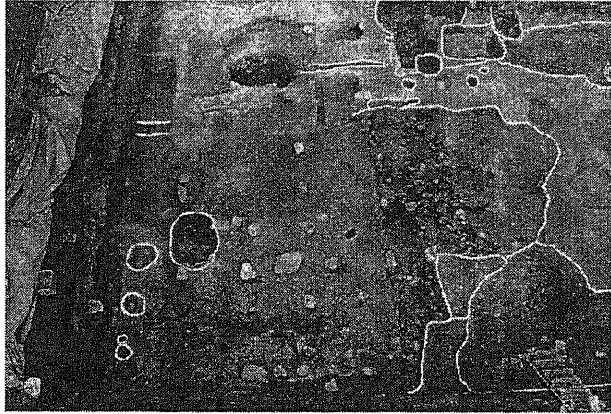
厚さ20cmの壁土を外した状態です。その下に残っていた角材です。



これが壁の中に残っていた間柱と思われます。



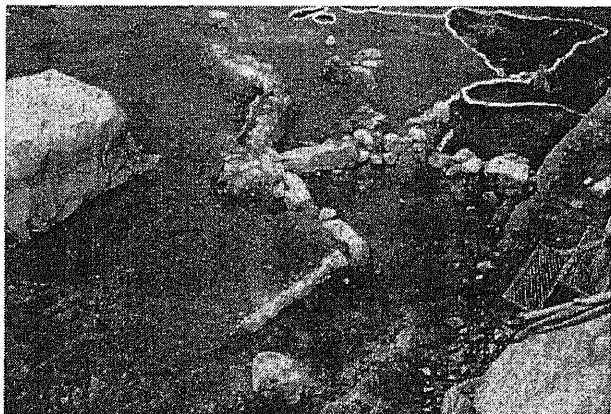
大引き、根太とかいう話ありましたが、私は根太かと考えています。



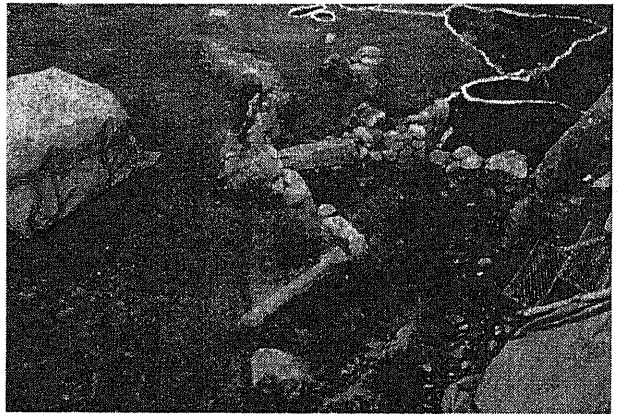
S K T 3 9で出土した半地下構造の蔵になります。床の下には湿気抜きの貝を敷き詰めています。ここは主に茶道具関係の品を収納していたみたいです。



こちらがS K T 4 7で確認された蔵座敷です。床面はなだらかに約30cm程下がります。セン列の外側に縁があったと思われます。またこの建物には壁土で作られた窓が倒壊した時のままの状態出土しており、柱の痕跡や木舞の跡が見られました。



これがそのアップです。ここには蝶番状の鉄製品が出ております。



先程の建物に外側には、組石の庭が発見されています。



先程S K T 2 3 0の炉壇は、移動形式と申しましたが、こちらは作り付けの炉壇です。慶長20年の焼土総層の中から出土しました。外側周囲には藁を巻いていたみたいです。中には灰が詰まった状態で出土しまして、炉縁の跡が炭化しており、1尺5寸幅を測る。千利休以降にこの寸法に定形

化すると言われています。

これが町の外郭にある環濠です。町の内側に濠幅4mで、町の外側に幅8mの濠がありまして、慶長期頃この濠間約36m間に鋳物師が居住していました。



石垣で狭めた濠です。天正13年銘の木簡が出土しており、恐らく濠幅約8m程度の濠になると思います。これはSKT12ですが、石垣を使って濠幅を狭めていっております。

文献では、天正14年に秀吉が環濠を埋める命令を出したとされていますが、発掘調査では濠幅を狭めた形で出土します。

これが濠幅を狭めた土砂で、町の内側から狭めているのがわかります。この遺構空白地帯にも土塁があったのかなと思っています。築造当初は濠幅8m、深さが約2.3m程度だったと思います。

3. 兵庫津の町並の変遷

—兵庫津遺跡第15次調査の成果から—

神戸市教育委員会 内藤 俊哉

1. はじめに

兵庫津遺跡ですが、考古学的な調査につきましては、博多や堺の後塵を拝しているような形でして、最近まで実態がよくわからない遺跡でした。ただ文献には、平安時代以降「兵庫の津」や「兵庫嶋」、また古くは「大輪田泊」などと呼ばれる港についての記載がたびたびみられ、平清盛による日宋貿易の基地とされたことなどは有名です。その後、室町時代には日明貿易も始められて、將軍足利義満の兵庫下向の記事も文献にたびたび登場します。また中世には「兵庫北関大船納帳」といった著名な文献も存在しており、これについては、詳細な研究もなされております。

このように文献史学の方からは、古くから重要な港湾遺跡として早くから注目されていたわけです。しかし考古学的な調査につきましては、1988年に実施された兵庫津遺跡の第1次調査で中世の海岸線の痕跡などが検出されたものの、それ以降の調査では中世の遺物が包含層中に認められたりする程度で、あとは近世後期の町屋の一部と考えられるものが検出されるというような状態でした。ところが阪神・淡路大震災以降、兵庫津遺跡の存在します兵庫区南部周辺において大規模な工事、共同住宅の建設や、遺跡をちょうど横断するように通る国道2号線沿いに、共同溝という電気・ガス・水道などのライフラインを入れたものの設置ですとか、が行われるようになりまして、これらに伴う発掘調査によって中世から近世にかけての兵庫津に関連すると思われる遺構が相次いで発見されるようになりました。今回、私が報告させていただきますのは、このような状況の中で神戸市教育委員会が平成10年度に実施いたしました第15

次調査の成果についてです。

2. 第15次調査について

この調査は、震災復興の共同住宅の建設に伴い1998年の5月から翌年1月まで、約750㎡の面積を調査したものです。

ところで兵庫津遺跡を考える上で、一つの手掛かりとしまして、『元禄兵庫津絵図』というものが存在しております(図3)。これは元禄9年(1696)に尼崎藩に提出された町絵図でして当時の兵庫の町が克明に描かれています。さらに精度的にも現在の地図と合わせましてもほとんど、ぴったりと重なるというかなり素晴らしいものです(図2)。

この絵図によりますと今回の調査地は、宮前町の南側の一画にあたりまして、この頃の海岸線から数十mという場所になります。慶長の頃の石高などを記録した文書『矢田部郡兵庫屋地子帳』などによっても、この一帯、宮前町や隣の鍛冶屋町などは、大変に人口密度の高い、賑やかな場所であったようです。

3. 基本層序と第1遺構面について

さて、調査成果ですが、今回の調査におきましては、おおよそ13世紀後半から18世紀にかけての時期の遺構面が、合計で8面確認されました。

現在この周辺の地表高は海拔3m前後でして、最終面である第8遺構面になりますとほぼ海拔0m前後というような状況です。

ついでにこの調査区の基本層序についてですが、第4遺構面までは図に見られるように各遺構面ごとに盛砂によって整地されていて、うち何層かにおいて焼土層を挟んでいる様子が認められます(図10)。

次に各遺構面の状況ですが、第1遺構面は地表下約1mほどある近・現代の盛土の下において検出された町屋跡で、時期は18世紀中期以降のものです。

上層からの攪乱が激しいために、建物の礎

石等はほとんど残っていなかったために詳しい建物配置等は不明です。ただ地下に掘り込まれた遺構については、かなり残ってしまっていて井戸やゴミ穴にされたと考えられる埋桶遺構、掘り炬燵とされているような小さい炉跡などが検出されています。

4. 第2遺構面と「宝永の大火」

この下が第2遺構面ですが、第1遺構面のベースがかなり分厚い焼土塊などで整地された層でして、その下にさらに炭化物の層を挟んで、みつかった生活面です(図4)。炭化物の層には、建築材の柱や板や量といったもの、生活用具の木製品、下駄や草鞋といったものまで含まれておりまして、町がそのまま焼け落ちたような状態で、大規模な火災を受けたものと考えられます。この炭化物に覆われるようにして、町屋の跡が整然とあらわれてまいりました(写真2)。

炭化物に混じって生活用具をはじめとする遺物も多量に出土しており、これらの遺物の年代は、18世紀前半、もう少し細かく言えば初頭位までのものが含まれております。

このため、町屋が火災に遭ったのは18世紀初頭頃であると考えられます。

ところで、江戸時代の兵庫津の町には北風家という有力な商家がありました。江戸後期になりますと、後に豪商として有名となる高田屋嘉兵衛の青年時代の支援者となったりもする家なのですが、ここの文書類が断片的に残っておりまして、『北風遺事』という本に纏められています。この中に収められている文書の幾つかに、宝永5年(1708)に大火があって家屋敷が焼失したという記載がみられます。北風家は調査地周辺の宮前町や鍛冶屋町に家作をもっておりまして、今回検出された焼土面は、おそらくこの1708年の「宝永の大火」でいいんじゃないかと考えております。この焼土面は、20mほど西へ離れた第17次調査地、80mほど北の第20次調査地にお

いても確認されており、かなり広範囲の火災まさに「大火」があったものと考えられます。

17世紀後半から18世紀初頭にかけてといたしますと、まさに先程触れました元禄の町絵図の街並みがそのまま検出されたわけです。

さて、この「宝永の大火」による焼土面である第2遺構面において検出された町屋遺構についてみていきたいと思っております。

まず町屋の建物配置ですが、東西方向および南北方向に通る街路、現在も調査区の北および西にあります道路がさきほどの『兵庫津町絵図』に描かれております街路とほぼ一致している道でして、元禄期には存在していたようで、その街路に取り付くような形で建てられていたようです。

そのうち東西の街路に取り付く町屋建物ですが、間口の狭い細長い建物が壁を接するように6~7棟検出されております(A群)。そして南北方向の街路につきましても、道路部分の未掘部分が少しありますので分かりにくいですが、これに取り付く町屋が2ないし3棟存在していたようです(B群)。これら街路に面した町屋に囲まれた奥の部分には、石組みの貯蔵施設やゴミ穴と考えられる埋め桶遺構などの「生活関連遺構」とでも呼ぶべき遺構が集中して設けられています(図5)。

次に町屋建物の構造ですが、A群のものにつきましても、間口3~6mで奥行が14m前後の礎石建物です。さらに個々の建物には片側に幅90cm程で断面形が蒲鉾状になった版築状された部分、おそらく「通り庭」ですとか「通り土間」ですとか呼ばれているもの、が建物を貫くようにあります。そして、もう片側のところに2部屋ないし3部屋の間取りがなされていたようです。部屋の部分からは、畳材の炭化したものなども出土しておりまして、床貼りで一部畳も敷かれていたようです(図6)。

それから屋根についてですが、調査のとき整地された焼土を除去しますと炭化材の上に

20～30cm位の火を受けた自然石があちこちにみられまして、焼け落ちる順番からおそらくこれらは板屋根に使われていた「置き石」であろうと考えております。また瓦もほとんど出てきませんでしたので、建物は板葺きの屋根であったとみてまちがいなさそうです。

また、B群の町屋ですが、使用されている礎石も大きく、近くに瓦が多量に投棄されている土坑なども検出されておりますし、出土しました遺物も何枚もの大皿や凝った文箱風の硯ですとか水滴などの文具が含まれていることから、ここにはやや立派な瓦葺きの建物が建っていたようです。『兵庫津町絵図』におきましてもこの町屋が取り付いている街路は幅が広く描かれておりまして、さしずめ表通りの大店といったところでしょうか。

あと少し生活関連遺構について、石組み遺構は、内法80×150cm、深さ1.0mほどの規模で、20～40cmの石を一部加工しながら組んだ遺構で、そこは地面のままで水などが溜まっていた形跡もありませんので、何らかの貯蔵施設と考えているものです。埋桶遺構は、直径90cmほどの木桶を埋め込んだ遺構で深さ数10cmのものから1.5m程のものまで多くあり内部からは、割れた土器などに混じって魚の骨や鱗などが多量にみつかることから、「芥溜め」といわれるゴミ穴であったらうと考えています。

また、先程お話いたしました通り土間部分には、1ないし2基の埋甕が設けられております。内容物の痕跡等がありませんので確証はないのですが、各地の類例からおそらくトイレ遺構であろうと考えております。この他、土間部分を断ち割ったときに蛸壺を転用した胞衣室埋納ピットがいくつみつかりました。この胞衣壺埋納ピットは下層の第5遺構面ぐらいまで普遍的に確認されています。

5. 第3・4遺構面について

このような第2遺構面の下には10～20cmの

盛土（砂）がみられ一部に焼土層を伴い第3遺構面が存在します。この遺構面は出土遺物から17世紀中頃であろうと考えられます。残念ながらこの焼土層に関する当時の記録等は残っておりません。

基本的には、ほぼ第2遺構面における屋地割りを踏襲する町屋群が検出されました。建物の構造もほとんど同じようで、建物の両側の礎石などは、上の遺構面の礎石の真下に重なるように出てくるところもあります。ただ建物の奥行だけが、やや短くなっているようです。

他に上の面からの変化でいうと、各建物の土間部分に竈が設けられることがあげられます。竈は平面馬蹄形の半地下式で、上部は粘土で構築されており、2～5基ぐらいが連なった形で検出されています。なかには、拳大の石を組んだ上に土を塗り込めたものも見られます。

さらに、この下層において第4遺構面を検出しました。第4遺構面は時期的には17世紀前半～中頃のものですが、上の第2・3遺構面と同じ屋地割り同じ構造の町屋が検出されています。ただ建物の奥行はさらに短くなる傾向がみられます。また、使用されている礎石が小型化し、間隔をおいて配されるようになり、五輪塔などの転用もみられるようになります（図7）。

6. 第5遺構面と「慶長の大地震」

そして第5遺構面ですが、この面は礎石の残りが悪くて不明な部分もあり、また町屋群の中に一部大きな礎石建物が混じっているようですが、屋地割りは上の面とほとんど変わらないものと思われま

す。この遺構面で重要なことは、遺構面を覆う焼土層と共に地震による噴砂痕が検出されていることです。（今回の調査に伴う地震痕跡の鑑定については通産省地質調査所の寒川先生に御協力いただいた）この噴砂痕跡を引き

起こした地震は、この面の出土遺物などからおそらく1596年の「慶長の大地震」と言われているものと考えられます。

兵庫津が「慶長の大地震」において壊滅的な被害を受けたことは須磨寺の『當山歴代』や山科言経の『言経脚記』などの文献に記載がみられたわけですが、従来これを疑問視する、阪神域では大きな被害をもたらすほどの揺れはなかったんじゃないか、という見解がかなり根強いものものでした。近年、神戸市やその周辺地域においてこの「慶長の大地震」に伴うとされる地震痕跡が多数発見され、かなり大きな被害はあったものという認識はなされてきつつあったわけですが、今回は兵庫津の町そのものにおいて、この地震の痕跡や震災と考えられる焼土などが検出され、文献の記載が正しかったことが証明されたわけです。

7. 第6遺構面の倉庫群と町並の変化

さらに下層の第6遺構面は焼土混じりの整地層の下で検出された遺構面です。ほぼ全面が焼け土面です。この遺構面におきましては、今までみておりました町屋群とは全然違う遺構群を検出いたしております(図8)。

まず礎石建物2は、調査区の東部において検出した建物で東西が4.5m、南北が8m以上の、中央部に少し空きがあるので前後2棟に分かれるのかもしれませんが、規模があります。この建物の構造は、普通の礎石建物に比べてやや特異なものであり、20~30cm角の平石を並べて一定の間隔で石刻を造り、その間を数cmのバラス状の小石で覆っているものです。おそらく石列上に根太を渡して柱を立ち上げる構造をとり、かなりの加重に耐えるよう設計されたものと思われる。また石列間を覆っているバラス状の小石は湿気などを防ぐことを目的とされたと思われ、これらのことから倉庫(蔵)施設であった可能性が高いようです(図9)。

次に石敷建物1ですが、東西が6.0m、南北が3.0m以上の規模をもつ遺構で南側は、調査区の外です。この建物においては、床というか床下というかに拳大の石が敷き詰められて、さらにその間をバラス状の小石で充?するという構造がとられています。このような石敷は整地以外の目的では、さきほどの礎石建物2であげましたような防湿や後は小動物の進入防止などが考えられ、用途としてはやはり倉庫施設と考えるのが妥当かと思われます。

この他にも調査区の西部でも礎石が散在しており削平のため規模等は不明ですが数棟の礎石建物があったようです。ただこの部分の建物は、先の倉庫のような特別な構造はみられず普通の礎石建物のようです。

このようにみますと、第6遺構面におきましては、調査区の西側に居住区、東側に倉庫施設が配置された、いままで上層の遺構面においてみられていた屋地割りとは違った敷地利用がなされていたと考えられます。

この遺構面は15世紀後半から16世紀にかけての時期のもので、特に青磁・白磁・染め付けなどの中国製の貿易陶磁器が多量に出土しました。

このような大規模な倉庫群や多量の貿易陶磁器の出土は、日明貿易に関連する港湾施設の存在を予想させます。ちょうど県教育委員会の調査で時期的にやや遡る同様の礎石建物が西方の奥まった地点で確認されており、このことは都市の成長にともなう港湾施設の海岸部への進出というふうにも考えられます。

これより下層にさらに第7・8遺構面が存在するわけですが、攪乱といくつかの時期の遺構の重複が激しいため建物などの配置等については現在検討中です。多数の柱穴、土坑、土師器の集積遺構などが検出されており、ただ礎石になりそうなものはほとんどみあたらず掘立柱建物が建てられていたようで

す。

8. まとめにかえて

以上が調査成果の概略についてですが、最後に少しまとめさせていただきます。今回の調査は、遺構面の遺存が大変良かったために各遺構面の時期区分が可能でした。また比較的まとまった面積を調査しましたので、検出した建物や遺構を「町屋群」や「生活関連遺構」というように本来あるべき一つの生活空間として捉えることが可能となりました。

町屋の変遷についてもかなり詳しく知ることができ、なかでも慶長期とそれ以前の町割りが大きく変化することがわかりました。ちょうどこの時期は、織田信長による花熊城攻めの後、兵庫津の町が織田氏とそのあとを引き継いだ豊臣氏の勢力下で近世城郭化されていったとされる時期に一致します

また、第6遺構面において検出された港湾施設と考えられる遺構は、いままで考古学的に不明とされていた国際貿易港としての兵庫津に光をあてるものとなりそうです。最後に第2遺構面における焼土層からの出土遺物は近世の都市生活を知る上で非常に多くの資料を与えてくれるものと思われます。

大変雑駁でありましたが、今まであまり知られておりませんでした兵庫津遺跡の特に中世から近世にかけての様相につきまして、少しでも知っていただく機会になればと、報告を終わらせていただきます。

なお今回の調査成果につきましては神戸市教育委員会に帰属するものです。本稿で使用した図版・写真等につきましては、未報告資料も含まれますので、他に転載等の利用をされる場合は神戸市教育委員会の了解を得てください。

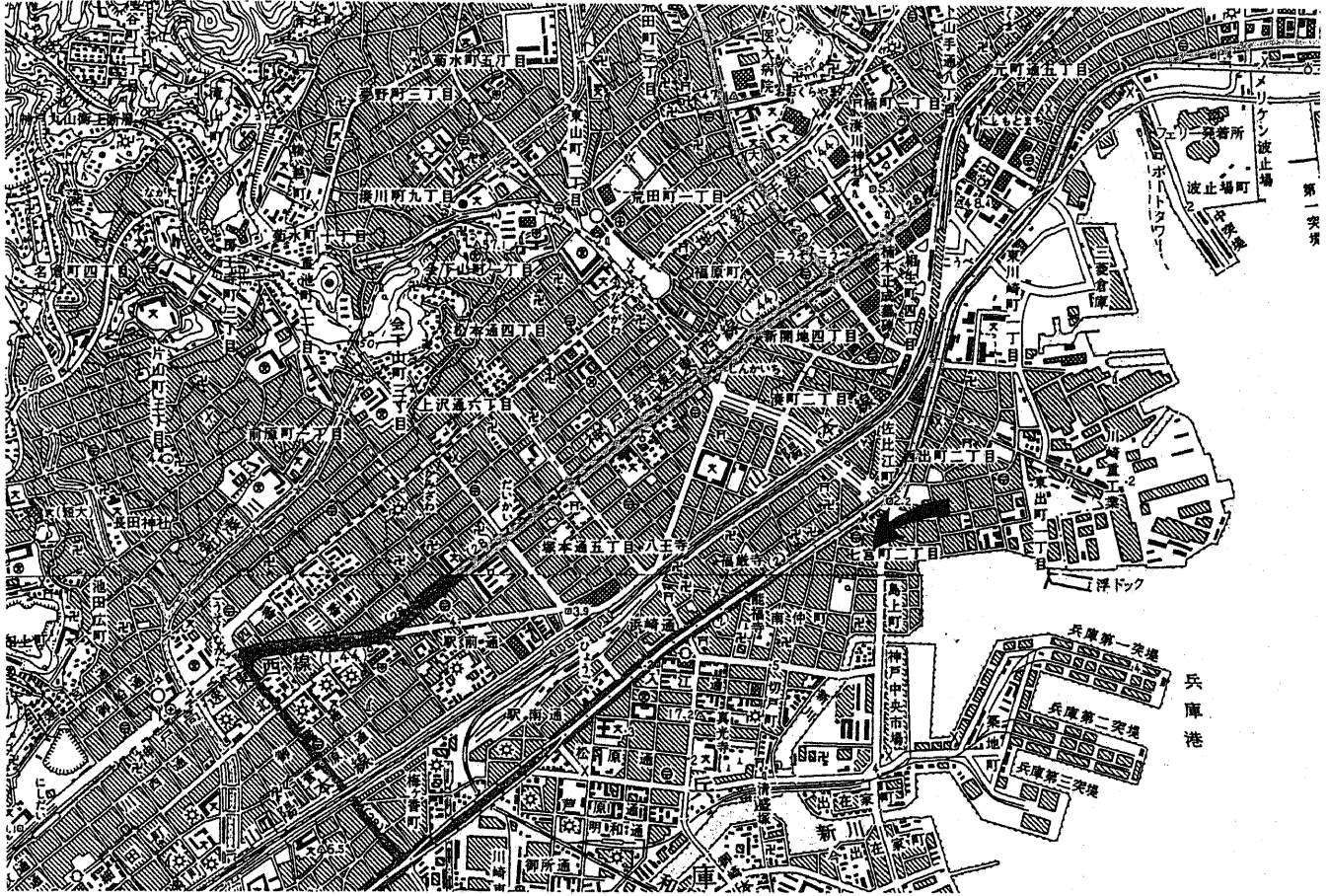


図1 調査位置図

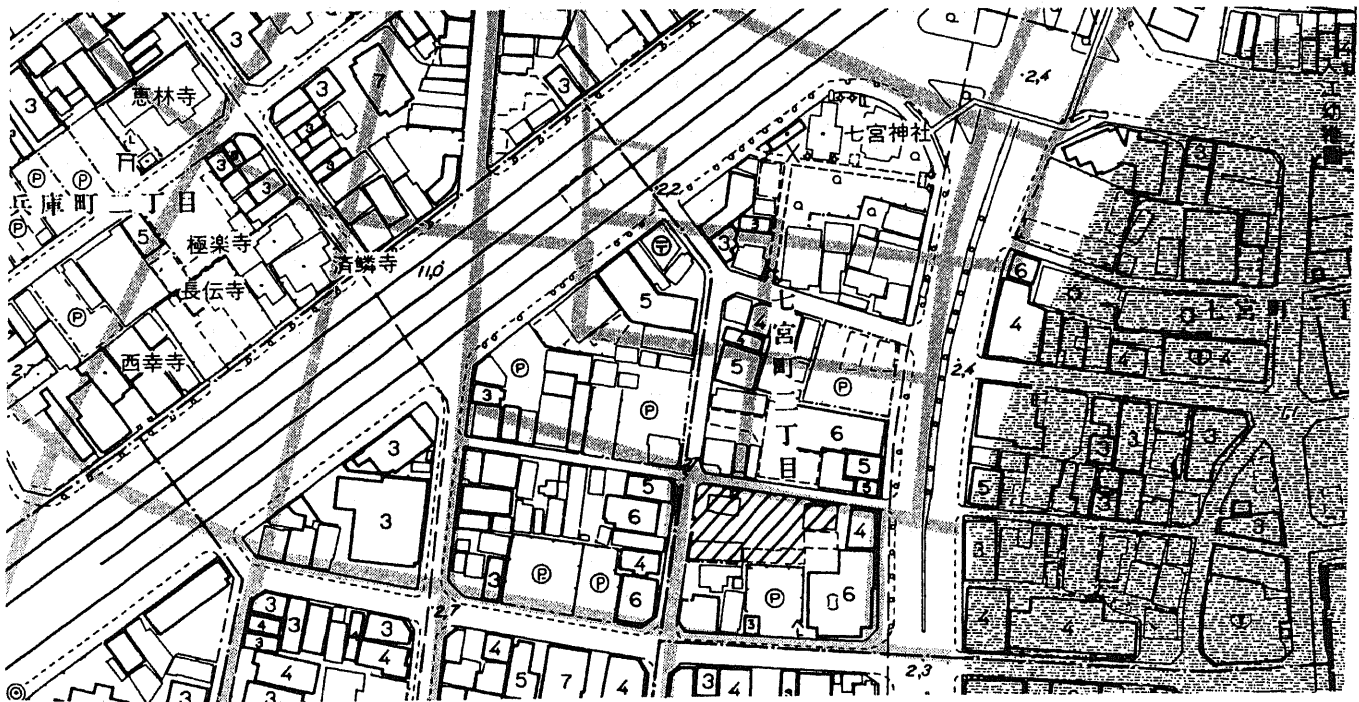


図2 調査区周辺 (元禄絵図との重ね図)

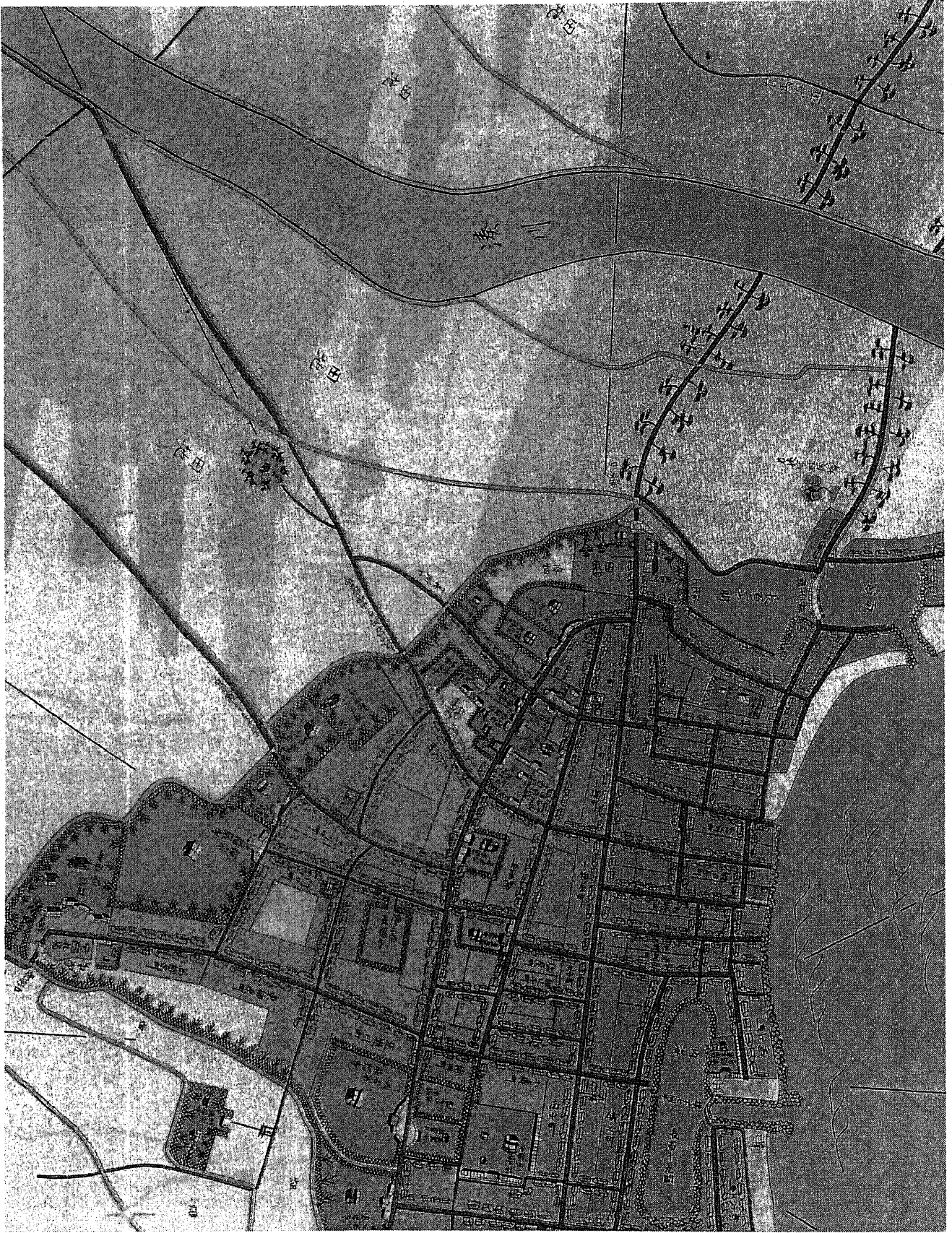


図3 元禄兵庫津絵図（「再版神戸市附図」大正12年刊行より）



图4 第2遺構面平面图

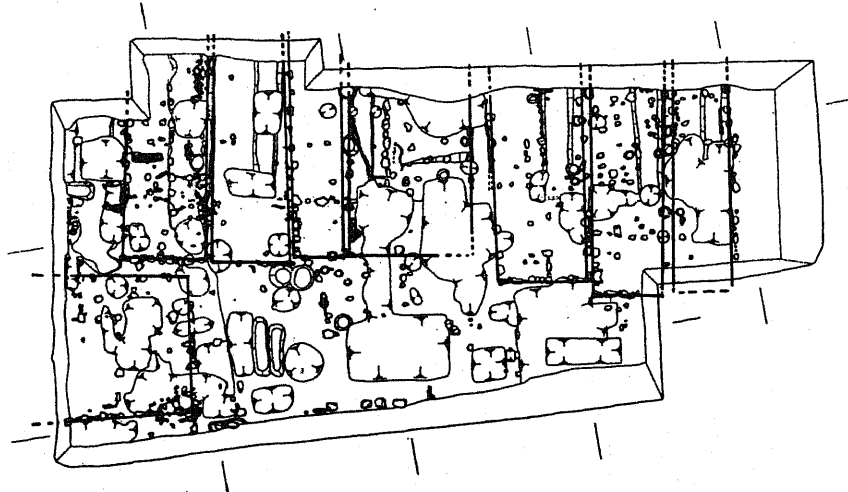


图5 町家群配置図

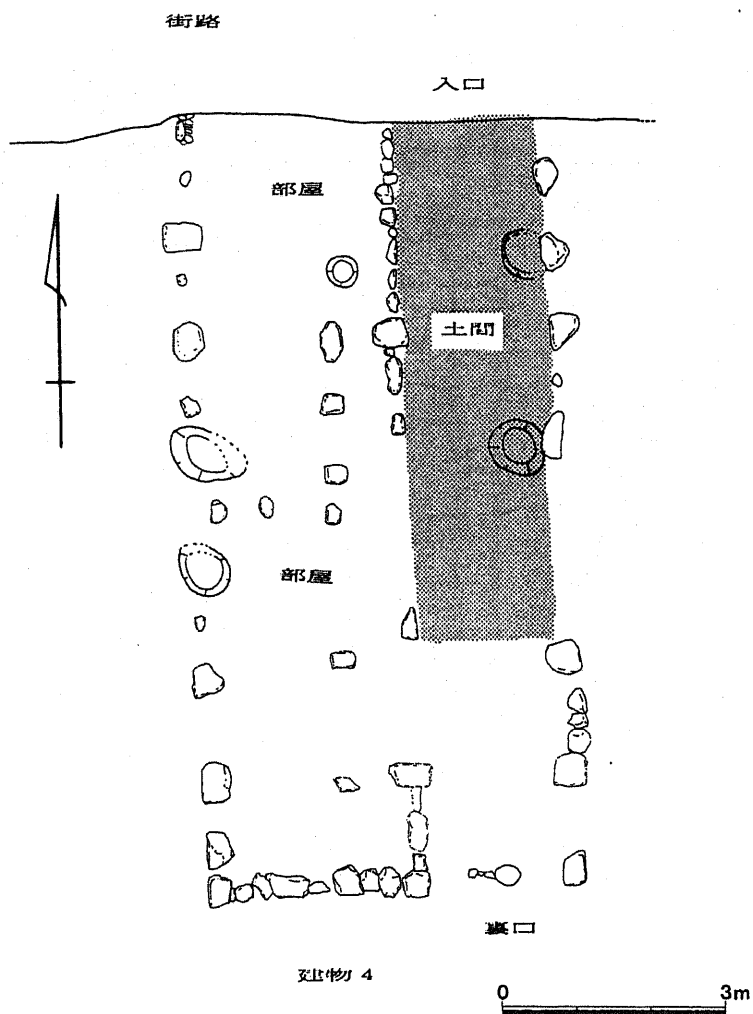


图6 建物平面図



图7 第4遺構面平面图

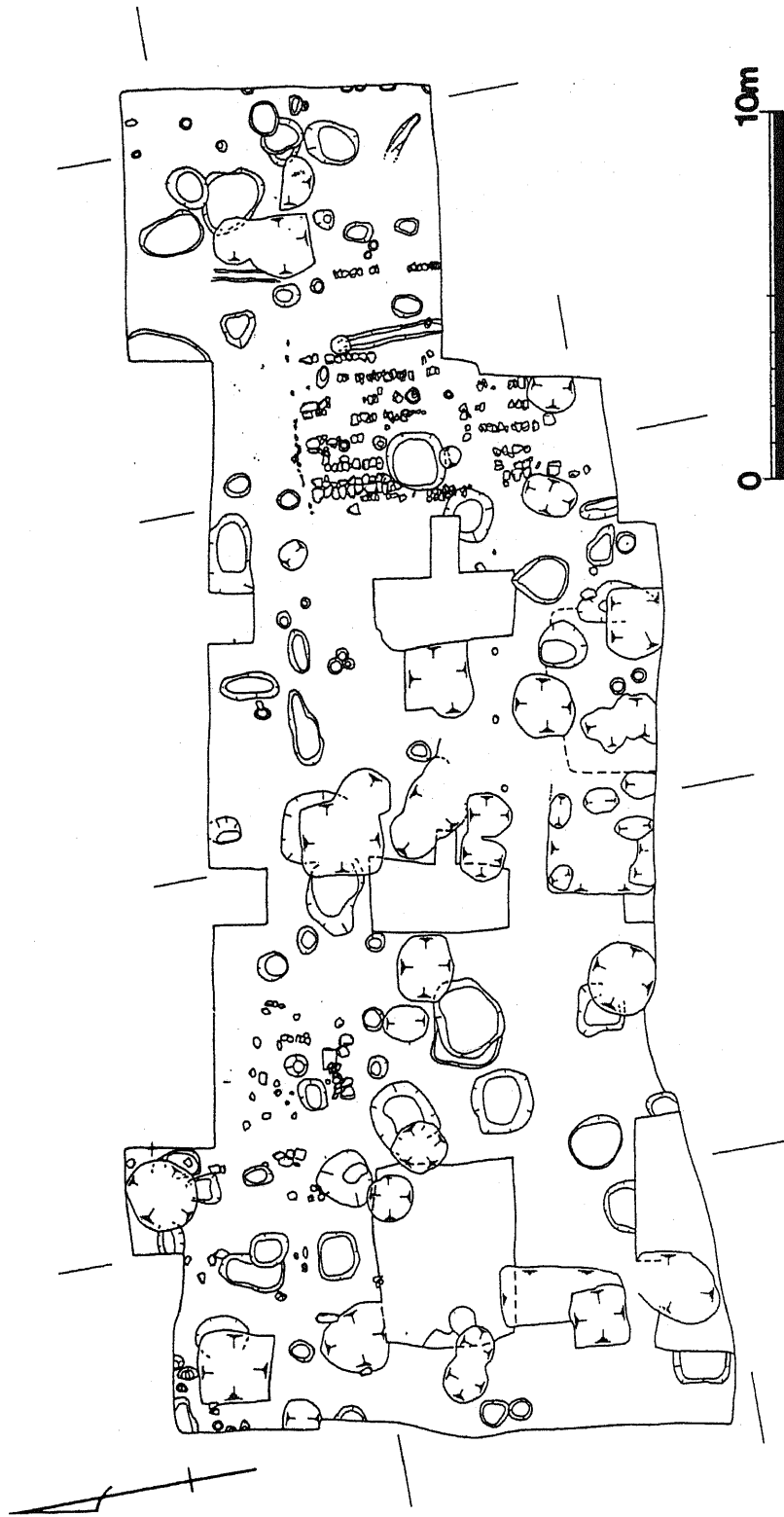


图 8 第6遺構面平面図

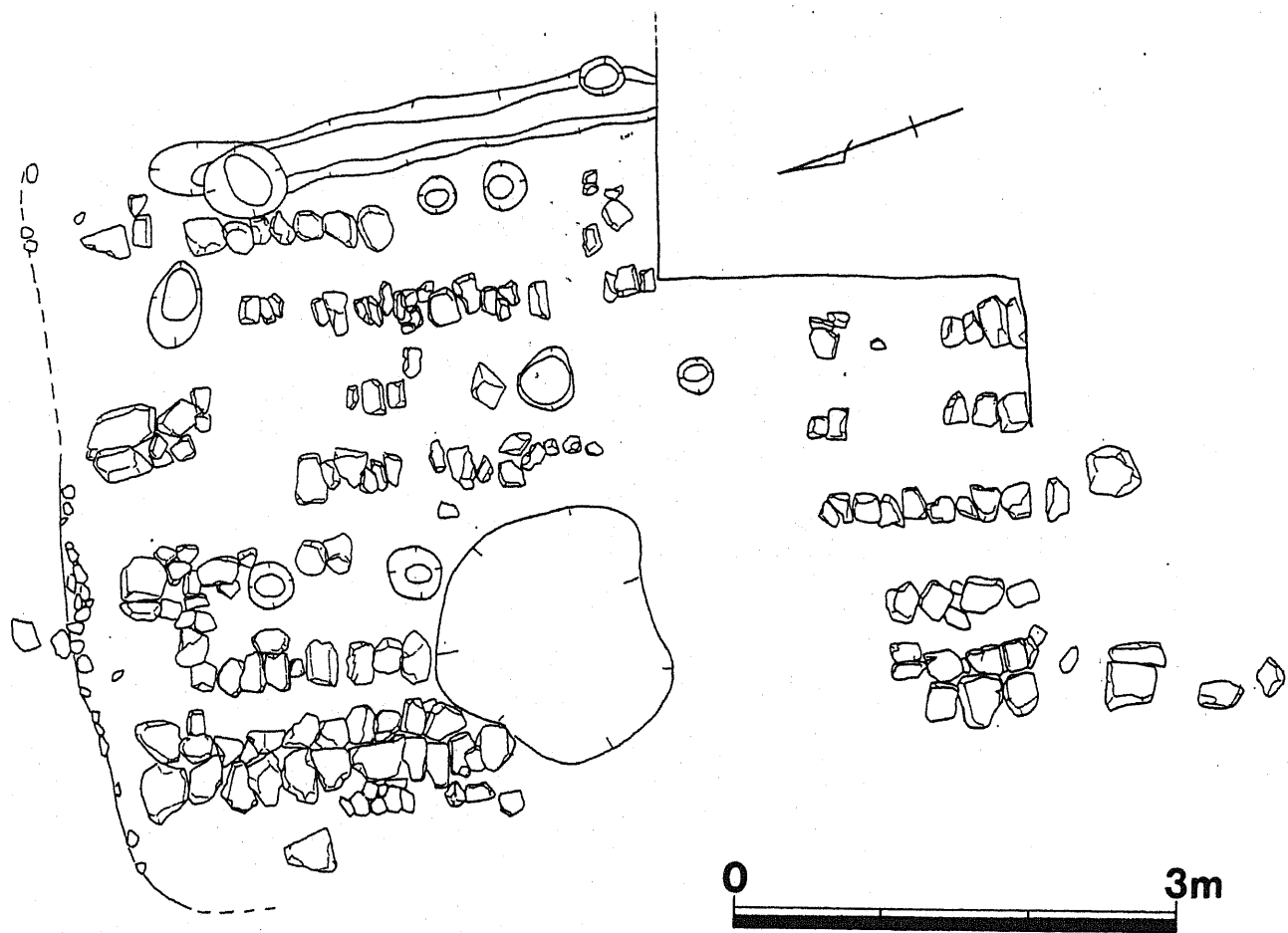


図9 第6遺構面 礎石建物2

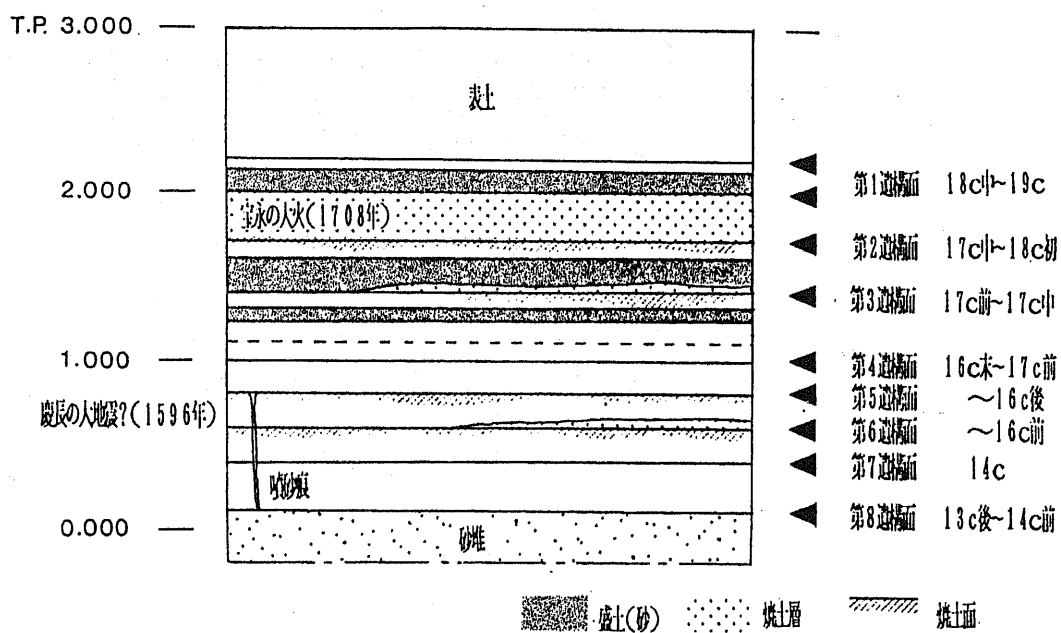


図10 土層断面概念図 (第15次調査)

写真1 調査区遠景

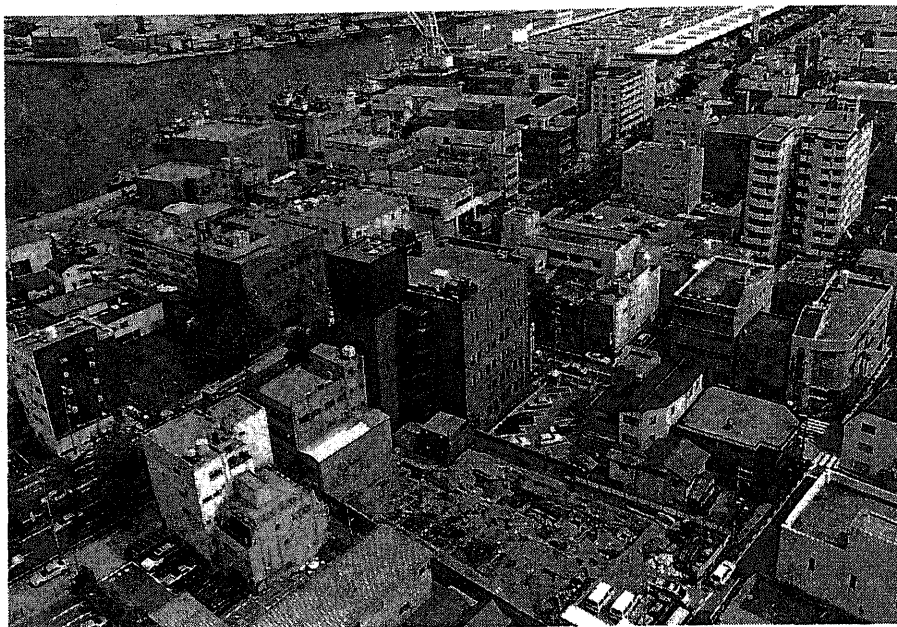


写真2
第2遺構面町家群



写真3
第6遺構面 礎石建物2
(写真はすべて神戸市教育委員会提供)



4. 市・町の形態と展開

—平安京・京都を中心として—

堀内明博

1. はじめに

近年文献史学・建築史・考古学を初めとして、町・市に関する研究は飛躍的に進展してきたと思われる。その中でも野口徹による『中世京都の町屋』が刊行され、従来の研究成果を集大成するとともに、町屋の出現過程にまで踏み込んだ研究で、氏独自の見解を表明された。それは行門制宅地二戸主の細分化という見方の批判の上で、行門制変容の中で、まず貴族住宅の築地の一部が巷所化されて、官が町下級官人宿舎・寺院下級僧房の集住形式を摂取した付属屋・門屋に転じ、都市中間層（下級貴族）によりその編成が拡大する。その中で建築的影響下に登場していた棧敷屋の性格が、そこに付加され、門・垣なしに道路に接した切妻型の棟割長屋で、各戸が戸口を備えた土間と窓によって、接客性と棧敷性を備えた板敷居間から成る町屋が成立したとした。

この見解は、限られた資料の中で中世京都の町屋を体系的に論じた優れた研究と評価されている。氏が論じた棟割長屋としての町屋の成立に際して、官人宿舎や寺院下層僧房がひとつの契機となったことは否めないが、それでは独立した定住型の町屋がどのように成立したかはこれだけでは、論じきれてないと考えられる。そこで本研究は、近年著しい成果を挙げている考古資料を主な研究対象として市と町の家屋形態について検討を加え、平安京・京都の中で、いかなる町屋類型が存在し、それがどのような過程を経て、近世京都の町屋に収斂されていくかを時系列的に分析するものである。

2. 市に関する遺跡

①長岡京右京六条一坊十一・十二町（西市関連?）

当遺跡は長岡京市神足二丁目に所在し、1999年10月から長岡京市埋文センターによって調査が継続されている。そこでは31棟にのぼる東西方向の掘立柱建物が確認されている。これらは梁間2間を基本に東西4~10間に亘るもので南北では6m~6.9m、東西では6~7.8mの間隔で東西4行以上、南北9列以上と整然と配置されている。調査担当者は兵舎に関連する遺構に想定されているが、従前付近から『西市』に関連する木簡が出土していることから、長岡京西市に関連する遺構が想定される。これらの建物は通常確認される掘立柱建物に比べ柱当り、柱掘り方が小規模であることから、仮設的な性格が強いと考えられる。またそれらの配置形態は平安京での四行八門制による宅地割と異なり、さらに小さい単位で構成されている。

②平安京右京八条二坊八町

当遺跡は、京都市南区西七条南西野町に所在し、1988年に京都市埋蔵文化財研究所によって、調査された。当地は平安京西市外町に想定され、八町の北端中央にあたる。平安時代前期の遺構として、南北溝とそれに直行する東西溝4条が確認された。これらの溝はいずれも、横板によって護岸されている。南北溝は一町を東西に二等分する中軸線上に位置するが、東西溝は、その間隔が北から9.6m(3.2丈)、5.4m(1.8丈)、2.7m(0.9丈)、5.4m(1.8丈)と四行八門制による最小単位の15m(5丈)より更に小規模の宅地割が想定される。しかもこれらの小規模宅地内には、掘立柱や礎石建ての痕跡が確認されなかったことから、地面に痕跡を残さないような仮設物が構築されたことが予想される。

③百々遺跡

当遺跡は、京都府乙訓郡大山崎町に所在し、長岡京右京三坊の推定九条大路より0.2~

0.6km南方、山陽道（西国街道）と久我塚の交差部北にあたる。1981年から京都府埋蔵文化財センターや大山崎町によって調査がなされ、8世紀末～9世紀中頃後半にかけての遺跡が発見されている。この中で注目されるのはIK-18と呼ばれる調査区で確認された南北建物群がある。これらは小規模の南北・東西溝で区画された中に梁間1間、桁行4間の細長い南北建物が1棟ずつ配置されている。建物間隔は3m（1丈）と狭く、推定山陽道東溝までの間に2棟が予想されることから、東西に4乃至5棟の南北建物があったことが想定され、奥行30m（10丈）規模の宅地が想定される。調査区内からは『和同開寶』をはじめ各種の墨書土器が出土している。正式な報告書は刊行されておらず、詳細は不明であるが、これらの南北建物の柱当り、柱掘り方は他に確認された同時期の掘立3柱建物と比較してかなり小規模であることから、これらも仮説的な性格が強いものと考えられる。さらにこれらの建物群の奥には、通常の規模を超えた大規模な井戸が1基存在することから、これらの施設に共同で使用されたものと考えられる。

3. 町に関する遺跡

①百々遺跡

当遺跡は、京都府乙訓郡大山崎町に所在し、長岡京右京三坊の推定九条大路より0.2～0.6km南方、山陽道（西国街道）と久我塚の交差部北にあたる。1981年から京都府埋蔵文化財センターや大山崎町によって調査がなされ、8世紀末～9世紀中頃後半にかけての遺跡が発見されている。ここで注目されるのはIK-18と呼ばれる調査区より北側において山陽道沿いに確認された遺構群である。これらのうち、山陽道に沿って建物の長軸方向を合わせて並行して配置し、2～3間×2間の小規模の掘建柱建物がやや接近して並んで確認される。夫々の屋敷地を限る柵・塀もしくは

溝などの施設は見られないが、屋敷地の奥には段、溝、柵・塀などの施設が見られ、宅地境の背割りとしての機能があったことが伺える。それらの奥行は約15m（5丈）の規模が予想され、四行八門制の一門規模に相当する。即ちこれらの宅地の奥行きが四行八門制の最小間口に相当する。さらにこれらの宅地内には原則的に2～3棟に井戸1基が見られることから共同的な性格がうかがえる。

②平安京右京八条二坊二町

当遺跡は、京都市下京区西七条石井町に所在し、平安京西市外町に隣接する宅地であり、1983年から1993年まで3回に亘る調査が行われている。その結果西叡負小路沿いに四行八門制に法った柵・塀、溝などで区切られた間口15m（5丈）の最小限の宅地割りが、確認された。更に道沿いには、3間×2間、2間×2間の小規模な建物が道の東側溝沿いに面して建てられていることが判明した。これらの建物の長軸は、道と並行していることが特徴といえる。これらの遺構群からは、多量の木簡、土器類、祭祀具を含めた木製品が出土し、西市に関連した町屋に想定されている。

③安祥寺下寺遺跡

当遺跡は、京都市山科区安朱棧敷町他に所在し、1993年以降4回に亘って調査が行われた。その結果東海道沿いに道に直行ないしは並行する柵・塀、溝で囲まれた幅30m（10丈）を基本単位とした宅地割りが想定されている。建物は奈良時代から平安時代後期まで連続と密集して建てられ、部分的に不明瞭な所はあるが、それらは道沿いというより、道から離れた所に立地する傾向にある。それらの建物の長軸方向は道と並行するのが一般的で、3間×2間などの小規模なものが多い。宅地内からは寺院に直接関連する遺構は発見されていないが、その一郭から蟠龍文鏡を伴う木炭木槨墓が確認され、東海道沿いの安祥寺下寺門前のような地域と考えられる。

④平安京左京七条三坊三町

当遺跡は、京都市下京区新町通り正面下る平野町に所在する。調査地点は三町の中央東端にあたり、町小路の西側溝に接した所に相当する。調査の結果平安時代後期12世紀代から室町時代前期後半15世紀代に亘る町に関連した遺跡が確認された。特に注目されるのは、12世紀代から中世にわたる町屋の変遷が込められたことである。確認された建物群の配置には2種類あり、一つは4間×2間の小規模な掘立柱建物が道に面して、しかも建物の長軸を道に直行する形態を採っている。もう一つは宅地内に入ったところに、1乃至2棟の東西方向の掘立柱建物で構成され、東西6間以上、南北2間のものが主要なものと考えられる。この二種類の建物は並存し、主屋と付属的な関係が想起でき、区画施設がないことから、その可能性がある。宅地境を明示する施設は12世紀代にはなく、13世紀にはいると通りに面した建物の周囲には溝などを巡らす傾向が伺える。このような構成は15世紀代まで見られるが、時期が下るに従い道沿いに建物が密集していく傾向があり、それに伴い1軒毎に井戸1基を備えるようになる。これらの井戸は道から宅地内へ9m(3丈)隔てた付近に集中し、6m(2条)前後の間隔で列をなす。町屋毎の裏を画する施設は認められないが、井戸の分布地帯が町屋の奥を画していることが予想される。このことから13世紀以降宅地裏の施設と表の町屋は区画施設の出現により、両者の関係が希薄となり、各々独立するような傾向が見られる。当該地一帯は、平安時代末の藤原定家の『明月記』でしられる七条町があり、今回検出された遺構群もそれに関連するものと考えられる。

⑤宇治市街地遺跡

当遺跡は、京都府宇治市壺番に所在し、宇治川の西岸、平等院の西に隣接した一帯である。その遺跡の成立は、平安時代後期平等院に代表される藤原氏一門をはじめとする時の権門により多くの別業が造営され、その周囲

に人々が住み始めたことによると考えられている。調査地点は、平等院南門前を東西に走る本町通と宇治橋から斜めに直線的に貫く新町通りの交差部やや東に位置する。町屋の遺構については判然としないが、現本町通りから9m(3丈)宅地内に入ったところに5基4列の埋め甕遺構があり、中世の甕を使用した町屋の一角が明らかとなった。個々でも町屋境を画する具体的な施設はないが、一部溝などがあることから、これが町屋の宅地境を示すものと考えられる。このような遺構は一条谷朝倉館の町屋で良く知られ、平安京左京北辺二坊六町女官町でも確認される。ここでも町屋の宅地境に関する施設は明瞭でない。

⑥平安京左京八条三坊

当遺跡は、京都市下京区烏丸通塩小路下がる東塩小路町に所在し、1995年以降8次に亘る大規模の発掘調査が行われた。その結果鎌倉時代後半から室町時代中頃にかけての遺跡が高密度に分布していることが判明した。この内室町小路沿いで町屋が確認されている。町屋関連としては13世紀代のものが掘立柱であるのに対し、14世紀にはいると礎石建てに変わることが判明し、それらの建物は間口が3~5mと小規模で奥行きは9~10mに復元されることから間口1~2間、奥行き4~5間の町屋が想定され、しかも密集して建ち並んでいたことが明らかとなった。これらはいずれも建物の長軸方向が通りに対し直行する形態を採る。更に通りから奥へ10~15mの幅に南北方向に井戸が6~9m前後の間隔でやや密に分布し列をなし、ここでも町屋の奥を限るような形態を採っている。各町屋間には、具体的に町屋の宅地を画する施設はないが、数軒を一まとめとするような柵・塀のような施設は確認される。また部分的ではあるが宅地の奥に通じる路地の施設も確認される。また宅地内にも柵・塀で囲繞された小規模な敷地があり、そこにも小規模な建物の存在が知られ、区画の存在から奥と通り沿いの町屋の

関係はここも独立したことが予想される。通りに面した町屋との関連は明確ではない。調査区内からはいずれも多量の鏡や銭の鋳型、埴塼、鑪羽口、炉壁が出土することから銅細工を中心とした職人町であった。当該地一帯は、平安時代末期八条女院御所に比定されている地域で、八条院解体後は東寺の所領となるが、それを下地に八条院町が成立したことが知られ、当遺跡はそれを如実に表しているといえる。

⑦山科本願寺

当遺跡は、京都市山科区西野左義長町他に所在する。ここは文明十年（1478）本願寺八世蓮如上人により造営された本願寺寺内町で、それから5年後の文明十五年（1483）にほぼ主要施設を完成させた。そして寺内町は、「御本寺」、「内寺内」、「外寺内」の3つの郭からなり、それらは各々土塁と堀で囲繞された東西0.8km、南北1kmの大規模環濠遺跡である。当該地はそのうち「御本寺」の南西隅に相当する。発見された濠は、幅5～12m、深さ1.5～4mの素掘りで、それに伴う土塁は基底部分が幅10mにも及ぶ大規模なものである。これらのすぐ内側で、間口2間（4m）×奥行き5間（10.8m）の礎石建て町屋を1棟確認している。これは溝で囲繞された範囲内に居室一列の三間取り型式をとり、通り庭の土間が明瞭に確認された。また町屋奥には3基3列の埋め甕施設を確認することから、油・酒などに関連した町屋と考えられる。町屋は調査範囲内では1棟だけ確認され、その東には溝状の落ち込みが確認されることから、町屋は連続しているのではなく、独立していた可能性が高い。この調査地の北西部にも同年調査がなされ、炉跡を伴う5間×3間の礎石建物1棟を確認している。このように御本寺の土塁すぐ内側に、鍛冶や油・酒を扱う工房や町屋が分布していたことが伺えるが、これらは連続した家並を構成するのではなく、敷地一郭隅に疎らに配置されていた可

能性が高い。これらの遺構群は、天文元年（1532）細川晴元率いる法華宗・延暦寺宗徒・近江守護六角氏の連合軍による総攻撃を受け、焼失した際の焼土層に覆われており、遺構の年代を限定している。

⑧平安京左京三条四坊・弁慶石町

当遺跡は、京都市中京区三条通麩屋町東入る弁慶石町に所在する。調査の結果三条通りに面した安土桃山時代から江戸時代初期の町屋敷の遺構を良好な状態で検出した。それは間口20m（約10間）、奥行22m以上（11間以上）の大規模なもので、屋敷地内には、店、釜屋があり、奥には裏庭、離れがあり、裏庭には庭石、井戸、方形石室等が分布する。店は通り庭に二列型の居室部が想定され、通り庭には、井戸、流し、排水用の石組暗渠溝が一列に配置され、敷地奥の境を画する背割り溝と繋がっている。店と裏庭の境には掘り込み地業を伴う石積施設がある。また雨水の排水用の石組み溝や瓦製土管なども裏庭に配置されている。この町屋は当初掘立柱であったが後に礎石建てに変更され、このような大規模な町屋に改築されたことが判明した。出土遺物からその改築時期が慶長元年（1596）の伏見大地震に想定されている。このような大規模の店の調査例は全国的にも少ない。町屋の性格として延宝六年（1678）の『京雀跡追』にみる「この町諸国商人の番丁也」と記されている事や貞享二年（1689）の『京羽二重織留』にみる長崎糸割符商人や両替商の所在を伝える記事があり、出土遺物から陶磁器を商う諸国問屋の可能性が指摘されている。

⑨伏見城立売通町

当遺跡は、京都市伏見区立売通に所在する。当地は伏見城絵図などによると大手筋と伏見街道が交差する地点からやや東に入った一郭で町屋に想定される街区である。検出された遺構群は、安土桃山時代と桃山時代から江戸初期の2時期の遺構面があり、それぞれに町屋の遺構が確認された。下層では間口2～3

間の細長いもので、通り庭が片方に寄るものと通り庭の両側に居室の付くものが見られる。いずれも立売通に面しており、建物の長軸は通りに直行する。通り庭内には井戸がほとんど確認されず、竈は通り庭の奥か敷地奥の別棟に見られる、町屋間はそれほど接近していなく、少し隙間があり、その間を画するものが見られない。上層では町屋は1棟だけしか確認されていない。しかし町屋境を画する溝のような布堀施設があり、土台建てであった可能性がある。井戸も点在することから、各町屋ごとに井戸を所有する形態と考えられる。当地は長方形の街区で短冊型地割りであり、奥行きが20mほどが推定できる。

⑩平安京左京二条四坊十一町・大炊町

当遺跡は、京都市中京区柳馬場通竹屋町下る五丁目に所在し、平安京の条坊では、御炊御門大路に面した宅地である。秀吉による天正地割りが施行された地域で、検出した遺構も、安土桃山時代から江戸時代にかけての町屋群が検出された。町屋は竹屋町に面して8軒、富小路に面して8軒、柳馬場に面して3軒を数え、その家屋数は近世を通じてほとんど変化していないことも明らかとなっている。各町屋はほとんど壁を接する様に密に家並を形成し、掘立柱列、通り庭、井戸、方形土塋、石組み土塋等を各々備えている。町屋境は当初掘立柱であったのが、江戸時代初期には礎石間を繋いだ河原石列の土台建てにとって代わっている。各町屋の通り庭や宅地奥には井戸や長方形を呈する河原石組みの土塋が1乃至2基持つものや1基も持たないものもみられる。また一部の町屋を除いて裏庭の隣地境界付近には収納用と考えられる大規模な方形土塋が1乃至2基あり、江戸中期に至るまで2～3回の造り替えが見られる。また敷地奥に既に離れと考えられる礎石建ての建物ももつものも見られる。宝永五年(1708)の大火以後、敷地奥の大規模方形土塋から土蔵に変換することが判明し、現在の京都町屋

の景観がこの時期に整備されたことが伺える。これらの町屋は長方形街区に短冊型地割りとなるが、それらの区画は平安京の四行八門制と符合する点が多いことから、天正地割りは、全く新たに創生されたのではなく、平安京の行門制を土台として施行されたことが判明した。

4. 市・町の類型と変遷

平安京・京都を中心として市・町に係わる遺跡を概観してみたが、それらからどのような市・町における家屋構造が垣間みることができるか、分析を試みたい。

■市の家屋構造

市を構成する建物と区画については、その実態が明瞭ではない。しかし限られた考古資料を見ると、まず四行八門制という宅地割りより更に細分化された宅地割りが存在すること、それらの宅地は溝(板による護岸施設を伴うものもある)によって区分されるものとしてでないものの2種類が存在する、細分化された宅地は長方形を呈し細長い、それらの宅地内には梁間1間ないし2間の細長い庇無し建物がある、梁・桁の寸法は他のものと遜色が合いにもかかわらず建物の柱掘形や柱当りは同時代の他の建物に比べ小規模である、柱掘形を持たないものまでである、建物個々には井戸はなく、数棟に1基の割合の場合が通常で井戸が少ない傾向にある、生活空間的な様相を呈していないなどの特徴を挙げることができる。即ちこれらの建物はいずれも仮設物としての色合いが濃いといえよう。それらの形態は、中国漢代画像石にみられる城市の様相に近似し、その原型があると考えられる。

■町の家屋構造

町を構成する建物と区画について9世紀前後から近世まで断片的ではあるがその変遷を

迎ることが可能になってきた。それらをまず町屋型と屋敷型の2種類に大別する。まず町屋型とは、通りに面して各々の建物が一定方向に建ち並び、同規模程度の建物で構成された同質な景観を呈していることが大きな特徴といえる。屋敷型とは、方形ないしやや細長い長方形を呈する敷地にその中ほどか隅に細長い小規模な建物を備えていることが特徴である。これらの2類型は、その形態、配置の特徴、敷地との関連から更に細分される。

A型は道沿いに位置し、建物の長軸方向を道方向にあわせているものである。その建物は2間×3間といずれも小規模で庇を持たず、一定間隔を空けて立地する。井戸も個別所有ではなく数軒に1基の割合と共同井戸的な様相を呈する。宅地割りについては宅地奥を画する溝、柵、段などが見られ、奥行き15m(5丈)ほどとなり、四行八門制による奥行き10丈の二分ノ一の数値を取る。宅地境の施設のないものをA0型(例：百々遺跡)、宅地境を示す施設のあるものをA1型(例：平安京右京八条二坊二町)に区分する。

B型は、道沿いに建物の長軸を道と直行して配置するもので、各々の建物間はやや接近する傾向にある。宅地奥には、道沿いの建物に比べ規模が大きく、庇を持つような建物が存在する。このような形態は野口徹が町屋展開の枠組みの中でその原型とした都市中間層の住居が面路にその建築を分割し始め、面路の付属屋とその奥の主屋をもつタイプとしたものに相当すると考えられる。但し道に面した個々の建物間には明瞭に境を示す施設はない。建物の奥行きについては道から約9m(4間半程)で、その背後の9~15m間に井戸や土壙が密集する所があり帯状を呈し、道に面した建物1軒ごとに井戸1基をもつ傾向は時代が下がるに従い強まる。但しこれらの建物は数軒単位で一つの境を示す施設を持ち始める。宅地奥の主要建物との間に境界施設のないものをB0型(例：平安京左京七条三坊三

町)、境界施設のあるものをB1型(例：平安京左京八条三坊)に区分する。さらに宅地奥でも区画施設が確認され、道からそこに至る路地と考えられる小径もみられる。

C型は、道に面して建物の長軸を直行する小規模なものである。各々の建物間はやや接近し、宅地奥までの寸法や井戸の有り方はB型と共通する。しかし宅地奥には規模の大きな建物の存在は見られず、道に面した建物だけで構成されるものである。現在まで僅かな資料ではあるが建物の境界を示すものがないことからC0型(例：宇治市街地遺跡、草戸千軒遺跡北方遺跡群)とする。

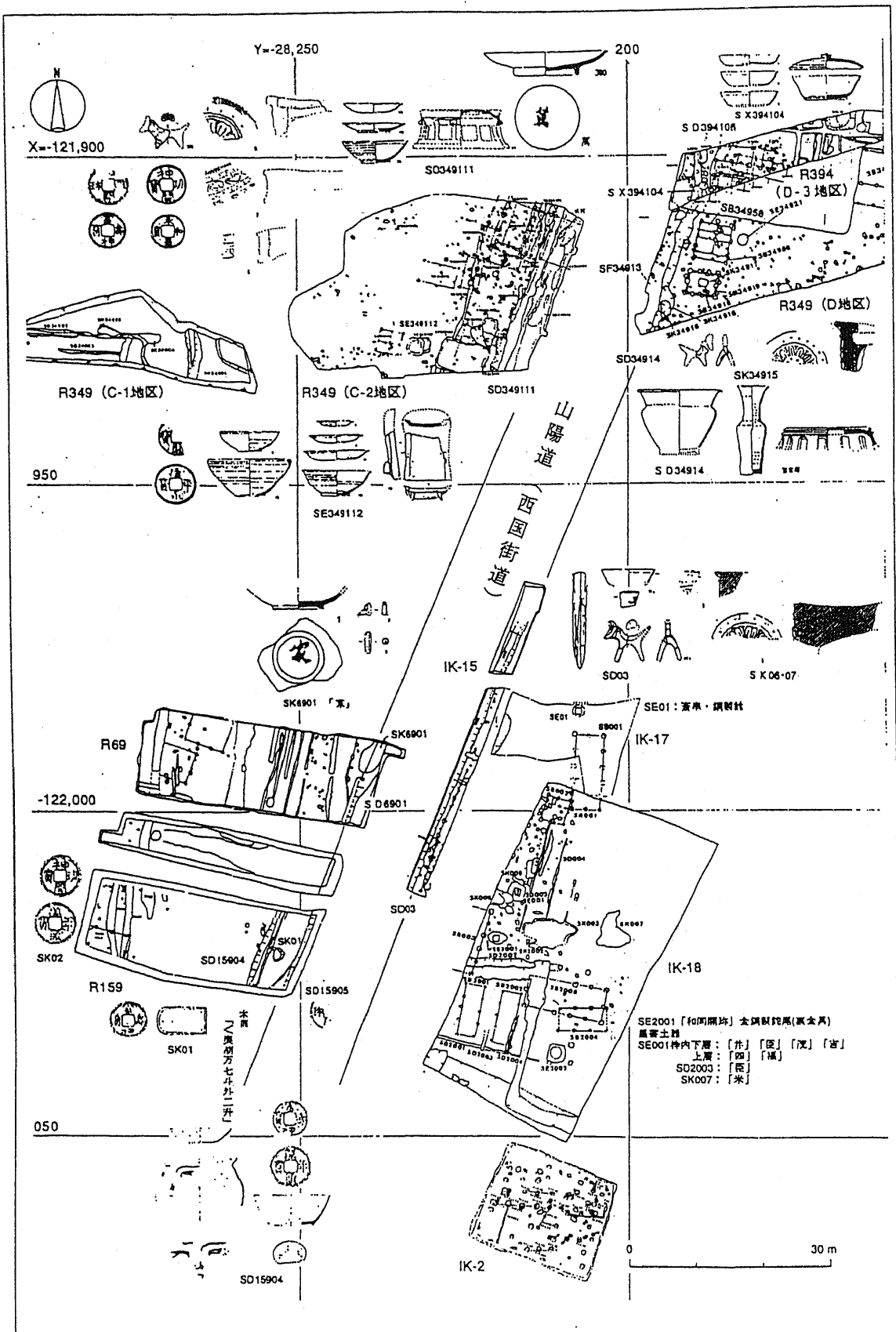
D型はC型に類似するが個々の建物間はかなり接近し、かつ個々の建物は短冊型の長方形の宅地内に存在するものである。宅地境が明瞭になることからD1型(例：伏見城立売町、平安京左京二条四坊十一町大炊町)とする。

これらの類型の時代を見るとA型が8世紀末~9世紀、B0型が12世紀後半、B1型とC0型が13世紀後半~中世、D1型が16世紀末以降となり、A型→B0型→B1型・C0型→D1型へと推移したことが辿れる。そして道に面して建物の長軸を直行させる町屋の成立は、B型が出現する12世紀代であるといえる。

屋敷型には敷地内に数棟の小規模建物で構成され、幾つかのまとまり毎に井戸を共有する。個別の建物の範囲を区画する施設のないものC0型(例：安祥寺下寺遺跡)、あるものをD0型(山科本願寺)とする。前者は律令都城での諸司厨町、院政期の御倉町の形態と考えられる。遺構の上では未検出であるが、敷地内には中心となる正殿相当建物の存在が予想される。また後者は、寺内町を始めとする境内空間を有する遺跡に見られることが予想され、山科寺内町では連続する家並は確認されていないものの、そのようなものの存在も予想される。

註

1. 「長岡京跡右京第654次調査 (7ANMDB - 3地区)」『長岡京連絡協議会No.99 - 08』1999
2. 「平安京右京八条二坊」『平安京跡発掘調査概報昭和63年度』京都市文化観光局 1989
3. 『百々遺跡』京都府遺跡調査報告第24冊 (財) 京都府埋蔵文化財調査センター 1994
4. 『第7回企画展西国街道と大山崎』大山崎町歴史資料館 1989
5. 「平安京右京八条二坊」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996
6. 「安祥寺下寺跡」『平成6年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996
7. 「平安京左京七条三坊」『平成2年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1994
8. 「宇治市街遺跡第2次発掘調査概報」宇治市埋蔵文化財発掘調査概報8集 宇治市教育委員会 1985
9. 「左京八条三坊の発掘調査成果-職人町の復元-」第5回平安京・京都研究集会発表資料 1996
10. 『山科本願寺跡 発掘調査現地説明会資料』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1997
11. 「平安京左京三条四坊」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1986
12. 『伏見城立売町屋跡発掘調査現地説明会資料』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1999
13. 「平安京左京二条四坊」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財) 京都市埋蔵文化財研究所 1996



百々遺跡の主要遺構平面図と主な出土建物（古閑1998より）
 IK-18は大山崎町役場、R69、R159は大山崎町消防署、R349は名神高速道路拡幅部分にあたる。

第7回企画展 西国街道と大山崎 大山崎町歴史資料館 H11.10.23

図1 山崎津と百々遺跡

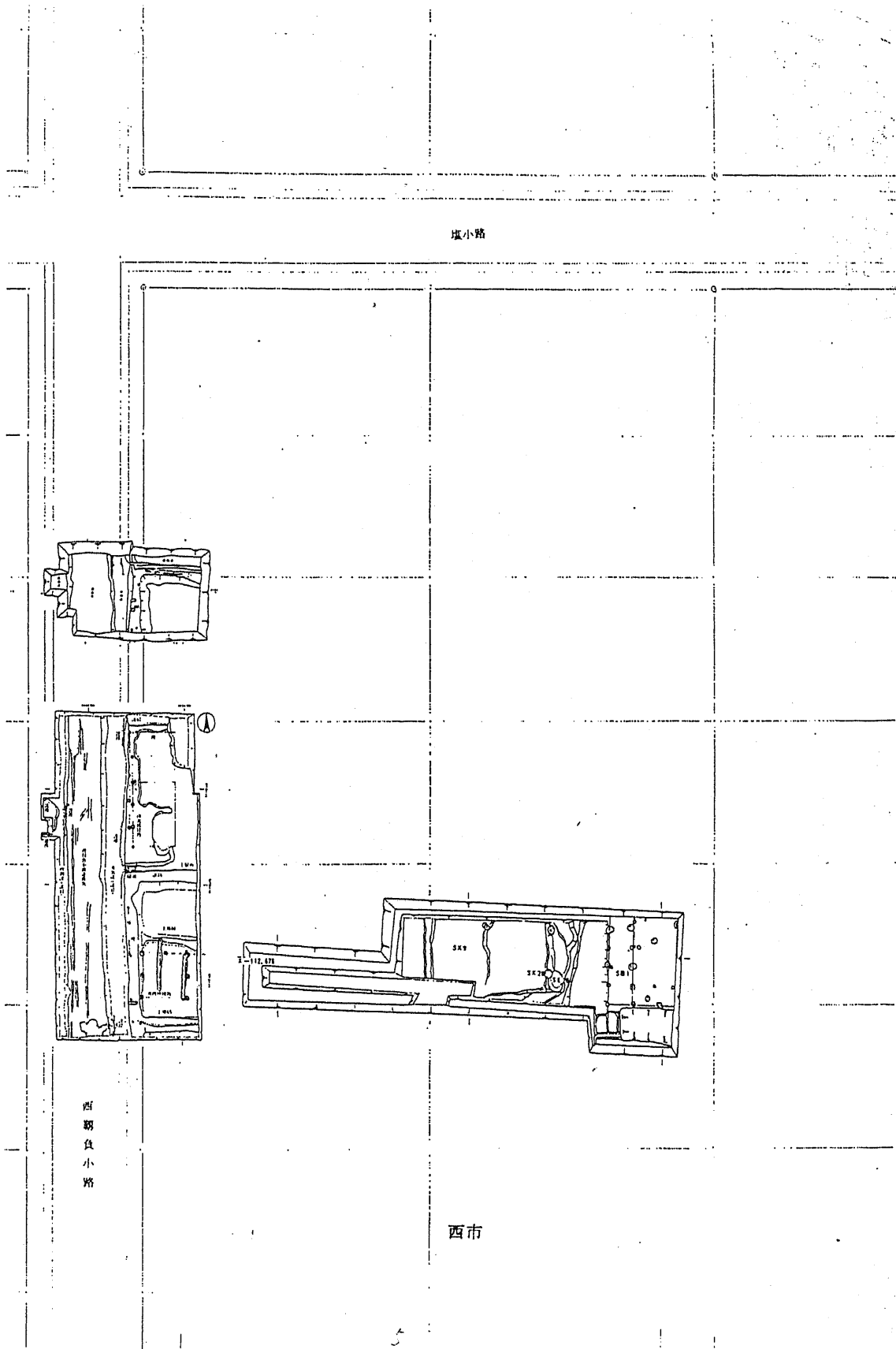


図2 西市と市町

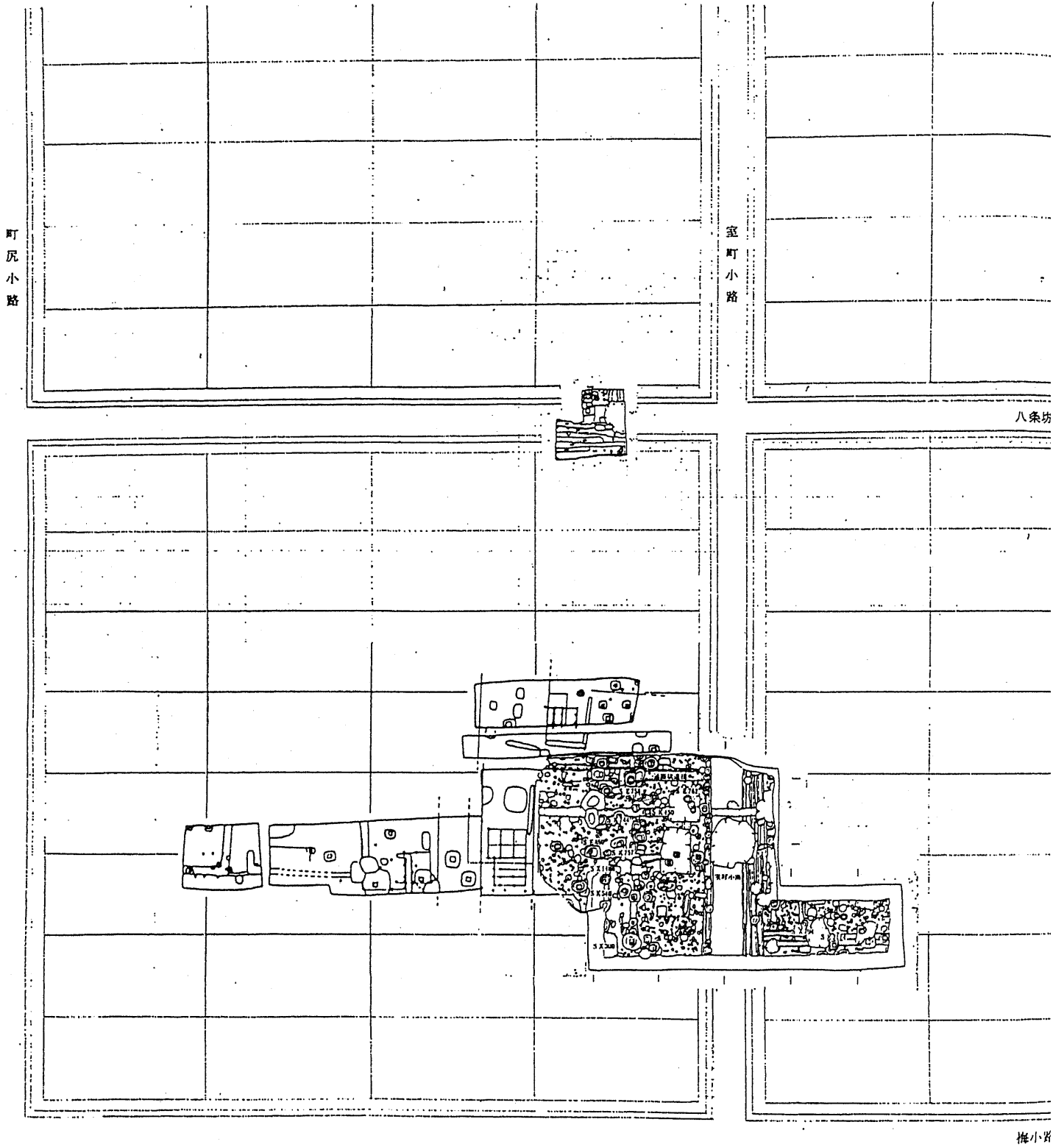
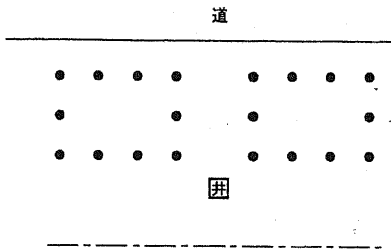


図3 八条院町と鑄造工房

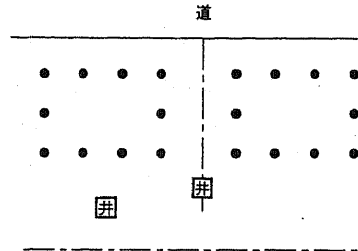
左京八条

町屋型類型

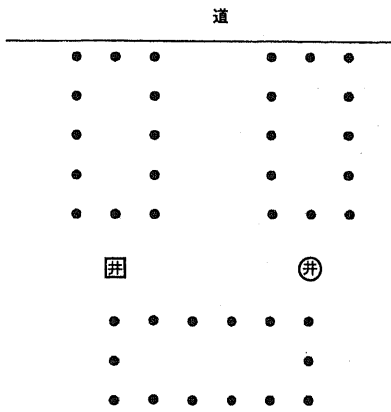
A₀型 (百々遺跡)



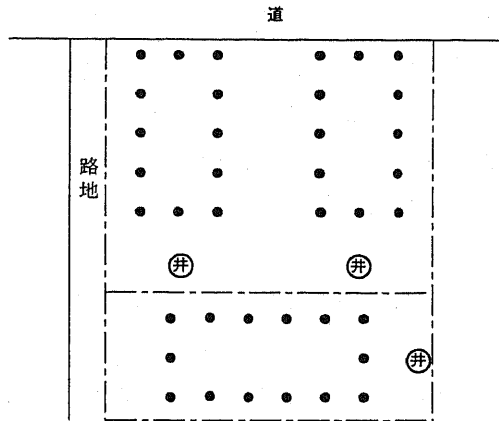
A₁型 (平安京右京八条二坊二町)



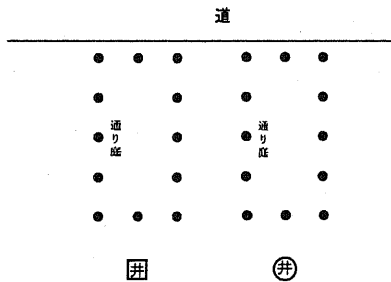
B₀型 (平安京左京七条三坊三町)



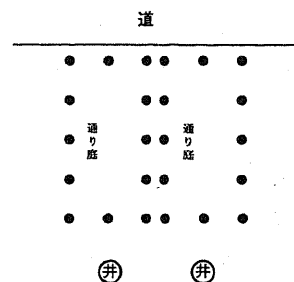
B₁型 (平安京左京八条三坊)



C₀型 (宇治市街地遺跡)

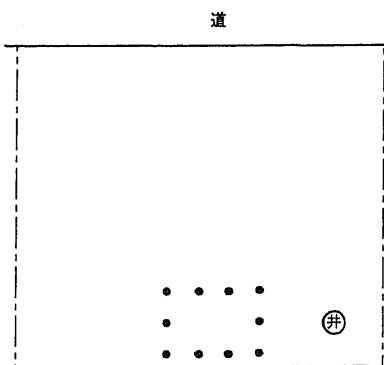


D₁型 (伏見城立売通町、平安京左京二条四坊十一町大炊町)



屋敷型類型

O₀型 (安祥寺下寺遺跡)



O₁型 (山科本願寺遺跡)

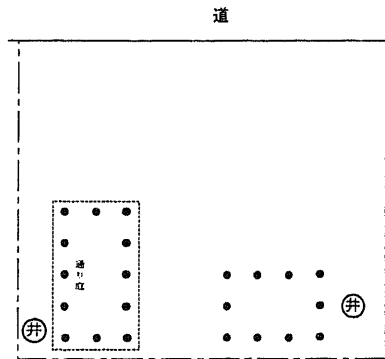


図4 町家型類型と屋敷型類型

5. 質疑応答と議論

■佐久間貴士報告関係

宮武：土蔵と見られる建物ですが、布掘りをして中に土台石を置きますね。この布掘りした溝の中はどのような土をおさめているんですか？

佐久間：これは僕が掘った物じゃ無いんですが、見に行きましたけど汚い土だったような気がしました。掘った土をまた元に戻した様な。大阪の町は建物作る前には綺麗な砂を入れるということが良くあるんです。だけど筋掘した後には用意しておかないといけないじゃないですか、砂を脇に。埋める時に。それはしてないんじゃないかなと。

宮武：隣の石垣の外側は、また別の空間なんですか？

佐久間：はい。石垣の隣は別の家になります。

吉岡：この資料に書いてある断面図には柱の礎石は、掘って下に埋めてあるという感じになってますけども、これには土台入っているのだろうか？普通土台を入れるのであれば土台にほぞで柱をやるんだから、掘立みたいに埋める必要は何もないと思いますね。そこで固定される訳だから。

佐久間：これ土台が入ってたんじゃないかな。

高島：土台が入ってるんだったら、こんな筋掘する必要どこまであるのかな？筋掘した所をがっちり固めて、その上に土台を載せるといのはうちの方のお城で出てきてますけど。これはちょっと違うかな・・・。

吉岡：ここでは土台があるのかないのかちょっと分からないですね。少なくとも筋掘した底面に礎石は直に置くわけですよ。

宮武：そうすると周囲とのすり合わせからいったら、やはり礎石の上に何か履かせないと、わざわざ筋掘してる意味は全然ないですよ。

面を建物側に向けている石垣が隣にあることは明らかですから、屋地が違うわけですよ。石垣の上にはまた別の建物空間があるわけですから、そこからの水をかなり呼んでますよね。土台にとっては腐ってくださいと言わんばかりの状態ですよ。

佐久間：ここはこのような階段状の宅地が続くんですよ。緩やかな斜面です。それで掘りますと時々階段状になった隣の敷地との境に、古代の石垣が出てくるんですよ。そういう場所なんです。

宮武：布堀の中の覆土が汚い土だったというのは実際に水気を呼んでる証拠かもしれないですね。

佐久間：それも私の記憶だけですからね。綺麗な土を入れていたらどうして入れているんだろうといつも思いますので。

宮武：肥前名護屋城内とか他の同時期の城跡（岡山城など）でも、この手の布基礎の建物が発見されてきてますが、色々と工夫していて、瓦をクラッシャー状に叩き割ったものや砂礫などを混ぜ込んだりして、布掘りした溝の中に入れて、礎石自体はレベルから言うと建物周囲の地面高に合わせた状態にして据えている。へたするとこの礎石の上に、布掘り溝の中の瓦や礫が載っかってきちゃうような状態にまで、周囲とのレベルを擦り合わせている。礎石を含めて布基礎全体を大壁が覆っちゃっているような、こういう建物が豊臣期には出てきていますよね。まあ、建物としてのランクがどういったものか分かりませんが。このケースの場合、礎石高が周囲より相当低い訳ですから布掘りのおかげで、壁そのものにまで水気を呼びかねないですよ。

吉岡：だからギリギリで礎石の所に被るか被らないか位であるのであれば、そこに土台が来るから別にいいんですよ。それより低い所に水は行くから。中へ完全に土台も入る様な深さがあると問題だということ。礎石自体

が入るか入らないかであれば問題ないですよ。だから礎石の上に土台は載るんだからね。基本的に。そこだと思ふ、周りとの高さ関係がどうなるのかと言うことが。

佐久間：結構壁は見つかっているんです、あちこちで。黄色い土で。ですから、大抵現物が残っていますね。

小野：そしたらもうちょっと丁寧に見れば、断面図が綺麗に出てくるってことですね。それとせっかく筋堀というか布堀してずーっと石据えて、これは要するに土蔵の重みに耐えるため、もっとしっかりした基礎をやって、普通ここ粘土で固めるなり何かやりますよね。

續：界でもせん列建物で同じ様に周りにこういう石を密に並べる建物があるんですけども、それ中には土間で完全に石を埋め込んでしまって、どうも土間に埋め込んで石を隠し込んで、そこから土台を置いて立ち上げるというのがあることはあるんですけども。

宮武：土台と礎石と直接は接しないんですか？

續：接しないですね。間に土間を張り込んで、その上に土台が載ってくると。重量を受けるための壁構造があるということです。

吉岡：じゃあ本来の意味での土台にはならない訳ね。礎石があるということはそこまで柱が下りてくる。柱は下りないんだ。それなら筏事業と同じだ。

續：石のある所に土台を四周に回して、それから柱を立ち上げると。

吉岡：土台の上に柱が立ち上がるのであれば問題無いよね。

小野：土台の下に重量に耐えさせるために布基礎を掘って、そこにずっとやったということですよ。

吉岡：それだったら、礎石的な石を入れなくても、同じ様な石を連続的に入れてもいいということですよ。だからこの図面で見ていると、下のやつは要するに取ったやつでしょ。

布堀の所をちょうど溝の所を出して、それでその下にはちゃんと礎石があるんですよ。これ見ると。上の根太の石とか抜いた絵が2段になってるものね。

小野：でもこれ良く分かんないよね。礎石の上に直に柱の位置が四角く書いてあるじゃないですか。これいったいどういう意味だろうと。もし普通の実測図でここに土台があるんだったらば、こんな書き方にはならに訳だから。

吉岡：柱は立ち上がっているからこの図になるんだらうね。

小野：土台がないじゃないですか。

宮武：内側の根太の絵、これ外側の布堀した礎石の位置と、内側の根太とは1つ飛ばし位で対応してるんですかね。ちょっとこの図面だと良く見えないんですが。

玉井：対応してないように見えますね。

宮武：ずれるんですか。

佐久間：これだけ根太や何かが残っていたら、土台が残っていたら絶対発見されてます。

吉岡：だから土台書いてないなら土台無いんだらうね。

佐久間：無いですね。

吉岡：だから一回礎石据えて柱立てて、完全に盛り土、張り土みたいにして綺麗な面を作ってしまうと、それから根太受けの束石を置いているという、そういうことだよ。見る限り。

宮武：壁が絶対腐りますよね。

吉岡：でもそれしか考えようがないっていう。

吉岡：佐久間さんに聞いたかったのは、暗渠、筒ありますよね。木樋の場合と瓦の場合があると云っていた。その位置は例えば通り土間の方に入るとか、そういう規則性はあるんですか？

佐久間：あります。通り土間に入るよりは、やはり部屋から出る方が多いです。

吉岡：部屋の下、床下から？

佐久間：はい。

小野：その暗渠ってどういう意味？その下水を流すみたいな意味での暗渠排水なのか、湿気にくいついていうのか。滲み出る水を集めて出すための暗渠って意味なのか。

佐久間：それは分からないですよ。ただ大手前考古の場合には、1つの家から2本出てるんですけど、後ろにちゃんと用水升があるんですよ裏にね。畳1畳位の。用水升からまた更に流す溝がちゃんと杭止めで作っているんで、ここは水使ったんだらうと思うんです。水使ってここに流し込む。つまりこれは土間になるわけですね。所が下水管がその建物で建物の奥の部屋からもう1つ出てるでしょ。これも果たしてそうなのかどうかっていうことは分からないんです。

小野：通り土間にあるやつは何となく分かりますよね。どうせ台所空間とか通り土間に入ってますからね。外に水溜めっていうのは普通に流しの水が出るっていうことでしょう。

佐久間：それでこの向かいのお家ありますよね。向かいのお家は下水管が瓦で出てきておりますけども、ここなんかもここが台所だっでちょっと考えにくい所があるんですよ。表なのでね。但しこの家は良く分からないんですが、下水管の上には基礎が残っているので板張りだった可能性あるんですよ。

吉岡：それ聞きたかったのはプランを考える上において、いくら暗渠と言おうと湿気が上がり易いから、普通床張らない所に通した方が合理的だと。余程の理由が無い限り床下にそれをやるのは厳しいなあと言うことだけです。だから規則性があるのかなのかということ。

佐久間：基本的にはやっぱり土間の方に多いです。それから江戸時代には基本的には土間です。

吉岡：近世の町屋なら大体通り土間にそのま

ま板ぐらいで蓋してあって、明けて掃除もできるっていう町屋が殆どですよ。上水道はないですね？

佐久間：上水はない井戸ですね。大阪は井戸水がいいところなんです。大阪は名水の地でしたので。大阪で今見つかっているのは高槻城の中の武家屋敷とここと、高槻城はちゃんと下水道で、書いてあったんですよ文書があって井戸とか水道とか書いてあったんです。それぐらいで殆どの場合が井戸ですね。

玉井：この時点で大坂の町家は確実に礎石なんですよ。掘立じゃないんですよ。

佐久間：そうですね。他の地域よりも大坂は礎石建ちが早いんですよ。

吉岡：町場は礎石建ちとみていいんじゃないかな。京都でもそうだし、石山のこれにしても一乗谷にしても、大体16世紀は町場では少なくとも礎石を使っているを見た方が。

佐久間：ただ伊丹は掘立が多いんですよ。

吉岡：だから正に農村なんですよ。町場とそれとの違いだと思います。

佐久間：伊丹は元々有岡城の城下町だったんです。

吉岡：城下町と言っても田舎なんですよ。要するにいわゆる町場的な場と、都市との違いだと思います。

玉井：だからそれはかなり明白な違いとして現れたかもしれない。外観も当然違うでしょ、建物もきっと。だから都市的な雰囲気があるのは礎石の建物だったのかもしれない。屋根材は分からないですか？

佐久間：屋根材はちょっと分からないです。消失家屋で全部ガサッと落ちたまま残ってくれるといいんですが、やっぱり片付けてますね基本的には。だからその部分だけしか残らないというか。

吉岡：1つはその屋根材の話したのは、大阪では秀吉の頃には瓦葺きだっっていうのがありますね。

佐久間：これは本願寺も瓦を積んでるんですよ。本願寺お寺さんだから当然なんです、普通の建物で武家屋敷は殆ど瓦葺きですね。

吉岡：でも本願寺にしたって半分は気にしないといけないのが、本願寺の元の本堂と言っているのは板葺きかこけら葺きが当初じゃないかって言ってるんですよ。今残っている建物の中で石山に移されている、あれ確か当初は瓦葺きじゃないっていう言い方をした気がするんだけど。

佐久間：本願寺は文禄年間に恐らく本願寺に納めただろうと思われる瓦が出てるんですよ。何万枚納めたって書いてある文禄何年・

宮武：近くにあった四天王寺の周辺には元々瓦職の集団が居たんでしょうね。

佐久間：伝承では四天王寺のオンダイカが寺島家で、寺島家っていうのが江戸時代の御瓦師、幕府の瓦師になるんですね。

宮武：天正18年の紀年銘が書いてある瓦が肥前名護屋城内で出土しているのですが、併せて四天王寺の瓦職人の名前を刻んだ瓦が何点か見つかっているのですよ。「四天王寺住人藤原朝臣美濃（守）」、「住村与介」とかね。だから、確実にその豊臣前期までの四天王寺門前には瓦職人の組織があって、大坂ではコンスタントに生産されていたということが言えるでしょう。

佐久間：ただ大きい勢力は奈良の西の京の勢力の圧倒的に大きくて、あの時代16世紀の建造物の瓦の分布見ますと、もう殆ど半ばまでは西の京の瓦師なんですよ。それらが姫路の前の阿賀に移ったり、三木に移ったり三木市ってありますよね。あの城下町に移って、三木衆が阿賀衆になっていくんです。始めは「西の京12」何とかって書くんですがその内「三木12」って書くようになるんですよ。

宮武：あれは播州の瓦工が起点になるんですかね？

佐久間：今の所三木衆と阿賀衆の2つが大きいのが分かっています。三木衆は三木城を

作った、阿賀衆っていうのは阿賀城、姫路城を作った。それで西の京の住人はどこでも行きますよね。

堀内：これ外寺内じゃ無いから入れなかったんですけど、山科本願寺の内寺内のちょうどご本寺の西南の角の土塁の所で掘った、埋め瓶の施設のある細長い建物があるんですけど、これも全部礎石建ちです。

吉岡：寺内は礎石建ちでいいんだと思いますよ。後は屋根の瓦の問題だね。だから瓦の建物が町屋まで及ぶかどうかという問題です。

佐久間：あの大きなお家は武家じゃないかと思ってるんですよ。下級武士とかそういうクラスじゃないかと思ってるんです。

玉井：これは町屋ではないでしょう。

吉岡：町屋でそんな大きな連続するのはどうも考えられない。

佐久間：但し大名級の屋敷地に比べると同じ縮尺で出しましたけど、大名級は遙かに大きいですから、大名級には行かないけど・・・
吉岡：道路に直接面してるってのが気になる訳ね。

佐久間：そうですね。恐らく周りにずーっと石が立ってますから板塀か土塀かっていうので、ある程度囲ってたはずなんです。主屋の部分は、脇の小さい建物部分の周りには見えないんですが、入り口は道の所に面して土間と書いてありますでしょ。これは溝を越えた向こう側に柱がというか材が2本置いてあるんですよ。どうもここに架け橋を造って、ここから入ったみたいなんですね。

吉岡：今井の今西家だって慶安のやつで、あれだけ立派な瓦葺きの建物があるんだから、やっぱり瓦葺きは近畿圏だけはかなり早いんだらうという気はするけど。

堀内：後で私が発表します、茶筒が沢山出てきた三条の強力な礎石建物は沢山瓦が出てから、恐らくあれは瓦葺きなんですね。慶長年間です。

佐久間：大きな商人で茶屋家なんか徳川と家

臣関係なんです。本当は武士じゃないんだけど、屋敷も茶屋さんはお城の直ぐ脇に敷地貰って。そういう俸禄貰ってる商人の中には許されてる人がいるかもしれない。身分として瓦を葺いてもいいよという。

小野：そこが問題なんだけどね。

吉岡：そう言う意味で身分制度で決めてるのも思わなくても、正に財力とそういう物でやっているのかも・・・

堀内：弁慶氏なんか特に問屋の可能性高いから、瀬戸物問屋の。問屋クラスでも瓦葺きになってた可能性は高いと思います。瓦が大量に出てきたから私もびっくりして、それも全部当然本瓦葺きです。

宮武：先ほどのスライドにもありましたように、竈とかに平気で使ってますよね。廃棄するには、貴重だったのもったいないから転用しているという捉え方もできますけど。瓦自体に「格」というか象徴性みたいなものは、確かに求められていたと私も思うのですが、あれだけ道路敷きや何かに転用しているだけに、屋根から降ろしてしまえば、現実的な使い回し方をするような、大坂あたりでは一般的な物品だったのでは。

佐久間：恐らく大阪でランクは金箔を貼れるかどうかなんです。金箔瓦は武家の家紋でも入れられる家と、入れられない家がありますから。

吉岡：だから通常の瓦に関してはそこまで厳しいことはなくて、先程の暗渠排水だとか色々な物に使ったり、瓦敷きあれだけ割った物を敷いたり、竈に入れたりするというのは、その辺に幾らでもある材料として瓦があったということですよ。

宮武：それだけ普及してたのか、逆に、もったいないからやったのか、解釈が大分変わってしまいますけど。ただ、これまで考えられていたよりも早くから、地方でも普及していた事実があります。九州でも戦国期の山城で瓦や礎石建物跡が発見される例が増えつつあ

ります。町場で言うと、長崎でも2棟ほど検出されています。天正年間から慶長初頭ぐらいのものと思われませんが、あそこの場合も武家権力の膝元に置かれていたわけではないですから。そうすると、16世紀の第3四半期から第4四半期には、九州の地方都市にも礎石建物が出てくることが指摘できます。非常に狭い調査範囲ですけど、「柴町遺跡」として報告されてますよ。瓦も若干量ですが出土しています。ただ、あそこの場合、軒丸瓦に「花十字」の紋様を付けたりですね、イエズス会などの国外団体が介在してますので、他の九州各地の技術観の発展過程と同一視できない点もあるのですが。キリシタン大名の有馬氏の本拠だった日野江城跡では、日本列島に存在しなかった技術に基づく石垣が最近検出されていますし。いずれにせよ、遅くとも16世紀末期には、九州の町場でも瓦の使用と礎石建物の出現が見られます。

吉岡：だから町場で中世後期に、町場の建物が礎石建ちであるというのは色んな例から言って、場所によっても全然可笑しくないし普通にあった。瓦に関しては畿内の特殊性じゃないかという気がするんだけどね。

續：堺では慶長に入ってからには確実に瓦は使ってますね。せん列建物、蔵だと考えているのは確実に本瓦葺きの瓦を使用しておりますし、全部の礎石の建物使ってるとも言えないんですけど、かなりの礎石の建物瓦を使用していると思います。

吉岡：武家地だから瓦使うとかそういう問題じゃないと思えるのは、近世にわーっと城下町が出てきた時に、東北でもそうだし多分福井でもそうだったんだと思うし、金沢もそうなんだけれども、武家屋敷の大きなやつってというのはむしろ草葺きなんですよ。やっぱ。それが瓦に変わったりしてくるんだけど、当初は草葺きですよ。絵とか色々な物を見る限り。だから武家屋敷だから瓦とか、そういう意味合いで決めない方がいいだ

ろうと思うけどね。仙台なんか仙台藩の見たら武家地殆ど草葺きですよ。勿論東北、北陸から北は当時の瓦では凍害から全然用を為さないって言うこともあるとは思いますがね。じゃあ西日本が全部そうかって言ったら、また向こう行ったら違うんだと思うし。

宮武：基本的にはそうじゃないかなと思うんですけども。瓦の使われ方で言えば、中世の守護大名の館ですとか城下周り、最近分かってる例見ても、やっぱり限定されるのは正面玄関付近に限られるのではないのでしょうか。必ずしもそれも瓦とは限らない例も幾つありますが。ただ、瓦自体がもうその時代になってくると武家の社会の中で、用途以上のプラスα要素があるってことでしょう。瓦当面に特定の模様使っているとか、それから先程佐久間さんがおっしゃった金箔貼っているとか。例えば最近の例では都城ですね。宮崎の本丸の建物群に関しては掘っ建てなんですよ。本丸の虎口の両サイドの塀が布堀なんですよ。そっから瓦が出てるんです。五三の桐の紋を付けた。瓦はその前周りの布堀の塀でしか出てないですよ。内部の主屋は掘っ建てなんですよ。これなんかは正しく外から見た時にどう見えるかということで。

小野：ただね、基本的に分けなきゃいけないのは、同じ時代の話でもお城というものと武家屋敷は別な訳ですから。瓦が早いって言うのは1つは城造りの問題と関係があると思うんですね。それで恐らく瓦は大量生産されるようになるわけですから。そうすると瓦がそれ以外の所にも行き渡るだけの供給が始まると。そうすると恐らく他の部分に入っていき可能性あるけども、そういう意味でやっぱり畿内の中でもすごく特殊な地域なんじゃないですかね。瓦使用ってことからいうと。元々普通の武家屋敷なんかでは瓦なんか使わない、住宅には使わないってのが原則なわけですから。当然瓦なんかのつける様になったら構造だって変えなければ、この重み問題があ

るから難しいでしょ。

玉井：荷重の問題で構造は変わるはずですよ。ということは城郭建築の技術が入ることがある。要するに技術者の問題ですけどね。

吉岡：良く出てくる畿内の大工組とか何とかって言うのは、殆ど町大工でしょ。それが集められてやってる。だから勿論町場でも仕事やるわけだから、技術的には畿内の大工というのはある程度そういう物をやったっておかしくない技術は持っている。だから地方に行ったら城郭建築をどういう風にやったか、その以降でないとしっかりした民家が残ってこないと言うのもそこだと思います。単に古い物が地方には残ってないだけじゃなくて、残る物が建てられなかったということも考えておかないといけない。社寺なら残っている物があるから、民家だって残る構造の物を建てられれば、少なくとも何かあっても可笑しくないわけだから。そういう意味で瓦の使い方が礎石を使うとかそういう問題が、やはり地域差とか色んな物の中で16~17世紀その辺りでかなりばらつきがある。

玉井：礎石じゃないと瓦はのらないですね。掘っ建てで瓦てのはありますか？

吉岡：古代はあるでしょう（平城京とか）

宮武：この時代はどうでしょう？

小野：今話題にしている様な物を除けば、基本的に城郭建築にしか、寺と城郭しか瓦は使わないという見方でやってるわけですから。この手の町屋みたいな礎石建物に本当に瓦がどの位ののってたのか、やっぱり問題があるんじゃないですかね。

佐久間：この前のやつは地震で潰れてますでしょ。ドワーッと落ちてるんですよ瓦が家の周りに。それで大体瓦だと。

吉岡：やはり特殊な用途の建物という・・・

佐久間：礎石がやっぱり普通の所に出てくるものでも4倍位でかいね。

小野：土蔵みたいなものかちょっと特殊なものか、そういう所は瓦のせてる可能性あるね。

吉岡：当時のやり方としたら空葺き何てことはないから、本瓦葺きで土載せてそれで瓦を置くんだからもの凄い重量ですよ。それで今の修理でこそ空葺きしたりして本瓦葺きの荷重を減らそうと努力はやってるけど。

佐久間：ここは人家密集地で両脇も向かい側も全部人家ありますからね。ここはメイン通りですよ、大阪の。

玉井：まだそういう居住地の区分が出来てないはずですよ。この時点では。だから何処にどんな建物があったのかというのはそれだけじゃ分からない。

宮武：例えばどうでしょうね礎石建ち、瓦が集中している屋地においては、その下周りに限っては他の場所よりも、造成自体もかなりいいことをやっているってことはありますか？

佐久間：ここはさっき見た様にこの位厚い砂を敷いてました。

宮武：それはやはり礎石建ちの建物の周りは共通して、地盤の地業にしっかりした造成が見えてるといことなのですか？

佐久間：いや、普通のところでも基本的には造成する時に、綺麗な砂入れるのは大阪の特徴なんですよ。だから豊臣期の最初に天正11年に造成開始しますよね。その時に大体入りますね。

宮武：建物の規格によって地下の造成の方法を変えるとということが、当時町屋で行われているのかどうか、個人的に興味を持つんですけど。

佐久間：逆に造成する時には道と側溝と整地をしたのが基本だろうと思いますけどね。そこから後は拝領ですから、武家は自分の所で手配しますけども、町人の場合は申し出なんですよ。申し出て「欲しい」そういう形で地割り区分しますでしょ。だから豊臣方がやってるのは大きな町の道作りと、それから側溝作りと。基本的に裏表がありますから、その裏地のラインはここだと。後は実は南北

通りの家は奥行きがまちまちなんですよ。なぜかというとな自然地形がありますので、大阪は西の海の方になだらかに下がっていくわけです。なだらかに下がっていくわけですから当然西の土地の方が低いんです。だから南北通りで屋地作りますと奥に段ができちゃうんです。そんなんで結構これがばらつきがあるんですよ。奥行きについては。所が南北については同じ等高線ラインじゃないですか。こっちが海でしょ、こうが南北でしょ、ここは揃えること出来るんですよ。そんな感じで地形的制約があったんじゃないかなと思うんです。大きな谷の所では豊臣時代前期の始めでは、道が谷に突き当たって切れちゃいます。それはこの図でも出てるんだけど、佐竹の屋敷の図面の上の図は下の方に谷があるんですよ。所がその下の時期になりますと、この谷を埋めて向かい側の武家屋敷の敷地がきちっと出来て、道が通る様になってるんです。こういう大きな谷が幾つもあったみたいなんです。現在大阪で谷町と言っている所、あそこは本当に谷だったんです。使い物にならない谷があって、それを埋めて何とか使える様にしてきたという。

玉井：要するに南北通りから東西通りに基準が移るわけですね。

佐久間：そうですね。

玉井：ということは地形的な問題を解決するには、その方がいいという判断をどっかでやったんでしょうね。

佐久間：初期の大名のお手紙とか、イエズス会の日記なんか見ますと、南北に向けてザーッと家が建ち並んだという記述が2箇所位出て来るんですよ。ですから最初に出て来た町並みは恐らく南北通り、東西の空き地をまた分割して行って、恐らく城近くから出来上がっていったんじゃないですかね。上松代町の先端にお城があって、根本に四天王寺があるんです。

宮武：四天王寺の門前として先行してあった

町場を、反対側の大坂城下の拡大でジョイントしたっていう考え方は？

佐久間：元々先端には石山本願寺があったんです。こっちの方の敷地を利用して、それをお城にして、周りが荘園だったんです。法安寺っていうお寺とか生玉社とか渡辺の津とか、そういう様な周辺の施設がありまして、それを全部退かすわけです。生玉社はもっと南へと。渡辺の津は取り込んじゃう、モリノシヨウは今森ノ宮って言うのがありますが、あれモリノシヨウのお宮さんなんですよ。だからあの辺りは脇に寄せられちゃうんじゃないかな、寺社は。自分たちの都市計画ありますから、社とかお寺は一旦退かされてますよね。お寺は寺町の方にもう1回入ってきますから。南の寺町、北の寺町ありますから、そっちに入ってきますので。大方みんな退かしちゃってやったと思うんですけど。

■ 續伸一郎 報告関係

玉井：堺で出ているセン列建物が鎌倉の方形堅穴と構造が類似しているとおっしゃったと思います。もちろん鎌倉ではセンを使いませんから材質が違うということは当然として、果たして類似の構造なのかどうか検討する必要があります。鎌倉の場合は要するに井戸みたいな構造だと思います。外側から圧力がかかって構造が持っているという様な感じがしていました。堺の場合必ずしもそうではないみたいです。せん列で自立しているとか、外との土圧みたいなのはかかってない？地下構造の下の部分が、掘っていくと外側がそのまま立ってますよね。外に土があるわけですけど、そうするとその圧力はかかってないんですか？

宮武：センを固定する物はないんですか？センだけで2段に自立している？

續：外側に一応粘土は貼るんですよ。大きく

掘方掘ってセンを建てます。その間には一応粘土を咬ますんですよ。

宮武：セン列の前面に粘土はあるんですか？

續：建物の内側には貼らずに、外側から？を自立させるように粘土を貼ります。

宮武：建物の内側で、そのセンが内部に倒れこむのを防ぐ構造物はないわけですね。

續：半地下構造のセン列建物ではないですね。

宮武：セン自身で立ってるということですね。

續：そうです。

吉岡：結局粘土か何かで貼り付けてなきゃ、あんな薄いセンだからもたないでしょ。

宮武：センと言うより、平瓦に近いサイズですよ。

吉岡：だから貼り付けのタイルだっていう感じですよ。

玉井：だから完全に自立してる。

佐久間：掘方掘って粘土先に貼るのかな？それでそこにペタンペタンと貼っていく？

續：半地下構造では普通のセン列建物とは作り方が違う。普通のセン列建物では地上に出るのはセンの1/3、約10cm程ですから、そのようにはしない。普通に掘ってセンを立てればいいんです。半地下構造の場合は、周囲を大きく掘り込んで、粘土を貼りセンを立て内側から壁土を立ち上げるという形になります。

小野：深いやつでセン2つ分位って言ったんですか？

續：そうですね。

小野：だから60cm位ってことは浅いんですよ、基本的には。

續：そうですか。

小野：半地下式って言っても、さっきの例えば炉壇を置く部分のあれだっていう風に関係したりすると、実は床は地上に近かったりする場合もあるわけですよ。60cmでしたらね。

そういう意味でこう鎌倉の方形堅穴とは全然違う。深いですからね。1mとかあるいはひどいのになると1m50とかもう2mにちかい深さになっています。そこには正に板床張ってるわけで、だから半地下というかその地下の意味が大分違うみたいですね。

吉岡：要するに掘り窪めてやってるっていう・・・

小野：床構造を作ってるっていう。だからある意味地形してる様な感じですよ。あの蔵の下の部分で。鎌倉のやつはまさに穴蔵にしちゃうわけですから。

吉岡：だから今半地下と言っている、地形して掘り窪めた所に床面はきちっとあるわけ？

續：あります。

吉岡：そこが生きてるわけ？

續：生きてます。

吉岡：その上に床を作るとかいうことはない？

續：ないです。

小野：さっきの話はただ蔵座敷みたいにする時は・・・

吉岡：蔵座敷にする時は上に何か張る・・・

續：半地下のセン列建物の場合は床面をころばし根太で作っていると思いますので。

小野：じゃあ60cm位は下がってるということですね。

それと鎌倉の例は、鎌倉の方形堅穴でも一番最後の新しいやつですよ。石貼りにするのは。この前の段階は石貼らないで直に板壁だけで作る地下式ですよ。

玉井：だから井戸みたいなものだなと思ったんですけどね。外から土圧で保っている。圧力はたいしたことないのかもしれないけど。

小野：でも面白いですね。東国でも結局あれは鎌倉では栄えたけど、鎌倉以外では少ない。

吉岡：さっき出たセン列のやつにしても、間柱か本柱かは別として幾つか間隔があって出てくる、それが40cm位って？

40cmというのは、1間、6尺5寸なり6尺3寸

でもいいんですけど、それとは合わない数字なんですね。2つ割でもないし3つ割でもない。その辺はちょっと大きなセン列建物と言ってるものの外形の建物の寸法は通常1間と言ってる物と大体合うんですか？

續：難しいですね。

玉井：建築のスケールに合ってくれないと困るといことはあります。

吉岡：もう1つは近世でもそうなんだけど、土蔵は6尺なり7尺とか8尺でもいいんだけど、その尺のあれでちょっと通常1間というのには合わない寸法で大壁で塗り込めていくから、やる場合もあるもんでそこがちょっと知りたかった。

續：そうですね、S K T 230では柱の跡が約40cmです。間柱が残っていた所が6cm間隔で2本確認されました。

吉岡：間隔？

堀内：さっき1個見つかったというスライドで。こう2つ並んでほぞ穴みたいなのが2つ並んで、1個パラって出たから片方が間柱だっていう。

續：そうです。

堀内：あれ非常に接したやつありましたよね、あれのことを言ってる。

吉岡：あれ間柱というより別の扉口なり何なり寄せ柱みたいなものかもしれない。6cmなんていうと。間柱と言うなら1尺以上の間隔がないとこまる・・・

堀内：今S K T 2 4 1のこの間隔を見たら、大体60cm間隔。

吉岡：60cmだったら3つ割りか。3つ割りで60尺。だから40cmというとなかなか割れない数字になるなと思って。60cm位ならまあ何とか1間っていう感じに合ってる。

小野：慶長期だけっていうことと、何でその半地下なのかっていう問題があるんですね。基本的に半地下になる前に地上敷きだったっていうわけですよ。

續：そうですね。登場した時から地上式だっ

たのですが、慶長期に突然現れて。

小野：東国の場合には理解できるんですよ。東国では元々方形竪穴っていうのがずっとありますのでね。あれが要するに都市部で整備されて構造的に綺麗になって、地下式の地下蔵のなっていくと。そして鎌倉の場合には特に、一番最後に石を貼った丈夫な蔵になっていくという形になるんですけども。こっちの方それないもんね。

玉井：慶長の地震の後ですか？

續：そうですね。

高島：地震の後だと考えてるんだよね。

玉井：そうすると地震を契機にこういう構造が採用されたという様に理解してるんですね。だとすると何か構造的な安定性を求めているのかな。

宮武：この方が耐久性があるっていうように、何か別のランクの施設の似た様な物にヒントを得て作ったからこそ、慶長以後にいっせいに同じパターンの遺構が出現しているのではないのでしょうか。ただ城郭建築の影響というようにさっきお話しされてましたが、城郭の世界でこういうのあるのかな。確かに石組みの地下式土蔵の類は、色々な例で出てますけど・・・

小野：この地下の構造ってことじゃなくて、むしろ續さんが言った城郭建築からというのはさっきの瓦を載せる、それから白壁で作るといって土蔵造りにするっていう、そちら側のイメージだろうと思うんですよ。

宮武：そうすると、「構造」よりも「体裁」とか「外観」についての問題になるのではないですか？

小野：3階蔵がこれじゃないかということですが、あれだけの大量の壁土塗ってれば、焼けた後当然その壁土が出ると思うんですけど、崩れ落ちて地上部分だった部分の壁、あるいは上塗りの例えば漆喰塗りが出るとかかっていうことはあるんですか？

續：いや、漆喰の壁は出土しないですね。堺

の方は基本的に全部土壁ではないかと思いません。

小野：じゃああの絵は綺麗に書いてあるけれども、あれじゃない可能性もあるわけですね。あれは正に漆喰壁だったですもんね。

宮武：絵の表現上では強調する意味あるんじゃないですかね。外観は歴博の『江戸図屏風』の町家の中に描かれてる蔵と同じですよ。玉井：あと池田本の『洛中洛外図屏風』。

宮武：『肥前名護屋城図屏風』の町家地区の中に白漆喰の他の建物よりも屋根高が高くて、瓦屋根の建物があるのですが、それが蔵であろうと思われます。ともかく町場を表現する際のサインとしてそういう描写をするんだろうと思うのです。実態は別としても。

吉岡：いやだから土蔵造り、即漆喰みたいな表現方法を取っているのかもしれない。

小野：絵ではね。

吉岡：実際は漆喰塗らなくても土壁、大壁でぐっとやった蔵みたいのが象徴的に白く描いている。

小野：土蔵の窓扉みたいなのあったんじゃないですか。あれは塗ってないんですか漆喰。

續：塗ってないです。

小野：あれもそのまんま。

吉岡：あれはもう正に普通の土蔵の扉ですよ。土扉と同じだと。

佐久間：大阪は漆喰塗った白壁出てるんですよ。大手前考古の図面の3Bの後ろに倒れた白壁って書いてあるでしょ。後ろ土蔵があったと推定してるんですけど、こんなでかい壁落ちてるんですよ。取り壊した方の家の方ですよ。だから後ろは土蔵だったと思うんですけど。漆喰塗りです。

吉岡：漆喰は強い火を受けると少し釉薬がかかったみたいにとろけたりするから割と分かる。それに対して単に白くても漆喰じゃなくて白土っていうのあるよね。ヨウメイ仕上げとして白土で塗る場合と漆喰とはちょっと違う。漆喰は円滑につるつるになるし、火を受

けると少し爛れる様な、いわゆる焼き物がかけるみたいなそういう感じになるから。それがあるんで白っぽくてもちょっと区別しないと。一乗谷は両方出てる。

佐久間：あれパラパラと剥離するのはどっちですか？

吉岡：多分白土の法が強いかもしいね。まあ分かんないですけど。ちょっとその辺の状況は。火を受けなきゃばけちゃって漆喰でも普通の白土に近くなるだろうし。

玉井：下を掘るといのは、上に高い物を立てたいということから考えると考えられませんか。下の部分の構造を安定させて高い物を作ろう。

吉岡：それにああいう風に瓦半裁したのでがっちり積むっていうのも、基礎周りを特に安定させるっていう。土蔵なんかでも近世でも半地下にはしないまでも、腰位まで石貼ったり、石積んだりしますよね。石積みでちょうど1mちょっと位まで、大きな大谷石みたいな物を、越前ならジャクダニ石を積む。そういうのが地下へ下りてるっていう意味で、かなり厚い物が綺麗に積んでやってる部分があります。だからそういう意味で下周りをとにかくがっちりさせて、揺れて動かん様にしちゃうっていうのかもしれない。

宮武：建てあげていく手順で言うと、土台を置いて間柱ないし本柱を置いて柱間がすかすかの状態の時に詰め込む様に瓦を入れてくわけですよ。

續：そうですね。

宮武：瓦自体で左右から挟み込まれるように柱自体が固定されてる？

續：そうですね。

玉井：まあ高層とは言わないまでも高い建物ではないですか。

吉岡：布基礎の考え方に近いかもしれない。だから地上に載っているとそこで縁切れてさっとなずれちゃうっていうのもあるから、下から

グーッと入れるという念入れてすることによって安定させるっていう考え方が、その地震を契機にあったのかもしれないけど。

玉井：うん。ありそうなことですね。しかもあの屏風の建物は面積的には大きな建物じゃなくて、ひょろ高いように描いてある。これがああいう物だったんじゃないかと思いたいですけどね。

玉井：先に土蔵の話をしてしまいました。が、町屋の変遷の過程が、15世紀段階から17世紀まで克明に判明している所っていうのは他に無いと思うんですけどね。これは例えば大阪とかの町家とほぼ対応すると思いますけど。

佐久間：一応14, 15, 16は堺NO.1だからね。

玉井：ただこれ以外に道1本後ろいったらもう全く便所が表に出てくるといった様な、その辺の景観っていうのは何となく想像し難いんですが、でもあったんでしょうね。都市的に景観的に一筋違いとガラッと雰囲気が変わるということになるんですかね。

佐久間：江戸時代と違って1つの屋敷地と屋敷地の間って路地が入ってるのね。路地の両側が同じ町家かはまた別としても、路地によって区分けすることは景観的には見えるんだよね。今の江戸時代の町並みって卯建つかなんかで分かれているけども、殆ど隙間がないじゃないですか。だけど堺の中世の町並みってまだ隙間隙間が通れて、奥に行けるんだよねその路地から奥へね。

吉岡：便所ってその正面に並ぶ便所って言うのは、割と水の抜かない構造の便所？

續：小の方はですねわざと瓶、瓶使うやつは底変えてますんで、多分下に抜ける。

吉岡：要するに所謂大の方のかす分みたいな物が堆積するという、水分は抜けていく

續：はい、そうです。

吉岡：その辺分らないんですけど、その中世から近世への糞尿を肥料として使うという

のは、堆肥的なそういうかす分を蒔くんですか、それとも近世から近代への便壺みたいなああいう水分を含んだものを蒔くんですか、どっちなんですか？

續：便所も埋甕でも2種類ありますが、そうですね底のある方は結構溜まったんじゃないかと思うんですけどね。

吉岡：だから良く言う肥料として使うから、買い取りだ何だという時に桶でちゃんと持っていく様な物なのか、殆ど水分は抜けてるものなのか。

小野：ただねその持っていくことは持っても、実は糞尿の肥料ってそのまま使うわけじゃないんですよ。あれもう一回溜めてそこで発酵させる、生のままということはあり得ないんですよ。だから実際にたとえ水分のまま持っていっても、濃縮されて発酵させられてって形で使われる物なんですけどね。だからもしそれで持っていくんだらば、当然どっかでまた溜めておかなきゃいけない部分ってのがあるんですけどね。

吉岡：かさばらないけど大半水分が下へ逃げて行くようなら、半減するんだらうなという気がして。だから単に道路の前で置いていたっていうのは外へ出す、運びやすいっていうのは分かるけれども、どこまで周りの農耕地との絡みがでるのかな。単に処理としてやりやすいから屋敷の前にあるのかね。

宮武：『洛中洛外図屏風』（高橋本）」に道の真ん中に公共の便所が置いてあるのなかったですか？

吉岡：それはあります。洛中洛外図にはあります。

小野：川の上に置いてるやつ。

吉岡：あれは水洗ですから、流れますからそのまま行っちゃいますよね。

宮武：道の上に置いてある例というのは、あれ何がしかの形で処理しなきゃならないでしょ。川なら別ですけど。

吉岡：だから大体中世のああいうのを見る

と、一乗谷のでも全部下へ抜けるっていう感じですよ。だからかす分だけどっかで取って捨てるにしても、基本的に浸透させちゃうって感じですよ。そうすれば処理はもう還元するから非常に楽になる。水分を全部溜めちゃうと、あの位の大きさじゃ直ぐ溜まっちゃうだろう。

堀内：でも江戸時代の埋め瓶なんか見たら底変わってないし、都市部の要するに桶瓶ですよ

吉岡：桶になったらそれは全然違うでしょ。

堀内：だから割ってる時期と割らなくなっていた時期があるのではないですか

吉岡：だから桶が使われ始めて、それと平行して使われる瓶の時は抜かない傾向の物が多いですよ。でも桶のほうが主流になるでしょ。わざわざ桶を入れて漆喰で固めたりして、まさに抜けない様にきちっとした、それはもう近代へ続いてくる便所ですよ。漆喰で塗ってるでしょ。

佐久間：一乗谷は桶の便所は無いんですか？

吉岡：基本的にはないですね。瓶も使わないし。

佐久間：豊臣期大坂にはあるんですよ。両方使う、瓶も桶状の物も使う。

吉岡：だからその辺によって屋敷の前に並んでくるものの理解も変わってくるかなと思って。

宮武：便所の周辺の浄化装置と言いますか、下水道の問題から言うと堺は全体的にどうなんですか？割合にしっかりしてるのか・・・
續：実は道路側溝が無いのです。大通りではありますけど、15世紀～16世紀前半頃では道路側溝は少ないです。

吉岡：砂堆だから水は全部浸透して行くんですよ。

宮武：水はけはいいということですか。

堀内：自然排水してしまう。

宮武：衛生上の問題で考えたら問題は無かったのでしょうか？

續：ただどれだけの人数が使っていたか分からない。在地で作られた甕とか、板で四角桶状のものを使用しています。ただ、どう見てもそんなに長期間使用するんじゃないかなと、ちょっと使うと一杯になるんじゃないかなという気はします。だからある程度溜まったら直ぐ持っていかないと、それこそ溢れるくらい量の量しか入らない便所なんですよ。

佐久間：糞尿を肥料に使うというのは、いつ位から始まったと考えられてるんですかね？

吉岡：良く言ってるのは中世後期ですよ。

宮武：室町の後半とか（「金肥」で言えば）？

吉岡：いや、その辺は知りません。知らないけどそういう風にしか聞いてないと言ってるだけで。

佐久間：大阪周辺の村で聞き取りやりますよね、大体1つの村に肥舟持ってましてね、夜中に交代で桶を1人8つ位載せて行くんですって。夜中に汲み取って、野菜か何か置いて帰ってくるんですって。

吉岡：物々交換でしょ。

佐久間：村によって行く地区が決まってまして、元々商売になりますから渡辺の村が独占的な権限持ってるんですよ。それで大金持ちの村になる村ですから。ところが村々も一応この地区、みんな肥舟持ってるんですよ。淀川下って大川まで来てここに来るんですよ。森ノ宮にお初を上げるんです。自分のとこの神社にもお初を上げるんです。

小野：そのスタイルっていうのはだけど江戸時代からでしょう。江戸なんかも、それぞれ各地域ごとに村がこう決まっていて、その権限を持ってるわけですよ。それ掃除村っていうんです。全部そういう屎尿を持って行く権限持ってるんですよ。それが成立するのは江戸でも中期以降だったんじゃないかな。

佐久間：恐らくこんだけ沢山肥桶がある地区っていうのは、やっぱり堺とは都市部でしょ、だから恐らく堺周りの村がどうしたかでしょうね。

宮武：基本的な質問なんですけど、この遺構そのものが便所なんですか。つまりここで用を足した施設ですか？それともこの敷地、屋地の中のどこかの便所での排泄物を汲んできて溜めるための施設でしょうか？

續：建物の配置からしても、表に来てするとは思えないですね

吉岡：そうですね。だって他の地区で面積的に広く掘っても数がそんなにないのに、ここだけズラッと前に並んでる。建物はむしろ小さいのにそこの人だけ3倍位するのかって言うと、言えないでしょ。

小野：いや、でも基本的には他の地区だって中側の方だけど、各家に1つか2つついてるんですよ。

續：はい、恐らく。勿論出てきますね。

吉岡：だから便所は少なくともあるんだろうけど、各屋敷には。

佐久間：大阪はね無いんですよ。必ずしも1軒の家がお便所持ってるとは限らないですよ。だから例えば片側町があったらね、そんな中で幾つかしかないんですよ。だから一種共同便所的な性格持ってるんですよ。

宮武：『洛中洛外図屏風』にある便所っていうのは共同なんですか

佐久間：井戸も同じ様に1軒で1個持ってるとは限らない。

小野：まあそういう地区もあるでしょうね。

佐久間：持ってる地区もあるんですけどね。

例えば2軒に1個しかないとか。

吉岡：だから1つにはこれからの報告の内容にも全部絡むんだけれども、一体何を基準に町屋と考えるかっていう大きな考え方が必要です。先程の瓦があるのは町屋じゃないのかっていうものもあるんだけれども、どういう要素を考古学的に言うと検出すれば町屋と考えるかとか、それから建築的に言って町屋というのは一体どう定義できるのかという話も、一方ではしておかないと町屋の話が始まらないっていう。

玉井：町屋の定義といのは建築史の中でも人によって違いますから。ただ近世の完成した町家のイメージを遡らせて考えてしまうとちょっと問題です。

佐久間：あの僕らも10年以上前から、この建築の住み手を考える根拠をどれに求めるかという時に、やっぱり物しかない。遺構の特性を、例えばさっき見た敷地が非常に大きいからこれはもう武家でいいだろうとか。ただ中間どうするかね。町人だっででっかい屋敷地あるだろう。それから道具なんかでも武器類を大量に出る所をどうするか。これも難しいんですよ。町人も武器持ってるんですよ。その所で使われた道具類がね。商人の家だとやっぱ木簡出るんですよ。この家には随分米が届いているなどかね。名前まで分かるんですよ。宛先同じだからね。木簡からこの家は何々さんの家で、何が荷物として来たかということが分かるんです。そういう意味では大手前高校は沢山木簡が出ましたので、同じ人名も沢山出たので、ここはかなり物が来てるというので町人地でいいだろうと思います。さっきのでっかいお!家は木簡の数が少なく、ちょっと分からないんです。堺は残念ながら余り木簡は出ない？

續：木簡は出土しないですね。

佐久間：普通溝からは出るけどね。

續：溝からも出土しないですね。

佐久間：やっぱり水の引きがいいから。

■内藤報告質疑

佐久間：道路と下に描いてあるこの鍛冶屋町との境は背割りの位置ですか？ここ、道はないのですよね？鍛冶屋町と宮前町の間はなくて、これは一応推定する背割りですね、

内藤：そうですね、これの絵図から起こして、で色が変わってるのが・・・

佐久間：あっ本当だ。じゃあ道があった可能

性があるんだ、可能性は無きにしもないと。

佐久間：これでみると大体前に1軒、奥へ1軒ですよ、建物が。奥にもう一つ家が建つ位の奥行きですよ？

内藤：もう一つ、そうですねハイ。

玉井：確認ですが近世段階の敷地の奥行はこれ、推定で20間位になるんですか？

堀内：やっぱり30m位・・・

玉井：30mということは15間

堀内：それ位ありますね

佐久間：大坂の船場みたいな所ですとね20間あると3棟建つんですよ、表と中と裏。だからこの位だと2棟が標準かもしれないですね

玉井：この敷地、奥行きは基盤でもなんでもないので何で決まってくるのですか。

佐久間：可能性としてはね、中世の町割りに影響されて、江戸時代に大きな改編がないとそのまゝいって道筋は使われていく可能性があるんですよ。で、堺とか博多みたいにね、まるっきり道筋を変えてしまう、改造してしまう所と、兵庫津はその辺はまだ分からないんですよえ？

小野：さっきの報告ですと慶長の大地震の前後で、大きく変わっている、そういう言い方でしたよねえ？

内藤：はい

佐久間：だから家の方向はね、よく似てるんですよ

内藤：そーですね

小野：表通りや何かは余り変わってない？

内藤：家屋自体は入船納帳で帳面も見えていまして、大きな街路とかそういうのはある程度出来ていて、あと細かい地割りについてかなり慶長・・・

小野：街区が変わってもずっと町名だけは継続するって例は有りましてね、

吉岡：うん、少しずつ移動したりしながらね

小野：町が動いちゃっても、その町名は使われるという、敦賀の町なんかそうですよ、あの大きく中世と近世で変わるんですけれど

も、系統は実は繋がっているという
だから文献で町の名前が中世も近世も同じものが出てくるからと言って、近世の下にそのまま同じ町名がダブっているかというところもそれは危ないみたですね。

佐久間：それで16世紀前半の建物からずーっと町軸が、良く似てるんですよ。だから道はあんまり変わってないみたい、この部分についてはですよ

玉井：要するに第5遺構面より後は同じ、感じですかね

佐久間：第6遺構面の建物軸も、これ建物とすれば良く似てるんです

小野：軸は変わってないけれども区画は全然変わっちゃってるから、

玉井：第5と第6の間で・・・

小野：だからちょっとあぶないですね、この慶長を境にして

玉井：かなり変わってるよ・・・

小野：はい、そうみた方がいいですね

吉岡：軸は大体、南北にいつてるから、そういう意味では変わらない可能性がある訳で道路だけは南北という

玉井：たまたまというか、うん・・・

高島：まあそうですね

小野：ここでも第6遺構面で、瓦と壁が出ているいるの倉庫みたいなというのは、これはこの図面でいうとどの事になるんでしょうか？

内藤：それは一番最後の・・・

吉岡：それでこの最後の一番大きな事ですよそれがそうだっていう・・・

堀内：あの、こんなに残りは良くないですが、嵯峨野天竜寺の境内の中でこういう石敷きをして、その石敷きの中に礎石みたいなものを置いた例もありますし、それから京都の町、中京のど真ん中でも宅地の奥にこういう石敷きを敷いて、礎石を置いた様な例があります。いずれも大体、えーっと天竜寺の例がいつになるかちょっと分からないんですが、15世紀

位には確実に有りますし、それで町の中は16世紀です。

小野：九州にも何か一個あったねえ？お城で、人吉じゃなかった・・・

宮武：いや割合、礎石立建物が採用される直前の時期の城に、こういうのがありますね。江戸期に入って多聞櫓風の建物端にもある。

小野：そうだよな

吉岡：だからいわゆる転がし根太みたいな、大引きをそのまま受ける大引きの筋に石があるやつがあります。床をそのままこの石の上にドンと置いて、転がし根太的に少し、丸太材に近いものを置いて、表面を調整していく、それに直接床を張る。そういう形だと思うんですね、一乗谷の土蔵なんかでもそれに近い様な形でして。

小野：石の方は何？大引きを受ける様な面がそろってるやつ？

内藤：そうです、はい。

小野：そうですか、何か2種類あってね、間にむしろ柱が来ちゃって石がその間を埋める様なやつと・・・

吉岡：埋めてる場合と両方あり得るんだけど、これだけ筋であるから・・・

小野：長岡の場合もご覧になったでしょ？

吉岡：筋じゃなくって、筋状に・・・

小野：あれも同じような、むしろ間を埋めるような

吉岡：筋状に石が抜けてあるような感じのやつだと、大引きの間を石で埋めている例だと言えるけど、これは割と筋になってるから、

小野：この上に乗ってるやつだと・・・

吉岡：城は割と、結構やるよね。

宮武：礎石建物を整えるよりも、楽なんですよ。

吉岡：束を立てて床を上げるよりは、直接ベタで置いた方が・・・

宮武：置いた方が楽ですかね

吉岡：頑丈に下は支えると言う意味で。

宮武：東側の雨落ち溝のような遺構は建物と

関係してくるんですか？

内藤：そうですね、接近し過ぎてて・・・

宮武：この西側の縁の石列、建物の内側に面してかなりピシャッと面取り良く並んでるんですけど。だからこれ、何か外側の壁周りの構造と関わってくるところがあるんじゃないかと思うのですが、他の石列は恐らく大引きが直接座るのに、別段、面をどちらかに向けて統一させなくても良いわけですから。この西側の縁の石列だけがピシッと内側にそろっていますので。

高島：そうですね

吉岡：これ見てると下の所、これ特に2重にあるから、極端に言えば柱周りの軸部と床構造が分離してて、際根太みたいにして、壁の近くにもう一回大引きが置かれていて、直接床だけは独立して床を支えている可能性がある。

宮武：各石列に高低差は無いんですよね？

内藤：はい

宮武：あの、西側の二列並んでる石列も？

内藤：はい同じです。

宮武：同じベタですか。

吉岡：割と面を持っているような感じが、

佐久間：そうですね

吉岡：だから床をやる時によくやるのは、柱なら柱なりに大引きを突っ込んだりして、醸造的に固める例と、もう一つは固めずに壁周りと床、極端に言ったら重いものを載せて床が下がろうと建物の壁の列は全然荷重を受けないから、関係ないって感じで逃げてるかもしれないです。

小野：15から16前半とかなり漠然と捉えてるとするのは、どうしてなんですか？

内藤：えーっとですね、遺物がですね・・・

小野：この時期の陶磁器、特に貿易陶磁器が沢山あれば大体きちんと決まりますよ。

内藤：そうですね

小野：なんか理由があったのかと思って。結構この時期のどの辺かというのは問題になり

そうな気がしたんですけどもね

内藤：そうですね、特に兵庫津ですね、15世紀の半ば位に応仁の乱でかなり焼かれまして、そこで一応堺の方にバトンタッチする様な形になっているんで、15世紀の半ば位で

小野：15のアレは30何年でしたっけ？

ちょうどドンパチやってて、瀬戸内来られないから、西海路から堺に最初に入って来るんですよ。

宮武：それ以来堺が成長していく。

小野：なんかこの辺の年代感というのは重要だなあという気がするんですけど。

内藤：うーん、そうですね、文明当時に結構、染め付けのやつが出てるんですが

小野：染め付けが沢山出てるんだっけなら見せてください、すぐに分かります、ピシッと分かりますよ

内藤：入ってきて、すぐに燃えたというんであれば良いのですが、染め付けが結構出てるんで、ちょっと時代幅を持たしていたんですね。

佐久間：だから終わりは大体その新しいやつで分かるんじゃないかな

内藤：そうですね

佐久間：で、始まりをどの辺にするかが問題になってきますよね

小野：逆にどこまで一番新しいものが入ってるかで、逆算すればいいんですけどね。

佐久間：はい

宮武：すみません基本的な質問なんですけど、この時期、つまりこの戦禍続きの15世紀中頃以後という微妙な時期に、兵庫津というのは、何某かの守護や守護代の藤元にある地域ですか？政治上の位置付けとしてはどういった性格の集落だったんでしょうか？

佐久間：大内の勢力下に入るのは後じゃないかな

宮武：播磨と攝津の西部は一応赤松が守護でしょ？分郡守護制になるのが14世紀末ですよ

ね、だから・・・

小野：大内船はあっちへ入れるけど、大内船以外が入れないからしょうがなく堺商人は堺の方に行っちゃうんじゃない

小野：細川が堺を押さえていて、そこで貿易の利権が逆転する訳ですから、今度堺に入ることによって

宮武：ちょっと気になったのが、慶長の大地震以前と以後との空間的な差異が大きいと言いますか、建物の質も含めてですね、これが社会構成上の同一ランクの人間が住んでいた所かどうかという問題が分からなかったもので。

小野：そうですね、この場合はどういう性格付けになるかがねえ

宮武：これ、室町段階の主体、この生活空間の主体っていうのが、どういう社会的ランクの人間だったのかなあっていうのが少し引かかってたんですけど

佐久間：県が掘ってるやつもあれ倉庫みたいなやつだったんですよね？

内藤：そうですね

佐久間：もうちょっと長方形のね、石・・・

内藤：ほぼこれと同じ構造なんですけど地盤的には安定した地域に入りますんで、考えているのはそちらの方が5、60、50年程古い時代を考えていられるんです

堀内：県はどの位面積掘ってるんですか？

内藤：兵庫津は横断する位に掘ってます

堀内：全部掘ってんですか！

小野：この道路沿いにずーっと掘ったんだ！

佐久間：それで兵庫津の両端って分かったんだから

内藤：5、6mの幅で、ええ

小野：まさに道路側溝掘ったわけねえ

吉岡：あの、床下に全部石が・・・

佐久間：剥いたらこうなるんよね

宮武：ただこれはやっぱり根太みたいな形があるんじゃないですかねえ

内藤：そうですね、一応細かいのを除けると先程見て頂いた、内のやつの細かい石を除けた状態で写真というか図面ですので、検出した形はこのような状態です。

堀内：なるほど

小野：根太の間を砂利で詰めてるんでね

玉井：なるほどね

佐久間：こっちの方が古いんですよね？

内藤：14前後位を、一応想定してるんですが

玉井：そんな古い

玉井：この時期に倉があった

小野：随分古い倉、鎌倉に匹敵する倉ですね

吉岡：それに比べれば、鎌倉のものに比べれば、礎石建ちで全然立派ですよ、立派だなあ、

玉井：殆ど海岸、海際に建ってますね

内藤：そうですね

玉井：だからかなり良く見えたんですよ、海から

佐久間：江戸期より兵庫津は少し小さいんですよ、中世は

玉井：ああ、そうですねえ

佐久間：それで山陽道が東西に通ってますよ、で三角地上に出っ張りがあるんですよ、この出っ張りの部分が兵庫の津なんですよ、江戸時代になりますとね、今度この両脇に町が拡大していくんですよ、だからねこっち程ね三角なんやけどこっち少し広いんですよ、これ三角形に見えるでしょ、一応、こっちの上の方とね端の方は江戸で、この辺りが中世なんですよ 山陽道境に海際に兵庫の津の範囲じゃないかなと言われてるんです

佐久間：ここに面白いこと書いてありましたよねえ、外側は港町的な要素があって、街道沿いは宿場町的な要素があったのではないかという、この内藤さんの意見ですね

玉井：この時代の港町といったら博多が一方ではあって、堺が一方にあって

佐久間：はい、あれ15世紀に堺に移るまではやっぱりここが一番大きいよねえ？

堀内：そうでうよね、はい

佐久間：瀬戸内の奥だからねえ、やっぱり

堀内：ここと尼崎でしょ

佐久間：尼崎か、でもやっぱり尼崎よりはこっちの方が古いな、尼崎はほら道場が出来るんですよ、ほらっ大物(ダイモツ)という日蓮系のね

吉岡：あの一、今重文の寺があるあれでしょ

佐久間：大物の道場ができてね、本願寺系じゃないんですけどね、そこにできるんです、その少し脇ってのが平安時代から有名な神崎の女郎屋さんがあった、神崎の港なんです、神崎があって、大物、尼崎があって、ちょっと離れて兵庫津があるんですよ

堀内：大物ではものすごい遺物がでていて、平安末のが、義経が船でここから落ち延びていくから

佐久間：兵庫の津は近くに福原の都、福原京を平氏が造るから、時代感覚としては、福原があって兵庫の津があるから、兵庫の津の方がランクがうんと上と考えるのですが、でも分かんないんだよね、大物も掘ってみると凄いかもしれへんし、分かんないんですよ、どの位のランク差があるか、文献資料ではもう圧倒的に兵庫の津ですよ

小野：福原は・・・

佐久間：短期間ね

小野：短期間だけね、むしろそこにくっ付いてきたような感じがあるから、福原があってじゃなくて、港があって福原ですからね

佐久間：そうですね

小野：あとは内陸でこういうのって、淀？

佐久間：淀はねえ、まだですよ、淀城がつくられるのがもうずっと後になりますから

小野：いやいや、港としてですよ

佐久間：ああ港、河港としてはです

小野：うんうん、だってあそこに全部上がってくるわけでしょ

佐久間：河港としてはね

小野：首都圏に入る玄関港としてはあそこですよ

佐久間：ただ大きい船が入りませんからね、30石止まりなんです

小野：じゃその前は、その前段階はなに、兵庫に降ろして小さい船に乗る訳？それとも海側はどこになるわけ？

佐久間：恐らくあがる前はねえ、小舟に乗り換えるんでしょうねえ

小野：ただ、海の上で？

佐久間：うーん、どこで乗り換えるかですね、豊臣の大阪時代はね、外港の河口の中間、河口に入りましてね、そこで乗り換えなんです、それで大体五千隻くらい免許持ってますよ、海廻りと河で、あれ免許制ですから船は、奉行所に届けるんですよ、でそこで乗り換えて大阪の宿と淀や伏見の宿は提携がありましてね、この宿の船を使えばこの宿に入ると決まってるんですよ、この宿の船だったらあの宿みたいに、荷物の搬送も人間だけじゃなく荷物もそうですね、河内屋さんやたら伏見屋さんの誰某って決まってるんですね

小野：問題になるのはやっぱり中世に、例えば淀だとか、鳥羽とか、要するに京の入り口の港がね、確かに河港なんだけど、当然ながらそれだけのものを持つてる訳なんですよ、海から来たやつはどこで河港にね

佐久間：石山本願寺の寺内からはね、唐船が見えるんですよ、見えるからねみんな本願寺の寺内から見学するわけです。(記事にありましたね)ですからかなり奥までね、本丸の所は大體寺内と思われまから、こら辺に立つと見える位の所までは入ってたと考えられますね

高島：淀と大和川の合流点くらいは入ってた、その辺くらいまでは入ってた

小野：こらに拠点があって、ここで川舟に代えて淀は上がってくと？

佐久間：イギリスのロンドンでもこの位は入ってますか？ロンドンだとどの位入ります？

海から河に入った所に港がありませんでしたか？

モリス：ずっと入ってますよ、何kmでしょうテムズ河がずうっと陸の方に段々とこういう様な形でテムズ河になって、そして更に入ってロンドンブリッジまできますね、ロンドンブリッジを越えることは、大きな船は出来ないからその下の所で荷物を一応降ろしてる様ですね。

佐久間：だから私は豊臣期のね、港ってのはこれ太線で囲ってますけど、南北に細長くて河港だったと思うんですよ、海港ではなくって、基本的には河で、こちら側はずっと低湿地が続いていてね、そこを改装していくのが江戸時代でね、その時には海から直接この外港で乗り換えをして、堀切を、堀割を入れて、中に入れる様に土佐堀とか色んな堀がありますのでね、そういう風な港体制を作ったのが江戸時代だと思うんですね

官武：あの、同じ15世紀という時代相で言うと、各国の守護にとっての重要なドル箱の一つが帆別銭などの関料なんですよ。当然、管国内のどこでも良いから船荷を中継しろというのじゃないので、相当にしっかり把握・規定化しておかねばならない。分国経済の生命線に関わる場所に限定しているものと思います。ですから、余計に兵庫津と首都圏との連絡の仕方が気になっているのですが。

佐久間：あのね、石山本願寺は港を持ってました、浦という、ちゃんと浦があるんですよ、ですから本願寺はこの河沿いに浦があって、そこに恐らく淀側の・・・

小野：むしろそこがねえ、或いはその直接淀なのか鳥羽なのか分からないですが、そういう所だと思うんですけど、近世に考えている関係とは違うんじゃないか、それがさっきか

ら気になってたんでね

官武：尼崎は確実なんですか？尼崎で一回そういう中継なんかは？

小野：前にをやった事があってね、というのは兵庫の津に上がった荷物って一体何処向けに、そこからどういう風に運搬されるんだって問題があってね、確かに北之関の入船納帳があるから大変有名なんだけど、考えてみたら今の神戸に上がっちゃうんでしょ、そしてたら首都圏から結構あるじゃない、あれを陸路で運ぼうとしたら結構な距離ですからね

佐久間：この時期のね、海洋図がありましてねえ、秀吉が使ったという、伝！伝水行(笑)だけど絵としたら大分古くて、そこには兵庫の津の間に尼・大物それから神崎、それでえー大阪、それから大阪湾の沿岸にはズラッと10個くらい書いてありますよ！堺以外にも沢山あった、泉大津これは昔の国府の泉国ってのがあったけど

吉岡：だから、対外的な建明船だとか何だとかっていう外洋船に近い様な船と、瀬戸内海だけの内海航路のものと、それと河港と、3種類を考慮しておかないといけなくて、だからその中の港で、外から来て内海航路というかそれに乗り換える部分、それから川舟に乗り換えて端末ターミナルとしての淀なり何なりくる部分、それが区別があったのか無かったのか

佐久間：結局大型船がね、近くまで寄れる港ってのは意味があったと思うんです、恐らく淀川の河口ってのはある程度まで入れると思う、それで上流は船底が浅くなるからあかんですから

吉岡：いやっ近世自体が基本的に近世の港ってというのは、全部河港ですよ、要するに船の保存上とか何とか言って、真水と交わらないとフナムシが殺せないという様な俗説かどうかは知らないですけど、そういう言い方をして真水の入ってくる所に船を入れる事によって、船の保ちを良くするという塩水だけでは

駄目なんだった。だから名護屋みたいなね、深い入り江だけではいわゆる本当の意味での港にはなり得ないと

宮武：継続使用を前提とするならですね。

吉岡：船待ちはできて

宮武：あくまでも名護屋は渡海基地ですし、それも一時的利用を前提にしていますから。

吉岡：だから河港なんだってことです、それが近代になっていわゆる鋼鉄線になって、もっと浚渫の問題や浅くなるのとかの問題があって、外海の海の直接の港になるという言い方を大きくはしてますよね

玉井：だからやはり問題は中世ですよ

吉岡：はい、中世ですねやはり

佐久間：でも中世がやっぱりあれだけあの、播磨摂津は文献残ってますからね、大きい港というと兵庫の津と、それから16世紀はやはり大物が凄いですよ、古い時期はちょっと良く分からないですが、あとやっぱり堺と、2大勢力ですよ文献の頻出度からいったらね

小野：あの、入船納帳見てもあれですからね、あれで年間で二千何隻でしたっけ？デカイやつが大体二千何隻、そしてそれ以外に入船納帳に載ってない薪炭船って言って薪の分があってあれが400隻でしたっけ？百石以下のやつはあれ基本的に書いてないですからね 東大寺が別の文書を持っていて、その中にやっぱり薪炭船っていうのが確か一年間で大体400隻位だったと思うんですけど、また百石以下の船・・・に入ってるという、で兵庫はご存じのとおり北の関と南の関、それと東西とふたつ持ってるわけですから、北の関の分は半分だと思えばその倍きっと入ってるに違いない訳で、それは結構な量ですよ。凄いですよね、五千隻、一年間で五千という、えーっと・・・

佐久間：あっ免許持ってる船の数ね

小野：実際に入って税金を納めた数がそれだけ、百石以下は除いて数でね

吉岡：365で割ったって凄いですよね

宮武：一日あたり13隻程度ですものね

小野：だから南北合わせてその倍だとすると、近世の北前船が一番盛んだった頃の敦賀と殆ど同じ位なんですね、敦賀の18世紀くらい、それが1年に五千とか六千なんですね、大きい船が、もちろん小さい船がもっとあるんですが、だからかなり凄いですよね、その倉庫群が出たって事なのかな

玉井：そういう量を考えないとこの倉庫群の意味は分からないということですね

小野：ということですよねえ、でも14世紀からって言われると、これははちょっとねえって感じるんですよ

吉岡：15、16というんなら、うんなるほどって思うんですけど、13からって言われると、うーんそんなに古いかなって気になってしまいますよね

内藤：ちょっとすみません、あの倉庫自体は14位と思うんですけど、ただその下の掘立が13位かなっていう・・・

佐久間：その下がね

玉井：14ね14

小野：鎌倉も結局13世紀の半ば以降なんですね、倉庫群がガーッと増えてくるのが、おまけに石造りのあの立派な倉庫になるのはそれも最終末或いはもっと、鎌倉幕府滅んでからじゃないかという見方もこの頃してるんですけど

玉井：恐らくそうでしょうね

小野：うん、だからねっ！そういう事からいうと

玉井：ちょうど合いますね

小野：今見てる様な石敷きのやつがいつ頃なのかというのがかなり大きな問題だと思うんですよ

玉井：ほぼ一緒なんでしょ、結局

小野：この県のあれを信じればね、その辺の情報が良く分かんないけど

宮武：だから鎌倉だと14世紀でしょ

佐久間：はい鎌倉14世紀ですね

吉岡：まさに室町政権が確立して、義満が遣明船だなんだと盛んにやり始めるその位の時期になるわけでしょ、14というと

玉井：だからちょっと前なんだな

小野：だから14世紀っていうのはやっぱり中途半端かな

吉岡：逆にいうとそういう社会的な変化の中で、ああいう政治的な動きが出るのかもしれない

玉井：こっちが先行してるわけですね

小野：博多はいつでしたっけ？倉とかができるのは

宮武：イメージはやっぱり16世紀っていうかんじですね

續：16世紀後半で確実に見つかったのがあって、ただ14世紀代にそれらしきものがあると海底の跡にあるっていう・・・

小野：ただ博多の方が新しいんですね？

宮武：「倉庫」としての建物の存在がわかるような例で言えば、古い段階での検出例は決して多くはないはずですね。主体的となる遺構を残すのは鎌倉の方が断然多いでしょうね。

玉井：14世紀ですか。

■掘内明博報告関係

玉井：さすが京都というか、町家は長岡京から始まってますか

堀内：長岡京の遺構と気づいたのは本当にごく最近なんですよ。この長岡京右京六条二坊は数日前の連絡協議会の中で紹介された資料で、「これ市の施設では？」という話で、平安京の西市の遺構はかなり前に出ていて、恐らく市の中心施設に関連する短冊形の地割りであろうということは前々から思っていました。それをはっきり証明する遺構が出てきたことになります。平安京の場合は西市の周辺も小規模な店舗があります。面的に広げられない理由もあって見つけられなかった訳です

けれども、長岡ではこういうものが出てきてもうこれは間違いのないということになった訳です。だから草戸千軒で中央の市場と考えている長方形の地割り群がありますが、その原形というのがやっぱり律令制都城の市にみいだせると思います。

玉井：なるほど。

堀内：だからあの十三湊の小学校で出てきたああいう細長いものが直接伝播したんじゃないかと、当然幾つかの段階を経て伝わっていると思うんですが、おそらくルーツというのはこういうところにあると思います。草戸でも市場と市場の周辺に長方形の街区があります。道の両側を見るとみんな井戸がずーっと道沿いに並びますからそこにも町家みたいなものが並んでたことが伺える。このような町屋の形態は今日お話しました大山崎の津とか平安京や長岡京の市の周辺でみうけられるということですね、ただ町家の構造も各時期に渡って大きく変化していくのが迎えます。例えば井戸の所有とか、蔵の存在ですね、それから屋敷割の問題ですね。

宮武：無論、検出遺構の規模から見ても、建物自体は「仮屋」なんですよ？

堀内：仮屋でしょうね、だから言いましたように非常に小規模な柱穴で構成された細長い施設であること。

宮武：結局建物の主体者の此処の空間における占有権というか敷地に関する所有権というのは当然ないわけでしょう、これに関しては？

堀内：はい、だから市の記載を見ますとね、東市と西市では市の立つ日が異なってます。それで市には商品を陳列する肆（イラクラ）があり、店頭の商品の名を表示していました。また一つの店には定められた一つの商品しか売ることができなかった。東市と西市でその都度にこういうものを建てるか、そのまま放置されているか。

高島：その度に建てる？

堀内：おそらく。

佐久間：10日？何日おきぐらいやったっけ？

堀内：東市は一日から十五日まで、西市は十六日から月末まで決まっていた。だから平安京の場合では出てこないわけですよ、柱穴そのものが。だから完全に仮囲いみたいなものなんでしょうね。長岡の場合は、まだ柱穴を掘ってますが平安京の西市内には柱穴がないのです。

宮武：平安京の場合も仮屋？

堀内：そういうように考えています。

宮武：ピットがないと。

堀内：はい

宮武：市にピットがないと、長岡は市にピットがちっちゃいけどある。

宮武：ピットがあるから分かったと？

堀内：分かった、偶然分かったんです。

玉井：ということはこの手のものは簡単に出てこない、他の場所ではもう出てこない？

堀内：だから大山崎の遺跡で私が市と想定している建物もピットが非常に小さくて、柱当りも小さい、だからひょっとしたら、見過ごしてしまう。

宮武：竹ですとかを主要な材質にするような建物なら、なおさらということですよ？

堀内：だから絵巻にも出てくる備前の市状況なんかに類似し、柱はすごく細いですからね

宮武：ここは一応そういう類の遺跡景観なのですね。

堀内：だから律令制の都城の中の市でもそんなしっかりした柱ではなかった。ただ市の中心施設である市舎とか、四周を画する門などの施設なんかはやっぱり恒常的なものでしょうけどね。

宮武：ただこれ、京という公の空間の中ですから、ここで交易活動をやりなさいという上部権力から設定された市と見なければならぬわけでしょう？

堀内：古代都城の市について注目されるのは、難波京遷都の際、わざわざ藤原仲麻呂ら

を恭仁京の市に遣わして、市人に恭仁を選ぶか、難波か平城かを下問していることで、市人が重要な役割を果たしている。

宮武：この広い空間で市人たちが自由に、三々五々建てたとしてはあまりにも規則的な建物配列でないかなと。

堀内：だから、朝廷の政務や儀式の際、参列者の立つ位置を示す版位と同じように、各地域ごとに（例えば西海道など）決まってると思うんですよ。

宮武：となれば、ここで開市をしなさいとGoサインを出している、つまり公権力が介在して設けたものであっても、市においてはそういう脆弱なクラスの建物を建てないといけないうことですよ？

堀内：そういうことになります。

宮武：主体者の階層に関わりなく、背景にある権力のレベルとも関わりなく、市においてはこういうものを建てるものだという普遍的なルールが共有されていたと理解できるのでしょうか。

堀内：はいそうだと思います、だから建物の規模は決められてる訳ですよ、その為これだけ同じパターン繰り返されている訳です。それぞれ木材を持って、用意された敷地内に仮設小屋みたいな、現在の地方の市場の状況に近い様相を呈していたんだと。

宮武：だから、強調したいのは、従来は建物規模や使用材の質や規格などが、構築主体者自体の社会的ランクを一定程度を表すものというイメージが強かったわけですけど、これは天下の長岡京の公市なんで、建物規模とその配列は統一的に規定されているのに、それでもこういう脆弱な建物を置いている。ということは、建物規格自体は必ずしも主体の階層性を示すものではなく、各柱自体からは、あくまでも仮設的用途を知るよりないということですよ？

堀内：都城内には、このような用途に応じた施設も存在したんでしょうね

宮武：そういうことなのでしょうね、だからちょっと驚きですよ。

堀内：この資料実はスクリーントーン張ってなくて良く分からなかったんで、理解しやすいようにスクリーントーンを張って明示しました。

佐久間：あれ、新聞発表はどんなんで言ったんやったけねえ？

堀内：新聞発表では同じ規模の建物群が見つかったということから、長岡京造営の際の倉庫とか、工人の宿舎とか、洪水の際の避難場所、市の関連施設など様々な見解が出されています。

玉井：市場とかそんなことは言ってないのですね。

佐久間：ここは木簡出てないのかなあ？

堀内：えーっとね、木簡出てないと想います。以前の右京六条四町の調査で、(延暦)三年十一月に「司」という木簡が知られているのと「西」銘の墨書土器が共伴して出土することから、おそらく長岡京の市というのはこの辺だろうというふうに考えられている。

ただね、平城の市が八条大路に接しており、平安京の市が七条大路に接しています。長岡京では六条大路に接し、各都城で市の南北位置が異なるということになっています。この調査区は六条大路に面してないだろう。なおかつこの市の関係する朱雀大路に寄ってるんです。平安京の市は二坊で、平城京では三坊と東西でも異なっています。このように市の位置が違うことがわかっており、長岡京では確定しませんが、その可能性があることからその一部に入れて頂いたら良いんですけど。

宮武：一戸一戸の建物の形状としては、おそらく他の地方での市での、その後のパターンにまで敷衍させて考えることは出来るのでしようけれども、こういう空間設定は、おそらくここでしか出てこないのではないのでしょうか。というのは他の都市的な場では、いか

に大都市であったとしても、本来は「地方市」であって「公界の論理」に従えば、地域権力から逸脱した世界の中で自然発生的に成立してくる空間という見通しがあるわけで、そこに「市」全体を網羅する計画性のようなものが及び得るのかどうか。全然違う次元の相反する論理ですよ。だから、この景観は他所ではちょっと見られないのではないのでしょうか。

堀内：そう、たださっき言った草戸千軒での市場に想定している所でも、土蔵と考えられるもの以外明確な建物出てないんですよ、確か。それから十三湊の長方形街区のある所でもあれ何も出てないですよ。だから、一つの律令の時代で創られた規範みたいなものがずうっと或る時代まで生きてる、続いているみたいなどころがあるんちがいますか。

宮武：民衆の中に？

堀内：うん、それか市とはこういうものだと、各地方でもこういうパターンが市なんだという模範があったのではないかと。まだ分かってる事例が非常に少ないんで、もっと報告書を全部見直したら出てくるかも分からないですが、大山崎の建物で気が付いたんです。それからこのような例は平安京にもある、ならもう多分何処にでもあるだろうと、おそらく市と称するものは規模の大小はあったとしても、こういう非常に細長い建物で構成され、なおかつ基礎がしっかりしないものと考えたわけです。

宮武：建物の構造なら通常の小屋レベルとして捉えられますよね。ただその配列としては、とんでもなく統一的ですよ。

堀内：とんでもないです。

宮武：これに関しては。

堀内：だからこの大山崎の遺跡とはね、少し形態が違うんです。これはもっと狭いです。間がねえ、これ6m位しかあいてないんです。そしてほぼ等間隔で、これをちょっと縦に並んだように見てもらったらいいます。調査

担当者とのやりとりの中で「この建物だけなんでピットが小さいのですか、本当に長岡京期？」と質問すると「そうです」と。改めて遺構図を見ると建物の軸線が西国街道と平行しない、平行しないのがどうやら周辺の遺構、他の建物見ても古い段階なんです。そして若干長岡でも新しい段階なってくると今言った西国街道と平行するような遺構群が出てくるわけです。だから当初からこの北側に点在する百々遺跡という小規模な建物群と市はセットじゃなくて、どっちかゆうたら市の方がさきで、後に若干時間差を置いて出てくる、僅か十年の間ですけどね。

高島：はあー、そうですか！？

堀内：はい、ここで周りに色々井戸の中から、斎串とか、金銅製鉈尾、それから「家」という墨書土器とか、それから硯、土馬、皇朝十二銭とか色んなものが出てくるわけですね。逆にIK18いう井戸の中からは、「井」とか「臣」など、その周辺でも「米」、「臣」などの色んな墨書土器が出土しており、百々遺跡と性格が異なる。その上他の遺跡においてもやはり市の周りとその北側の百々遺跡とは出てくるもんが若干異なる。だから特に南側で出てくるものの中で特徴的なのは墨書人面土器なんです。北側の百々遺跡の方からは墨書人面土器というのは出てないんですよ、そういう意味では墨書人面土器の性格を考える上では面白いなと思っているんですけどね。さっき出てきた尼崎とか、それから織豊期の市というのがどないなってるのか分からないんですけども、そういう港と荷揚げ場の関係がセットで把握できるのが非常に興味深いですね。

宮武：南側の墨書人面土器が出ているエリアでは、

堀内：はい。

宮武：南側の遺構群には、山陽道と並走する柵列が存在しますよねえ？

堀内：はい。

宮武：これ北側の遺構群でも綺麗に平行する柵列などの遮蔽施設が同じようにあるのですか？

堀内：ないです。

宮武：ということは、南側だけ遮蔽施設が明確なんですか？

堀内：はい、ただね、北側にはその塀はないんですけども、裏地の溝があります、そしてさらにこのC1地区とC2地区に大きな段差があります。だからいわゆるテラスで、一応カットされて造成されていることですね。実は最近そのテラスの上側でもかなり大規模な掘立柱で構成される建物群が見つかってわけです。それはもう規模が全然違うんです、だからまさに京域内の邸宅での主屋と付属屋を見てみたい感じの状況がここにもあるというわけですね。ただ言ったようにこの段階にはまだ奥がはっきり区画していない、で、七条町の段階でもその奥と表の面する町家の境界がまだ不鮮明であると、ということで一応今の所私は奥との関係が一定程度存在するのではないかと考えているわけです。それがあがる段階、奥そのものが衰退して路地が成立すると、だから京都の路地の成立というのは堺とは全然違う経緯で成立していると考えられます。

宮武：先程、佐久間さんと話してたんですけどね、それじゃ本来、町家地区の敷地の特徴と、まあ例えば城下町の場合だと武家地の敷地の特徴とを、もし分ける基準があるとすれば何なのかという問題を考えると、明らかに町家の方よりも武家地の方が、その敷地については不可侵、排他的ですよ。溝であれ塀であれ、境界表示の施設を互いに明示しあうという仕組みがあるわけじゃないですか。町家の場合、路地ですとか塀などがある面では隣り合う同士の境界になるべきはずなのに、先程の續さんの発表にもあったように、簡単にそれがつぶれたり、隣地の敷地に飲み込まれたりする状況が見える。で、今の七条町のお

話でも、明確ではない「奥」の世界との繋がり方、お隣さんとの境界が非常に曖昧な時期があって、それも固定的ではないというか、変化が激しいと。これが町家通有の「思想」だとすると、非常に興味深い現象であると思う一方、よく分からなくなる点もでてくる。じゃあ、そうした変化の激しい町屋敷地の基本的性格の中から、何で短冊状地割に代表される画一的な敷地に固定化されていくのかという点がわからない。本来、敷地境界の不明さという町家の宿命のような性格があったとするなら、それが後には定型化されていく、スライドしていく意味というのが何に基づいているのか。

佐久間：大坂はね、地子免状なんですよ、土地で要らないんですよ、おそらくある時期から水帳というのが作られましてね、全部敷地の間口を測った、

宮武：しかも屋地子を徴収する場合には現住者とそこの処分権を持っている人間とが明確になるから。

佐久間：はい、それに間口の大きさも記録されちゃうわけですしね、で今残ってるのは江戸後期の水帳が多いんですけど、前期の水帳はないんでしょうけどね、基本的には後期ですよ、で江戸後期大坂はねえ、地子免状じゃないかなあ。

宮武：ということは我々のイメージ、都市的な場の中の町家が成立する前提の一つとして地子制度がはっきりしないとできあがらないものと。

佐久間：地子制度というのはねえ、中世にもあったと思うんですけど、少なくとも信長期にはあるんです地子、だからだから安土では地子免状ですよ、安土が確か。

宮武：基本的にはそうですね。

佐久間：で大坂も最初はね、地子免状でいったと思うんですけども、それが江戸に入ってくるとだんだん土地の台帳を作るようになりますから、今の所江戸後期には作ってますも

んね、その時期には基本的にはもう境界としてある程度決まってくると思うんですけど、それがいつからかはちょっとわからないですね。

堀内：その起源に近いものの一つに、西市の外町に接した宅地内では、奥行30mの土塁みたいなものがある。土塁で囲まれた中に小さい町家が戸ずつ入るわけですよ、でそれは当初はそういうもんだという四行八門制の実用的な規定があり、それはお互い同士の領域が設定されて脅かさないようなルールが確立してあった。それがずっと続いていくからこそ、奥行とかが、まあ横の拡大はあっても、奥行の敷地の拡大というのはよっぽどのことがない限り改変されないわけですよ。しかもそういう土地所有の明確な税とつかないわけですから、その境界を明確にする必要がないわけですよ、ただ暗黙の了解としてこれぐらいが大体我々の奥なんだというね、そういうのがずっと伝統でいわゆる町に住む人達の内、共通の認識があったのではないかと。

宮武：背割りのゆるやかなルールなんて言うんですかね。

堀内：そうですね。

宮武：背割りの境界が徐々に定着していくイメージなんだろうね。

堀内：そう、だからそれが明確化されていくのが鎌倉時代後半以降で、もっと明確化するのが織豊期の豊臣以降の、天正地割りによる改編によってです。それで実際に南北路と東西路に面する町家は具体的に違う。で、その境は、一軒一軒の境はちゃんと土台敷と考えられる河原石敷で区切られ、石組みの部分を一部共有する部分はありますが、その目地の正確さでは遙かに違いますからね。

宮武：そうですねえ、自身も豊臣の城下町跡に多少なりとも係わってますので言うわけではないのですが、昨今、強調されるように、織豊期になって突如としてそうした明確な境界規定が、必ずしも現れるわけでもないよう

に思うんですね。地子の問題で言えば、京都で起きた天文法華の乱という事件を経て、それ以後、地子銭の「町請」へと以降し始める現象があるわけでしょう。町を構成する住民同士が相互の居住区の確認という行為に出る。信長や秀吉以前に、町の共同体内部で徐々に土地の把握が進行していた。これ、10Pの資料にもあるように、慶長大地震以前と以後との地割が大きく様変わりする事情ですが、16世紀代に何かあったのは確実に、これを豊臣政権による町整備に全て帰結させて解釈してよいのか……。

堀内：ここで圧倒的に変わりますよね。

宮武：この時期ってのが何なのかなあという気がするんですね。

堀内：さっき言った七条町とか八条院町でも井戸の作る位置というのは殆ど動いてないわけですよ。

佐久間：うん、そう、これ後ろという意識がそうさせてるんでしょうね。

堀内：はい、この場所くらいに作ったらいとということで、何処にでも作って良いわけではないんでしょうね。それはお互いの共通の利害関係が存在していた証左といえます。境界は明確ではなくとも。その境界を明確にするというのが、やっぱり織豊系城下町の中でも大坂城時期の大きな転換期になるわけ。

宮武：だからくり返すようですが、必ずしも豊臣や織田に代表される様な公権力を主体とするとは限らないわけで、都市に住む住民が自らの居住地についてお互いに利権がまあ、折り合いがつくような状況になって初めて境界線が出てくるわけですよね。だから言い方を換えればそれ以前の中世的な町家の特徴というのは境界がはっきりしない、奥ははっきりしてても。隣の敷地と隣の敷地がいくらでも変わるというパターンであって。

堀内：ただね、井戸の分布を見るとやっぱり一定の間隔で、

宮武：一定の間隔ですね、確かに。

堀内：だから隣との境界もそんなには変わってないはずなんです。だから特に七条町とか八条院町というのは職人で構成されている町で、そういう職人層の自らの土地の持ち分に関しては横にしても南北にしてもそれほど大きく一線を越えない、それ以上の権力が立ち入る要素が発生しなかったんじゃないですか。だからこそずっと面々と同じ様な所に井戸を作っては壊してきて、最後15世紀の或る段階を迎えて忽然と消えるわけですよね、遺跡が。そういう理解をしないと遺構がわからない。だから近世以降の左京二条四坊での天明の大火まで地割りが変わらなかったという意味と中世の地割りが存続する意味との背景が全然違うわけですよね、おそらく。

玉井：でもこれは文献史の人は支配体制というふうに理解しますね。

宮武：そうでは必ずしも私はないと思いますよ。

堀内：京都の場合は、町組というのが戦国期に出来上がってきて、それ以降町共同体というのが頑としてくるわけですよね。面白いことに石組みの井戸なんかは、井戸の堀方は隣の家の一部まで広がってくるわけですよ。ほんで大地震とか火災で潰れますよね、また同じような所にまた井戸作るわけだけど、井戸が隣に越えてもいっこうに差しかえない。それで上に井戸を構築して土間を設置する際に礎石は元の位置通りにする。その様な共同体意識というのはものすごい持ってるわけです。

宮武：この間仁木宏さんが綺麗に整理をなされたわけじゃないですか、都市研究史を。その中ではもう一回見させてもらっても、一番都市研究の中で欠落してるというのは、都市民の内容に関する問題で、そこに定住するとか、座ってる都市民だけ見てきたわけですよ、だから出ていったりこういう移動性の強い住人と、土地・家屋の所有者との関係に

については、研究史ってのは桜井英治さんの研究のほかにはあまりないですよ。それを考えていかないと相互、一つのブロックの中で居住している複数の世帯者ってのが互いに妥協しあいながら、また裏かわに隣の土地までまたがってポーンと井戸掘ったりする様なそういう理屈ってのは考えられないと思うんですよ、誰の敷地だったんだということじゃ。玉井：いや定住という意識でみますから、我々もついつい無意識のうちにね。実際には殆ど常時流動しているわけでしょ、都市住民というのは。

宮武：だから京都はもとより会津の築田文書や相模当麻など、住人（商人）構成に関する史料で出てくるように、土地の持ち主というのはまた違う、宿や店舗を借りてる人間はいくらでも変わる。

高島：それが一杯ありますね、はい。

佐久間：都市ってのがね、流動してるってのはね、大坂じゃちょっと違うんですよ。大坂はね、人別帳がありますからどちらかというと、

宮武：城下というのはやはり違うと思うんですよ。

佐久間：あの、何人外から来て嫁いだ、それから何人が外に嫁いで行ったか養子にいったか全部記録があるんですよ。

玉井：城下町の場合はそうでしょう。

宮武：政治都市の場合はそうだと思いますよ。

佐久間：でね、今残ってるのが江戸後期の文書なんですけれど。大坂の人口は豊臣20万、徳川前期の終わり位に41万位になって、その後またグァーっと28万位に下がるわけですよ。その下がりかけてる頃の人別帳を見ますと農村から殆ど人が入ってこない。農村と婚姻関係はしない。他の都市の人とは婚姻しますけど、養子やりとりやりますけど、農村と全然しないんですよ。今まで一般的には農民が都市に入ってくる流動化現象はあったん

じゃないか、それが都市を支えてきたんだと理解してたんですが。この10月にね、近世史の先生が大坂の分かるところの人間の流動化を全部データ化したんですよ、いやあ殆ど入ってこない。それはあくまで江戸後期で減少期なんですけどね、減少期としても、もし一般的に農家と婚姻関係があるならね、ちょっと位入ってきてもいいじゃないですか、でも殆どない。

宮武：幕末に限ればですね？

佐久間：えーっと、江戸後期ですね。

宮武：だから中世から豊臣の・・・

佐久間：中世なんか、中世はね、逆にねあちらこちらから来い来いってやりますでしょ、それで農人町ってのもつくりまますよ。

高島：ありますね。

佐久間：農人町の住人ってのはね、おそらく農村では色んな多角経営やってるね、土地持ちの農民がやはりそこに住むんですよ。彼らは農民であると同時に企業家じゃないですか、そういう奴はやはり市内に持ってくるという、やっぱり織豊期とか中世ってのは、流動的だったんじゃないかと思うんですけどね。

玉井：そんなに出来ないかもしれないけど、天正くらいの京都では移動してますよね？

宮武：はいはい。

6. 町家研究会へのコメント

宮武 正登

近世以前の都市空間を構成する「町場」に関する論議は、これまでの研究での主軸をなした二つの視座の延長上において展開しているといつてよいだろう。一つは町の構成員をめぐる議論であり、文献史学を中心とした社会構造の中の都市住民の動向の追究が主であって、町共同体の成熟度を目安とする捉え方である。多くは支配権力との対立的図式の中での理解から容易に脱し得なかったが、昨今では相互の指向性の合致をもって近世都市の成立を論理づけようとする史観も提示されている(註1)。

今一つは空間構造論で、各時代の都市プランの特性と変質を追う手法である。街区割や町並みの復元的検証を前提作業とし、それに当たっての基礎資料は絵画・考古資料・地籍図・古地名と多岐にわたるため、必ずしも主導的学派を固定化させる必要性を伴わずに議論を広げることが可能と言える(註2)。

この二つの視座を遊離させずに「町」の具体相を実証していくことが重要だが、今回の事例報告・討論では、主に後者の視点に立って、その主要資料の一つである発掘調査成果を素材として考古学・建築史学の立場から協業的検証を試みたわけで、とりわけ町屋のディテールに関する新たな要素の相互確認と、今後も重視すべき問題の抽出がなされたものと思う。対象地域を近畿地方に限定しただけに、結果的に各時代ごとの町屋の先進的スタイルを通観する形となったが、その意味では、この現象・類型の全てを全国的動向として敷衍させて捉えられるかどうか、別途の議論が必要であろう。また、大坂・京都・堺・兵庫津という、いずれも一大経済都市(行政府としての側面を持つものがある)の町屋を事例としたことで、多彩かつ濃密な情報の列挙と

なった。そのためか議論の方向が分散化しすぎた観は否めないだろう。その中で、あくまでも個人的な興味に発端する幾つかの印象的な問題のみを、以下に再確認しておきたい。

堺の町屋形成過程に関する續伸一郎氏の報告に対する論議の過程で、考古学上の方法論から前近代都市を考察する際に不可避の、にもかかわらず実質的には未解決の課題が吉岡泰英氏から提起されている。すなわち、町屋跡の判定基準となる共通要素は何か、何の遺構をもって当該の遺跡を町屋跡として認知し得るのか、また、建築学サイドとしては、どのような定義を「町屋」に与えるべきなのかとの疑問であり、これらを明確化させない限り、議論の拡大はできないとの見方であった。これを受けた佐久間貴士氏も大坂城下の屋敷地を例に掲げて、面積上の制約を伴う調査の場合、近隣地区内での複数敷地の規模との相対的比較によって、武家居宅と町屋敷との格差を漠然と想定せざるを得ない実情を吐露した。あわせて出土遺物による評価の限界にも言及し、木簡のような特殊資料の集積でもない限り、町屋を特定化することが厳密には困難である点を指摘している(註3)。建築・考古両学派からの、現状に照らした問題意識の整合を見たこととなったが、この指標対象の絞り込みこそが「町屋」をテーマとした学際的検討を試みる際の目下の難関であり、その解決に向けての作業は、町屋の共通型式の確定と同義となる。

この問題提起がなされる以前に、續氏はその報告の中で堺の「近世的な町屋」(慶長20年被災遺構)の基本モデルを簡潔に整理していた。それは、①表通りに面する、②礎石立ちの主屋、③通り庭の存在、④竈の存在、⑤裏地に蔵が隣接するといった共通特性である。確かに、町屋の発生原意に関わる「ミセ」の痕跡などを検出遺構の中で識別することが容易ではないと予測できる以上、最低でも建物跡が街路に面する(接する)ことを条件と

して規定することが可能かもしれない。しかし、上記のうちの複数要素の複合によって初めて、町屋跡としての判別の確実性が高まるわけで、竈単体の検出をもって町屋と見なせるものではないことは勿論である。ただし、通り土間・蔵跡の存在という条件は、いずれか単独のみの検出の場合でも、かなり有効な判断基準となり得るだろう。特に蔵の存在は、後述するように、完成された町屋の指標として重要な意義を持つように考えられるからである。

高橋康夫氏の最近の解釈（註4）に従えば、臨時的・仮設的側面を持っていた初期の町屋が、都市民による屋地の所有権が安定化する戦国期以降に、定住用の恒久的家屋として独自の形態的發展を遂げ近世的町屋の成立を迎えたとなるが、そうした推移を重視するなら、屋地内での継続的な生活維持のための環境整備が進んでいるか否かが、遺構分析上のポイントとなろう。主屋自体の構造的・質的内容は、時代差・地域差によって相違するであろうが、ともかくも通りに面した家屋が存在し（註5）、その維持のための付随施設（井戸等の水利施設、給排水用の溝、蔵、便所など）を伴うという、大雑把な基準の設定ができる（註5）。したがって、その付随施設の内容と敷地内での位置の分析を通じて、町屋跡の識別のための有力な判断材料が得られる可能性があり、それだけに屋地奥（裏地）の用途と実態の解説を主眼においた再検証が急がれる。

特に、兵庫、堺、大坂の報告で、共通して議論の対象となった蔵跡と思しい建物については、今後も他事例との詳細な比較分析を要しよう。言うまでもなく、家屋と蔵との併存の意味とは、常時の物品管理・備蓄と有徳人の常住の証左であり、つまりは恒久的町屋の成立の重要な指標になるとともに、裏地の積極的利用の具体例の一つに該当する。その建築上のグレード（施設の性格上、殊に耐久性

の高さが基準となるだろう）に関する検討結果は、主体者の町場社会での階層性を導き出すとともに、町場全体の成熟度をはかる尺度ともなり得るだろう。兵庫津、鎌倉で14世紀代に、堺では15世紀後半～16世紀前半、「瓶倉」の登場を積極的に捉えるならば、京都では既に12世紀代には遺構の検出例を見るといった今回の事実確認によって、中世での常設町屋の起点を別の視角から認識できそうである。

ところで、これらの多様な形態の蔵跡の提示を受けた一連の討議では、復元的視点からの構造内容の検証が活発に繰り広げられたが、その発生をめぐって「城郭建築の技術的影響」という仮説が現れてきた。堺の半地下式構造の蔵跡、大坂の町屋での瓦屋根形式の建物の出現期は、確かに城郭の一大革新期と時を同じくする。特に「堺の三階蔵」そのものの跡の可能性を持つ半地下式蔵跡が、慶長年間に入って突如として急増する事実は、町場の世界の外部で発達した技術観の採用を予測させる。その可否を議論するに当たって確認しておきたいのは、当該期の城郭建築の技術内容である。内藤昌氏の統計的整理（註6）によれば、現時点で把握されている古典建築書のうち、江戸前期（万治年間）以前の成立と見なされる37本の中で、城郭の内部建築の仕様に関する記載を持つものは僅か5本にすぎず、さらに慶長年間以前の所産の技術内容を記す12本に限れば、関連項目自体が皆無であることがわかる。これは、城郭専用の建築分野がこの時期にはまだ定式化されていないこと、つまるところ近世初頭以前には技術体系上の独立したジャンルとして整理されていなかったことを示すものと推測したい。したがって、築城の際に駆使された作事の技術は、それに従事していた職工人の動き次第で、他種の工事の機会においても採択され得る柔軟な性質を持っていたと考えられよう（当時、一つの分野として確立していた屋敷・

御殿建築のように、権門所属の番匠などの職人集団の関与を前提とする、伝統的「雛形」に準拠した作事は別であろうが。

城郭の内部施設の形成過程から考えれば、居住機能の充実や意匠・装飾性の発想などは後出する事象であり、耐久性の向上、備蓄施設の発達といった籠城時の対策に関する現実的要素が、先行して独自発展を遂げていたものと見てよい。織豊政権は、足利義昭御所に始まり聚楽第建設に至るまで、洛中はもとより近隣各国の町大工を、その都度「大工組」として動員・編成し京都の再開発を実現させていった(註7)。その過程で城郭専用の技術が町場に流出し応用される機会があっても、それを妨げる要件は存在しなかったはずである。

最後に、蔵を含めた屋地奥をめぐる問題に関して、個人的な疑問点に触れて今後の議論の展開に期待しておこうと思う。「ミセ」を伴ったであろう居住空間が街路に接近する配置が、町屋の基本的平面構造にあることは今回の報告会でも改めて確認できた。そして、その敷地奥に何らかの付属施設が設定され、両者を接続する「通り土間」ないしその前身の路地が伴い、敷地全体が短冊状の平面形をなすことは、現時点で近世的町屋のスタイルとして共有されている認識である。短冊状地割の連続が町屋の存在の指標の一つとなることは、もはや常識化された通念であろう。しかし、町屋がそうした形状の敷地を指向した直接的理由は何であろうか。

博多の聖福寺境内の町屋群は、16世紀中頃に街路に沿って整然とした短冊状地割を完成させた空間として知られるが、奥行き30間前後にもなる屋地奥の世界は、共同菜園などの農地や共同作業場といった漠然とした利用目的のみが推測されているに留まる(註8)。そうすると地口の均質な土地分割の意味は裏地においては曖昧なものとなり、屋地全体にまで波及するような強い規則性が内在する必然

性は理解できなくなる。また、草戸千軒遺跡の地口10~12m・奥行き100mにもなる短冊状の敷地(14世紀中頃~後半)は、どのような土地利用を前提とした屋地割なのであろうか(註9)。とてものこと、建物の占有面積や配列からの関わりで説明付けられるような敷地規模ではない。

堺や京都などを例にした町屋の発展形態の理解の中で、表から裏(奥)への「進出」ないし「開発」というキーワードがよく用いられる。小路の発達による街区規模での奥空間の開発は、人口動態の変化などの点で納得できそうだが、屋地単位での家屋裏の開発となると具体的に何を期待しての動きと解釈すべきなのだろうか。蔵や井戸の計画スペースだけのために、果ては耕地開発のために余剰帯を事前設定していったというのだろうか。それとも、今のところ目的は特定できないものの、屋地奥の二次利用が貫徹されて初めて、短冊状の敷地が成立するという図式に帰結されるのであろうか(註10)。いずれにしても、奥行き10間規模以上の「短冊状」と報告されている屋地の調査例で、主屋が屋地奥の相当部分にまで拡張されている痕跡や、別個の建物群が細長い敷地奥を占有している検出事例は、桃山期以前にはあまり見かけない。多くは漠然とした空白地が控え、用途の評価に確証が持てないような土壌等が分布するといった遺跡景観がイメージされる。兵庫津の調査成果発表の中で内藤俊哉氏は、慶長地震の被災町屋跡に先行する遺構面上では短冊状地割配列は見いだせないと報告される一方、早くも14世紀代での蔵跡の発生を確認している。となれば、裏地の土地利用目的と細長い屋地の連続とは、現象上は必ずしもかみ合わないこととなる。

要するに、敷地境界を伴う短冊状地割の発生時期については解明に向かいつつあるが、その発生原意・起源について、単純に言えば、そのような敷地形状を求めざるを得ないよう

な土地利用形態とは一体何なのかといった根本的問題について、未だ明確な回答を見ないのである。これが条里制の施行理念にまで遡及するのか、今回の堀内氏報告により実像が明らかになった長岡京東市の仮屋群のスタイルに、以後の規範性を求められるのか、あるいは地子等の税制整備による地口の確定の必要性から、生活様式とは別次元で徐々に確立されていく地割りなのか、なお様々な議論の余地が残されているはずである。同様の屋地割の連続が、アジア・ヨーロッパ各国の古代・中世都市にも見られるという普遍性がある以上（註11）、都市の居住形態の根源に繋がる問題をはらむように思えてならない。彼らは当初、家屋の裏地にどのような活用価値を意識していたのであろうか。

註

(1) 仁木宏『空間・公・共同体－中世都市から近世都市へ』青木書店 1997。

(2) その学史と方法論については、玉井哲雄「都市史研究における都市空間研究」（高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅰ－空間』東京大学出版会 1989）に整理されている。

(3) 生業種を特定し得る工具類の出土でもない限り、小野正敏氏の提唱する遺物組成－アセンブリッジ (Assemblage)－の概念に基づいた出土資料全体の分析が一つの解決策として有効であろう（同氏『戦国城下町の考古学』講談社選書メチエ108 1997他）。ただし大坂城下の場合、確実に武家地跡・町屋跡との識別が可能な調査地点を基礎単位とし、加えて近隣農村部での調査単位を補完対象としてデータ化しておく必要があるから、一定程度の全体像が把握できる調査事例ではない場合の、比較対象とするべき単位空間の設定・選択の困難さを前提とした佐久間氏の発言と想像している。

(4) 同氏「日本都市史の視点」（『中世都市研究6－都市研究の方法』新人物往来社 1999）他。

(5) 織豊期になってもなお、「小屋」の存在と「町屋」的景観との関連性が根強く認知されていた節がある。この頃、武家が有事の際に構築する陣所に、「町屋作り」と称する兵舎の設置状況が認められる（堀際に諸卒、町屋作りに小屋を懸けさせ〔『信長公記』巻11「丹波国波多野館取り巻くの事」〕、「下には町屋作りに小屋を小路、をやって作りならべ〔『太閤記』巻三「備中高松冠城落居并高松城水攻事」〕、「青麥にて陣屋をふき、左右町作〔『豊前覚書』「八、上勢御渡海之次第」〕。『日葡辞書』には「陣屋 (ヂンヤ・Ginya)」を「戦争の時の幕舎。または、陣営内に作った仮屋」と解説していることから、その多くは脆弱な建築構造にあったことが容易に想像できる。文禄・慶長の役の出兵基地である肥前名護屋の諸将の陣所のうち、佐竹義宣陣所の内部施設を記した平塚滝俊書状写（天正20年）には「一なかれにむねをつ、け陳取申候、前にハついちをつき（東京大学史料編纂所謄写本）」とあり、一定の規則性と空間区分線に従って長屋が連立する状況に触れている。実際に、氏家行広陣跡の発掘調査では、掘立柱の長屋跡を構成単位として陣内の空間を細分化している例も検出されている。これらのことから、建築構造に関わらずほぼ同一規格の長屋（小屋）が連続する様を、近世初期には「町屋」の擬似的景観として表現していた可能性が指摘できる。

(6) 生活機能の継続的維持という目的から言えば、検出遺構の内容とは別に、安定した下地の形成のための整地・造成地業の有無も、重要な判断材料になると思う。しかし土木史の観点からこの問題を論じられた例はなく、屋地単位での考古学的検討事例も少ない。

(7) 同氏『近世大工の美学－環境論理としての日本古典建築学』中公文庫895 1997。

(8) 横田冬彦「城郭と権威」(『岩波講座日本通史-近世1』岩波書店 1993)。

(9) 宮本雅明「中世後期博多聖福寺境内の都市空間構成」(『建築史学』17 1991)、大庭康時「聖福寺前一丁目2番地-中世後期博多における街区の研究(1)-」(『法哈◆』2 1993)。

(10) 岩本正二・鈴木康之他『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書V-中世瀬戸内の集落遺跡』広島県教育委員会 1997。

(11) 討論の中で、堀内明博氏は京都七条町等での調査成果を踏まえて、鎌倉前期までは街路に面する屋地奥に大規模占地の屋敷空間が両立し(相互に屋敷境を持たない密接な関係が推測されるとする)、鎌倉後期に後背の屋敷が衰退してその空閑地を利用する路地が成立し町屋群が形成されるとの推移を主張している。裏地の空間の出発点を考えていく上で、極めて重要な指摘と思われる。

(12) 藤岡謙二郎編『講座考古地理学3-歴史的都市』学生社 1985、玉井哲雄「町割・屋敷割・町屋-近世都市空間成立過程に関する一考察」(『年報都市史研究2-城下町の類型』山川出版社1994)。

Ⅲ 各論

各論の説明

研究会の過程で現場で議論が、また研究会で報告に対しての討論が行われた。それらの内容はそれぞれの研究者がこれから研究としてまとめて公表していくはずであるが、ここではとりあえずまとめることができた内容を収載した。内容は以下の通り。

1. 「ムラ」の建物、「マチ」の建物

——東国の発掘事例を考える——

飯村 均

2. 中世の町における建物復原をめぐって

——広島県草戸千軒町遺跡の出土資料から

鈴木 康之

3. 考古学発掘資料による建物復原の現状と課題

吉岡 泰英

4. 北東北にみる古代住居跡の一例

高島 成侑

5. 先史時代発掘部材による建物復原の試み
——部材研究会の成果を基に

中田信一郎

6. 考古学発掘資料による建物復原事例の
日英比較

モリス・マーティン

論文としての体裁や用語の統一など論者各自の考え方を尊重して特に行っていない。図版の扱いも同様である。

以上の論文以外にも重要な論点があったことはいうまでもない。この研究会メンバーとしても今後機会をみて論文集のような形で公表していくことは追求したい。

なお、この報告書全体の原稿整理・編集にあたり児玉大典（千葉大学学生）、中尾七重（武蔵大学非常勤講師）の協力を得た。

最後のモリス論文は英文で掲載し、タイトルのみを日本語に訳した。また、全体の目次は英訳して最後に掲載した。

1. 「ムラ」の建物、「マチ」の建物 —東国の発掘事例を考える—

飯村 均

1 問題意識の前提

考古学は歴史的な新発見、意外な新事実を多く知ることができることから、学際的な歴史研究を求められることが少なくない。しかし、その共同研究の「幻想」は、伊藤正義が指摘したように、「同床異夢」であることが多い。建築史と考古学の関係も例外ではないであろう。建築史側の問題は、それぞれ別稿で触れられているので、考古学側の問題を考えてみたい。

まず、考古学側の「わがままさ」「傲慢さ」であろう。考古学側は「こういう建物が出た」あるいは「こういうピットが出た」と図面を示して、建築史側に「建物を建てろ」「建物（上部構造）を書け」と要求する事例を良く聞く。そして、遺跡や遺構について両者であまり相互議論せず、一方的なお互いの考え方を押し付け、不一致の点を心密かに不信感を持っているだけである。これはあまりにも傲慢でないだろうか。建築史の方法論や研究史も知らずに、一方的に非建設的、感情的な不信感のみを募らせて、単に感情的な、非学問的な意味のない感情でしかなく、真正面から相互批判し、議論することは全くなかった。その意味のない、非学問的な不信感が、共同研究の可能性をさらに遠ざけてきた。特に、建築史という学問を尊重する立場に欠いた、考古学側の傲慢さと言わざるを得ない。…一番傲慢なのは私自身かもしれないが…。この考古学が学として自立するのであれば、この傲慢さは自戒するべきであろう。

次に、「建物を建てない考古学」である。考古学は「大きな穴」や「遺物のたくさん出る穴」は好まれるが、土器も出ない「小さな

穴」は興味を持たれない、十分調査されない場合が多い。その結果、ピットと呼ばれる

「小さな穴」は顧みられず、ひどい場合は調査をされないことも少なくない。もちろん、考古学側の事情もある。大規模開発に伴う行政調査とともに発展してきた宿命かもしれない。しかし、「無数にピットだけが漫然と載っている平面図」を見ると、悲しい思いをすることが多い。これで「遺跡が語っている歴史の声を十分読み解いたのであろうか」という思いを強くする。もちろんこれも悲しいことではあるが、前述のやむを得ない事情を思うと……。

一方、建築史側に平面図を渡して、建物を建ててもらおう—柱穴を図上で結んで建物にしよう—という事例はもっと根深い問題であると思っている。この場合の最大の問題は、自らの調査・研究の放棄—自殺行為—であるからである。つまり、建築史と考古学がそれぞれの方法論を駆使して、相互に議論・批判しての結論であれば首肯できるが、考古学側の何の説明もなく平面図を渡し、相互に議論することもなく、唯々諾々とその建物を報告書に掲載していたのでは、それは考古学的事実とは言えない。また、学際的な研究とも当然言えない。それが科学的な態度と言えるだろうか？これならば、「無数のピットが漫然と載っている報告書」の方が、まだ科学的な態度、「信頼すべき報告書」と言えるのではないだろうか？

20世紀に負っていた考古学の宿命—大規模開発と発掘調査—「マイナスイメージ」を解消し、「つまらない小さい穴」ばかりの中世遺跡の不当な過少評価から脱却し、遺跡の語る歴史の声を十分汲み取る考古学を推し進めるためには、今こそ「ピット」「柱穴」の積極的な正当な評価が重要である。その意味で、筆者は地域の仲間と一緒に、平成12年9月に『東北地方南部における中近世集落の諸問題—掘立柱建物跡を中心として—』という研究

会を福島県いわき市で開催し、資料集を刊行した。羽柴直人の調査経験に立脚した率直な問題提起に続き、福島県内各地（会津・中通り・浜通り地方）、宮城県、茨城県、栃木県の事例が報告され、資料が集成された。研究史的に見ても、本沢愼輔・高橋與右衛門・羽柴直人・飯村均・中山雅弘らの個別研究を除けば、1990年1月に大阪で開催された第27回埋蔵文化財研究集会『中世末から近世のまち・むらと都市』以来の10年ぶりの資料集成であり、東日本では初めて「掘立柱建物跡」に焦点を当てた研究会であり、20世紀への研究の一方を示し得たと自負している。

その評価は今後委ねることとしても、この研究会の中での議論について、若干触れておきたい。議論は①建築史の用語・考え方。②建物の地域性・時代性・（階層性）-平面形と間尺の視点から-。③建物調査方法の問題-遺構の認定・時期の決定-。の3点に絞って行われた。①については、金丸義一が梁・桁の使い方の問題や平面形の悪さ（歪んでいること）や、庇と縁の使い方の違いを指摘し、上部構造を考えない考古学の問題点を適切に示した。また、箱崎和久は掘立柱建物跡・礎石建物跡・根石（礎板）建物跡あるいは、併用建物の存在を指摘し、現存建物（民家研究）との関係での建築史としての現状認識を示し、考古学への問題提起を行った。堀内明博は屋敷と言う空間の中での建物の認識の重要性を指摘し、東国では弥生時代早期以降成立する梁間一間型の建物と、律令期以降成立する梁間二間型で縁や庇が付く建物が多く、総柱型が少ないことを指摘した。この建築史からの視点は考古学が十分学ぶべきであり、今後の調査に反映させるべき視点である。

②については論点を外れるので省略するが、③については特に考古学側から、羽柴直人・高橋與右衛門・関根達人・藤田俊雄らが、調査経験に基づく問題提起をした。必ずしも調査方法について意見の一致を見たわけ

ではないが、筆者なりにここで整理しておきたい。まずは、どうやって「建物を建てるか」である。発掘調査で建物を建てるという場合は、柱穴・ピットと呼ばれる「小さな穴」にどうやって有機的な関係を見だし、それをどうやって合理的に結ぶかと言うことである。

考古学では基本的に平面的な調査と、断面（土層・形）の調査しか有り得ないわけで、これを駆使してピットの有機的な関係を探るのである。しかし、何百・何千・何万というピットを前にすると暗澹たる気持ちになるので、ブロック毎に分けたり、類型化したり、柱間・柱通り・主軸方向の規則性を見出したり、様々な視点から読み込めば、必ず道は開けると思う。その時に、図面だけ機械的に作成して、現場が終わってから（調査した遺跡がなくなったから）やろうと言う姿勢は好ましくない。時間が許されるのであれば、何回か検証し、現場にフィードバックする作業をしてほしい。スケールの大きい-例えば1/50とか1/100とか-概略の図面を作成し、建物跡を検証し、現場でもう一度確認してほしい、必ず大切な見逃していた柱穴を発見できるからである。

こうした調査・検証作業の十分取することは困難であることは十分承知しているし、こうした作業をしても、建物跡を構成しない柱穴が多数であるという現状は大きく変わらないかもしれないが、「より確からしい考古学的事実」には確実に近付いていけると考えている。それこそが「遺跡が雄弁に語る歴史を十分に読み込む」のに不可欠な基礎的な作業であるからである。現状では、考古学がそれをすぐに実施することは困難であるとすれば、開発に伴う記録保存の発掘調査という、限られた予算と時間の中で、どういう視点と方法で調査し、建物跡を抽出し、報告書をまとめたかを明記するべきであろう。例えば、青森県八戸市『根城-本丸跡の発掘調査-』の報

告書のように。

やや私見をを交えて③の論点を整理したが、①～③の論点はいずれもミクロな研究視点であり、討論の場で堀内明博・鋤柄俊夫・橋口定志が指摘したように、階層性の認定や、遺跡の空間構成・立地・景観・地域を前提としたマクロな研究なしに、遺跡研究・集落研究は成立しないことは明白である。しかし、一方だけ欠けた研究も当然不完全であり、ミクロな研究とマクロな研究が車の両輪のように相互に機能して、初めて地域研究・歴史研究・学際研究を可能にする。『東北地方南部における中近世集落の諸問題』という研究会の成果に拠りつつ、建物遺構研究における考古学側の研究の現状と問題点を整理したつもりである。これを前提にしつつ、中世東国の「ムラ」の建物遺構と「マチ」の建物遺構の現状を概観して見たい。

2 「ムラ」の建物

前提となる話ではあるが、「ムラ」とは何だろうか？考古学で言う「ムラ」は集落遺跡であり、文献史学や歴史地理学で言う「村落共同体」である「村」とは異なる。中世の集落遺跡であれば、溝などで区画された屋敷地の複合体を取り敢えず「ムラ」と言っている。したがって、集落遺跡が村と評価される場合もあるし、町・市・津・泊などと評価される場合もありし、極端な場合は都市や館・寺院と評価されることもある。「ムラ」とは極めて曖昧と言わざるを得ないが、ここでは「村落共同体」の構成要素の基本的な単位である屋敷地と理解しても大過ないであろう遺跡を、「ムラ」として取り上げているという言い方しかできない。それはまだ概念規定できる段階に研究が到達していないからである。

東国の中世の「ムラ」は、大きくは3～4種類の建物で構成されていると考えている。それは、①掘立柱建物。②竪穴建物。③壁支

建物。④土台建あるは平地式建物。である。大雑把に言って、東国では古墳時代から古代へ、竪穴建物跡は小型化し、無柱穴化する。そして、平安時代からは掘立柱建物跡が主たる居住形態となると通説的な考えられ、カマドを持つ竪穴住居跡は遅くとも11世紀（一部地域は12世紀）には姿を消すと考えられてきた。しかし、現実にはどうであろうか、11・12世紀の遺跡は東京都落川遺跡群や岩手県平泉遺跡群など政治拠点の遺跡しか発見されず、「大開発の時代」に集落がほとんど存在しないこととなる。東国では縄文時代以降に集落が見つからない時代がいくつかある。一つは弥生時代から古墳時代初期であり、もう一つは古代末中世初頭である。全くないわけではないが、前後の時代に比して極端に少なく、皆無に近い。これは、ある意味では考古学の限界―諦めてはいないが―ではないかと考えている。つまり、考古学的に発見しづらい建物様式―平地式・半地下式、考古学的に残りにくい食器様式―漆器・木器―のせいではないかと考えている。

東国では6世紀に火山灰で埋もれた群馬県黒井峯・中筋・西組遺跡の事例を見ても、かなり古い段階（おそらく弥生時代）から平地式住居が主体的であったことが読み取れます。したがって、奈良・平安時代は確実に竪穴住居跡は存在するが、一方で平地式住居も存続し、それが、竪穴住居跡の矮小化とともに、民衆の居住形態の中心となった可能性は、直接的な根拠に乏しいながら、予察しておきたい。その可能性も視野に入れて、集落景観は考えるべきであろう。したがって、考古学的に多く検証できる①・②の事例のみにとらわれることなく、事例は少ないが③・④も十分視野に入れることによって、新しい集落研究の可能性も考えられる。

①掘立柱建物を主体とする集落

東国の掘立柱建物では、梁間一間、梁間二間を基調とした長方形の平面形の建物が主で

あるが、10～12世紀の拠点的な遺跡や12～14世紀の日本海側－北陸・出羽－の集落では、総柱建物が主となる。これは、地域性と階層性によるものと考えられるが、王朝国家期の平安京の寝殿造系建物との関係も考慮する必要があるだろう。

屋敷地は基本的に溝や塀・生け垣・段切りで区画され、梁間二間＋縁・庇の長方形の平面形の母屋に、梁間一・二間の長方形の平面形の付属屋・倉庫・工房などが伴い、ほかに竪穴建物の倉庫・工房が伴う例や、おそらく平地住居も存在したことであろう。空間地は畑・庭・作業場となり、屋敷景観を営んでいたものと推測される。

階層性は建物規模や屋敷地の規模、屋敷内の建物数などに表現される。単独の屋敷地や複数（多くない）の屋敷地で構成される場合が多く、遺構の重複が少なく、集落の存続期間が短い。一見、散村的と言える。丘陵斜面を段切りして屋敷地を形成したり、低丘陵上、沖積微高地などに立地する。独特の地形や可耕地、生業との関係で、こうした立地となる。

中世後期になると、館や寺院、街道・津などに関連して屋敷地が集中する傾向が見られ、こうした傾向は12世紀後葉から見られる－福島県荒井猫田遺跡・新潟県樋田遺跡など－が、14世紀以降顕在化する。これをもって、畿内と言う集村化、前川要の言う都市化という現象と評価するのは、早計であると現段階では考えている。

②竪穴建物を主体とする集落

竪穴建物とは1辺2～4mを基調とした方形の竪穴遺構で、壁はほぼ直立し、底面は踏み締まりがなく、火処（あまり焼けていない）がある例も少なく、柱穴も多くない。堆積土はほとんどが埋め戻しで、積極的に自然堆積と言える例は少ない。機能した時間は古代の竪穴建物などに比して短い。基本的に古代のカマドを持つ竪穴建物の系譜は引かないと考えており、現状では、11世紀頃に大陸なしは

半島の影響で博多あたりで発生し、都市・鎌倉で顕著に発展した「倉」と考えている。

しかし、用途については多様で、「住居」「倉庫」「工房」などとする意見がある。これは、時代性や地域性、集落の性格にもよるので、現段階で即断できない。鎌倉・若宮大路遺跡群（秋月医院跡）の事例や長野県遊光遺跡の事例から、基本的な構造は半地下式で土壁で支える建物で、土台建ての構造であることは推測される。竪穴遺構は現状では南は鹿児島県から北は青森県まで分布するが、これを主体とする集落は、現在、信濃・上野・下野・常陸・上総・陸奥に分布し、東国特有と言える。

このタイプの集落の場合、屋敷の単位を抽出できないという難点と、道に面した宿・市－栃木県下古館遺跡・福島県古宿遺跡・宮城県観音沢遺跡など－や、川に面した津－福島県古館遺跡－と考えられる場合があり、性格付けが難しい場合が多い。しかし、茨城県柴崎遺跡や群馬県中村遺跡などは本類型と考えている。竪穴建物・土坑・井戸・（地下式坑）・溝などで構成され、明確な屋敷地を抽出しづらいが、一定の規則性は感じられる。竪穴建物の分布状況から見ても、ある程度分布に偏りがあることから、空白地に土台建て平地建物や壁支建物、園地を推定することも可能であろう。それにしても建物の分布の偏在性は、用途・機能面での集団性・共同性を表現しているような気がする。

③壁支建物を主体とする集落

発見例は少ないが、必ず存在すると考えている建物である。新潟県馬場屋敷遺跡下層の屋敷地である。葦を材料として床・壁が構成され、柱材は細く、壁は床をやや掘り下げ手埋め、戻した地中から立ち上がる構造である。基本的には葦壁で支える構造の建物である。間仕切もあり、床の葦の並べ方の方向も異なることから、部屋割りあったと考えられる。根太の痕跡は不明であるが、低い床貼りなし

は平地式の構造であろう。床には囲炉裏を除いて、全面、葦を丁寧に敷き詰めている。

これは信濃川の自然堤防上に立地し、洪水などで埋没していることから偶然発見されたもので、1289～1310年の木簡も伴っており、出土遺物から見ても13世紀後半から14世紀前半の集落である。建物は溝で区画され、網代塀や呪い札や茅刈の鑑札札も出土し、下駄の未製品も多く、下駄製作用の鋸も出土している。職人の屋敷地である可能性が高い。

これ類似した構造の建物について、都市・鎌倉の佐助ヶ谷遺跡にあり、斉木秀雄は「板壁掘立柱建物」と仮称して、提唱している。佐助ヶ谷遺跡は寺院の前面にある工務所と推定され、さまざまな職人や関連する人々の居住が推定されている。板壁を地中から立ち上げる構造で、柱材は細い打ち込みとなり、基本的に板壁で支える構造である。

14世紀には確実に出現していることから、遅くとも14世紀には、東国で普遍的—都市でも集落でも—に存在した建物と考えるべきである。こうした板材・網代や茅・葦といった植物質の材料を使った壁支建物は、絵図・絵巻物などの絵画史料では良く見られるものであり、例えば、『一遍上人絵伝』や『骨寺村絵図』などに描かれて建物が挙げられる。考古学的な直接証拠はまだ乏しいが、隣接諸分野を含めて、視野に入れていく必要があると考えている。

既述の①・②の集落類型でも、同じ屋敷地に壁支建物が存在する可能性は常にあり、これが考古学的にも証明されれば、中世集落研究—建物研究—は飛躍的に発展すると考えている。また、高橋與右衛門が調査した岩手県岩崎台地遺跡群の11～12世紀の竪穴建物は、調査当時、実見させていただいたが、いま改めて考えてみると、壁支建物の可能性もあったと考えており、こうした構造の建物が11世紀以前まで溯る可能性もある。さらに、斉木秀雄も考察しているように、佐助ヶ谷遺跡の

壁支建物の指図らしい墨書の板片も出土しており、あるいは現場で簡単な指図を書いて、短期間で組み立てていくような、現在の「プレハブ」に近いイメージの建物で、必ずしも専門の番匠は関わらなかったかも知れない。

④土台建物・平地建物(?)

福島県馬場中路遺跡5号家屋跡は火災に遭っており、焼けた建築部材と50個体を越える土器がまとまって出土した。11世紀の屋敷地で、阿武隈川の低位段丘面に立地している。この報告書の図面を見ると、焼けた建築材はあるのに、柱穴が全くないのである。建築部材や土器の出土状況を見ると、根太を地面に直接置いて、柱を立ち上げる構造の、土台建物あるいは平地建物とも呼ぶべき構造であるとしたか、考えられなかった。名称は適切ではないが、取り敢えず構造がわかるまでの仮称と御理解いただき、今後可能性を検討していきたい。

既述のように、11世紀の遺跡が少ない現状で比較しようがないが、出土土器の多様性や出土量を見ると、比較的上層民の建物、あるいは宴会儀礼・宗教儀礼などに伴う特殊な建物と考えている。事例が少ないので即断できないが、少なくとも建物構造からして、③の種類の建物より上層かと推測している。いずれにせよ、考古学的に見つかりにくい建物であるからこそ、今後の調査方法や研究の視点が重要となってくる。

以上、建物形態を中心に集落類型を見てきたが、既にお気づきのように、考古学的に見えない建物を相当読み込まないと、集落研究が出来ないのが東国の現状である。つまり、現在見えている—発掘調査で発見される—集落は、まさに「氷山の一角」でしかないのである。したがって、東国において中世集落研究が進展しないの当然であり、相当見えないものまで読み込んで、初めて臆気な全体像が見えると言った状況であり、隔靴搔痒の感は拭えない。実証的な研究を標榜すればするほ

ど、かなりの回り道するか、理論の陥穽に落ち込む…筆者もそうであるが…しかないのである。それが「ムラ」研究の閉塞感を生んでいる。

3 「マチ」の建物

「マチ」とは、「町・宿・市・津・泊」などと呼ばれる網野善彦のいう「都市的な場」に相当するような空間であるが、考古学的には極めて定義付けが困難な遺跡である。考古学では前川要や馬淵和雄らが一定の定義を行っているが、ここでは、中世みちの研究会の成果に拠りつつ、「道」に面してある、「ムラ」の遺跡と異なる景観の遺跡を取り上げ、その構成原理と建物を概観してみたい。

既に幾度か論じたが、筆者は東国の道に面した遺跡の二つの類型があると考えている。一つのは栃木県下古館遺跡を標式遺跡とする下古館型であり、もう一つのは福島県荒猫田遺跡を標式遺跡とする荒井猫田型である。そして、筆者は断定はできないものの、前者が「市」、後者が「宿」の可能性を指摘した。

①「市」の建物—下古館遺跡—

下古館遺跡については、近年本報告書が刊行され、田代隆らが詳細な考察を行っている。遺跡は「奥大道」と推定される「うしみち」と呼ばれる道が南北に縦貫し、その両側に「竪穴遺構・井戸・土坑・掘立柱建物跡」が群在し、「方形区画遺構・塚・墓坑・火葬跡」などの宗教施設も存在する。この遺構群は、1号溝跡（南北480m、東西170m）とそれと相似形をなす49・142号溝跡で二重に区画され、「うしみち」以外の往来を許さない構造となっている。

1号溝跡内部は、溝跡や空白地帯で「うしみち」を中心に梯子状に11区分され、そのうち8区間は竪穴建物・井戸・土坑で構成される生活感の強い均質な空間であり、中央西側の3区間は宗教施設・塚・土坑墓・火葬跡で

構成される宗教的な空間である。

また、遺跡成立当初からほぼ同規模の遺構の稀薄な「台形区画」があり、1121号→1670号と変遷し、1号溝跡の掘削とともにその内側に取り込まれ、327号という「台形区画」となる。これを調査者は「市」(?)と考えている。

遺跡は12世紀末には成立した可能性があり、15世紀初には廃絶し、1号溝跡が掘削される13世紀中頃が画期となっている。

この調査成果を筆者なりに評価すると、12世紀末には奥大道成立し、その枝道の約220m西側に「市庭」が成立し、その中間に小さな御堂があり、その成立根拠となっている。13世紀中頃になると奥大道を中心に長方形の区画が成立し、「市庭」もその中に取り込まれる。御堂は方形区画遺構として大型化し、周囲にお墓・火葬所が寄生する。区画の内の道沿いには、道から一定の空白（5～20m）を以て方形竪穴遺構・井戸跡が分布し、前述の8区画毎にいくつかの集団が存在したことを窺わせる分布である。出土遺物の組成は「都市・鎌倉」的であり、東国の「市」の典型例として考えて大過ないであろう。このとき、常に「道」という物流の基幹と宗教勢力の関与が絶対条件であったことが注目される。次にこの遺跡の主たる建物である竪穴遺構に着目したい。竪穴遺構は125基あり、平面形を方形を基調とし、面積3.15～23.1㎡、深さ0.12～1.3mを測り、88%が人為的に埋め戻されている。ほかに特徴としては、①底面の踏み締まりがない。②56基に壁の一部を内側に掘り残した出入口がある。③柱穴はほとんど存在し、配置パターンは20通りくらいあり、根石を置く例のある。④主軸方向は明らかに奥大道意識した南北・東西方向にまとまる。⑤炉(?)が発見されたには18基で、ほとんどコーナーである。⑥底面直上から出土遺物は鎌倉出良く出土する(北武蔵・上野産)火鉢のみである。

この特徴は中世前期の東国の竪穴建物に共通しており、板床貼、板壁の竪穴建物と考えざる得ない、火処は本来存在しないか、あるいは火鉢などで対応した可能性が高い。その意味では、「都市的」と言える。予てから、竪穴建物について、「一過性の建物」「住居・倉庫・作業場」とする意見が強かったが、その意味では下古館遺跡例は、一過性の（あるいは存続期間の短い）「住居」「倉庫」の可能性が高い。その中で筆者は、前述の遺構の特徴や分布状況や遺跡の特殊性から「存続期間が短い倉庫」の可能性を支持したい。

それを前提に考察すると、100年～150年で125基の竪穴建物－倉庫－があり、10年程度の存続期間を考えると、多く見ても8区画で1区画に1～2基しか存続し得ず、各区画毎の1基存在の倉庫との推定も可能となる。一方、居住空間については、道と竪穴遺構との間の空白地に壁支建物・土台建物などを推定したい。あるいは、常設的な店棚も考える必要があるかもしれない。

以上、下古館遺跡は、東国の中世前期の道に面した「市」として考えたい。

②「宿」の建物－荒井猫田遺跡－

荒井猫田遺跡については、押山雄三・高田勝・高橋博志・中島雄一・福森久晃らの報告があり、それを下に、筆者の私見を含めてその特色を簡単にまとめる。

a 阿武隈川などの河川の段丘面に立地する。b 両側側溝の南北道路（奥大道）を中心に遺跡が形成。c 奥大道の南と北に木戸跡があり、その間は120～130mである。d 南側木戸跡（1時期）北側で西に向かう東西道路、北側木戸跡（3時期）北側に東に向かう東西道路が接続する。e 道の両側には、間口20m前後、奥行20～25mの町屋が連続する。f 町屋は、梁間が比較的広い2間3間の方形に近い平面形の平入りの掘立柱建物跡で構成され、奥に井戸や総柱や梁間1間型の掘立柱建物跡の倉庫を伴う可能性が高い。

g 北西部の区画は鍛冶師集団が居住。h 遺跡南東側の館跡は道を意識して作られて、当初は単郭であるが、新たに館跡西側の町屋を壊して複郭とし、奥大道からの直接引き込み道路を付設し、その関係を一層強めている。i 南側木戸跡南側は極端に遺構密度が稀薄となるが、南側約20mまでは遺構が分布する。j 北側木戸跡北側20mまでは遺構の密度に変化が少ないが、さらに北側の自然流路の間は、遺構の密度が極端に低くなる。k 道路側溝と町屋との間には1～2mの遺構の空白が明白に観察でき、河野真知朗は店棚の可能性を示唆している。

l 出土遺物は多様で、本地域として量的にも少なくない、しかしかわらけは極端に少ない。m 存続期間は12世紀後葉から15世紀前葉で、三時期の変遷が推定され、盛期は13～14世紀である。

遺跡の変遷は、同じ奥大道に面する下古館遺跡に類似するが、主に構成する遺構の違いや、囲繞施設の有無、宗教性の有無を重視し、「宿」と考えた。そして、同様の遺跡として山形県塔の腰遺跡などが挙げられる。

西日本で2000年にこれに類似した遺跡として滋賀県草津市野路岡田遺跡が調査され、文献史料にも頻出する東海道「野路宿」に比定されている。本研究会（2000年12月16日京都市）での草津市教育委員会岡田雅人の報告により、特色を列記する。

a 12世紀後半から13世紀前半に存続。b 「馬道」（東海道？）と通称される古道の両側に広がる。c 道に面して空地（小道）や柵跡で、25～30m毎に町屋が区画され、奥には共同の井戸や納屋・畑・屋敷墓が存在。d 町屋は掘立柱建物跡で総柱のものが多く、平入りと考えられる。e 瓦器の出土が多い。f 遺跡の西側には宗教施設らしい方形区画があり、東側には墓域があり、ともに六勝寺系の瓦が出土する。g 宗教施設の東隣には総柱の大型掘立柱建物跡があり、中核と考えられて

いる。まだ、調査途中で断定はできないものの、構成原理や成立時期、町屋の在り方は西と東という地域差…例えば総柱と側柱建物の差など…を勘案すれば、荒井猫田遺跡と極めて類似していると言わざるを得ない。したがって、中世前期の「宿」の一類型として考えていきたい。そのとき、町屋の屋敷地の一単位を見ると、両遺跡ともに建物の面路性という点や建物の梁間がやや広いという点を除けば、周辺の集落遺跡—ムラ—と大差ない。つまり、「[ムラ]の屋敷地が道の面して計画的に集まった」という印象である。そして、その「集まった」原理の要因となったのが、道であり、野路岡田遺跡では宗教勢力であり、荒井猫田遺跡では「公権力」であった可能性が高い（この違いについて、「西と東」という視点も含め宇野隆夫に示唆を得た）。

以上、「マチ」の建物として、東国の「市」と「宿」の代表的な事例を概観した。筆者の怠慢から、個々の具体的な建物跡の構造に論及できなかった。また、これ以外にも東国では、中世の川湊（津）と考えられる静岡県元島遺跡や、潟に面した秋田県洲崎遺跡があり、また独特の遺跡の構成原理も持っている。さらに、青森県十三湊遺跡の調査により、中世の外海に面した湊の実態も解明されつつある。これらの残された課題については、稿を改めたい。

4 おわりに—共同研究の必要性—

今回の研究会を通して、考えたこと、気付いたことを思い付くままに論じてきたが、当然十分に所期の目的を達しているとは言えない。しかし、考古学と建築史の本格的な共同研究の第1歩として評価されるべきであろう。やや大袈裟に言って、21世紀への提言として、冒頭で述べたように、相互の学問・方法論を尊重しつつ、真摯な態度での相互批判・自己批判が不可欠である事を指摘してお

きたい。そして、もし共同研究に具体的な成果を結実させるならば、個別・具体的な「地域研究」以外あり得ないと考えている。列島規模で、考古学を取り巻く状況が一層厳しくなる中で、「発見主義の時代」から「研究の時代」を大きく舵を取らなければいけない現在、「地域研究」「地域の歴史の構築」こそが課せられた責務であり、その場でこそ共同研究の有効性が発揮されると考えている。地域にある個々の遺跡や個々の遺構を真摯に調査し、正当に歴史的に評価することなしに、もはや考古学の存在意義は失われると考えている。考古学が21世紀に滅びゆかないために、より広い視野で地域の遺跡を考えるべきと、改めて考えることができたが、これを実践する努力をこれからも続けていきたい。

主要参考文献

石井進編1991『考古学と中世史研究』名著出版

福島県考古学会中近世部会編2000『東北地方南部における中近世集落の諸問題—掘立柱建物跡を中心として—』

小野正敏編2001『図解日本の中世遺跡』東京大学出版会

中世都市研究同人会編1991・94『中世都市研究』第1・3号

斎木秀雄他1993『佐助ヶ谷遺跡発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団

帝京大学山梨文化財研究所編2000『遺跡・遺物から何を讀みとるか（IV）—ムラ研究の方法—資料集』

中世都市研究会編1999『中世都市研究6 都市研究の方法』新人物往来社

藤原良章・村井章介編1999『中世のみちと物流』山川出版社

田代隆他1995『下古館遺跡』栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団



図1 陸奥南部の掘立柱建物跡を主体とする集落

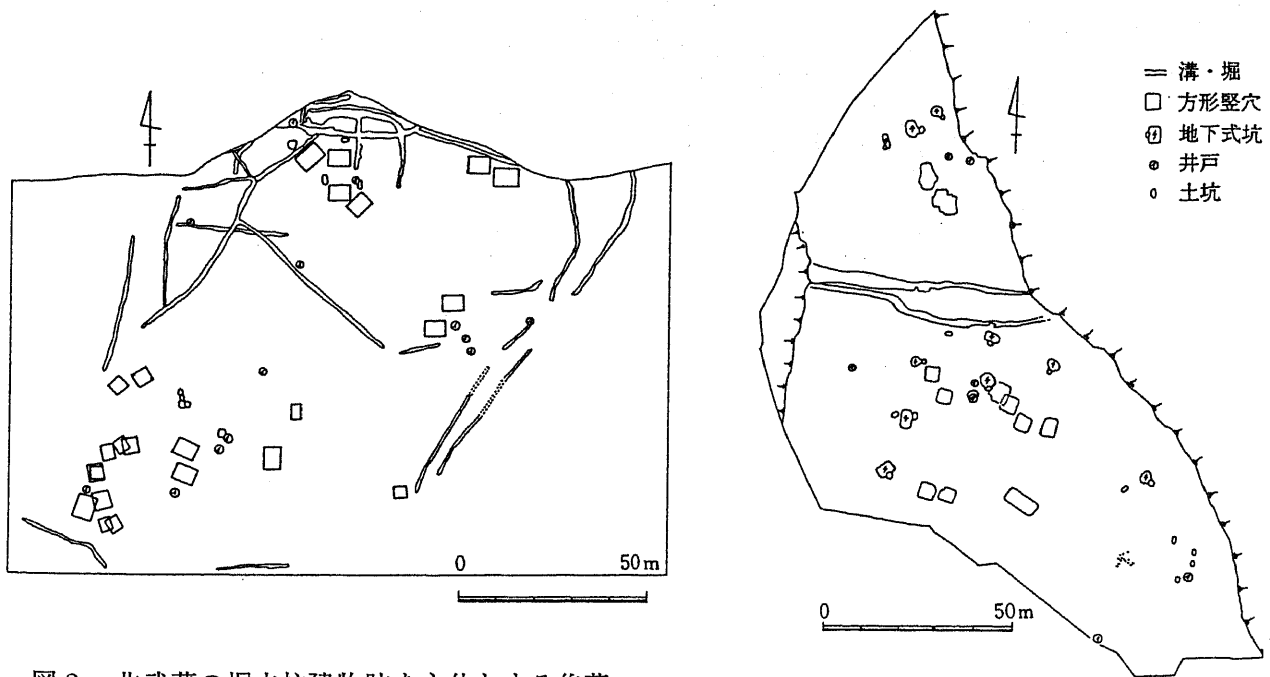


図2 北武蔵の掘立柱建物跡を主体とする集落

図3 上野の竪穴建物跡を主体とする集落

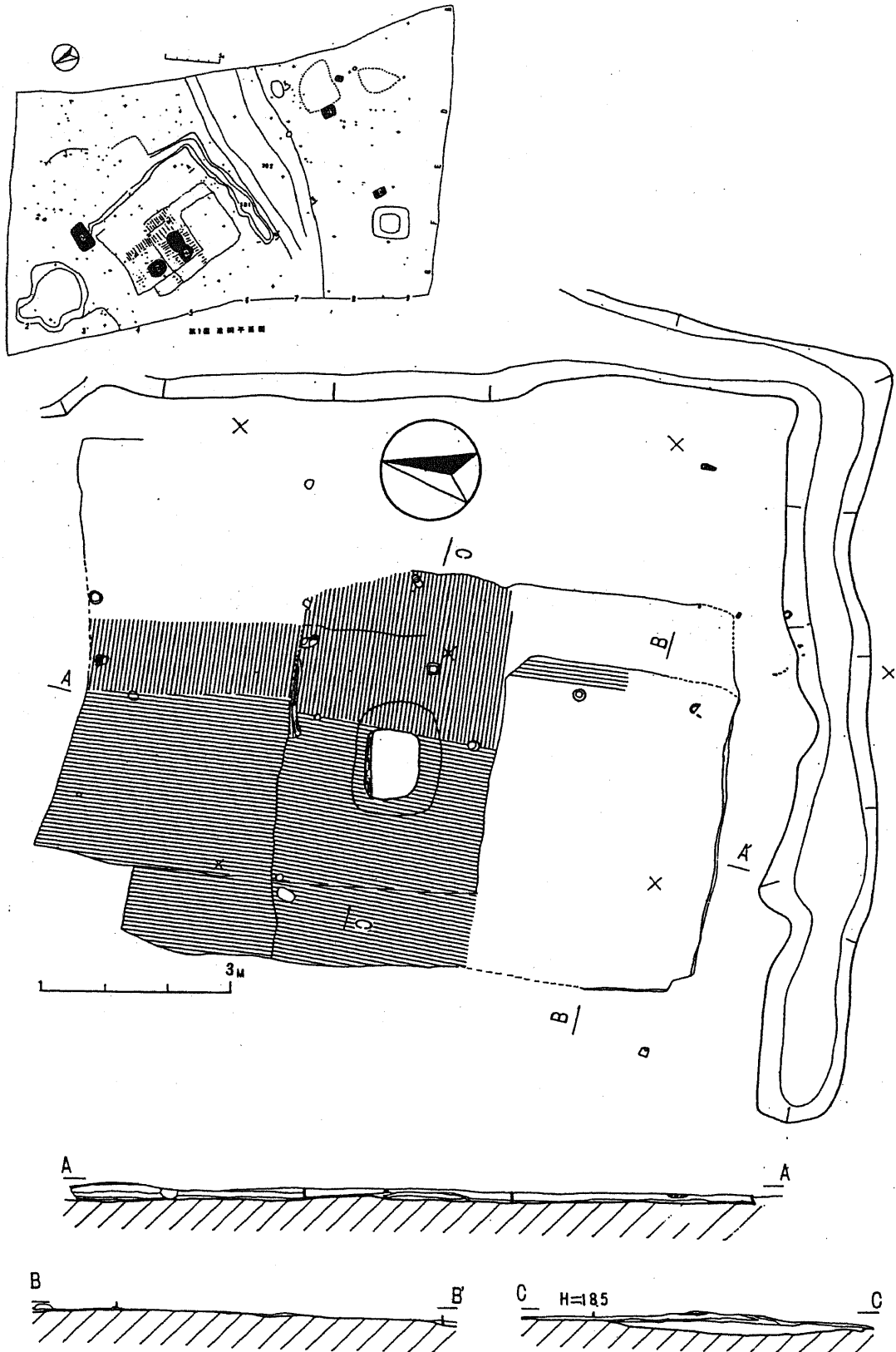


图4 壁支建物跡（馬場屋敷遺跡下層）

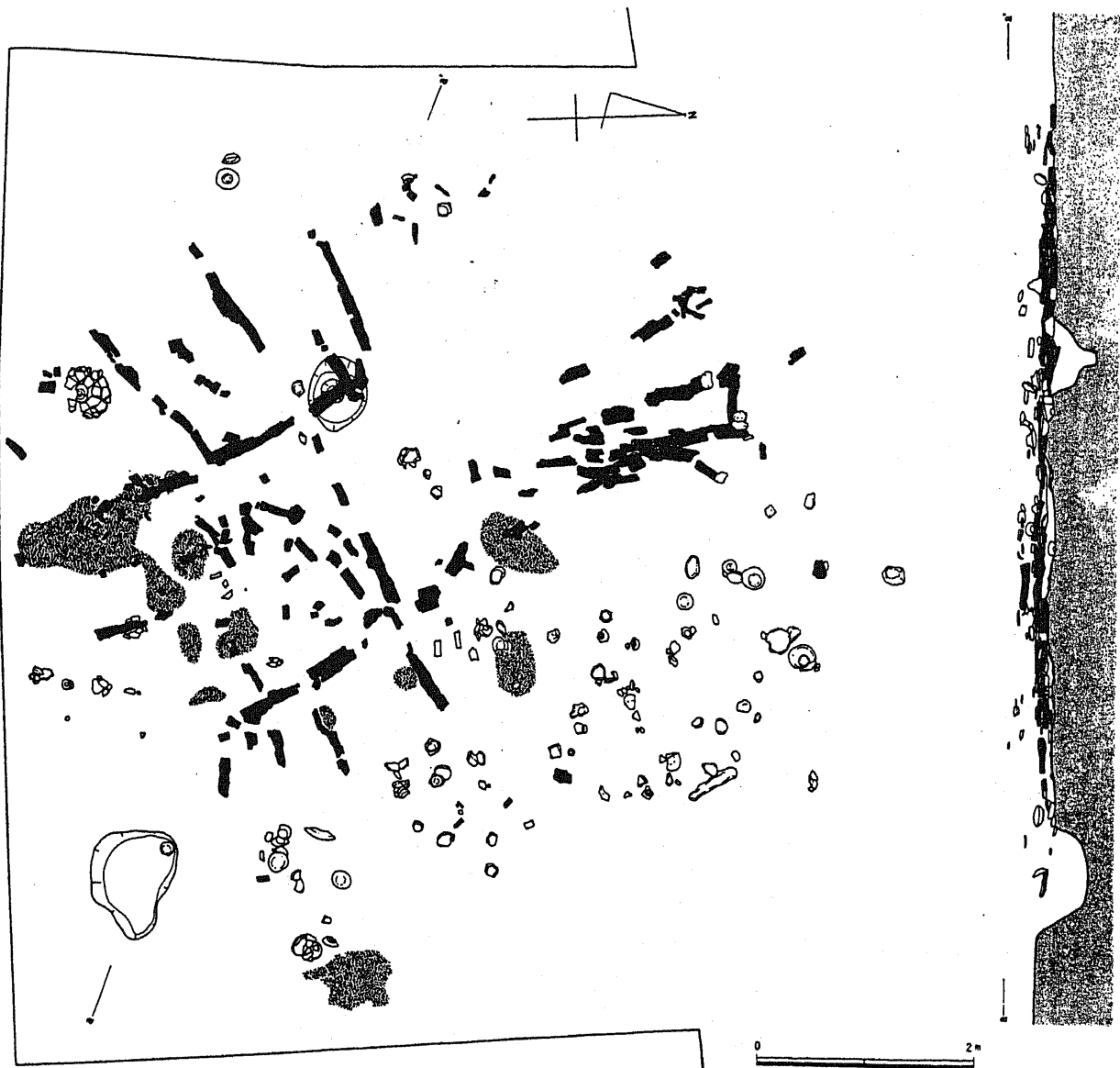


图5 土台建物跡（馬場中路遺跡）

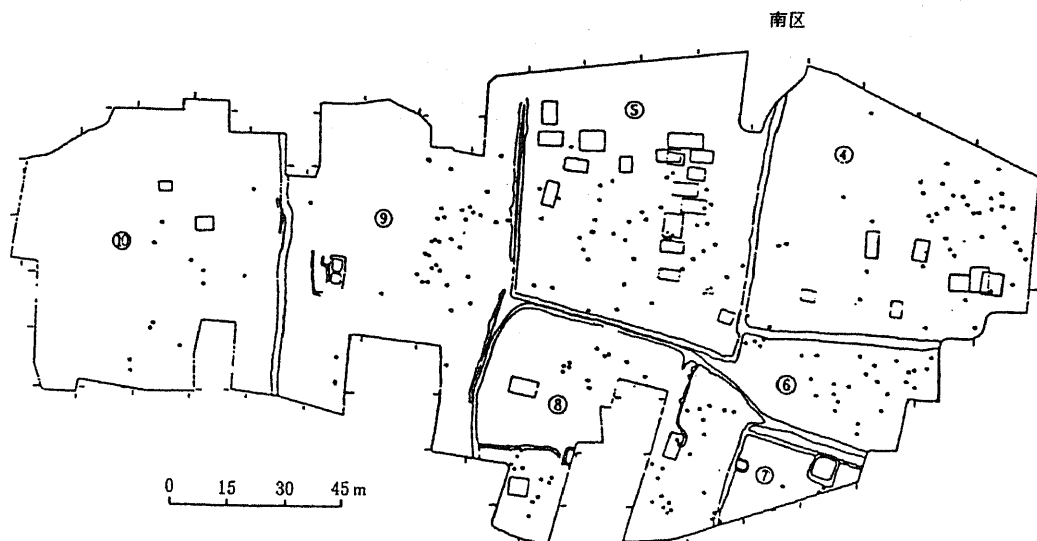


图6 新潟県樋田遺跡



图7 福島県荒井猫田遺跡

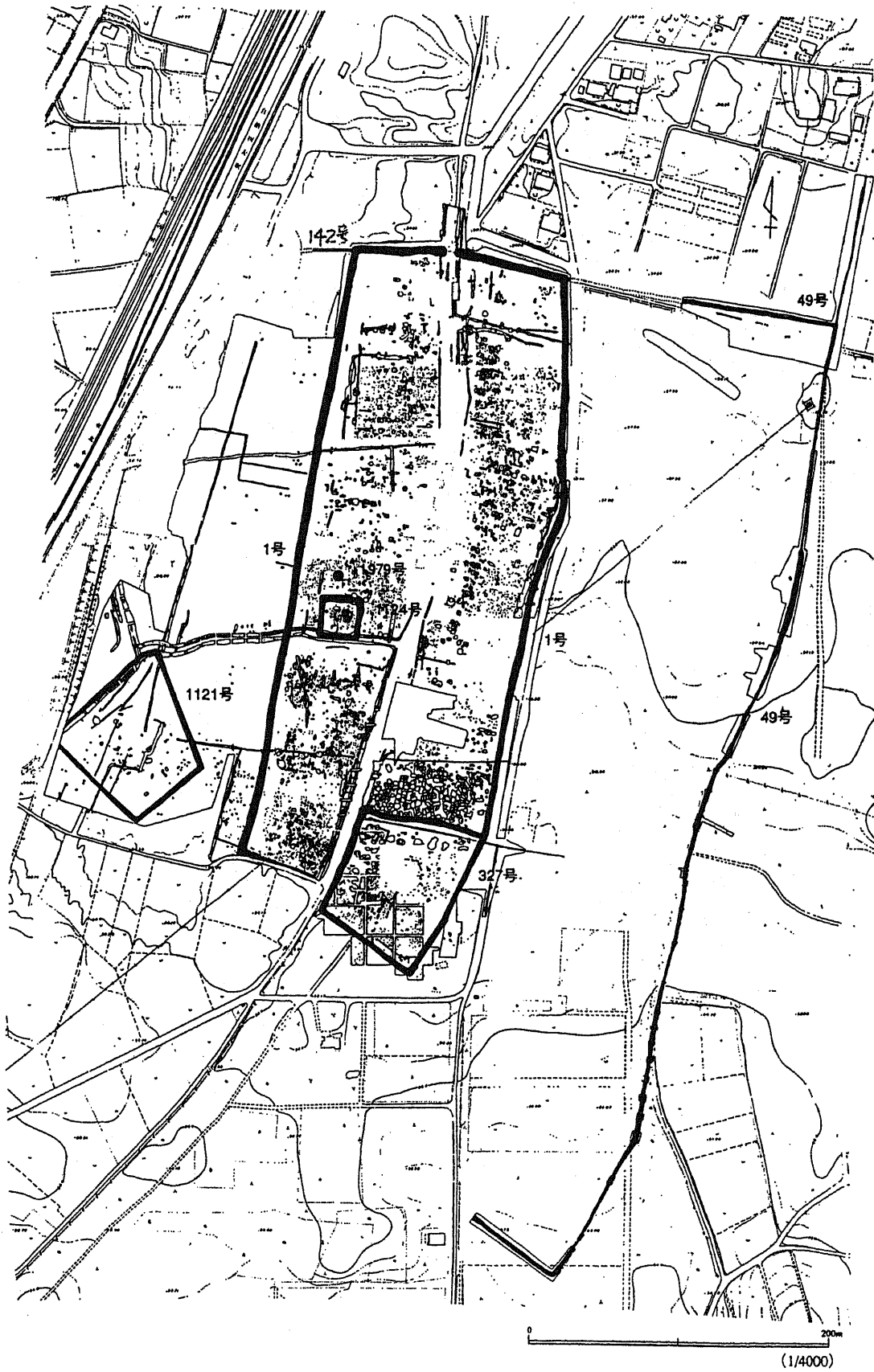


图8 栃木県下古館遺跡

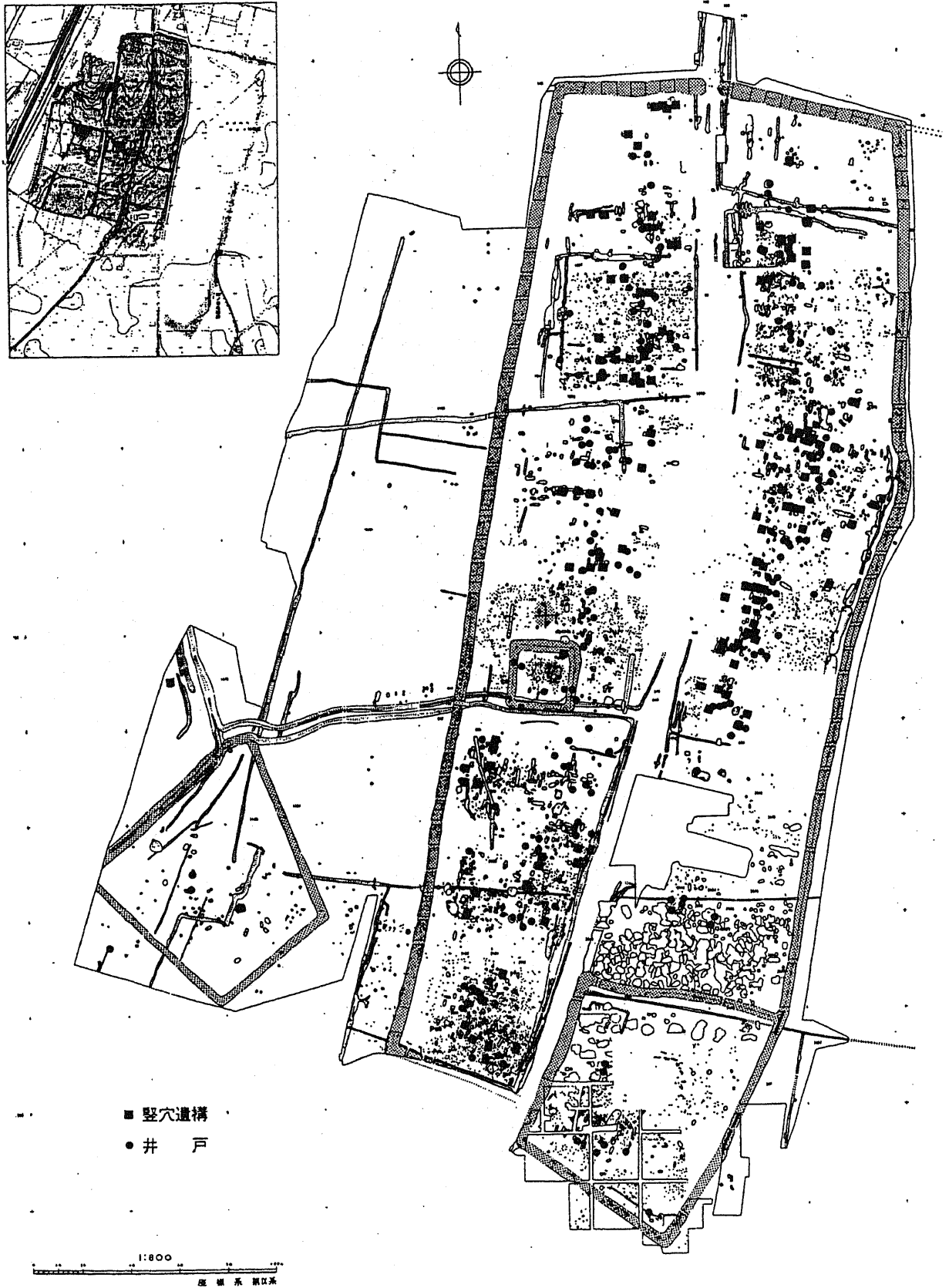
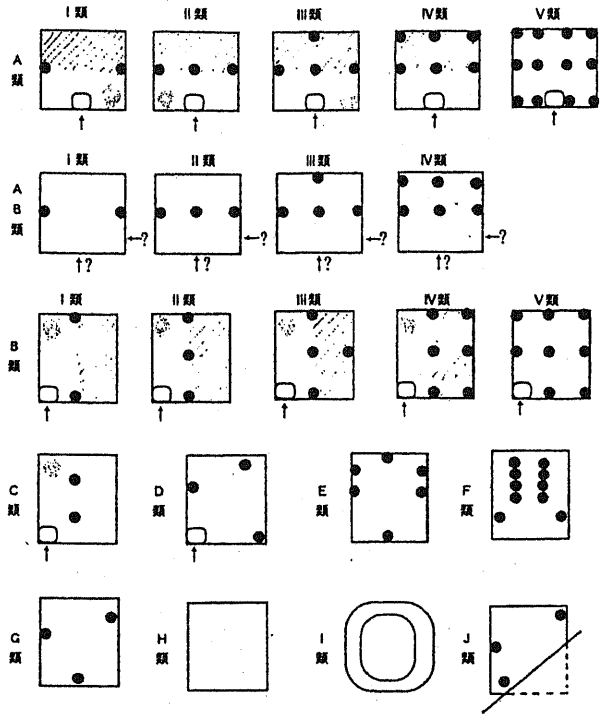


図9 竪穴建物跡の分布 (下古館遺跡)



↑ 竪穴への進入方向
 □ 入口
 ● 柱穴
 ● 炉灶遺跡
 // 土物等部

第416図 竪穴遺構の分類

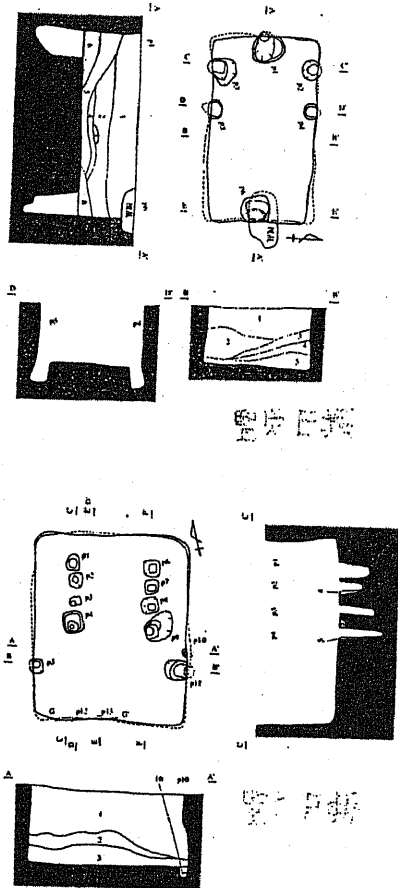


図10 竪穴建物跡の分類 (下古館遺跡)

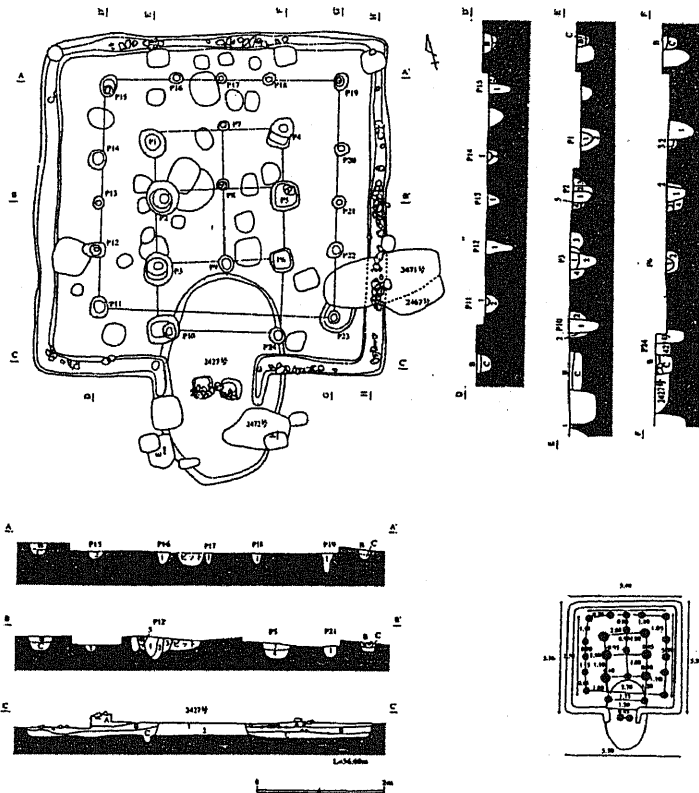


図11 御堂 (下古館遺跡)

2. 中世の町における建物復原をめぐる —広島県草戸千軒町遺跡の出土資料から—

鈴木康之

はじめに

近年、全国的に中世遺跡の発掘調査が進展したことにより、13世紀後半を前後する時期に日本列島の広範な地域で物資の流通が活性化し、物流の拠点となる集落を各地成立させたことが明らかになってきた。「津」「湊」「宿」「市」「町」などの名で呼ばれるこうした集落は、他の一般村落から分化した物流拠点としての機能を持ち、景観の上でも「都市的」とでもいうべき独特の景観を有していたものと考えられる。また、これらの物流拠点の機能や景観は、その後の社会・経済の発展に重要な役割を果たし、近世にかけて成立したさまざまな町にも大きな影響を及ぼしたはずである。しかし、京都や鎌倉といった当時の政治の中心地を除く多くの物流拠点では、景観復原の拠りどころとなる記録類はほとんど残されておらず、復原にはさまざまな困難が伴う。

ここでいう景観 (landscape) とは、集落の立地やそれを取り巻く自然環境、人間が自然に働きかけることによって改変した地形や環境、あるいは建築・土木工事による人工的な構築物などの総体を指す。したがって、景観復原には考古学のみならず生態学・地理学・歴史学・建築史学・土木史学など広範な領域の成果が必要とされる。ただ、記録類に残らないような各地の物流拠点は、考古学的な発掘調査によってその存在が確認される場合が多く、復原のための資料は一次的には考古資料として解釈されることになる。したがって、考古学の果たすべき役割には重要なものがあるが、その際問題となるのが、考古学的に解釈される段階で、他の領域の資料と

して重要な部分が切り捨てられてしまう可能性である。自然遺物 (ecofacts) の検出において明らかなように、考古学的な関心からは廃棄されてきた資料の中にも、集落の景観復原に重要な情報が豊富に含まれている可能性は極めて高い。そのため、自然遺物の取り上げに際して関連する領域の研究者が立ち会うことや、サンプリングした土壌をそのまま専門の研究者に渡すことなどによって、考古学的な関心による恣意的な選別を回避することが試みられている。

同様のことは、建物復原の場合にもいえるだろう。建物復原のための情報をより良い状態で収集するためには、発掘調査の段階から建築史の研究者との共同作業を進めることが理想であることはいうまでもない。しかし、現実の調査体制では建築史の専門家を調査員に加えることは困難な場合が多い。そこで、発掘調査にあたる個々の調査員が、建物復原のためにはどのようなデータが必要とされるのかという認識を深めることによって、これに対応していくことがさしあたっての課題となるだろう。

1. 建物復原の根拠となる資料

発掘調査資料の中で建物復原の根拠として利用される機会が最も多いのは、検出した遺構の平面図である。特に遺構平面図によって示される柱の配列と、それに付随する柱間寸法、柱の太さ、あるいは雨落溝の存在などが建物復原の重要な資料として利用されてきた。これは、日本の建物の多くが架構式と呼ばれる軸組構造によって構築されているため、建物の形態と地面に残された痕跡とを比較検討する上で、柱の配置が何よりも重要な要素とされてきたためと考えられる。しかし、同じ柱の配置でもそこに復原できる建物にはさまざまな可能性が考えられるし、近年の発掘調査によって明らかにされてきた多様な建

物構造、例えば方形竪穴建物などの存在は、柱の配置を中心としてきた建物復原の方法では明らかにできない構築物が存在していたことを示している。建物復原の根拠をより確かなものにするためには、遺構平面図に表れない各種の情報を、発掘調査やその後の資料整理の過程で収集・分析し、資料化することが必要である。

しかしながら、現状では発掘調査を担当する考古学の研究者と建物復原に参加する建築史学の研究者との間で、それら建物復原に関する詳細な情報が十分に共有されておらず、その点に考古資料に基づく建物復原の問題があると思われる。そこで、ここでは草戸千軒町遺跡（広島県福山市）の出土資料の中から、建物復原の根拠となりうる資料にどのようなものがあるかを紹介することによって、遺構平面図以外にどのような情報が提示できるのかを考えてみたい[1]。

まず、建物復原の根拠となりうる資料としてどのようなものが出土しているのかを、思いつくままに挙げてみる。

(a) 建物の部材

建物の一部を構成したさまざまな部材が出土すれば、建物復原の重要な資料として利用できるが、実際にはこうした直接的な資料が出土することは稀である。しかし、木材以外の建築資材にまで範囲を広げれば、多くの資料が存在している。例えば、釘・鏝や飾り金具などの金属製品、瓦・罨や壁土などの土製品などには、かつては建物の一部分だったと考えられるものが含まれており、検討を進めていけば、重要な情報を提供してくれるものと思われる。

(b) 建物以外の部材

実際の復原作業を進めるためには、出土した断片的な建築資材だけでは不十分で、それ以外の間接的な資料も参考にする必要があるだろう。その一つとして注目したいのは木組井戸である。井戸の構築は土木工事の領域に

含まれるもので、井戸材の構築技術が建築史の視点から分析されることはほとんどないが、建物復原に貴重な資料を提供するものであることは間違いない。まず一つには、木材の構築技術や加工技術体系の解明がある。遺跡において建築部材が本来の状態を検出されることはまずないが、井戸材の場合は地下部分に関する限り、部材が組まれた状態で検出される例は多い。また、井戸はその構造や規模に階層性のあることが明らかにされており、これによって井戸を構築・利用した人々の社会的な位置付けが可能になる。これは、井戸と同一区画に存在する建物を復原する上での重要な情報となるはずである。

(c) 廃棄木材

ここにいう廃棄木材とは、製材の過程で廃棄された端材や木屑で、建物の部材としては利用されなかった木材のことである。建物の構造を構成する部材そのものではないため、ネガティブな資料ではあるが、製材方法をはじめとする木材加工技術を復原する上では多くの情報を含んでいる。草戸千軒における具体的な資料としては、鼻繰（切り落とされた棧穴の部分）などがある。

(d) 木材加工具

いわゆる大工道具である。出土例は必ずしも多くないが、鋸・手斧・鑿・錐などが確認されている。また工具の手入れに不可欠な砥石についても、近年考古学的な関心が高まりつつある。従来、こうした木材加工を支える技術的な背景については、文献・絵画資料や、わずかに残された伝世資料などを掘りどころに研究が進められてきたが、各地で考古資料が明らかになるにつれ、建物復原のみならず、広範な分野の資料として今後さらにその重要性が評価されることになるだろう。

以上挙げてきたように、直接的な建物遺構である柱穴や礎石はもちろんのこと、それ以外の出土資料にも、建物復原の根拠となりうる情報は豊富に含まれている。ここではすべ

表1 各時期の暦年代

時期	暦年代
I期前半	13世紀中頃から後半
I期後半	13世紀後半から14世紀初頭
II期前半	14世紀前半
II期後半	14世紀中頃
III期	15世紀前半から中頃
IV期前半	15世紀後半
IV期後半	15世紀末から16世紀初頭

ての資料について検討を加えることはできないため、壁土・瓦などの部材、井戸材に見る木材加工痕などを中心に紹介してみたい。なお、時期を記述する際に草戸千軒町遺跡における時期区分を利用する必要があるが、各時期の暦年代は表1のとおりである。

2. 壁土

壁土の分布

草戸千軒町遺跡からは多くの壁土の塊が出土している。これは土壁が火災などによって熱を受けて固まったもので、整地層や廃棄土坑の埋土などから出土する例が多い。その総量は明らかではないが、まとまった量が出土する場所は比較的集中する傾向がある。すなわち、I期の段階では遺跡中央部の「中心区画」と呼ばれる区域にまとまって出土する遺構が集中しており、それがII期には遺跡の南半部にも広がるようになる。その後、II期後半からIII期までには遺跡の中央から北半にかけての区域に集中するようになり、IV期になると、遺跡中央から北半にかけての区域と遺跡南端の環濠に囲まれた区域とに集中するようになる。こうした分布範囲の拡大・縮小傾向は、集落における遺構集中区域の拡大・縮小傾向と規を一にしていることから、建物の集中区域には当然土壁をもつ建物も多く存在していたものと考えられる。

壁土の出土量の時期的な変遷は集計されていないが、まとまった量の壁土を出土する遺構の数はI～II期よりもIV期が多く、集落の

前半期に比べて後半期により多くの土壁の建物が存在していた可能性が考えられる。

また、ほとんどの資料は廃棄や整地といった行為によって本来の建物の位置から移動しているため、建物遺構との対応関係を明らかにすることは困難だが、後述するSB1781のように、壁土の使われていた建物が特定できる場合もある。

壁土の特徴

草戸千軒町遺跡出土の壁土については、田邊英男によって概要がまとめられている[2]。田邊は壁土に残された下地の痕跡を分類し、下地構造の復原を試みている。出土している壁土の大部分は断片的なものが多く、下地の構造が完全に把握できないものも多いが、板材などを格子状に組んだ木舞の痕跡を残すものと、背面に板状の圧痕を残すものとの二種類があることは確認できる。

このうち、格子状の木舞が確認できるものはほとんどが幅2～5cm、厚さ6mmほどの割板を利用したもので、割竹や丸太材を利用したと考えられるものが少数認められる。I期前半に埋められた池状遺構・SG3185から出土した資料が典型的な例で、横方向の割板を中心に、その両面に縦方向の割板を組んだ「二重棧」と呼ばれる木舞下地であったことが田邊によって復原されている。またこの遺構からは、漆喰かと思われる白色の上塗を施した壁土もいくつか出土している点が注目される(写真1)。

いっぽう、背面に板状の圧痕を残す壁土には比較的大型の塊が多く、厚さも10cmを超えている。代表的な資料はSD4196というII期後半の溝状遺構から出土したもので、ここでは幅80cm、深さ30cm、長さ16.5mの溝の中にぎっしりと壁土塊が埋め込まれていた。圧痕からは、幅8～10cmの平行する板材が並んでいることがわかり(写真2)、田邊は絵巻物との比較から木摺下地をもつ土塀を想定して

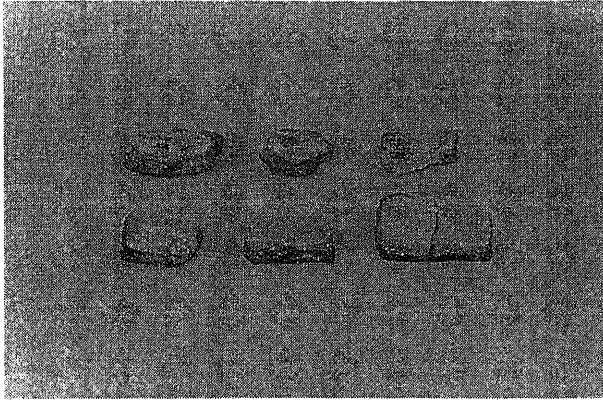


写真1 上塗のある壁土

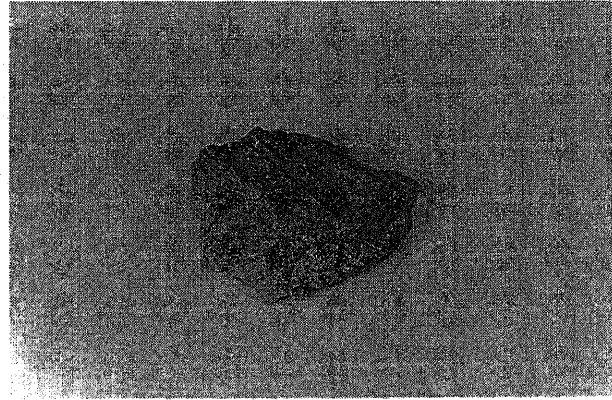


写真2 板状の圧痕を残す壁土

いる（図1）。確かに、『年中行事絵巻』『餓鬼草紙』『なよ竹物語絵巻』『春日権現験記絵』などには、上土塀の下地として横方向に板材を並べた構造が描かれている。絵画表現上の類型的な表現であるにせよ、土塀の下地としてこのような木摺下地が広く行われていたことがうかがえる。また、SD4196において溝状遺構からこのような壁土塊が出土していることは、本来土塀として存在していた壁が火災などで崩壊したのち、それに沿って掘られた溝に処分されたことが考えられ、これらの壁土塊が土塀のものであるという推定を裏付けるものとなるだろう。

3. 壁木舞と鼻線

SD1375出土の壁木舞

草戸千軒の町における土壁の構造を考える上で注目すべき資料として、I期後半に埋められた溝状遺構SD1375から出土した壁木舞がある（図2）。当初は格子状木製品と呼ばれていたが、その後の検討によって木舞と判断してほぼ間違いのないものと考えられるようになってきている。この遺構からは14組ほどの木舞が出土しており、残存状態が良好な資料からは、両端に刃をもつ角材（間柱に比定できる）に横方向の貫を渡し、これに平行する割板を中心として、両面にこれと直行する割板を組んだことが確認できる。割板は幅2～4

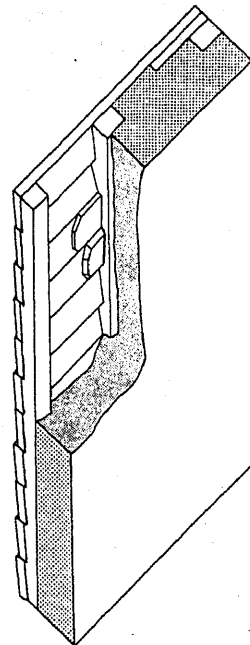


図1 土塀の復原図

cm、厚さ2～8mmの柂目材で、材の寸法・構造とも前述のSG3185出土の壁土塊から復原できる二重棧の木舞とほぼ同一のものである。これらの資料から、13世紀後半の草戸千軒の町に、木舞下地をもつ土壁の建物がいくつか存在していたことが明らかになる。

SD1375出土の鼻線

SD1375からは、壁木舞のほかに「鼻線」と呼ばれる板材の断片も出土している（図3）。これは板材の端部にあけられた運搬用の縄掛孔、いわゆる棧穴の部分に切断したものである。鼻線はその他の遺構からも出土し

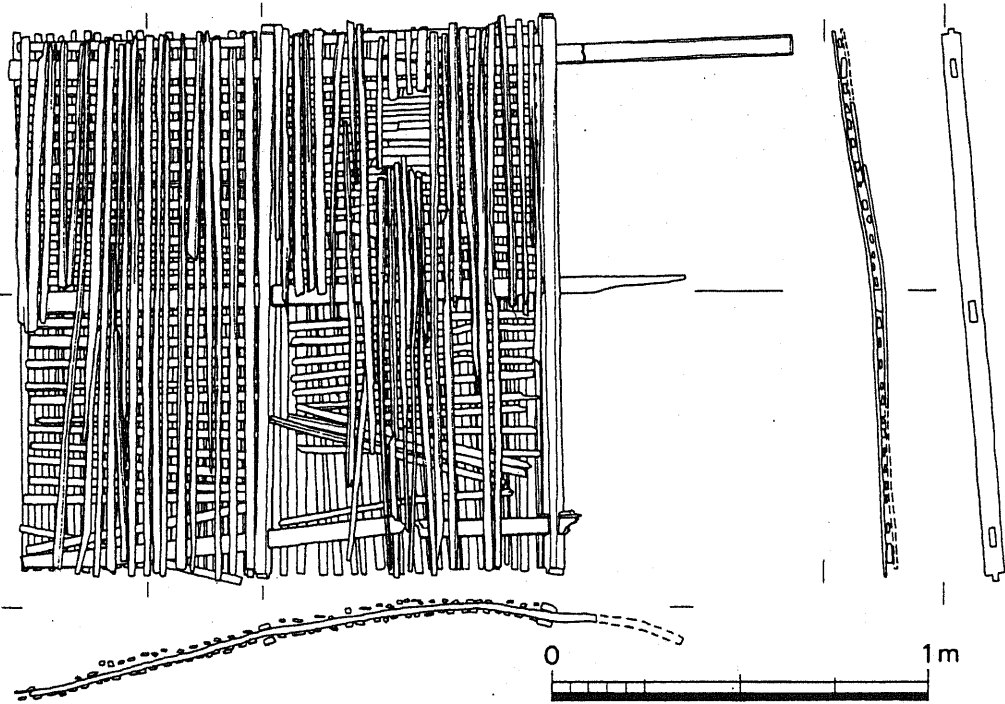


図2 SD1375出土の壁小舞

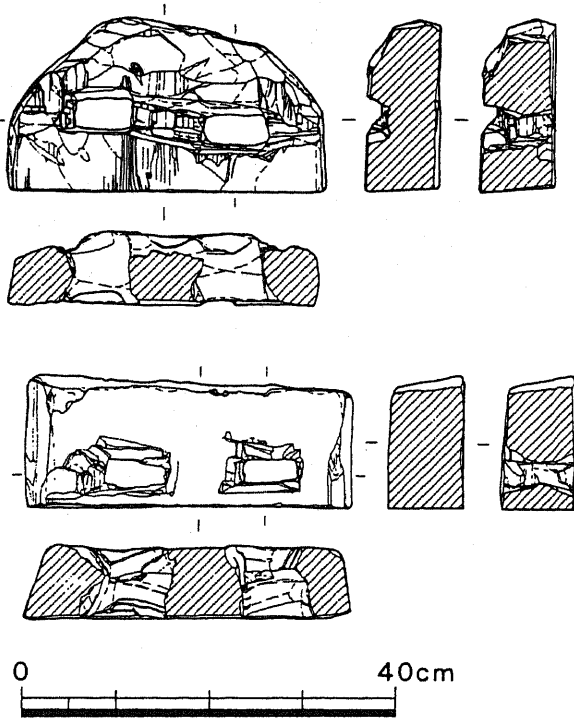


図3 SD1375出土の鼻線

ている（図示したものは、コウヤマキ）。

廃棄されていた鼻線は、いずれも横挽鋸によって切り落とされている。後述するように草戸千軒町遺跡の木材からは横挽鋸の痕跡が数多く確認できるほか、おもに横挽きに用いられたとされる「木の葉形鋸」の実物もI期後半の遺構から出土しており、13世紀後半には横挽鋸が広く普及していたことがうかがえる。

棧穴が加工された状態の木材が建築現場に運び込まれていたことや、現場での製材作業によって棧穴部分が切り離されていたことなどは、『北野天神縁起絵巻』などによってその状況をうかがうことができるが、出土した鼻線はこうした木材加工の過程を具体的に示す資料として重要である。

ており、遺跡全体で100点ほどの出土例があるが、この遺構には68点が集中している。樹種鑑定の結果、コウヤマキ、ヒノキ、スギが含まれていることが確認され、鼻線の形状が樹種ごとに異なっていることも明らかになっ

SD1375の機能

SD1375からは壁木舞・鼻線のほかにも、運搬具などの建築・土木工事に関係する資料が出土している。おそらく、SD1375とそれに平行するSD1766・1820、その南のSG

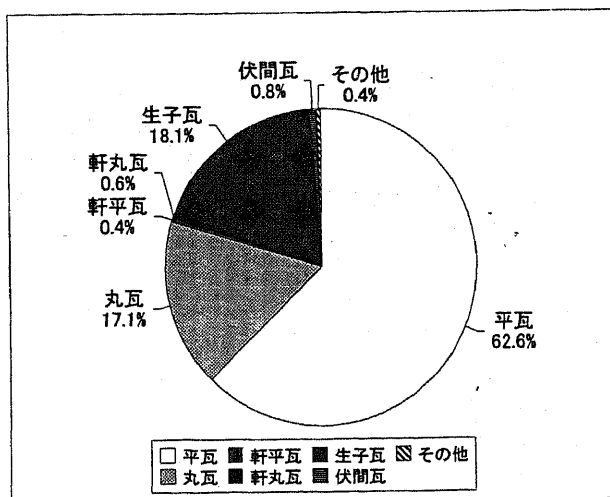


図5 出土瓦の種類別比率

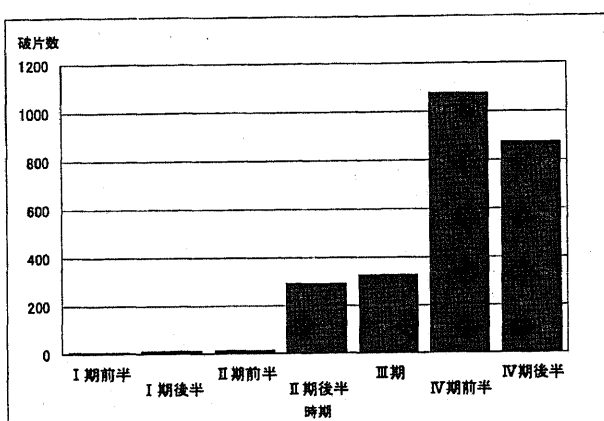


図6 瓦の時期別出土点数

な施設の用地として利用していたことが遺構の重複状況から明らかで、II期になって活性化することのこの区域の活動の基盤が、これら一連の事業によって整えられたものと思われる。

これまで、SD1375のような溝状遺構は単に町割りのための区画溝ととらえてきた。確かに溝の位置は町の中の区画に制約されていることは間違いないが、以上のような遺構の形成過程を考慮すれば、溝が埋め戻される前と後とでは付近の土地利用の在り方が大きく変化したことも明らかになってくる。つまり、溝が構築される前には積極的に利用されていなかった区画の地盤を改良し、大がかりな施設を建設したことが考えられるようになり、集落の変遷過程を考える上での有効な手がかりを得ることができる。

4. 瓦類

瓦類の出土状況

草戸千軒町遺跡からは破片数で7,500点ほどの瓦が出土している。瓦の種類別にみると、平瓦（鬘斗瓦を含む）が約63%、丸瓦が約17%、軒丸・軒平瓦が約1%、生子瓦が約18%、その他（伏間瓦・鬼瓦など）が約1%という内訳である（図5）。

出土点数を時期別に見ていくと、I期前半からII期前半にかけての出土量は非常に少なく、II期後半からIII期にはある程度の量が出土するようになる。さらにIV期前・後半には急激に出土点数が増加する（図6）。時期や地区によって出土量に偏りはあるものの、瓦は遺跡のほぼ全域から出土している。

瓦葺建物の存在

以上のような瓦の出土状況から、この町に瓦を葺いた建物が存在していたことは十分に考えられるだろう。瓦の出土総量は必ずしも多くはないが、この町で使われた瓦の全てが遺跡内で出土するとは限らず、町の廃絶時に利用可能な瓦が他の場所に持ち去れた可能性も考えられる。あるいは、檜皮葺や柿葺などの棟を押さえる目的で、限定的に瓦が使われていたことも考えられる。ただし、檜皮葺・柿葺建物の存在を具体的に示す資料は明らかになっておらず、屋根材や出土瓦をめぐる詳細な検討は今後の課題である。

また、瓦の出土量が急速に増加するIV期には、瓦の出土地点が集まる傾向が明らかである。一つの集中地点は「中心区画」の南東部で、寺院の可能性が指摘されている区域である。もう一つは、遺跡南部の環濠で囲まれた区域で、ここには領主的な性格をもつ有力者の居館が存在したと考えられる。検出した建物遺構との対応関係は明らかにできていないが、これらの区域には瓦を利用した建物が

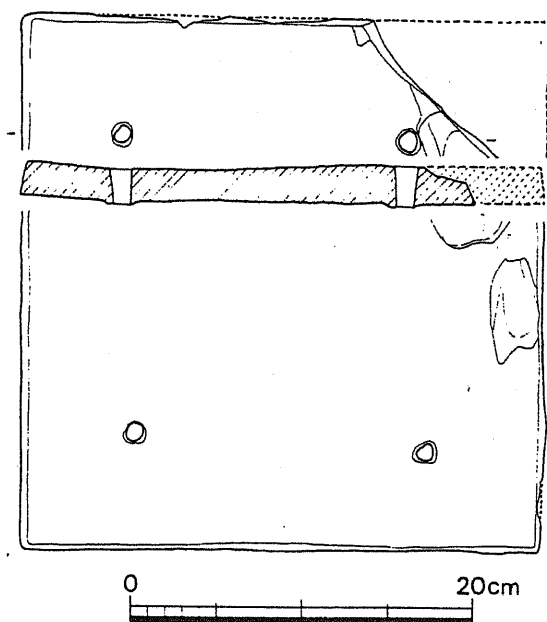


図7 生子瓦

存在していたことだろう。

ところで、出土瓦の二割近くを生子瓦が占めていることにも注目しなければならない。これは一辺30.3cm前後、厚さ2.3cm前後の扁平な瓦で、四隅の近くに片面から焼成前の穿孔があるものが多いが(図8)、穿孔のないもの、孔の貫通していない資料も存在している。遺跡全体で約1,400点(破片数)出土しているが、そのうちの半数近くは土壁をもつ倉庫、つまり土蔵と考えられる建物跡SB1781周辺に集中している。他の区域での出土点数は限られており、後述のように、少なくともこの建物においては生子瓦が使われていたものと考えられる。

5. 井戸材に見る木材加工技術

木材加工技術の概要

室町時代に大鋸が出現するまで、日本には製材用の横挽鋸は存在せず、もっぱら打ち割り法による製材が行われていたというのが、中世の製材技術に関する定説である[4]。草戸千軒町遺跡の井戸材から、この点を検証することも可能である。

前述のように、井戸の構築が土木工事の領域に含まれるためか、考古資料としての井戸材の加工技術や構築方法などは、これまで建築史的な視点からはあまり検討されてこなかった。また、井戸材に限らず木製品は出土後の保存・管理が困難で、十分に資料化されていないことも、井戸材や出土建築部材についての本格的な分析が進んでいないことと無関係ではないだろう。

幸いにも草戸千軒町遺跡の場合は、遺跡の立地が木製品の保存に適していただけでなく、その後の保存・管理にも多くの努力が払われており、調査後10・20年を経た資料でも、ほとんどの資料は検討が可能な状態にある。井戸材についても、遺跡全体で200基近い木組井戸が調査されているが、大部分は井戸材が取り上げられ、水漬、あるいは保存処理された状態で保管されている。

草戸千軒町遺跡出土の井戸材を概観した限りでは、ほとんどの井戸材は打ち割り法によって製材されたものと考えられる。加工痕から復原できる基本的な製材法は次のようなものである。まず、打ち割り法によって板材や角材を得る。その際の破断面は木理に沿ってフレネルレンズ状の凹凸があるが、多くの場合はこの面を手斧によって平滑に調整している。より平滑な面が必要とされる場合には、その上を誇によって調整している。井戸材は建築材ほどに外観の美しさが求められなかったためか、打ち割り法で破断したままの面が残されることも多い。特に井戸の掘形側の面、つまり土の中に隠れて見えない面は、多くの場合調整されていない(写真3)。

加工された板材・角材には、必要に応じて刳や刳穴など継手・仕口の加工が施される。刳穴の加工には鑿が、刳の加工には鑿と鋸が利用されたことが加工痕から想定できる。鋸の痕跡はすべて横挽方向のもので、縦挽方向の痕跡は確認できていない。例えば刳の加工でも、まず角材の両側面から横挽鋸で切り目

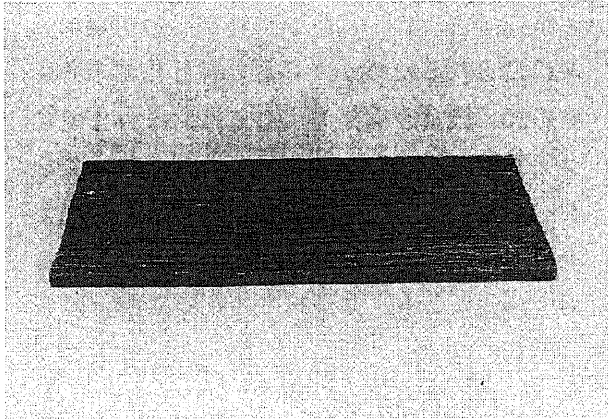


写真3 打ち割りの破断面を残す井戸材

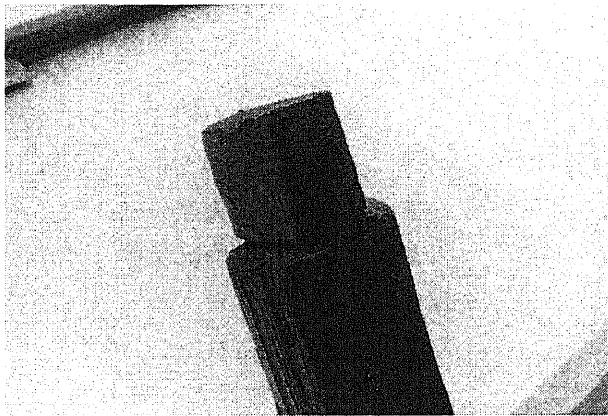


写真4 杓の加工 (SD4930)

を入れたのちに、鑿で不要な部分を繊維方向に叩き落としており(写真4)、現在の胴付鋸による加工のような縦挽方向の切り目は確認できない。

これらの継手・仕口は設計に基づいて計画的に加工されたはずであるが、中には杓穴と杓の寸法が全く合っておらず、杓穴の隙間や杓の先端に楔を打ち込むことによって固定するといった場当たりのみえる加工が施されるものがある。他の用途に用いられた材が井戸材に転用されたと考えられるものも存在するが、そうした転用材の利用が、場当たりの加工に関係している可能性もある。

井戸の掘形に井戸材を据える場合には材の使い方にきまりがあったようで、ほとんどの井戸で木表を内側、木裏を外側に組んでいる。つまり材の樹皮に近い側が水のたまる側、芯に近い側が土に接するようになっている。こ

のような木表・木裏の使い方の例外は、刳物・結物の井戸である。刳物、つまり丸太材を刳り抜いた井戸の場合は本来の丸太材そのままに、樹皮側が外を向く。また、結物を利用した井戸は側板が板目取り、つまり側板短辺の湾曲に沿って年輪が走るように木取りされており、この場合も樹皮側が外を向くように組まれている。

結物の井戸と多角形縦板組の井戸とは構造が類似しているが、後者の場合は先の原則どおりに木表が外側を向くように組まれており、材の使い方からは両者の系譜が異なっていることを考えさせる。このことは、15世紀代頃から広く普及してくる結物を利用した井戸の系譜を考える上で重要な示唆を与えるものであるが、この問題については稿を改めたい。

以上のような打ち割り法による製材は、草戸千軒の町が存在した13世紀中頃から16世紀初頭にいたるまでの井戸で確認することができる。15世紀代には縦挽の製材用鋸である「大鋸」が登場したと推定されているが、少なくともこの町では大鋸によって製材されたものはほとんど利用されていなかったようである。

いっぽう、16世紀後半の吉川元春館跡(広島県山県郡豊平町)出土の木製品を観察すると、縦挽鋸や台鉋の存在を示す資料をいくつか確認することができる[5]。遺跡の性格の違いなども考慮しなければならないが、16世紀代のうちに、大鋸や台鉋の普及に伴って木材加工技術の体系が大きく変換していった状況を見いだすことはできるだろう。

さて、井戸の構築に際して、ほとんどすべてとっていいほど製材された板材・角材が用いられていることにも注目しなければならない。転用材が利用されることはあっても、丸太材や樹皮を残すような材がそのまま井戸材に用いられることはなかったのである。また、製材した板材ではあるが、棧穴を残した

ままの材が井戸材に利用されている例も多くみうけられる。このような棧穴を残す材が組まれた構築物は、『一遍上人絵伝』の踊屋などにみることができ、当時の町では一般的な風景だったのかも知れない。

以上のようなことから考えられるのは、草戸千軒の町には伐採された丸太材がそのままの状態運び込まれることは少なく、ある程度加工された状態の材木がもたらされていたことである。そのため、加工の手間を省くために棧穴を残す場合があっても、樹皮が残るような材が利用されることは少なかったものと考えられる。また、先に紹介したSD1375出土の鼻線の状態が樹種によって異なっていることから、棧穴の加工が生産地に近い場所で行われていたことが想定できる。このことは町に存在した建物の用材を考える上でも重要な点で、建物を構成する部材に樹皮が残る丸太材などが利用されることは少なく、製材加工を経た木材が使われていた可能性が高いといえるだろう[6]。

ところで、安芸国沼田荘では康元元年(1256)頃、沼田新荘を相続した小早川国平が新荘の山々から「比檜」三千本を切り出し沼田川に流したが、沼田本荘の小早川茂平が下流でこれを奪い取ったために争論となっている(「小早川文書」第115号)。ここには、中国山地で切り出された木材が瀬戸内海に流れ込む河川を利用して運搬されていたことが示されているが、それと同時に、切り出した木材を利用するためには河川の下流域(この場合には沼田本荘)を押さえることが重要であったこともわかる。芦田川においても上流域で伐採された木材が川に流され、それらが河口にある草戸千軒の町に集結したことは当然考えられるだろう。この遺跡で多数の木組井戸が発見されること背景には、豊富な木材資源を利用できるだけの地理的・社会的・経済的な条件が整っていたことが考えられるのである。

井戸の加工技術と階層性

草戸千軒の井戸の大部分を占める木組井戸には何種類かの構造があり、小都隆[7]・岩本正二[8]によって分類されている。また、井戸の構造と規模・立地などとの関係から、構造に階層性があったことも指摘されている。ここでは井戸構造に認められる階層性と加工技術との関係を説明するため、先行研究に基づきながら、木組井戸の構造を便宜的に次の5系統に分けておく。

(a) 方形縦板組系

縦板を方形に組んだ木組井戸をすべて含み、四隅に隅柱を立てるものや横棧で縦板を支えるものなどがある。草戸千軒では最も多くみられる井戸である。

(b) 円形曲物系

底のない曲物を何段か積み上げた井戸で、13世紀代の遺跡北半部を中心に確認できる。比較的小型の井戸が多い。

(c) 多角形縦板組系

縦板を多角形に組んだ井戸で、内側から横棧で固定するものや、縦板どうしを雇刃で固定するものなどがある。板の枚数には多様性があり、六角形から十八角形までが存在する。I期後半に出現するようであるが、大部分はII期後半に集中的に構築され、一部はIV期まで使用されている。

(d) 方形横板組系

四隅に柱を立て、四側面に横板を積み上げた井戸である。四隅の柱には、側板を嵌めるための切り欠きをもつ場合が多い。II期前半からII期後半にかけての時期集中的に構築され、IV期まで使い続けられたものもある。

(e) 円形結物系

底のない結桶状の構造をもつ井戸で、結物が単体で用いられる場合と複数積み重ねられる場合とがある。底板の痕跡を残す例も少数あるが、確認できない資料の方が多く、容器としてではなく、井戸用に組まれた結物が主流だったと考えられる。

以上分類した井戸のうち最も普遍的な井戸は（a）であり、これよりも格の高い井戸と考えられるのが（c）と（d）である。岩本も指摘するように、（c）の多角形井戸は鎌倉の大規模な武家屋敷、京都の貴族の屋敷や七条町などの商工業区域といった、経済力をもつ造営主体が想定できる場所に立地する井戸であり、草戸千軒においても「中心区画」と呼ばれる経済的に優位な立場にあったと考えられる区画と、それに隣接する区画に集中している。これに次ぐのが（d）の横板組井戸で、（c）のように特定の区画にだけ集中する傾向はみられないが、集落内の各区域で中心的な役割を果たしたと考えられる場所に分散して立地しており、規模も大きなものが作られている。

ここで注目されるのは、これら（c）（d）の井戸で、その規模に比例して大型で厚い良質の材が用いられていることである。一般的な（a）の井戸では厚さ2cm前後の板材が用いられているの多いのに対して、（c）（d）の井戸では厚さ3cm以上の木理の通った板材が用いられ、中には10cmを超える厚みをもつ材によって組まれたものも存在する。さらに、（a）の井戸では縦板相互の接合面（木端）が手斧で調整されているだけなのに対して、（c）における縦板相互、（d）における横板相互の接合面には、写真5のように木端を平行に移動するような工具による調整が確認できる。これは複数のストロークが重なり合う誇の加工痕とは異なるもので、小あるいは台鉋に類した工具による加工痕だと考えられる。こうした加工痕を「小状工具による加工痕」と呼ぶことにするが、このような加工痕は今のところ（c）（d）の井戸材と（e）の結桶状の側板相互の接合面だけに確認できる。ただし、（e）において小状の加工痕が確認できるようになるのはⅣ期になってからで、Ⅱ期後半の段階では誇によって加工されている（写真6）[9]。それに対して、（c）

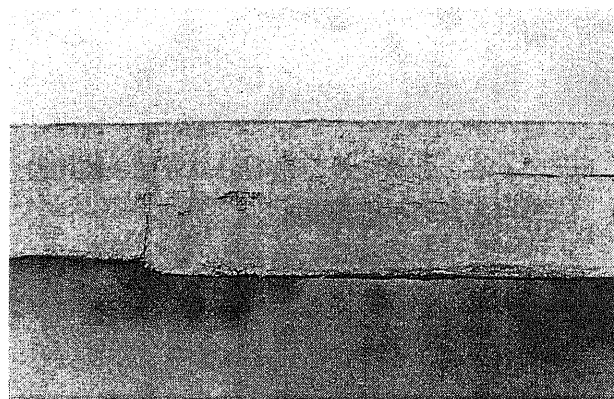


写真5 ★状工具による加工痕

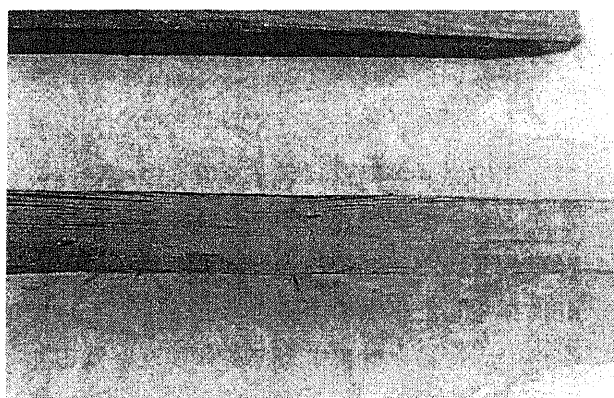


写真6 ★による加工痕

（d）の井戸の場合は遅くともⅡ期後半の段階には小状工具による加工痕が認められる。

「小状工具」は、手斧や誇よりも精密な加工を行う必要性から採用された工具と考えられ、井戸の構造と同様に、井戸材の加工技術にも階層性を見いだすことが可能である。

井戸の構造や加工技術に表現された階層性は、それが位置する区画の格を示すものと思われ、当然そこに存在していた建物にもその階層性は表現されていたに違いない。

6. 草戸千軒の「蔵」

物流拠点と「蔵」

草戸千軒町遺跡出土資料の中から、建物を復原する上で参考となる資料をいくつか紹介してきたが、次に出土資料と具体的な建物遺構とが結びつく例を紹介したい。ここで紹介するのは、倉庫の跡と考えられる建物遺構で

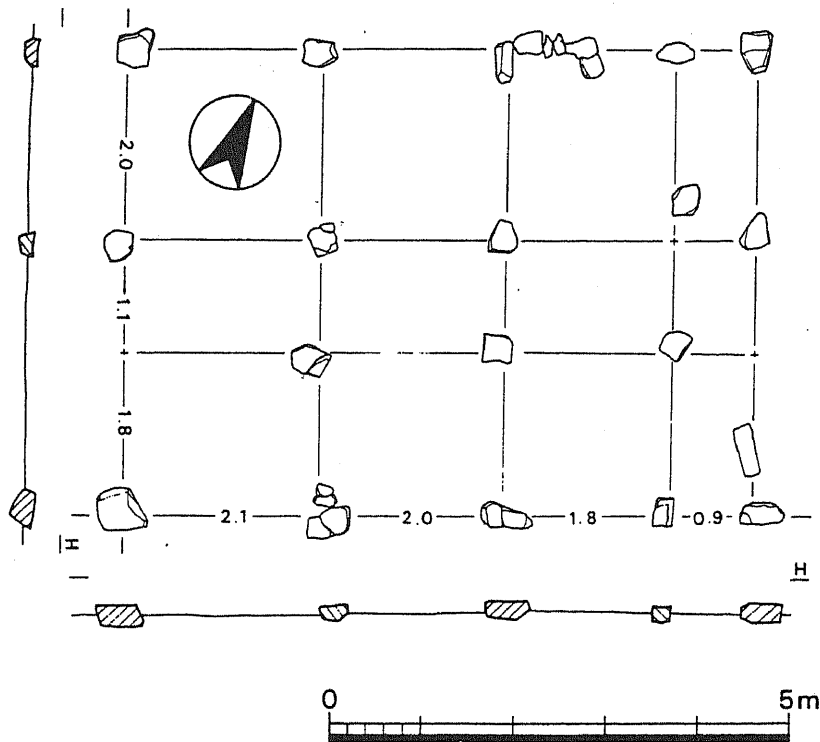


図8 SB1781平面図

ある。物流拠点である草戸千軒の町にとって、物資を保管するための倉庫、つまり「蔵」は、町の機能を象徴する建物といってもいいだろう。これまでに検出した建物跡の中には、倉庫の可能性が考えられるものがいくつか存在しているが、ここではその一例を紹介し、出土資料との関係からどのような建物が復原できるのかを考えてみたい。

SB1781について

第27次調査で検出した東西4間×南北3間の東西棟の礎石建物跡で、全般的に礎石の残存状況が良くない当遺跡にあって、最も良好に礎石が確認できた例である(図9)。建物はⅡ期後半に埋められた池・SG1791の北東隅にあるが、建物直下の部分だけはさらにSG1790として池が掘り直されている。このSG1791は池状遺構と報告されているが、建物との位置関係や、南辺・西辺に杭で固定した横板をめぐらせ、底部に粗梁の役割を果たす木製品を廃棄した後に、大型の礫を大量に埋

めている状況からは、SB1781構築のための掘込地業と考えるべきである。つまり、池を埋め戻した上では地盤が安定しないため、土を入れ替え、礫で固めて地盤の安定を図ったものと考えられる。建物跡の周辺には黒色灰層や焼土層、壁土のブロックなどが広がり、建物は焼失したことがわかる。また、SB1781の西にはSB1780が存在する。この建物もSG1781を埋めた上に建てられており、SB1781と併存していた可能性が高い。

このSB1781からは大量の壁土と生子瓦が出土しており、その分布状況を図10・11に示した。これは、2m×2mの区画ごとに何片の壁土塊あるいは生子瓦が出土したかを示したものである。これをみるといずれもSB1781に重なって集中的に出土しており、壁土・生子瓦がこの建物で使われたものであることは明らかである。また、生子瓦以外の瓦は全く出土しておらず、屋根に瓦が葺かれていた可能性は考えられない。なお、SB1780にはこれらの遺物が集中していないことか

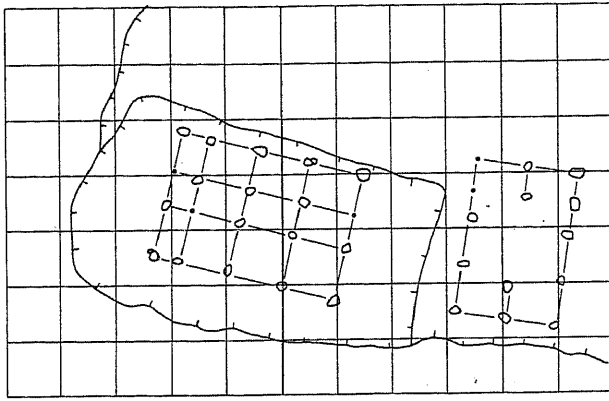


図9 SB1781周辺の壁土

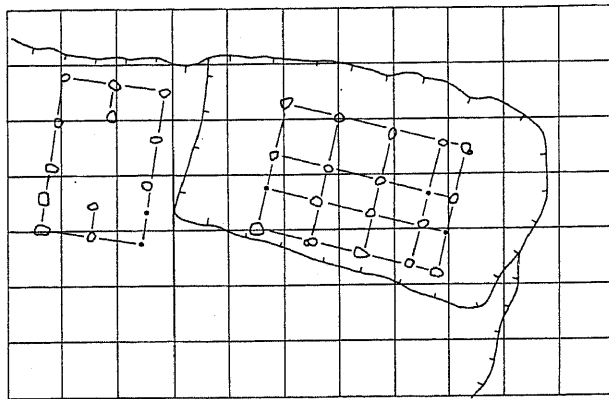


図10 SB1781周辺の生子瓦

ら、SB1781とは異なる構造の建物だったようである。

SB1781に伴う壁土は、先に示した分類に従えば板状圧痕のある厚手の壁土になる。下地の痕跡が確認できるものはすべて板状のもので、格子状の木舞下地の痕跡を残す資料はここでは確認できない。また、長く直線的な藁状の繊維圧痕が確認できるものがあり、これは壁土の貼り付きを良くするための「下げ苧」かとも思われる[10]。これらの痕跡からすれば、この建物は木摺下地に土壁を塗ったものであったと判断できる。壁土の出土量が多く、10cmを超えるような厚さがあることから、建物のかなりの部分に土壁が使われ、いわゆる大壁であった可能性が高い。また、板状の圧痕が屋根を葺いた板材のものを含むと考えれば[11]、『春日権現験記絵』に描かれた塗籠の蔵のような建物を想定することも可能だろう。

さて、問題は大量に出土した生子瓦であるが、これらは土壁、特に低い位置の壁を保護するために貼られていたものと考えられる。四隅に孔が開けられているからには、立面に固定する目的で作られたものと考えられ、敷瓦として使われていた可能性は考えにくい。形態や想定される用途は、近世の土蔵に使われた生子瓦と基本的に同一のものと考えられるため、ここでは畳ではなく生子瓦と呼ぶことにしたい。なお、四隅の穿孔が完全でないものも目立つことから、すべての生子瓦の四隅が釘で打ち付けられたわけではなかったらしいが、それでも固定は可能だったのかも知れない。なお、建物跡周辺からは多くの鉄釘が出土しているが、生子瓦固定用に使われたものかどうかは明らかではない。

以上のように、SB1781は丁寧な地盤工事の上に作られた礎石建物で、生子瓦を貼った土壁をもつ建物に復原できる。屋根材は明らかでないが、板葺屋根の上に壁土を塗ったものだったとすれば、置き屋根の可能性が考えられるだろう。土壁や生子瓦が防火の目的で使われることが多いことを考えれば、その機能は倉庫と考えるのが妥当である。建物の時期は明確な根拠を欠いているが、Ⅱ期後半の土器を大量に含む池の埋土上に構築されていることから、14世紀中頃から後半にかけての時期に建てられたものと考えられる。廃絶時期についてはさらに不明確であるが、SD510・SD550・SK582といった隣接地域の遺構で出土している生子瓦が、この建物の廃絶に伴って分散して廃棄されたものと考えられると、それらの遺構の廃絶時期である15世紀後半には火災によって焼失していたことになる。

京都や堺では16世紀代のうちに畳列をもつ倉庫建築の存在が考古学的に明確になってくるが、それ以前の段階から土壁をもつ倉庫が存在していたことは、文献資料からうかがうことができる。しかし、その具体的な姿は『春

日権現験記絵』に描かれた例など断片的な資料しか存在しない。そうした中で、草戸千軒のSB1781の例は土蔵の系譜を考える上で重要な意味をもつものといえる。

おわりに

ここでは、草戸千軒町遺跡出土資料の中から建物復原の根拠として有効だと思われる資料をいくつか紹介してきた。建物復原において柱の配列が重視されるあまり、それ以外の情報が建物復原の根拠として十分に資料化できていないのではないかと感じていたからである。最後に示したSB1781の場合も、礎石の配列の状況、礎石間の寸法、雨落溝と考えられる石組の状況などについては報告書に詳細に記述されているが、壁土・生子瓦の出土状況についての記載はわずかで、それらを建物に結びつけて総合的に解釈しようとする視点は明確でない。建物復原において柱の配列が果たす役割はもちろん重要であるが、それ以外の多様な出土遺物を建物に結びつけて解釈することによって、建物のイメージをより具体化することが可能になるだろう。

今ひとつ指摘しておきたいのは、木製品の保存処理の問題である。木製品は、他の遺物に劣らず多くの情報を保持している。加工痕に示される工具の問題だけでなく、樹種や年輪年代など、木製品から明らかになる点が多い。しかし、資料を良好な状態で保管するためには手間がかかり、その解決策として樹脂含浸などによる保存処理が進められている。ところが、木製品に残された微妙な加工痕を観察する立場からすれば、処理を終えた資料よりも、未処理の水漬資料の方が確実に多くの情報を得ることができる。水漬の状態のままでは資料の劣化が進行することは理解できるが、保存処理の目的がどこにあるのかを考えると、水から出すことに目的があるのではなく、資料の保持している情報を次の世代へ

と伝えることが保存処理の目的ではないかと思われる。だとすれば、現在進められている処理方法が最適のものなのかどうか、再検討してみる必要があるだろう。

注

[1]発掘調査の詳細については、既刊の調査報告書を参照のこと。

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅰ～Ⅴ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、1993～1996

[2]田邊英男「草戸千軒町遺跡出土の壁土Ⅰ・Ⅱ」『草戸千軒』No.203・211、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、1990・1991

[3]草戸千軒町遺跡における溝・池状遺構の中に地盤改良に伴う施設が存在する可能性については、堀内博明氏にご指摘いただいた。

[4]村松貞次郎『大工道具の歴史』岩波書店、1973

[5]小都隆・尾崎光伸氏らのお世話で、水漬資料を拝見させていただいた。

[6]吉岡泰英氏のご指摘による。

[7]小都隆「草戸千軒の井戸」『考古学研究』第26巻第3号、考古学研究会、1979

[8]岩本正二「西日本の中世井戸—広島県草戸千軒町遺跡の井戸をめぐって—」『考古論集』潮見浩先生退官記念論文集刊行会、1993

[9]鈴木康之「草戸千軒町遺跡出土の桶・樽について」『草戸千軒』No.229、広島県草戸千軒町遺跡調査研究所、1995

[10]吉岡泰英氏のご指摘による。

[11]吉岡泰英氏のご指摘による。

3. 考古学発掘資料による建物復原の現状と課題

吉岡泰英

1. はじめに

近年、遺跡に関するニュースを多く目にするとともに、そこで発見された遺跡をわかりやすく解説するために建物の復原図が示されることも多い。また、遺跡に関する関心も高まり、その保存と活用をはかることを目的とする整備事業が各地で実施されている。考古学発掘資料による建物の復原が研究として行われる例の多くは、こうした遺跡の保存と活用をはかることを目的とした大規模な整備事業に関連するものに限られているといってもよい状況にあるといえよう。

木造建築を主とする我が国において、過去の状況を物語る上部構造が残る例はほとんど見られず、検出された遺構から遺跡の往時の姿を具体的に認識することは一般の人々にとって困難であることから、その姿を具体的に体感することが出来る手法として、建物復原が採用されることによるものと考えられる。事実、こうした建物復原は多くの人から楽しく、わかりやすい整備として好意的に受けとめられている。

しかし、一方で研究者等から否定的な意見も表明されている。反対の立場の人々の主張するところは、発掘資料は解釈の余地が大きく、根拠に乏しく、学問的に正確な復原は不可能であり、こうした不正確な情報が広まることを懸念するという点にある。

確かに、建物復原は効果的であることから、安易に実施された場合の問題点が多いことも事実である。遺跡整備事業において実施される遺跡は、本来、事業における明確な目的があり、その目的によって、イメージ復原から、部分復原、外観復原、そして実物復原など、様々な手法が選択されなければならない。そ

して、こうした整備や復原事業の前提とならねばならないのが学問的研究、復原研究である。

「復原」は、残されたものを手がかりとして、学術的な調査研究に基づいて、元の形にもどす（復する）ことである。その建物の復原的研究成果の表現は、必ずしも実物大復原ばかりでなく、模型や図面なども含め多様である。また、こうした「遺跡整備事業としての復原事業」と「学問としての復原的研究」、言い換えるならば、復原研究（論文）および復原図と実物復原（復原設計）の間には大きな違いがあることも確認しなければならない。その違いは、建物として存在するためには、構造物としての安定が要求されることに起因する。すなわち、すべての部材を決めなければ建物は出来上がらないが、逆に論文は論証をすることが目的であって、不明な点を明確化することもまた意味があるということである。

先述したように、整備事業の中で実施される復原は学問研究に基づくものでなければならないが、復原根拠などの研究成果が公表されている例が少なく、その検証などが進んでおらず、研究の広がりが見られないことも反対論の背景として想定される。

ここでは、筆者が直接関係した一乗谷朝倉氏遺跡町並復原事業を一例として取り上げ、図面等の設計資料が少ない近世以前の遺跡において、主として考古資料に基づいて行われる建物復原の現状と課題についての若干の整理を行い、議論の材料を提供することとした。

2. 建物復原と考古学発掘資料

まず、一般的に考古学発掘資料から建物復原を行う上で基礎となることはどのような点であるのか、整理しておきたい。

建物復原に関わる考古学発掘資料は大きく直接的に建物に関わる資料（これを直接資料

と呼ぶこととする)と建物を類推する上で重要な間接的な資料(同様に間接資料と呼ぶこととする)に二分することができる。と考える。

直接資料は、一般的な遺構と呼ばれる礎石(据付け痕)・柱穴・地覆石・狭間石・基壇・敷石・土間叩き・張り床・転し根太(痕)・竈・炉・いろり・井戸など、原位置を保つものと、柱・梁・敷居・壁・建具・金具・瓦など、何らかの移動が認められる建築部材を主とする遺物に分類できる。

遺構は、一般的に平面や基本構造(礎石建・堀立)を示し、まれに土間や転し根太などの床構造等を示すこともある。また、雨落溝の位置により軒の出が決定されることも多い。基本的に「平面的」な資料といえるが、礎石や柱穴などから柱の大きさや建物規模等がある程度類推する場合もある。これに対し、建築部材などの遺物は、通常、一部であるが具体的な構造形式や寸法などの細部を決定することが可能となる。この中で最もよく建物の様子を示す資料は倒壊した建築がそのまま残る場合であることはいうまでもない。

建物復原における資料は、多くの人は上記した直接資料のみと考えられている。しかし、こうした直接資料と同じように重要であり、注意を払われなければならないのが次に示す間接資料である。

まず、全体地形や遺構の配置、地業などは個別建物用途の推定に欠かせない。建物平面を考察する上で重要な資料となる。また、多種多様な出土品やこれらの分布は、建物の機能、利用者・住人等の階層、技術や文化等の社会的背景を推定する材料となることを確認しておきたい。建築には木工のみならず屋根工・壁工・表具工・金具工など多くの技術者が関わり、こうした社会総体の技術、文化の具現されたものと考えてよい。いずれにしても、建物復原においては、これら直接・間接資料を総合し、全体的な年代観、空間特性などを決定すること無しには不可能であること

を認識しなければならない。

そして、具体的に建物復原研究を行う上では、こうした考古学発掘資料に加えて、文化財などとして現存する同時代の建物や絵画資料などの参考資料が加わり、復原設計図が出来上がることとなる。

3. 一乗谷朝倉氏遺跡町並復原における復原設計の考え方

一乗谷朝倉氏遺跡においては、特別史跡に指定された1972年以来、遺跡の調査・整備事業の全体構想に基づいて、専属の組織により実施されてきた。その結果、遺跡全体の把握や地区や屋敷などの区画の解明が進んでおり、復原対象とした遺構の屋敷の性格や建物の用途がほぼ明らかとなっている。また、復原事業も遺跡を保存し活用するということを目的とする整備事業の中に明確に位置付けられてきた。このように、周到に計画準備され、建物復原は実施に移された。この一乗谷朝倉氏遺跡における復原事業については、その報告書(特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡環境整備報告Ⅱ-武家屋敷の復原-・Ⅲ-町並立体復原事業-)で詳細を報告している。

ここではその建物復原実施に至る復原設計の考え方を示す中で、前述した考古学発掘資料と建物(復原)との関わりを具体的に示してみることとしたい。

具体例として、第一に門を取り上げてみよう。復原対象とした門遺構は礎石4で構成されるものと堀立柱2で構成されるものがある。前者の遺構の存在する屋敷の規模が後者に比べて大きく、こうした点から、それぞれの屋敷の住人の身分や格式の違いが想定される。門建物に直接関わる遺構は、こうした礎石や柱穴およびその間に配置された狭間石列である。これらに加え、両脇の塀の基礎部遺構や正面の石段など周囲の遺構全体が重要である。これらから門の構成を検討しなければならない。遺物としては、門の箱金物や饅頭

金物、門扉の八双金物が出土している。

我々が通常目にする門建物の例として、礎石4で構成される門は薬医門と高麗門が、堀立柱2で構成される門は棟門と冠木門がある。対象とする遺構は、いずれかと考えてよい。そこで、当時の絵画資料などの通例から見て、それぞれ薬医門、棟門形式と判断した。また、復原対象とした堀立柱2本の遺構の詳細を見ると、この柱穴の間隔は8尺であり、その柱穴形状がほぼ8寸角と判断される。また、全面の道路やその側溝、そして両脇の塀などとの配置関係から、門建物の軒の出は4尺程度と判断される。これを基礎資料として、現存する室町時代後期の門建物の実例や大工の技術書に記される各部の寸法などの「木割」から、柱間隔や柱太さとの比例関係を考察し、これに基づいて具体的な寸法を決定した。また、建物の外観を大きく決定づける屋根形式については、遺跡内では基本的に瓦の出土例がないこと、屋根材の可能性が考えられる板材が所々で出土していること、絵画資料などにおいては板葺が多いことなどから、基本的に長い割板を用いたものと推定した。

次に町家と考えられている建物について一例を示してみよう。

この建物跡が存在するのは、敷地間口約6メートル、奥行き約15メートルの区画が道路に面して連続的に配置される地区である。建物礎石は隣地境界の溝側石に接するように、ほぼ敷地間口一杯に配置されている。また、建物は、礎石配置から、基準柱間を1間6.2尺(1.88メートル)とし、正面2.5間、奥行き3.5間の規模であることが判明する。また、礎石間にも基本的に狭間石と考えられる少し小振りの石が並べられている。こうした礎石等の中で注目されたのは正・背面の中央に配置された一回り大きな礎石である。2.5間を二分する位置にあって、やや大きいことが他の礎石と若干異なる。その位置が正・背面の中央であることから、棟を支える柱と推定す

るのが合理的であると考えられた。洛中洛外図屏風などの絵画資料には、こうした妻の柱が棟まで延びて棟木を受ける構造の町家が散見されることからこの推定は補強された。加えて、遺跡内では、こうした小規模な屋敷を区画する遺構として溝が一般的であり、他には雨落溝が検出されることがまれであることも、このような小規模屋敷の建物として、妻入構造がふさわしいことを考えさせる。また、建物内部には奥半に埋甕遺構が存在し、これが住人の職業などとの重要な関わりを想定させる。こうした埋甕遺構と関係する職業としては、染めもの・醸造などが考えられるが、小規模な屋敷であり、またこうした戦国期の都市で最も多かった職業が染めもの業であること、埋甕にセット関係が認められることなどから、染めもの職人の住まいの可能性が高いと考えられた。そこでそのように仮定することとした。また、こうした埋甕遺構や井戸などの配置された部分は土間と考えられること、内部に独立的に配置された一つの礎石に柱が立ち、これが建物内部の仕切りに強い関わりがあると考えられることなどから建物平面を推定した。建物の柱の大きさについてはこの建物遺構から直接知ることは出来ない。しかし、遺跡内で検出されている礎石上の痕跡や柱の断片などから、これを採用した。構造については当然、前述したように正・背面に棟持柱を配した妻入となる。これを前提に、室町時代の民家構造などを参考にし、基本構造を想定した。また、絵画資料等を参考にすれば都市の民家においては板葺が一般的であること、隣地との境の溝が雨落溝とするのが合理的であるが、屋根を茅葺とすれば隣接する建物との間隔が3尺程度と狭く困難であるが、板葺とすれば矛盾が生じないことなどから門同様の長い割板を用いた板葺とした。そして、絵画資料等を参考に、その押さえは、丸太もしくは割り木を基本とし、要所に石も併用することとした。

この他、遺跡内では直接資料として前述した屋根材や柱・建築金物のほか、敷居・畳・壁土などの建物の様子を具体的に物語る遺物が出土している。柱の断片からは寸法のみならず、その面取りが1/10であること、仕上げに台鉋や手斧が用いられ、この台鉋仕上げのみられる柱材質は檜であり、手斧仕上げは松や栗材であることも知られた。また、敷居の溝の深さ、幅、配列などから板戸と障子を用いた建具形式や戸締まりの形式が知られた。壁材からはその厚さと柱太さの関係から真壁構造があったこと、下地となる小舞に茅が用いられていたこと、仕上げは荒壁・中塗仕上げ・砂壁など多様であり、また布着せという高度な技術が用いられる例もあったことなどが知られた。この他、煽り止め、錠前、引き手、八双などの建築金具も多彩である。このほか、畳の断片が検出されており、その普及もわかれる。また、何より重要なことは、長年の調査により、この町の建物は基準柱間寸法が1間 6.2尺でほぼ統一されており、専門の技術者集団によって建てられていたと考えられることである。こうしたことを総合的に判断すれば、この町の建築技術の水準は極めて高度であったことも判明する。これに加えて、極めて多量の生活用具、茶道具、文房具、工具などが出土しており、「茶の湯」の普及に示されるように、都市としての文化の高さも知られる。こうした建物を取り巻く社会環境全体を考慮しないで個々の遺構を建物として具体的にまとめあげることは出来なかったといえよう。

もちろん、こうした考古学発掘資料を検証する上で、現存する建物が参考となったことはいままでのない。こうした検証を通じて、具体的な寸法などを決定し、設計を行い、工法を決定し、建物復原はしたものである。

4. 考古学発掘資料による建物復原の課題

最後に、前述した一乗谷朝倉氏遺跡の建物

復原の実例を踏まえ、今後の建物復原の課題を整理してみたい。

まず、第一に指摘しなければならないことは、遺構調査への建築史関係者の関わり方である。一乗谷朝倉氏遺跡における建物復原の考え方を示したが、このような復原に至ったのは筆者が当初から遺跡発掘調査に従事し、その中で常に建築（上部構造）を考えてきたことによる。この点が極めて重要であったと考えている。一般的に遺跡調査に従事するのは考古学研究者であり、建築史研究者が加わる例は少ない。建築史研究者は、建築遺構が検出された後にコメントを求められるのが通例である。しかし、多くの遺跡が建築遺構であることを考えれば、発掘調査において、建築史専攻者が参加することが必要であると痛感している。遺跡整備において、復原的整備が検討されているのであればなおさらである。多くの復原事業においては、建築史専攻者が参加するのは発掘調査終了後である。そのため、復原考察を行う場合、発掘調査結果のみから判断することを余儀なくされる。一例を示せば、ある建物遺構において、「ある個所の柱痕跡が無い」という調査結果が示されたとしよう。この解釈において、当初から柱が「無かった」のか、それとも何らかの事情（削平、調査における見落としなど）で「検出されなかった」のかによって、復原における考え方は大きく異なるのである。「柱無し」の構造とするかのか、それとも「柱が存在した可能性を採用する」のかという正反対の結果が生じるのである。これはある程度、調査過程で意識があれば解決されることであるといえる。

第二に、考古学発掘調査事例の目覚ましい増加によって蓄積された建物復原の基礎となる資料は膨大であるが、これらの資料を建築史研究の資料として活用するための基礎作業が必要とされることである。一つは、これらの資料の集成と検証である。なお、遺構につ

いて考えれば、遺構は前述したように基本的に建築の平面の解釈を主として行うこととなるので、建物の用途などの特性の把握が必要であることはいうまでもない。これまでに蓄積された資料の収集、検討を行う上での基準は、ある程度広範囲な調査が実施され、空間特性等の判断が可能かつ検証の可能な調査事例を中心とすべきである。また、古代の内裏や官庁などの最上質の建物を別とすれば、掘立と礎石建の違いは大きいと考えるが、これをどのように考えるのか、整理する必要があると思われる。

遺物についての考古学発掘資料の蓄積が建築史関係者の間で十分に認識されていないのが現状である。中でも建築に直接関わる建築部材は重要である。一つの遺物は、材質や加工法などを通じて極めて多くの情報をもたらす。特に古代建築においてはこうした建築部材を検証することが必要であると思われる。マスコミに大きく取り上げられた遺跡はもとより、今回の実見することが出来た惣利遺跡や吉野ヶ里遺跡の出土部材に示される建築技術の情報は示唆に富む。これらの部材は技術の到達度、地域の差異等を明確に示し、新たな知見を与える資料である。こうした資料の集成を行うことは建築を支える技術などの社会環境を知る上で不可欠と考える。同時に、こうした建築部材等を加工する技術の基本となる工具や使用痕等も部材同様に技術の到達度、地域の差異等を示す貴重な資料であることから、並行して、その集成を行うことが必要であると考え。付け加えれば、こうした作業は、これまでの建築史の常識の変更を迫る可能性を秘めていると思われることを指摘しておきたい。

第三に、間接資料の重要性である。中でも建築を考察する上で、空間特性の把握は不可欠である。よく個別の建物遺構を示し、その建物がどのようなものであったのかを尋ねられることがあるが、返答に窮する。基本的に

建物遺構が全体の中でどのような位置にあるのかの検討なしで、その建物の性格を考えることは出来ないし、ましてや復原案を示すことは不可能である。本来、屋敷（敷地）全体の構成等の把握なくして、（個別）建物のプランのみからは、その機能等の特定は出来ない。したがって、復原考察も困難となる。空間の特性を知るためには、屋敷（敷地）全体の構成等の把握の必要性が不可欠であるといえる。また、こうした空間把握を行い、建物平面的考察を終え、その上で上部構造の復原が始まるが、一乗谷朝倉氏遺跡における復原事例で示したように、ここにおいても間接資料が重要である。基本として、建物はその建築を取り巻く社会環境の反映である。階層や地域などにより、技術、材料の違いを想定しなければならぬ。近世以前において現存の建築にも増して、地域による技術等の差異が大きいことも留意すべきである。吉野ヶ里遺跡の出土工具等に端的に示されるように、古代以前においては大陸との交渉によって九州北部等の技術の先進性が顕著である。また、中世という広い意味での同時代においても、万徳院跡、吉川元春館跡、名護屋城跡と一乗谷遺跡等これまでに知見している石垣積技術等を比較した時、地域による技術・方法の差は大きい。また、都と地方、都市と農村などの集落における違いは大きいことを認識しなければならぬ。戦国大名の支配拠点としての都市遺跡である一乗谷においては、建物は基本的に礎石建であるが、同時代の一般的な集落遺跡などでは掘立柱建が通例であることは周知のとおりである。また、復原考察の対象とする遺跡（場）の文化などの環境を見極める必要がある。博物館内の実物大建物復原の事例として評価の高い草戸千軒遺跡を例に取り上げ、私見を述べてみよう。この事例は、絵画資料に見られる中世の町的一端を具体化したようにみえる。しかし、ここでは長年の発掘調査により、多量の資料が出土している。

直接的に建築と関わる建築部材も柱、土壁、壁小舞、瓦など多彩であり、その技術も高度である。それにも増して重要と考えるのが井戸の部材である。多くの遺構が削平されている中で地中深く築かれた多くの井戸が残されている。この井戸の多くは井側として木材が用いられているが、この材質は基本的に杉や檜であり、かつ大径である。この事実は上質の木材がこの町に多量にもたらされていたことの証左であり、これと、前述した高度な建築技術を合わせて考えれば、展示に示された復原案とは異なったものになるのではなかろうか。

最後に付け加えれば、いずれにしても、復原事業にはその報告書の刊行が必要である。その概要さえも報告されない場合も見られるが、建物復原が建築史にとって意味あるものとなるためには、その復原考察が公表され、その検証が広く行われることが必要であることはいうまでもなかろう。

4. 北東北にみる古代住居跡の一例

高島 成侑

1. はじめに

日本列島の北東北において、9世紀後半から11世紀にかけての遺跡から、竪穴住居跡と掘立柱建物跡とが一体となったとみられる遺構が発見されてから、はや10数年が経過している。その遺構としての性格の解明は依然として進んでいるわけではないが、遺構そのものは青森県内と秋田県内とで増える一方である。

ここでは、その実例を引きながら、これらの遺構が一体の住居跡であるとした見解を述べ、検出された地域とその形態とを比較しながら、現段階における考えをまとめてみた。

2. 最初の発見

この形の住居跡を最初に検出したのは、青森県・発茶沢(1)遺跡においてであり、1986年から87年にかけてであった。かなり大きな古代集落が営まれていたと考えられる遺跡であり、住居跡も数多く検出されていたのであるが、その中の11棟ほどの遺構に、掘立柱建物跡が竪穴住居跡と一体となる形態が認められたのである。

図-1にみるように、そのなかの大部分のものは、竪穴の周囲に周堤跡が築かれており、その竈跡側に掘立柱建物跡がつながるような形を示している。この発茶沢(1)遺跡で掘立柱建物跡と竪穴建物跡とがつながって一体となると考えたのは、掘立柱建物跡の竪穴側で、柱間の中心となる柱穴が無いか、あっても浅すぎるものであり、掘立柱建物が竪穴建物に寄りかかるようにでもしなければ、建たないのではないかと考えたからであった。例えば、図-2にみるように、発茶沢(1)遺跡・第205号住居跡は、二期の掘立柱建物跡がみられるの

であるが、このような形で竪穴建物跡と一体となっているのである。*1)

ここで問題視されたのは、竪穴建物跡と掘立柱建物跡との同時性をどう証明するかということであった。発茶沢(1)遺跡の遺構は、掘立柱建物跡の竪穴建物跡と接する部分での柱穴の並びから、独立して建つ掘立柱建物跡と考えることが困難であり、あるいは、竪穴建物跡と一体であった構造かもしれないという発想から出された説であり、両者の同時性の証明は必ずしも十分でなかったことは否めないところであった。

3. その後の展開と津軽浪岡地方

それからまもなくして、青森県・朝日山(3)遺跡において、図-3のような遺構が検出された。朝日山(3)遺跡にはこの遺構一つではなく、同様の竪穴建物跡と掘立柱建物跡とが一体となる形で18棟ほどが、隠れた斜面に整然と並んで建っており、ほとんどが斜面の上部に外周溝跡を廻して、竪穴建物跡と掘立柱建物跡とが一体となる形を強調しており、その出入り口なども示しているものであった。

報告書の発行が遅れ、確認は遅くなったが、先に発茶沢(1)遺跡で問題視された掘立柱建物跡との同時性に対する疑問は、これによって解消されたようであった。*2)

そしてこの頃から、津軽・浪岡町周辺において、次々にこのような形態の遺構が検出された。外周溝跡だけではなく、その先端に排水された水を溜めたとみられる大きな土坑跡をもつものもみられるようになり、また、これまでは9世紀後半から11世紀までと長くみられていたものが、9世紀後半から10世紀初頭まで、とか9世紀の半ばから後半、というように、より古くみられる遺構が多く検出されるようになった。野尻(1)遺跡をはじめ*3)、野尻(2)遺跡にもあり*4)*5)、野尻(3)*6)、野尻(4)遺跡にも確認された*7)。

これら野尻の(1)、(2)、(3)、(4)遺跡は、道路に掛かる緊急調査によるものであり、その遺跡としての全貌は窺い得ないのであるが、図-4、図-5にみるように、この建物跡があたかも町並みを形成するような形態で、それも同じ向きをもって並んで検出されたことは驚きであった。

この浪岡町の野尻周辺が、今のところ、もっとも早い時期にこのような竪穴住居と掘立柱建物が一体となった建物跡が造られたところとみられる。野尻(3)遺跡では10棟がそれにあたり、野尻(4)遺跡では25棟以上があり、野尻(2)遺跡では1棟、野尻(1)遺跡では少なくとも13棟を数え、総計少なくとも49棟となる。

そして最近になって、このほかにも少しづつではあるが同様の遺構が検出されている。鱒ヶ沢の外馬屋前田(1)遺跡で1棟があり*8)、青森市の野木遺跡でも1棟が検出されており*9)、さらには津川遺跡にもあり、昨年から発掘が始まった野尻(4)遺跡の拡張部分においても、数多くのこのような建物跡が建っていたことが検出されている。

つまり、竪穴建物跡と掘立柱建物跡とが一体となった住居跡は、青森県の津軽・浪岡町付近がその始まりのようであるが、上北の六ヶ所村において検出された発茶沢(1)遺跡にあり、また、青森市や鱒ヶ沢町、五所川原市などとある。また青森県外においては、秋田県の米代川流域に多くみられることが報告されており、秋田県埋文センターノ高橋 学氏も注目されている*10)。

ただし、秋田県の遺構は、竪穴建物跡の竈跡側に掘立柱建物跡が取り付くものもあるが、そうではない側に付くものもあり、これらを同じ物として一緒にしてみているようなところがあり、青森県の場合とは少し異なるようでもある。

これらの建物跡は、竪穴建物跡は竈跡がどちらかに寄って造られており、支柱穴がその

脇の前面腰壁に寄り添って2本あり、あとの2本は後方の対角線上にある、という構造である。そして掘立柱建物跡は2間に2間、あるいは2間に3間というほどの規模である。

これらをまとめたのが表-1である。ここには現段階で確認された一つづつについて、掘立柱建物跡と竪穴建物跡との規模や接続する間隔などについて挙げてある。また、外周溝跡の有無やその廻る範囲、先端部の土坑跡の有無などについてもまとめてある。この表から何を読みとるかは今後の課題であり、まだまだ同様の遺構が増えそうなどころでもある。いましばらく、様子をみたい。

4. むすび

上に述べた竪穴建物跡と掘立柱建物跡とが一体となる建物跡(住居跡)は、青森県においては9世紀半ばから始まり、10世紀から11世紀までも建ち並んでいたのである。一つの大きな集団をなしているようにもみられ、かなりの数の人々が、このような住居跡に住んでいたとみられる。

そのような住居群に住む人たちはどこから来たのであろうか。また、住居群の中で1棟だけ、この形式をもつ住居跡が検出される遺跡もあることは、いかなる意味を持っているのであろうか。これからの課題としたい。さらに、この種の建物跡が検出されているのは、いまのところ青森県内と秋田県の米代川流域と考えていたのであるが、最近になって、福島県でもあるということを知り*11)、また、山形県*12)や石川県・寺家遺跡でもそれらしいものが検出されている、と聞いている。これらの地域の古代史を調べる上でも、重要な事実となるのではないかと考えている。

註

- 1) 畠山 昇「発茶沢(1)遺跡Ⅳ」1989
青森県教育委員会
- 2) 白鳥文夫「朝日山(3)遺跡」1994

- 青森県教育委員会
- 3) 大田原潤「野尻(1)遺跡Ⅰ」 1998
青森県教育委員会
 - 4) 伊藤昭雄「野尻(2)遺跡」 1994
青森県教育委員会
 - 5) 大湯卓二「野尻(2)遺跡Ⅱ」 1995
青森県教育委員会
 - 6) 大湯卓二「野尻(3)遺跡」 1996
青森県教育委員会
 - 7) 新岡 巖「野尻(4)遺跡」 1995
青森県教育委員会
 - 8) 畠山 昇「外馬屋前田(1)遺跡」 1998
青森県教育委員会
 - 9) 木村 淳一「野木遺跡発掘調査外報」
1997
青森市教育委員会
 - 10) 高橋学「竪穴住居と掘立柱建物跡が並
列して構築される遺構について——能
代市福田遺跡・十二林遺跡を端緒とし
て——」1989『秋田県埋蔵文化財セン
ター研究紀要』所収
 - 11) 飯村 均「福島空港・あぶくま南道路
発掘調査報告2」1998(財)福島県文
化センター
 - 12) 菅原祥夫「平安時代における蝦夷系土
器の南下——蝦夷の移住をめぐっ
て——」2000 阿部正光君追悼集刊行
会『阿部正光君追悼集』所収

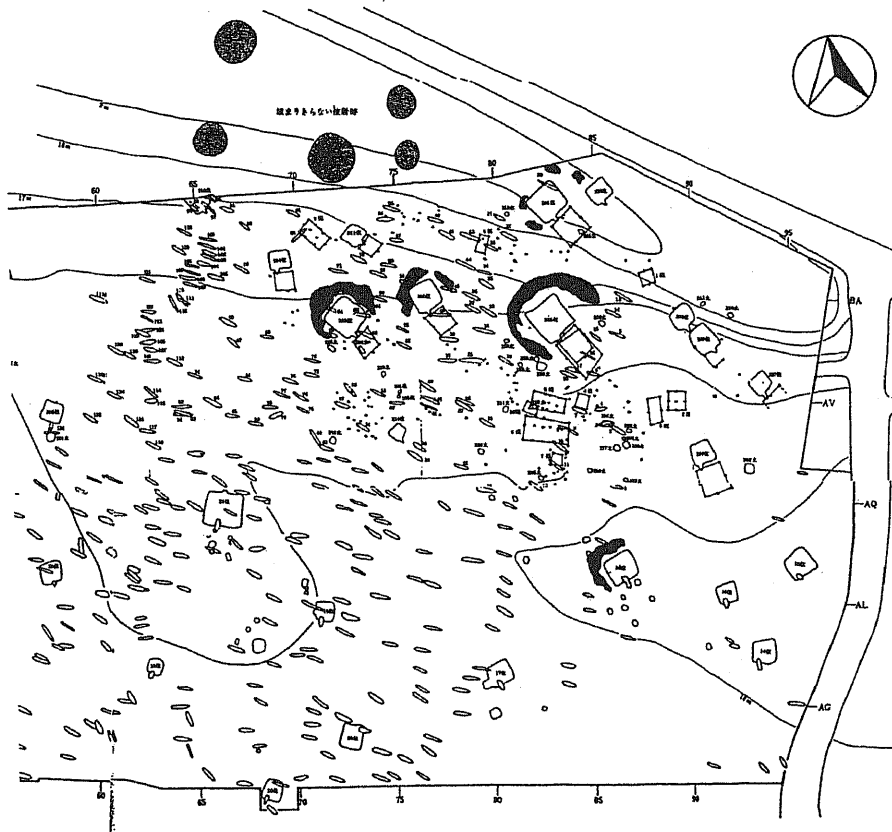


図1 発茶沢 (1) 遺跡 遺構配置図 (発茶沢 (1) 遺跡 報告書より)

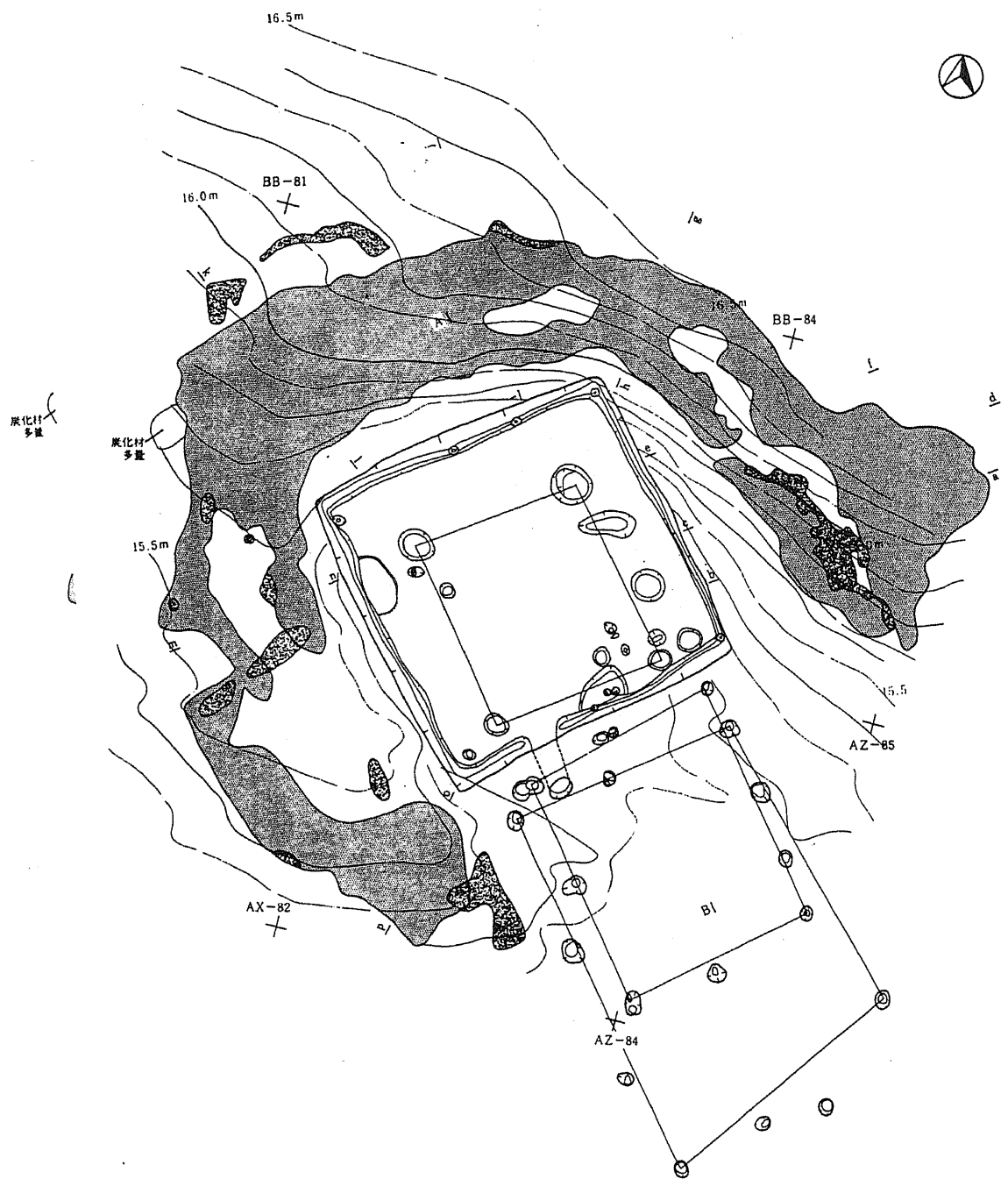


図2 発茶沢(1)遺跡 第205号住居跡(発茶沢(1)遺跡 報告書より)



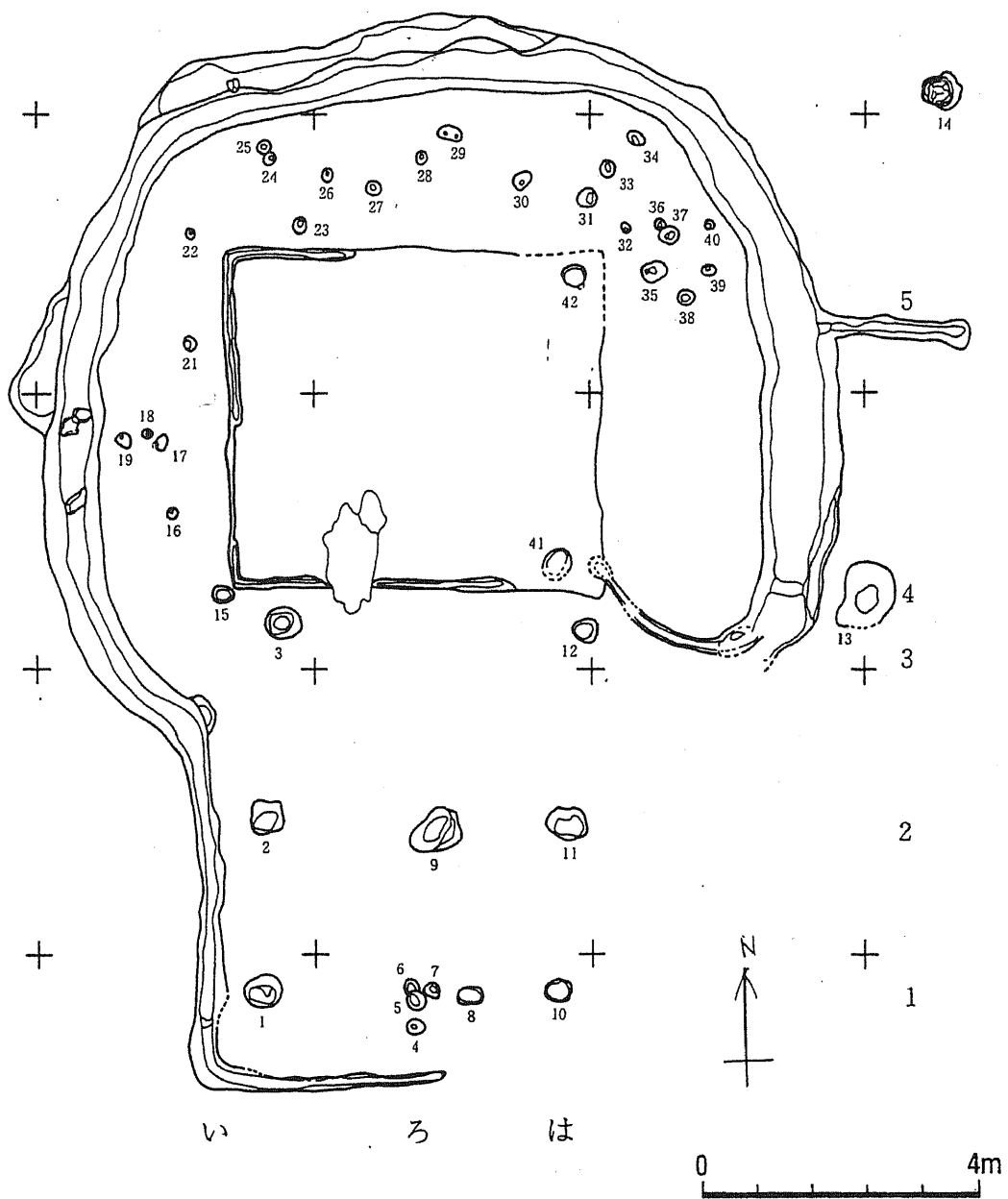


図3 朝日山(3)遺跡 401号住居跡 (同 報告書より)



図4 野尻(3)遺跡遺構配置図(同報告書より)

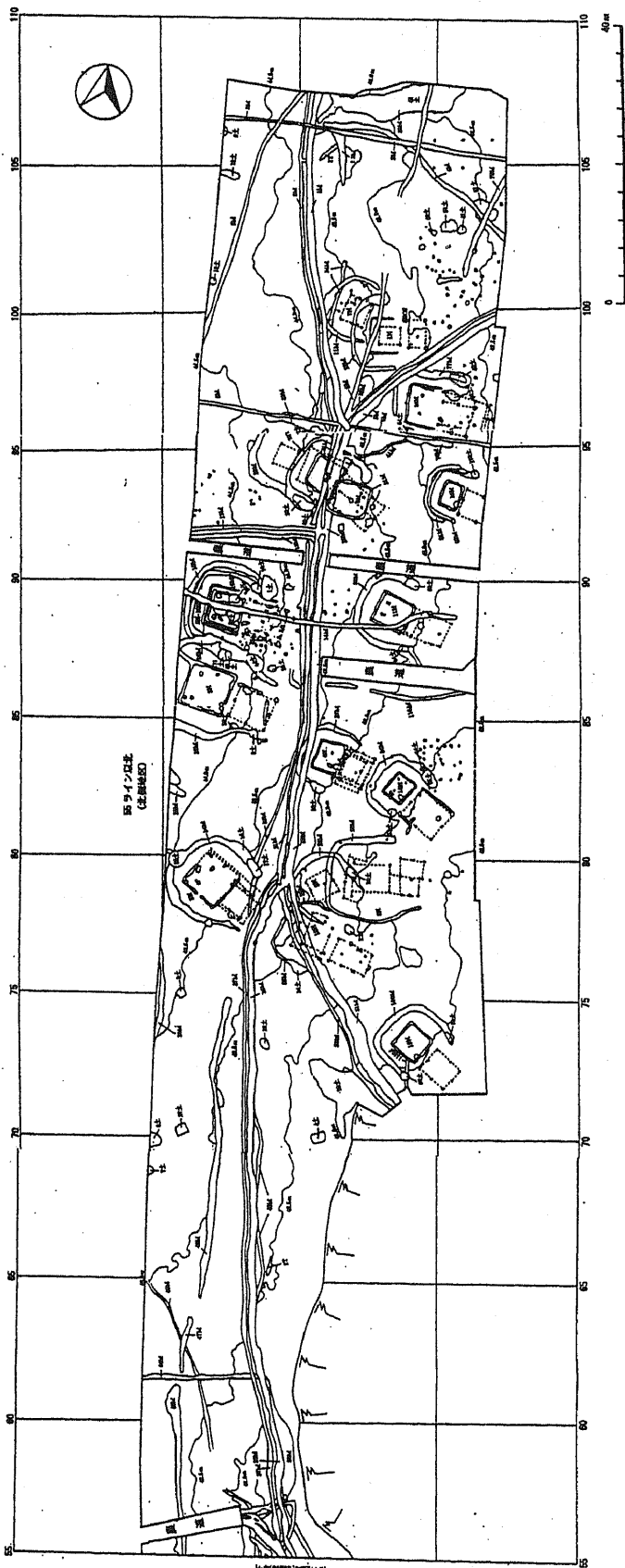
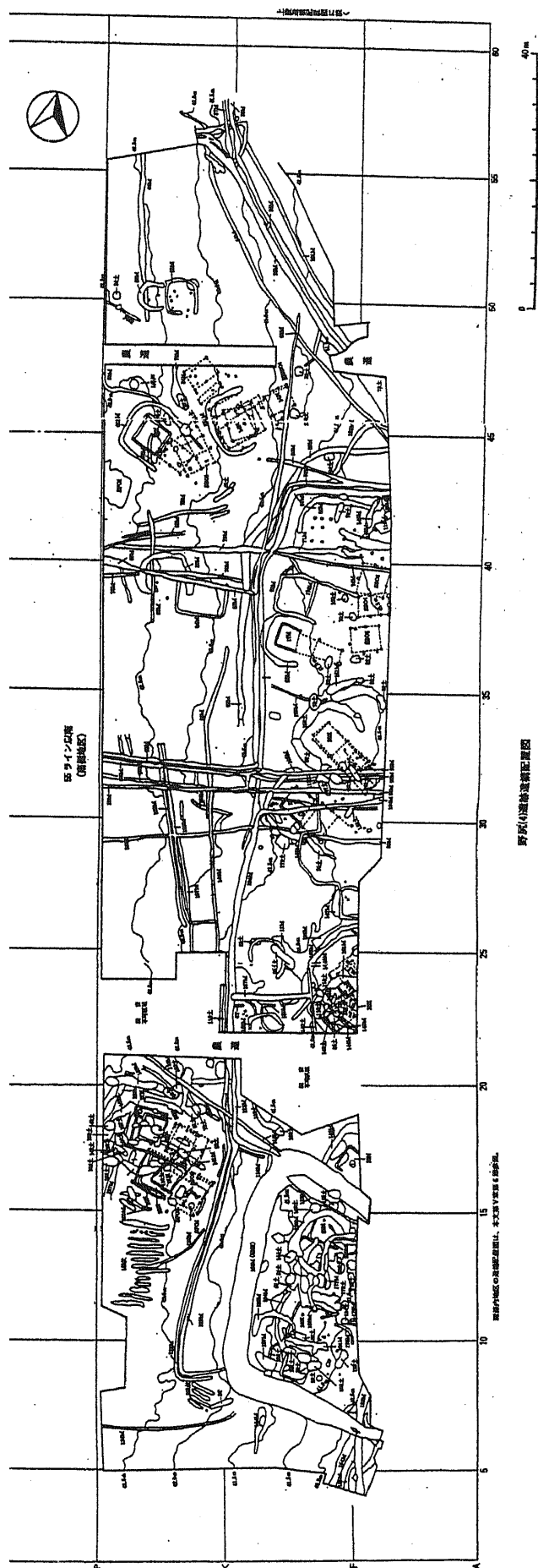


図5 野尻(4)遺跡 遺構配置図 (同 報告書より)

表1 竪穴建物跡 + 掘立柱建物跡 集計表

遺跡名称	遺跡名称	竪穴の面積(m ²)	掘立柱の面積(m ²)	竪穴の位置・特徴	竪穴部分の深さ(掘立柱)と掘立柱の間隔(cm)	外周溝の有無	外周溝の掘削範囲	外周溝先端の土質	年代
野原(1)遺跡	第201号住居跡	31.7	30.0	南壁やや西より。半地下式。	2×2	無		無	古小牧火山区以東。平安時代。
野原(1)遺跡	第202号住居跡	21.8	20.0	南壁やや西より。半地下式。	2×2	無		無	古小牧火山区以東。平安時代。
野原(1)遺跡	第203号住居跡	35.2	15.0	南壁やや西より。	1×2	無		無	古小牧火山区以東。平安時代。
野原(1)遺跡	第204号住居跡	13.1	12.0	南壁やや西より。	1×2	無		無	古小牧火山区以東。平安時代。
野原(1)遺跡	第205号住居跡	43.1	27.0	南壁やや西より。	2×2	無		無	古小牧火山区以東。平安時代。
野原(1)遺跡	第210号住居跡	16.8	28.0	南壁やや西より。	2×2	無		無	古小牧火山区以東。平安時代。
野原(1)遺跡	第211号住居跡	7.3	10.0	南壁やや西より。	1×2	無		無	古小牧火山区以東。平安時代。
野原(1)遺跡	第402号住居跡	24.7	不明	南壁やや西より。地下から半地下へ作り直えたとと思われる。	2×1	無		無	古小牧火山区以東。平安時代。
野原(1)遺跡	第102号建物跡	16.9	不明	不明	2×2	有	西側・北側	有	平安時代。
野原(1)遺跡	第106号建物跡	63.0	不明	南壁やや西より。	2×2	有	南西の一部のみ	無	平安時代。
野原(1)遺跡	第109号建物跡	31.0	不明	南壁やや西より。	3×2	有	南西の一部のみ	無	平安時代。
野原(1)遺跡	第110号建物跡	21.3	不明	南壁やや西より。半地下式。	3×2	有	西側のみ	無	平安時代。
野原(1)遺跡	第111号建物跡	27.0	23.3	南壁やや西より。	2×2	有	西側のみ	無	平安時代。
野原(1)遺跡	第112号建物跡	27.5	22.5	南壁やや西より。	2×2	有	南壁以外を全周	無	平安時代。
野原(1)遺跡	第401号竪穴住居跡	40.0	14.0	南壁やや西より。	1×2	有	西側・北側	無	平安時代。
野原(1)遺跡	第406号竪穴住居跡	19.0	14.0	南壁やや西より。	2×2	有	西側・北側	無	平安時代。
野原(2)遺跡	第1号建物跡	22.5	28.0	東壁北より。塀土のみ。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第1号建物跡	17.0	不明	東壁南より。塀土のみ。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第14号建物跡	23.1	17.1	東壁南より。塀土のみ。	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第15号建物跡	22.3	12.4	東壁南より。塀土のみ。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第16号建物跡	24.6	14.1	東壁南より。塀土のみ。	1×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第17号建物跡	35.4	13.0	東壁南より。	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第18号建物跡	62.1	31.2	不明	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第19号建物跡	38.3	15.3	東壁南より。	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第11号建物跡	38.3	16.3	東壁南より。	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第13号建物跡	17.8	16.7	東壁北より。塀土のみ。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第14号建物跡	23.0	17.9	東壁北より。塀土のみ。	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第15号建物跡	42.2	21.1	東壁南より。塀土のみ。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第16号建物跡	21.3	18.0	東壁南より。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第13号建物跡	28.2	28.0	不明	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第14号建物跡	21.5	20.0	不明	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第15号建物跡	19.4	22.3	不明	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第16号建物跡	20.2	19.2	不明	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第17号建物跡	49.0	22.2	東壁南より。	1×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第18号建物跡	24.8	12.8	東壁南より。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第19号建物跡	21.7	9.4	東壁南より。塀土のみ。	1×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第20号建物跡	17.8	22.3	東壁南より。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第21号建物跡	35.1	28.3	東壁南より。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第22号建物跡	14.4	16.1	東壁南より。塀土のみ。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第23号建物跡	29.1	12.3	東壁南より。塀土のみ。	1×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第24号建物跡	17.8	32.1	東壁南より。	2×3	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第25号建物跡	19.6	10.4	不明	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第26号建物跡	27.2	23.4	東壁南より。塀土のみ。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第27号建物跡	19.4	15.3	東壁南より。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第28号建物跡	17.1	20.6	不明	2×3	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第29号建物跡	15.2	15.0	東壁南より。	2×4	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第30号建物跡	19.3	11.4	不明	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第31号建物跡	7.8	11.5	東壁南より。	1×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第32号建物跡	25.7	14.0	東壁南より。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第33号建物跡	9.7	19.4	東壁中央。	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第34号建物跡	9.0	28.7	東壁南より。塀土のみ。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第35号建物跡	14.9	16.0	東壁南より。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第36号建物跡	12.8	29.8	東壁南より。塀土のみ。	3×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第37号建物跡	19.3	14.2	北壁南より。	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第38号建物跡	10.4	5.5	東壁南より。	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第39号建物跡	19.8	20.0	不明	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第40号建物跡	28.0	16.2	東壁南より。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第41号建物跡	32.9	26.1	東壁南より。塀土のみ。	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第42号建物跡	9.7	27.9	不明	4×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第43号建物跡	17.2	20.0	不明	1×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第44号建物跡	13.4	7.1	南壁西より。	2×2	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第45号建物跡	不明	32.8	不明	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第46号建物跡	11.0	11.6	不明	1×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第47号建物跡	9.7	27.9	不明	2×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。
野原(2)遺跡	第48号建物跡	15.8	15.5	東壁南より。	3×1	有	東六部分西側・南側・北側	有	10世紀後半。

5. 発掘部材による建物復原の試み

中田信一郎

はじめに

1999年10月16日、福岡県夜須町惣利遺跡整理事務所において、同遺跡出土の発掘部材による建物復原の研究会が行われ、参加する機会を得た。研究会の内容は、「発掘部材を丁寧に観て、その部材が建物のどこに当るのかを具体的に確定する」ことであり、考古学や建築史学、建築技術史など、様々な方面からの検討が行われた。以下に、当研究会の内容を整理し、それを基に自分なりに古建築の復元を行いたいと思う。

1 惣利遺跡の概説

惣利遺跡は、福岡県朝倉郡夜須町に位置する、弥生時代前期から中世にかけての集落遺跡である。弥生時代の北九州地方は、他の地方に先駆けて大陸からの先進文化を取り入れた地域であり、吉野ヶ里遺跡などの大規模環壕集落を中心に多数の遺跡が存在する。同町にも、弥生時代中期の甕棺墓を主とした峯遺跡や、弥生時代後期の大規模集落跡であるヒルハタ遺跡、大規模環壕集落である追額遺跡など、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が数多く存在する（図1）。

当遺跡の調査は、県道改良事業と県営ホ場整備事業に伴い実施され、1994年6月15日から1995年3月21にかけて約20,000㎡が調査された。県道改良事業区域内を県道調査区、ホ場整備事業区域内を県ポⅠ区・県ポⅡ区というように3カ所に分けて調査は行われた。県道調査区からは溜め池状遺構と溝状遺構、県ポⅠ区からは竪穴住居136棟の他に掘立柱建物・柵列・甕棺墓・土坑・土坑墓・溝などが検出された。県ポⅡ区からは竪穴住居115棟

の他に古墳5基・土坑・土坑墓などが検出された。特に県道調査区では、溜め池の中から弥生時代前期?古墳時代までの土器や木製品などが多量に出土した。木製品をみると、弥生時代の木製品は、鋏・鋤・杵・臼・斧柄・杓子・編籠・紡錘車・案・槽・椀・容器・弓など、多種多様であり、類例の少ない貴重なものもかなり認められる。また、柱・床材・梯子などの建築材が膨大な量で出土した。古墳時代の木製品は建築材がほとんどで、ホゾ付きの柱や扉および扉の軸受け・門・鼠返しなどが出土している。その出土木製品の多さ、多様さから、当時の生活文化を知る上で重要な遺跡である。

2 出土部材の検討

扉（6001/6002/6005） 扉は3枚とも古墳時代のもので、いずれも井戸枠に転用されていた。6001と6002は対になり、門が通された状態で出土した。6005にある欠込みは、転用時に井戸枠の噛み合わせのために加工されたものである。樹種は導管が確認されるので、広葉樹である。木取りは板目で、材色の違いから、扉軸と反対側に辺材（白太）を使用していることが分る。現在では辺材は腐りやすいので、製材段階で捨ててしまうのが普通である。

表面には手斧（チョウナ）による明瞭な加工痕が残る。門のない裏面や軸側の方が工具痕がよく残っている。風食の多い方が建物の外側に面していたと考え、門を有する面が外に面していたことになる。

6002と6005には軸部の割れを補修するための穴がけられており、6002には穴の中に桜の皮が残る。桜の皮は、軸が割れたのを補修するために、上記の穴に通して縛り合わせる紐に使用されたものと思われる。6005には、軸部の割れに伴う欠損部に埋木を施しているのが、材色の違い（埋木部分は、上記の辺材部

分と同様、周辺部と比べ色が白い)から確認出来る。

6002と6005は扉軸が一方欠損しているが、6001の扉軸は上下残っている。扉軸は上下で長さが異なる。上軸(長軸)は下軸(短軸)の約2倍の長さがある。このことは、扉の取り付け方(扉を取り付ける際、マグサなど扉の上に位置する部材にあげられた穴に長軸を突っ込み、蹴放しなど扉の下に位置する材にあげられた軸受けの穴に短軸を落とし込むという方法)に起因すると考えられる。このように考えると、扉は建て込みではなく、建て付けであったことになる。出土したマグサ材の軸穴が貫通すること、軸部に割れの補修が施されていることから、取り外しが可能な建て付けであったことが示されよう。

扉の高さは1m強である。このように扉高が低いと、平屋の建物であった場合入室時にもぐり込まなくてはならなくなるので、この扉のように扉高が低いものに関しては、高床建物の扉である可能性が高い。

梯子(6917) 弥生時代のもので、樹種は杉である。上記の扉(6005)と同様、井戸枠に転用された際の欠込みがある。鋸目の様なギザギザの線が入っているが、弥生時代に建築用の鋸は確認されていない(細工用のものなら、福岡県雀居遺跡の机に確認される)ので、鉄鑿の痕と考えられる。表面は手斧(チョウナ)で仕上加工されているが、杉は断面に年輪が出て凹凸が出易いので、一見した所、割肌(手斧による仕上がらない、割ったままの面)のように見える。

敷居(6918) 全長約311cm、幅約18cmの、三角形断面の板材である。材は両端で欠損しているが、ほぼ全長に近い長さが残っていると思われる。下面に欠込み(幅約15cm)、上面には木舞穴(長さ約2.5?3.0cm、幅約3.0?3.5cm、深さ約2.0cm)を有する。下面の欠込みを根太受け、上面の木舞穴を壁

心材の受けとすると、全長が3m強あることと考え合わせて、梁行方向に架かる敷居材が考えられる。

下面は削平されているが、根太受けと思われる欠込みの痕跡があるので、元々それほど厚い部材ではなかったと考えられる。欠込み(幅約15cm)がはっきりと確認されるものは3つ(図4-3裏面の実線)、他にその可能性のあるものが3つ(同破線)ある。欠込み間の間隔は平均して35cmであるが、各々の間隔は25cm?48cmとばらつきが大きく、はっきりと確認できる欠込み間の間隔も、30cmと40cmで10cmもの差があり、一定した値にはならない。欠込みの幅は約15cmあり、欠込みを根太受けとすると、根太は大引と同じくらいの太さが考えられ、桁行方向に長い建物が想定される。

上面には鑄があり、木舞穴が中心通りに約15cm間隔で10個、端のものを合わせれば11個認められる。木舞穴の他に、3ヶ所に比較的大きな穴が貫通する。

木舞穴の中に1つだけ、幅が2倍近い(図4-3表面のa, 5.0cm)ものがあり、この木舞穴と2つの貫通孔(同b, c)が材を大体4等分していることから、これらの穴は間柱を受ける可能性が考えられる。上記2つの貫通孔の間には、もう1つの貫通孔(同d)と木舞穴が1つあるが、この木舞穴は他と比べて中途半端なもので深さは浅く、削り間違いの可能性もある。また、b・c間のもう1つの貫通孔dは、b・cと比べて縦幅が狭く、bとの間に、その縦幅と同じ幅で溝がのびる。よってdは、間柱(b上にくる)に接する縦板をはめるための溝が、dの部分だけ、欠込みを付けたために下面が削平され(dの裏面には、同幅で欠込みが付く)、貫通した可能性がある。

そう考えると、木舞穴を有する区間に草壁または網代壁を有し、貫通孔間はそれとは壁構造が異なっていたか、または開口部であっ

て出入口の役割を果たしていた可能性が考えられる。特に1つの可能性として、b、cは間柱で、bに接してd端部まで小脇板がはめられ、敷居材の室内側に蹴放しを添え、幅60cm弱の片開きの扉か、もしくは幅30cm弱の両開きの扉を設けていたと考えられる。

上面の鑄の山は、木舞穴を有する面（幅約11.0cm）と、そうでない面（幅約7.5cm）とからなる。木舞穴は部材の中心に通って位置しているので、鑄の頂点は片側に寄っている。鑄が風雨仕舞いの役割を負っていたと仮定すれば、木舞穴を有する面が建物の内側にくる（壁が鑄頂より室内側にくる）と、風雨が鑄の山でとまらずに室内に吹き込んでしまうので、鑄の頂上で風雨がとまるように、木舞穴を有する面が建物の外に面していた（壁が鑄頂より外側にくる）と考えられる（図2）。上では、鑄が付くのは風雨仕舞いのためであるとしたが、当遺跡では建築材を薄く削って転用している例が多く認められ、三角形断面の転用材も確認されていることから、鑄については後の転用時の加工による可能性もある。

木舞穴を有する発掘部材には、長崎県壱岐原の辻遺跡出土の込栓式の大引材（弥生時代中期後葉）がある（図??参照）。材長324cmの完形品で、部材両端のホゾに、込栓が通る貫通孔を有するのが特徴である。木舞穴は大引材上面に直接穿ったもので、30～36cm間隔で8個の穴があく。原の辻遺跡出土の大引では、大引上に直接壁体がかかるため、根太の位置に制約された木舞間隔となり、開口部は設け難い。それと比べ今回検討した敷居材では、根太の位置に制約されずに壁体を設けることができ、敷居自身と根太の固定が考慮されている。原の辻遺跡出土の大引は弥生時代中期のもので、惣利遺跡出土の敷居材は弥生時代末・古墳時代のものであることから、構造上の時代的发展が窺える。

梁（6919） 全長約380cm、幅約13cmの板材である。両端に貫通する角穴を有する。穴の間隔は約3.3mであり、柱のホゾ穴であると考えられる。柱穴間隔から、柱心11尺位の梁間一間型建物の梁材であると思われる。

断面は楕円形で、材は薄い。このように薄い材では建築材として強度が出ないので、断面が楕円形に薄く削られているのは転用時の加工によるもので、元は丸太に近い太さがあったと思われる。部材長辺側の一方には、柱の当りと思われる欠込みが、もう一方には釘痕の様な小穴が無数に残る。欠込みのある方が建物の内側、小穴のある方が外側であろう。小穴は、建物が建っていたときについたのか、もしくは転用された後の加工によるのかは分からないが、いずれの場合も飾りをつけるなど、祭祀的用途に伴うもので、建築とは関係ないものと思われる。

桁（6920） 全長約299cm、幅約11cmの板材である。途中で折れているので元の全長は分からない。部材の中心付近に貫通孔（長さ2cm、幅4.5cm）を有する。穴は貫通しているが、小さいので柱ホゾとは考えにくく、転用時の加工の可能性がある。この部材も上記の敷居（6918）・梁（6919）と同様、転用時の加工により薄く削平されている。片側に残る突起部分を何らかの仕口と考えて、仕口加工を有する桁材であると思われる。

片側にある突起の機能として、①ホゾ・②渡顎仕口（渡顎仕口の凸部分のみが残り、梁の下端を受ける部分が全て削平された状態）・③長手方向の継手の3つの可能性が考えられる。①のホゾについては、突起部分にホゾの固定に伴う圧迫痕がないことから、可能性は薄い。②の渡顎仕口についても、上面の面取りが突起部まできているので、その可能性は薄いと思われる。しかし面取りに関しては、上記の敷居（6918）・梁（6919）と同様に転用時のものであるとも考えられる。③

の長手方向の継手については、材の大きさから推して突起部分は構造的に細く、弱い、壁で重量を受けていて、ただ横にズレないというだけのものであれば、十分に考えられる。

ホゾ付きの柱 (6201) 全長約255cm、径約15cmの丸太材である。上部に長さ約20cm、径約6cmの造出し(ホゾ)をもつ。表面は綺麗に面取りされている。表面の風食の具合が少ないので長期間使用されていたものではないらしい。干割れの様子から、地中に埋めていた長さは95cm、地表面からホゾまでの長さは140cm位であることが分る。上端のホゾは加工が丁寧で、先細りしていることから、これより上に伸びるものではないと思われる。また、造出しが先細りしているのに合わせて柱径が細いことから、造出し上に柱が付くとは考え難い。そうすると、造出しに鼠返しと台輪を落し込んで井桁に軒桁を組み、垂木を受ける屋根倉式の高床倉庫の柱(図4-5)か、もしくは総柱建物の東柱が考えられる。

同じ様な造出しをもつ出土部材として、愛媛県松山市古照遺跡出土の柱材がある(図?参照)。この柱材は床下の円柱部分に交互に直交する3段以上の貫穴をもち、造出し部分は不整多角形断面で、現状で15cmの長さしかない。一般に造出しを持つ柱は、造出しに鼠返しと台輪を落し込み、台輪上で井桁組の横板壁を受け、柱頭部はホゾで側桁を支持する造出柱式の高床建物に復元されるが、古照遺跡出土の柱材や当部材の様に造出しが短い場合には、屋根倉式か総柱式の高床建物を想定すべきであろう。造出柱式の柱材では造出し断面は長方形か方形であり、古照遺跡出土の柱材と当部材は多角形または円形であることから、建築形式の違いが言えるかもしれないが、今のところ出土例が少なく、確かなことは言えない。

隅柱 (6914) 全長約178cm、径約22cmの丸太材である。地中に埋まる部分を削った後、腐食防止のため焼いてある。同じように表面を焼いて腐食防止をしている例が、同時代の大規模環壕集落である、福岡県甘木市平塚川添遺跡出土の柱材(弥生時代後期)にみられる。炭化部位の長さから、地中埋没部分の長さは108cmであることが分る。部材は途中で折れていて、元の全長は分らないが、柱径の太さや、埋没部分の長さが1m強あることなどから、地上部分に出た柱の長さとして3m位の長さ(地下部分と地上部分の長さの比率を1:3として)があったと推測される。

上端部に、直角方向の2つの穴を有する。2つの穴の軸線が直角に交わることから、隅柱であると考えられる。穴の機能としては、①縁の受け・②大引受け・③間渡しの受けの3つの可能性が上げられる。①の縁の受けについては、上記のように、柱がさらに伸びるものと思われるので、その可能性は薄い。②の大引受けだとすると、炭化部位と穴との位置から床高65cm位の高床建物が想定されるが、高床式にしては床高が中途半端に低い。そう考えると、③の間渡しの受けの可能性が一番高い。また、穴の軸線が柱の中心にこないことから、間渡しの受けであると指摘できる。間渡しの受けだとすると、建物は平屋建物ということになる。

間渡しが柱の軸線の内寄りにくると、間渡しのワンスパンが大体60cmであることが、富山県桜町遺跡出土の柱材(縄文時代中期後半)と一致するのは興味深い。何か共通する、構造的な制約があって一致したのであるだろうか?

間渡しが柱の内寄りにくる理由として、外側に間渡しがきた場合、大引上に渡した一番外側の根太(柱の内側に添う)と、壁との間に大きな開きが出来てしまうことが上げられる(右図)が、この場合、床板を伸ばせば容

易に解決する問題である。他に考えられる理由としては、外見上の問題(例えば草壁だと、外寄りにした場合柱が隠れる)や、作業のやり易さなどが上げられるが、特に何らかの作業上の制約があったわけではなく、慣習的にそうしたと見た方がよいのかもしれない。

蹴放し (6903) 長さ約91cm、幅約15cm、厚さ約9cmで、軸穴径6.0~7.5cmと、小脇板を嵌める目違いホゾ穴と考えられる加工を有する。元の長さは割れていて分らないが、幅と厚さは当時のまま残っている。軸穴の反対側に、方立を受けると思われる四角い穴が残るが、割れていて確かなことはいえない。軸穴と方立穴の間隔は60cm位なので、扉幅60cm位の片開きの扉を受けていたものと思われる。

厚さが9cm以上あることと、想定される扉が大きいことから、平屋建物の蹴放しであると考えられる。材厚があるのは地面に直接置くからであり、扉が大きいのは、出土扉材で述べた通りである。高床建物の蹴放し材と思われるものが、三重県納所遺跡で2つ出土している。1つを紹介すると、「全長147cm、幅20cm、厚さ3cmの板材で、片側をへ字型に造り出す。径8.6?10.4cmの軸吊穴が内法69cm間隔に2ヶ所と、それぞれの外側に軸吊穴と前面を揃えて平面長方形の方立ホゾ穴が貫通する。材の裏面には両端部の背面寄りに浅い小ホゾ穴があり、L字型突起部には材の中央に長さ48cmにわたって深さ1cm程の抉りがある」というものである。6903と比較すると、材の厚さは6903の1/3しかなく、軸穴から想定される扉幅も35cm位で、かなり小型のものである。

このような特徴の違いから、高床建物と平屋建物の、蹴放し材が区別出来る。

マグサ (6905) 全長約109cm、幅約12cm、厚さは割れてしまっていて分らないが、

それでも6.5cmあり、構造材としても機能し得る厚みがある。軸穴(5.5cm)と方立が通ると考えられる穴(割れていて全体は分らないが、一方の幅は5.0cm)が残る。上記の蹴放しとは異なり、こちらの穴は2つとも貫通している。

普通マグサ材には、扉上部の戸当りを兼ねた、扉を取り付けた際に生じる隙間を塞ぐための凸状造出しが下端につく(三重県納所遺跡や、群馬県渋川市中村遺跡出土のマグサ材にみられる、下図参照)が、この材では割れてしまっていて分らない。しかし軸穴が通っている事から、マグサであると判断される。軸穴の径と、軸穴と方立穴との間隔が、上記の蹴放しと大体同じであることから、これらは対になる可能性がある。

軸受け (5104) 葦戸の軸受けである。葦戸は島根県出雲市三田谷I遺跡出土の発掘部材から、「頭付き板材に、頭と反対側の板部分に軸穴を穿ち、窓の小脇板壁にホゾ差し、頭部分と葦戸の軸で板壁を挟み固定する」といった取り付け方が明らかとなった。このような取り付け方であると、軸受け頭部分の壁の当りと軸穴の位置より、大体の壁厚(壁板の厚み)が分る。

扉のところで記したように、扉は建て付けであるが、葦戸は上記の取り付け方から、建て込みであることが分る。扉の場合は、その取り付け方から、上軸と下軸で約2倍の長さの違いが生じたが、葦戸の場合、軸は左右で同じ長さになる。

門の受け(鍵) 形は軸受けに似ているが、軸穴が丸ではなく四角い。葦の軸受けでもよいが、それにしても軸の回転に伴う摩り減りが無い。さて、「葦戸をどのようにして留めていたのか」という問題がある。葦戸は下ろしたままにしておくと、風などで持ち上がってしまう、その度にバタンバタンと煩く

てしょうがないのである。そこで、当部材を軸受けと同じように葦戸の下方に設けて門を通し、葦戸を留める門として用いたのではないか、という意見が出された。機能的にみてその可能性はあるが、この部材の場合、壁厚と葦戸の厚みを合わせた厚みがなくてはならない所(葦戸という壁厚)に、それだけの厚みがない。実状として、どのように使用されていたのかは不明である。

3 復元建物

高床建物(6918・6919を使用) ここで6918(以下、敷居材と記す)と6919(以下、梁材と記す)を同時に用いて、梁間1間型高床建物に当て嵌め、復元する。敷居材の推定材長と、梁材の両端の貫通孔(柱ホゾ穴と思われる)間がほぼ等しく、その3m強という長さは、当時(弥生時代末?古墳時代初頭)の遺構の柱配置から、梁間1間型高床建物の梁行長として妥当であることから、梁間1間型高床建物の、梁行の部材として同じ建物に使用されていたと考える。

梁間1間型高床建物は、梁行に大引を渡し、大引上に根太、または床板を敷く形式である。そうすると、敷居材は、桁行に渡された根太上に載る、妻側の敷居であると仮定し得る。大引を渡す形式として、造出柱式・分枝式・大引貫式・屋根倉式・際束式の5通りが考えられるが、想定される根太が大きく、最も安定して梁行をとばせる大引貫式とする。桁行は、梁間1間型高床建物に卓抜する平面形式(1×2間)とする(特に弥生時代末?古墳時代初頭の遺構には、梁行1間、桁行2間のものが多い)。

梁、桁、柱の組合わせは、梁材の両端に正方形穴が貫通することから、方形断面の柱ホゾに桁、梁を落とし込む形式とする。出土柱材に造出し(ホゾ)をもつものがあることも、上記の組合せ形式を裏付ける。

梁材中央に貫穴がないことから、棟持柱(棟東)は上記の柱とは異なり、梁より上を造り出して、梁を落とし込む形式ではない。また、又首構造であれば、梁中央に貫穴がなくても良いが、梁両端に合掌材下端を受ける穴が必要である。しかし梁材両端の貫通孔は正方形であり、合掌材下端を受ける穴とは考え難い。よって、棟持柱は柱と軸線をそろえず梁に添えて立て、梁に棟持柱の当りを欠き込み組合せ、縄で縛る形式とする。

敷居材下面に残る欠込みから、幅15cmの根太を大引上に7本渡し、その上に敷居と、床板を敷く。上記の敷居材の検討から、敷居材に残る貫通孔間は出入口であると考え、開口部とする。また、出入口の右側に縦板を取り付ける。壁は敷居材の木舞穴より、草壁と網代壁を考えたが、ここでは草壁とする。

4 まとめ

発掘部材を観察するに当たっての留意点を、以下に記す。これらのことは、これから発掘部材を検討するに当たって、1つの指標になるものとする。

- 部材形状・寸法、仕口・継手加工から、建物のどこの構成部材かは大体分るが、仕口・継手については、形状、そこに残る圧迫痕、摩滅り具合をさらに詳しく観察し、建築形式を決めていく必要がある。

- 表面の腐食具合・干割れの様子からは、使用された頻度(期間)、外に面していたか室内に面していたか、土に接していたかどうかを推測出来る。

- 表面に残る刃痕を詳しく観ていけば、石器と鉄器のどちらを使用したのかということ、また、用いられた具体的な道具とその使用方法が推定出来る*1。特に刃幅に関しては、打ち間違えて立ててしまった刃痕(刃先痕)から、用いられた道具の刃幅が断定出来る。

●手斧仕上げか割肌かの判定は、杉などの針葉樹である場合には手斧痕が残り難いので、特に詳しく観察する必要がある。

●部材は転用による2次加工を受けているものが多く、建築時の痕と転用時の痕とを、部材の形態・構造的特徴から見極める必要がある。

今後の展望 出土した木製品が実際に何に使われていたのかは、タイムマシンでもない限り、本当のことは分らない。しかし、出土した木材が本当に過去の建築部材であるならば、遺構や絵画遺物よりも、当時の建物を知る上でより信憑性の高い資料となり得る。実際に、現在までに出土した木材の多くが建築部材とされ、それにより当時の建築形式・建築技術が、一見実証的に論じられてきている。

しかしここで忘れてはいけないのは、その根拠とされた木材は、極論すれば建築部材でない可能性もあるということである。もしそうなれば、論拠の実証性どころか、それにより議論したことさえも水泡に帰すことになる。こうしたことから、部材の検証は十分慎重に行われる必要がある。

弥生時代の木製品に残る加工痕の研究として、宮原晋一氏の刃先痕の研究がある。木製品に残る加工痕から、使用工具の材質復元を試みたものであるが、この成果により、発掘部材の客観的な検討が、加工痕による使用工具の復元においては可能となった。

今回行ったのは、発掘部材による、主に形態的特徴からの復元である。復元の実証性を上げるには客観的な検証が必要であるが、部材の形態的特徴のみから復元を行うとなると、どうしても主観的になるところが出てきてしまう。こうした復元において実証性を上げるためには、多様な視点からの多角的検証が不可欠である。考古学からの歴史的・理科学的視点で、建築学からの技術的・建築史的

視点で、その他民族学、民俗学、地理学など様々な視点から、発掘部材より考え得る出来る限りの可能性を示し、より妥当な解釈を、検討するに当たっての指標となるものを、見極めていく必要がある。

主な参考文献

- ・宮本長二郎『日本原始古代の住居建築』(中央公論美術出版、1996)
- ・浅川滋男編『先史日本の住居とその周辺』(同成社、1998)
- ・浅川滋男『住まいの民族建築学』(建築資料研究社、1994)
- ・坂井秀弥編『復原技術と暮らしの日本史』(新人物往来社、1998)
- ・埋蔵文化財研究会『弥生時代の掘立柱建物』(1991/2/9・10)
- ・小矢部市教育委員会『桜町遺跡—縄文の森に吹く風を感じて—』(1998)
- ・建築雑誌No.1426「古代建築の復元」(1998年9月号)
- ・建築雑誌No.1430「建物復元にどのような原理原則が求められているか」(1998年11月号)
- ・宮本長二郎「高床建築の成立と展開」『東アジアの古代文化、第73号』

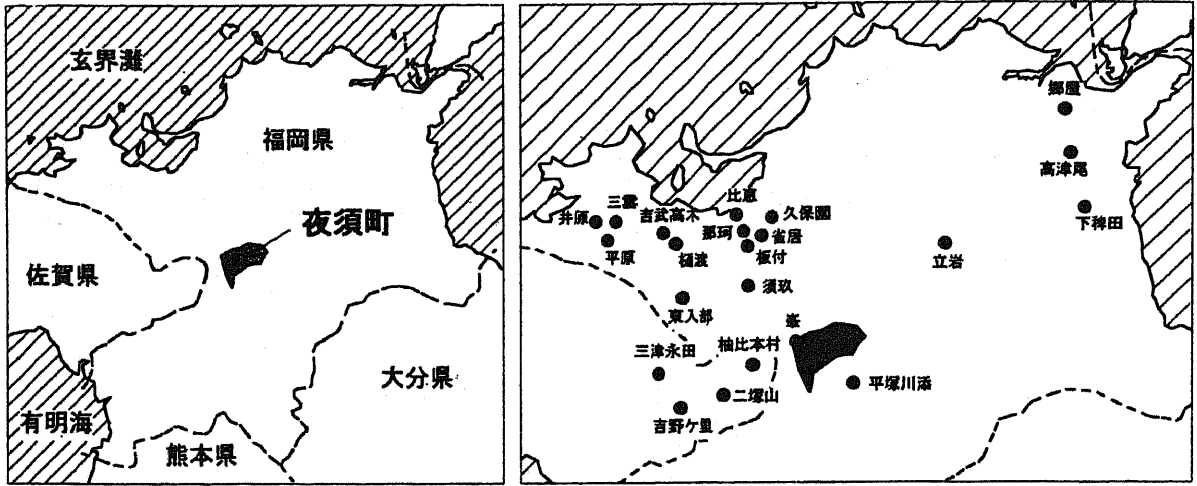


図1 夜須町の位置（左）と周辺の主要遺跡（右）

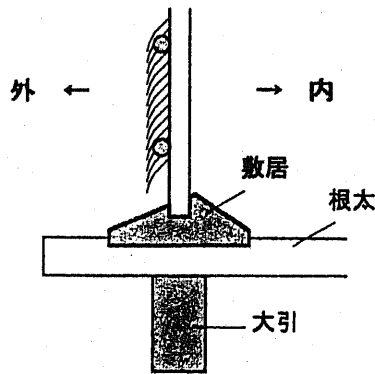


図2 敷居断面模式図

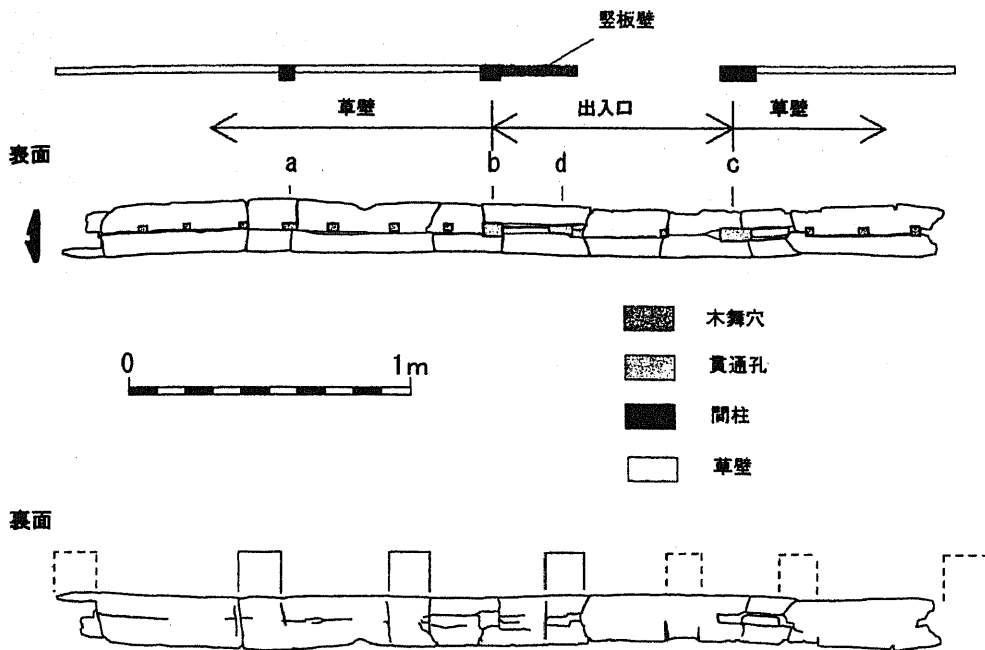


図3 敷居材実測図

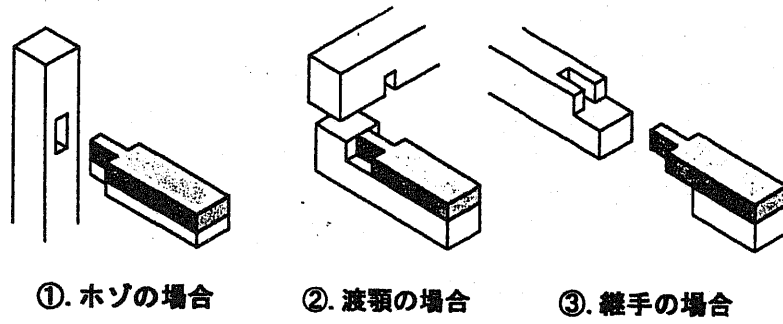


図4 突起部分の性格

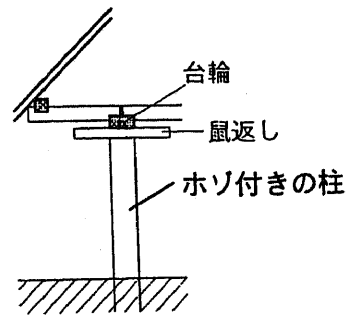
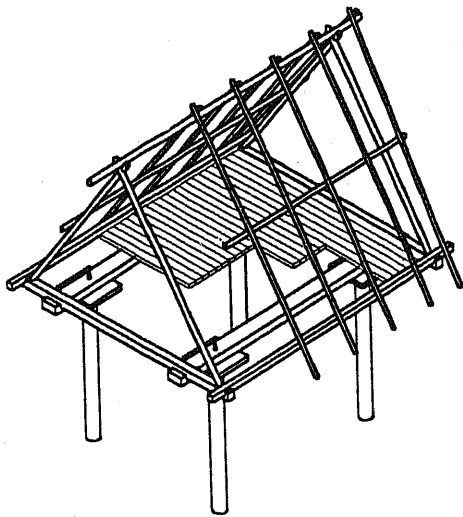


図5 ホゾ付きの柱による復原建物構造図

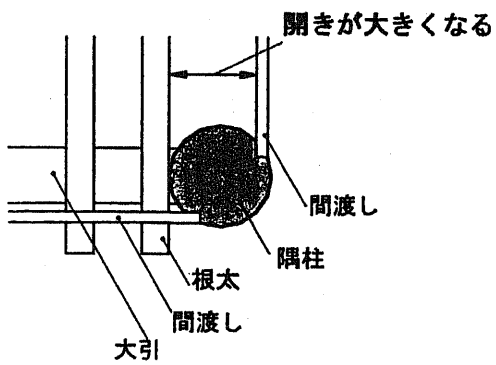


図6 間渡しが柱の外寄りになる場合

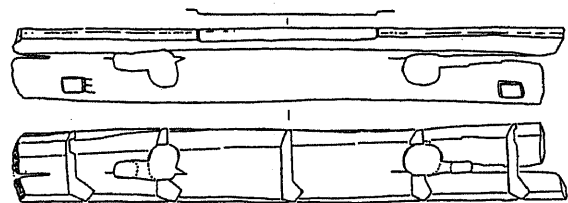


図7 三重県納所遺跡出土蹴放し材
 (『日本原始古代の住居建築』より転載)

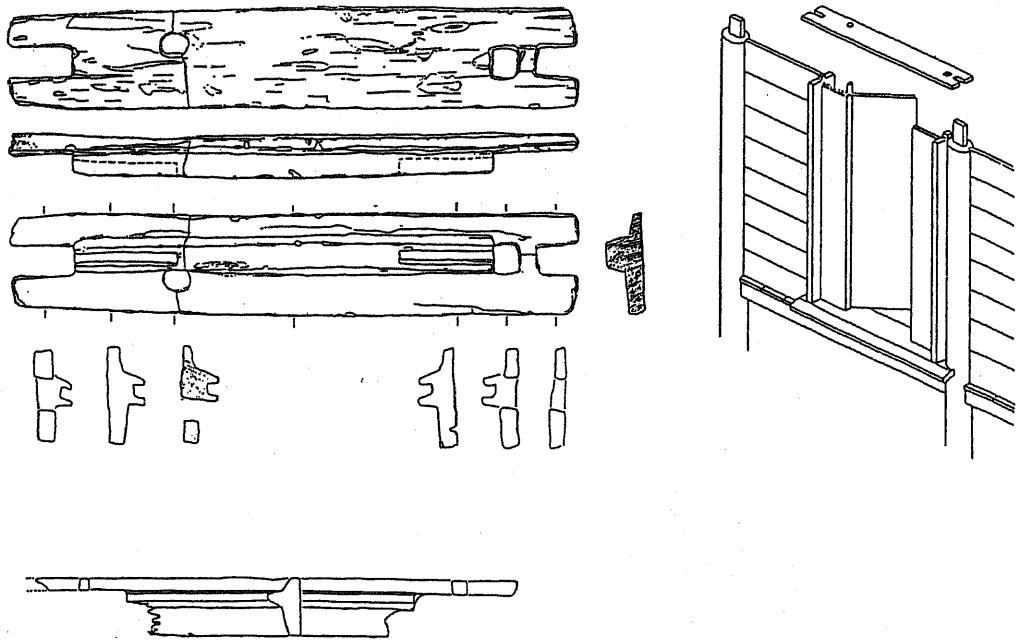


図8 群馬県渋川市中村遺跡出土マグサ材 (左)
 (『日本原始古代の住居建築』より転載)

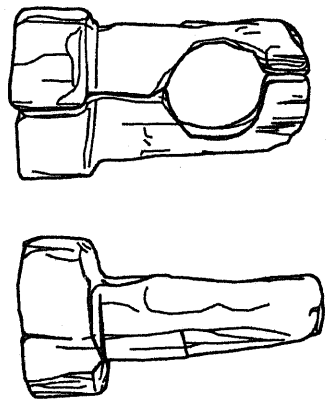


図9 蔀戸の軸受け
 (報告書の写真をトレース)

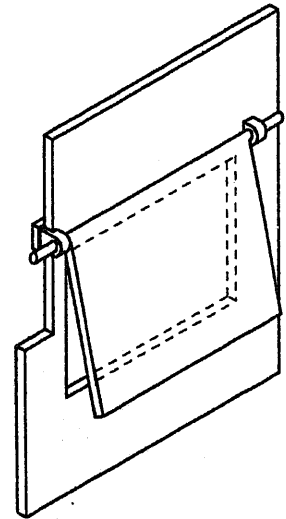
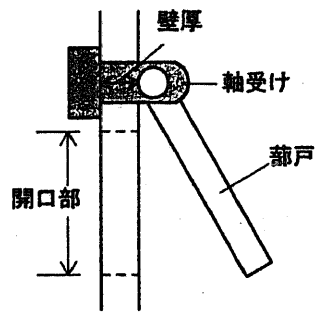
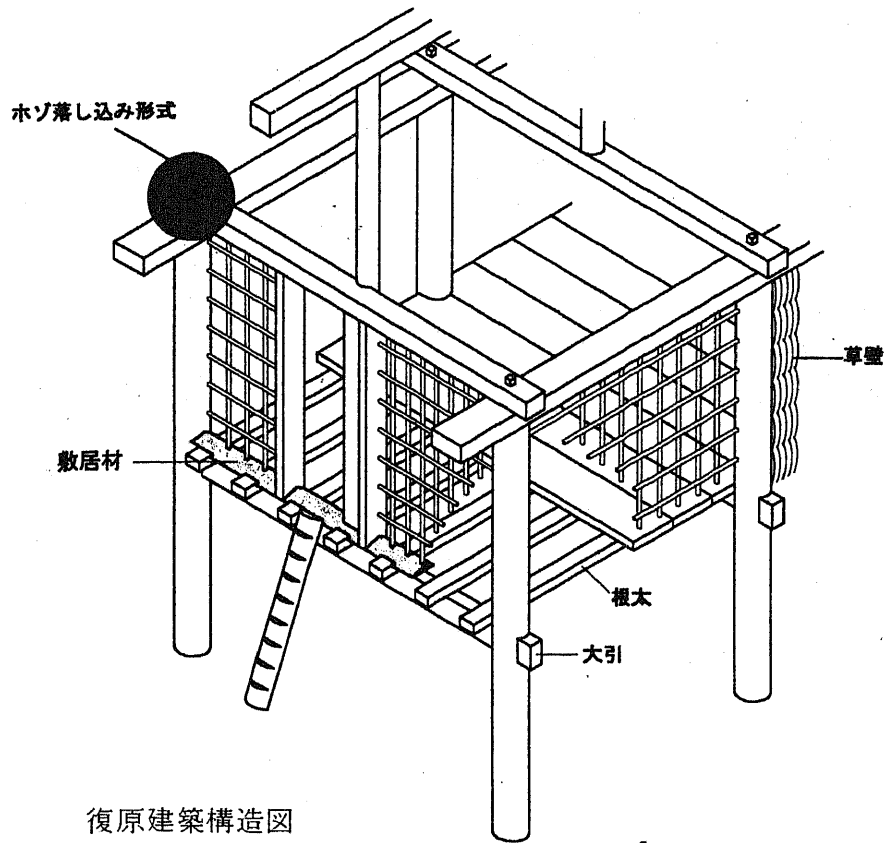
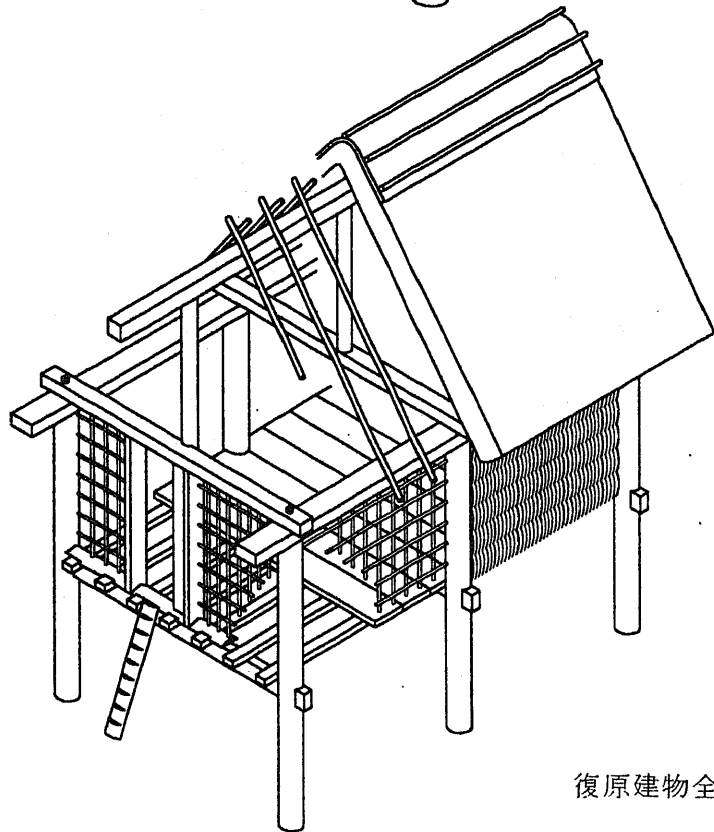


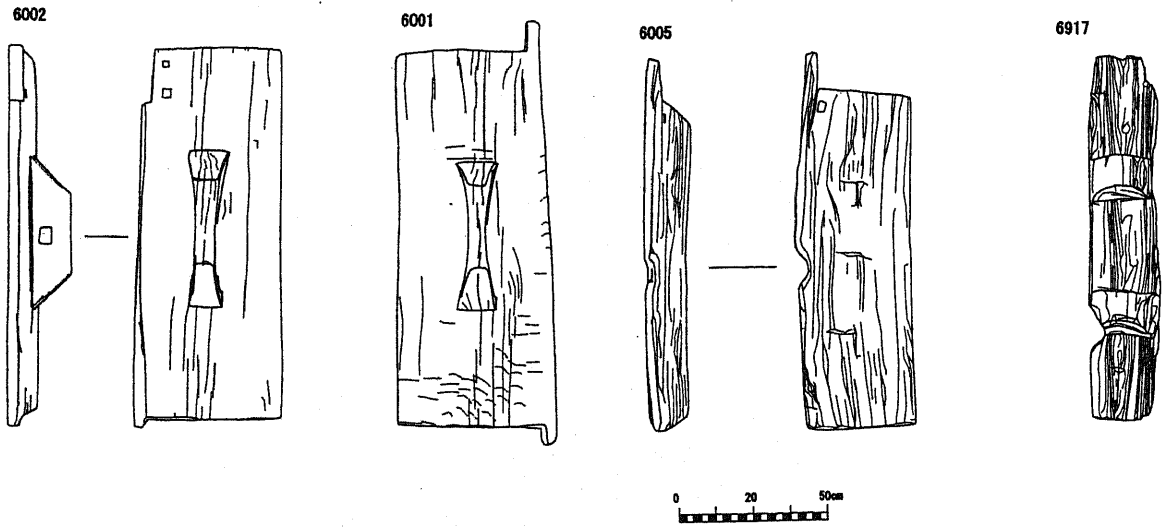
図10 蔀戸断面模式図 (左) と蔀戸構造図 (右)



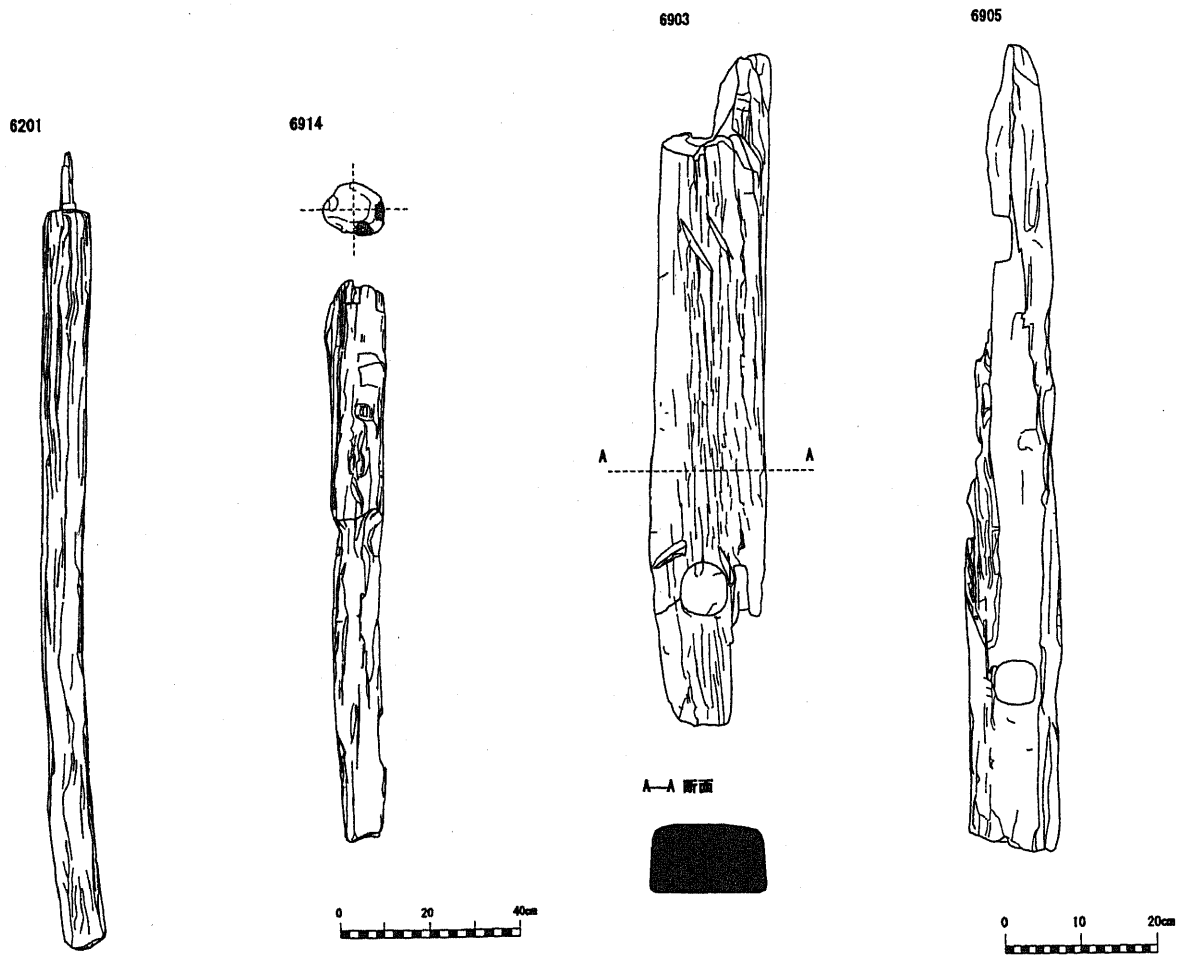
復原建築構造図



復原建物全体図



実測図1 扉・梯子



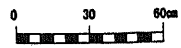
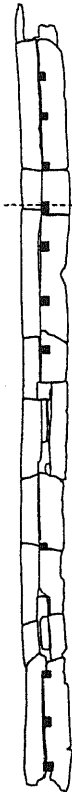
実測図2 柱 (6201・6914)

実測図3 蹴放し (6903) マグサ (6905)

6918 裏面



6918 表面

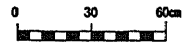


実測図4 敷居 (6918)

6919

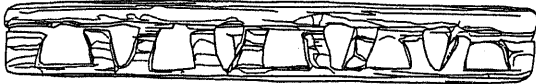


6920

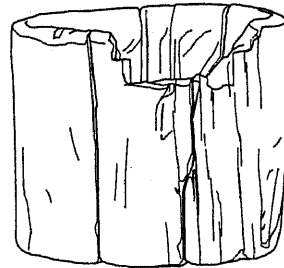
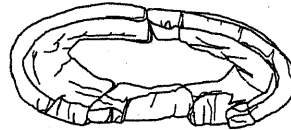


実測図5 梁 (6919) 桁 (6920)

5106



5031



実測図6 楕円筒型木製品 (5031) 連子窓の枠 (5106)

6. 考古学発掘資料による建物復原事例の日英比較

モリス・マーティン

Reconstruction of lost architecture based on archaeological data:

A comparison of some examples in Britain and Japan

Martin Morris

1) Aims of this Report.

The importance of archaeological data as a means of supplementing surviving buildings and filling some of the many gaps in our understanding of architectural history is very considerable. In particular, archaeology can reveal the essentials of the plan of a lost structure, a fundamental starting point for any kind of reconstruction. But for reconstruction of the superstructure, the archaeological evidence is usually much more limited, and, in addition to any fragments of the structure itself, comparable contemporary structures, or existing structures of similar layout, old illustrations of one form or another and the design skills and imaginative powers of the reconstructor all have to be brought into play. Even then, the reconstructor must be aware that the results of his efforts are almost inevitably bound to be no more than approximations of the structures he seeks to reproduce. Nevertheless, the effort to reconstruct is, I would argue, worth making if the plan survives with reasonable clarity. Indeed, as I have stated elsewhere: "Difficult and imprecise though it may be, having dug up and effectively destroyed the evidence, we surely have something approaching a duty to engage in a measure of reconstruction, because reconstruction and interpretation are ultimately inseparable, and reconstructions both reflect and influence the conclusions that are drawn from the site itself" (note 1). Because of my perception of the importance of augmenting architectural evidence with archaeological data, I have found participation in this "Kaken" project extremely interesting and am grateful for the opportunity to do so.

As the only foreigner participating in the project, and in view of my own research interests in cultural comparison, it has seemed appropriate for me to take as the theme of my report a comparison between archaeologically based architectural reconstruction in Japan and in the context of the foreign culture with which I am most closely acquainted, Great Britain. Divided as they are by the great Eurasian land mass, over a distance which more or less ensured separate development until the 19th century, Japan and Britain nevertheless offer interesting potential for historical comparison at a number of levels. For one thing, both have cultures that are heavily derivative, with roots on the neighbouring continent, whilst at the same time their position as symmetrically juxtaposed archipelagoes beyond the edge of the continent gave each a cultural and political identity of its own. By the time they came face to face as members of an increasingly global community, each had become arguably the most advanced, though by no means the largest, nation in its own regional/cultural sphere (a position which only Japan retains today). Again, if we consider the overall sweep of the histories of Japan and Britain, along with a shared overall historical division into ancient, mediaeval and early

modern phases of development, it is possible to discern many thought provoking parallels of process and structure, along with inevitable and equally meaningful disparities.

In both countries, modern archaeological excavation has revealed the remains of a range of important structures, the evidence thereafter being used in the production of reconstructions of the architectural superstructure. In this report I have selected a number of complementary examples of such excavated structures from both countries with the aim of comparing briefly both the structures themselves, and the techniques used and problems encountered in their reconstruction.

2) Examples Chosen for Comparison.

The pairs of examples selected for comparison are as follows:

- 1) the Mitsudera site in Gumma prefecture, a local ruler's residence of 6th century date, and Yeavinger in Northumberland, a 7th century royal villa.
- 2) the site of the Daigokuden at Nara, main hall of the Nara palace in the 8th century, and the Basilica at the heart of Roman London in the 2nd and 3rd centuries A.D.
- 3) Rectangular timber-lined sunken-featured buildings unearthed in early mediaeval contexts at Kamakura in Kanagawa prefecture and similar structures excavated in late 10th century strata of the Viking centre of Yorvik (modern York).
- 4) the 7th century kairo of Yamadadera, sections of which were recovered almost complete from muddy deposits at Asuka in Nara prefecture, and a reconstructed section of the 12th century cloister of Rievaulx Abbey in Yorkshire.

The examples are discussed in the order of their listing above. They are considered with a view to highlighting meaningful contrasts as well as parallels, since these can be equally revealing when we come to appraise the characters of the widely separated cultures of Japan and Britain. They represent in the case of their respective cultures, an elite residence in the phase of state-formation, a major architectural expression of the high point in the flowering of ancient culture (the latter pre-dating the former in the case of Britain, but post-dating it in that of Japan), mediaeval structures associated with proto or early mediaeval craftsmen and merchants, and a part of the cloister of a great monastic complex, representing the important category of religious architecture.

3) Mitsudera and Yeavinger.

Both of these sites are of immense importance for the light they shed on the architectural character of the houses of the elite at an important point in the state formation process in their respective countries. In both cases, the character of this category of complex at this period had been a matter of surmise, since no standing buildings survived, and their discovery represented a historic milestone. The moated compound of the Mitsudera 1 site in Gumma was excavated between 1981 and 1983, as part of the preliminaries to the construction of the Joetsu Shinkansen, and the excavation report was published in 1988. Only the area of the proposed railway line was systematically excavated, cutting a broad swathe

diagonally across the rectangular moated compound from north to south (fig. 1a), but additional limited trial trenches were also dug which established the overall extent of the compound.

The excavation revealed a compound divided down the centre by timber palisades into two enclosures more or less equal in area (fig. 1b). In the north-eastern one were discovered the remains of sunken-floored pit dwelling structures, in a line along the dividing fences, while the south-western enclosure was dominated by the remains of a large ground level structure, with a 3 x 3 bay moya and surrounding hisashi, its roof-ridge, to judge from its proportions, running north-east to south-west (note 2). To the rear of this were found a well with a hexagonal protecting structure, and two rectangular buildings, one, 14 bays in length, running parallel with and hard against the innermost ring of enclosing palisades across the northwest side of the compound. To the south east of the central structure were found 3 earthfast posts, aligned with its central axis and perhaps framing a visual screen protecting the entry from view. Parallel to the dividing fences was a watercourse, probably brought in by aqueduct, along which were located ritual basins several metres in diameter, lined with stones, as were the revetted sides of the moat, in a manner resembling the revetment of burial tumuli. All the structures had earthfast posts, and it was the clear pattern of post-holes, the stones lining revetments and the fill of the sunken-floored features and well that constituted the bulk of the evidence for the built structures. There was no specific evidence which identified the complex precisely, but it was clear that it was at its height in the early decades of the 6th century, and its scale and planned character, as well as its alignment with a group of large burial tumuli of the same period just to the north west (note 3) leave no room for doubt that it was built as the fortified residence of a leading local ruler, possibly the Kuruma-mochi, imperial charioteers and perhaps the family who gave their name to Gumma (note 4).

The site at Yeavinger was excavated by a team under Brian Hope Taylor in the late 1950s and early 1960s, but there was a long delay before the full excavation report was published in 1977, by which time many of its conclusions seemed somewhat dated (note 5). The site, which went through four major and a number of minor phases, consisted of a central hall, and a number of lesser buildings, all of timber, a palisaded compound, possibly for cattle, and, in the middle phases, a timber grandstand like a segment of a Roman amphitheatre (fig. 2b). The central halls, of which there were four in succession, were considerable structures, the first one setting the standard at 25m x 11m, broadly comparable with the 14m x 14m of the main hall at Mitsudera. The construction of the halls was striking. They had massive solid timber walls of upright planks embedded side by side in the earth, with their edges touching. These walls were buttressed on the outside with raking shores, also embedded in the earth, and internally there were holes for what may have been aisle posts, and for posts on the central axis of the building.

There is little doubt that this site is that of a Northumbrian royal villa called Gefrin, briefly described by the 8th century monastic chronicler, Bede. The villa is described in the context of an account of a visit there by King Edwin of Northumbria, shortly after his formal

conversion to Catholic Christianity in the late 620s. He was accompanied by his queen, Ethelburga, a Kentish princess who was already a Christian when she married him. A missionary bishop, Paulinus, had travelled north with her from Kent and played a leading role in persuading Edwin and his court to accept Christianity. The royal sojourn at Gefrin lasted 36 days, during which Paulinus was occupied catechizing the local population and baptizing them in the nearby River Glen. Although Bede was writing a century after this visit, his record of events in Northumbria for the period in question is generally regarded as relatively accurate. The similarity of Gefrin to the modern place name of Yeavinger and the proximity of the site to the River Glen corroborate the identification (note 6).

The function of this kind of royal villa was to provide suitable accommodation for the king and his household once or twice a year, while they stayed in the district, living on the food rents owed to the king by the farmers of the district (a primitive form of taxation which was essential in what was still largely a cashless economy). Such villas must have existed on all the major royal estates, supporting the royal lifestyle, providing a means for the people of a locality to gain access to their king and enabling him to sit in judgement and settle disputes. It is clear that more major royal residences, used for longer periods, were located in the proximity of larger-scale settlements referred to as *civitas* or *urbs*.

These two elite centres offer a range of interesting features for comparison. Dating to within a hundred years of each other, both were centred on a large and impressive earthfast timber structure (fig. 1c & 2a). The structural approach, however, was fundamentally different in each case. The main building at Mitsudera was a framed building, the walls being mere panels of infill without which the stability of the structure would not have been impaired. By contrast, the walls of the halls at Yeavinger were massive and structural, and although there were freestanding posts within, it is by no means certain that all of them were part of the roof support system, though those on the centreline of the structure probably were. It may be that this difference is a manifestation of differing constructional influences from the adjacent continent, with Mitsudera reflecting the timber-framed palatial tradition of China and Yeavinger (though realized in timber) the masonry wall tradition of Rome and the ancient Mediterranean world: a contrast of columnar and mural construction systems. Continental influence is also implied by other features: for instance, the general layout of the complex at Mitsudera, even in its partially excavated state, unmistakably owes much to the planning concepts of China, while the grandstand at Yeavinger seems to be an attempt to create in timber a segment of a classical amphitheatre.

With respect to reconstructing what kind of buildings the main structures on these two sites were, recourse was had to various sources. At Mitsudera, contemporary clay models of buildings from tumuli (*haniwa*), and images on bronze artifacts, such as the famous "House Mirror", were one important source of information, but otherwise there was little of the same period to go on, and surviving thatched vernacular houses of Edo period date were used as a basis for reconstructing overall form (note 7). In the case of Yeavinger, contemporary models and illustrations were lacking, but the 9 - 10th century church at Greensted exhibited a

similar vertical paling timber construction (note 8), while the slightly later timber stave churches of Scandinavia offered hints for the reconstruction of roof forms and other details. In addition, mediaeval timber barns have been looked at as possible later developments of the hall type.

In both cases reconstruction models have been built, and through these the possible architectural character and constructional features of the various structures has been explored in miniature, which is a particularly effective way to approach this kind of problem. In neither case has there been any attempt at a full-scale reconstruction on site, and both sites remain undeveloped, apart from the super-express track crossing the site of Mitsudera, the remainder of which still has not been excavated.

4) Nara's Daigokuden and London's Roman Basilica

These two structures represent the largest and most prestigious secular buildings in their respective countries in the ancient phase of their civilisations. The Daigokuden was unearthed as part of the overall excavation of the great palace complex at Nara, the Heijo Kyo (fig. 3a). The programme of excavations at the site was begun by the Nara National Cultural Properties Research Institute in 1955, but the bulk of excavations of the central palacelarea where the imperial residence and halls of state were situated took place in 12 phases between 1965 and 1979. In the course of this, two great audience halls were discovered, the larger and earlier, located on the central axis of the palace complex, being the one under consideration here. The structure stood at the north end of a great enclosure, measuring 176m east to west by 317m north to south (fig. 3b) (note 9). The southern two thirds of this enclosure formed a gravel paved courtyard, containing no other structures, but having a large gate at the south end on the central axis. The northern third of this enclosure, where the Daigokuden and the Koden to the rear of it stood, was raised about 2m. The Daigokuden itself was set on a platform elevating it perhaps a further 2m. The remains of three staircases were discovered on the south and north sides and one in the centre of the east and west sides. Only the tamped earth core of the platform remains, but it was probably revetted and paved with stone like the platforms of the Golden Halls of temples at that period. The foundation stones on which the posts of the structure once stood had been removed in antiquity, when the building itself was transferred to the new capital, Kuni Kyo which flourished briefly in the 740s (note 10). However, the layer of smaller bedding stones beneath them remained in situ, and from these it was possible to ascertain the original position and number of posts in the structure. The building had been 9 bays in length and 4 bays in depth, with a bay length of approximately 5m (17 shaku), giving total dimensions of 45m by 20m. Erected shortly after the foundation of Heijo Kyo in 710, the Daigokuden stood on the site for a mere 30 years before it was moved to Kuni Kyo sometime in the early 740s. Thereafter it was again moved and re-used as the Golden Hall of the Kokubuji of Yamashiro Province (note 11).

The existence of a major Roman settlement on the site of the city of London, like that of the Japanese "Southern Capital" at Nara, had never been forgotten, and it was obvious that it

must have had a substantial civic centre, but no remains were visible above ground, and the centre of the city had been overbuilt many times since instead of reverting to farmland like the site of the Heijo palace. There was thus no possibility of simply stripping the entire site. Only through piecemeal archaeological investigation on sites in the city as they came up for redevelopment could clues as to the character of the Roman centre be accumulated (fig. 4a) (note 12). The story of the excavation begins with investigations on the Leadenhall Court site in the 1880s by Hodge and Miller, which revealed fragments of a major Roman structure. The structure discovered in the 1880s was tentatively identified as a basilica in 1923 by Lethaby, an interpretation accepted by Mortimer Wheeler in 1928, who suggested that it had been rebuilt at least once. A further 20 investigations between 1930 and 1984, many of them no more than observations made while redevelopment was in progress, added to an emerging picture. Pottery finds by Dunning in 1931 suggested a date shortly after 90 AD for the main structure. By 1965, the main basilica was differentiated from another masonry building to the south, which seemed to be earlier, according to the research of Ralph Merrifield. Particularly important was a large-scale rescue excavation at Fenchurch Street in 1968 - 9 by Brian Philp. Philp concluded that the earlier building, which he termed the "proto-forum", was erected after the Boudiccan revolt of AD60, but was demolished between AD 90 - 100 to make way for a much larger forum on the site.

Major excavations on the Leadenhall Court site between 1984 and 1990 added substantially to the picture and shed much light on the phases, form, and ultimate fate of the structure. Its full scale was established: 160m long by 50m wide in its most developed phase, with a central nave, terminating in an apse and transept at the east end, a south aisle and three aisles on the north side, the northernmost of which apparently opened onto the street to the north rather than to the interior of the building. It also became apparent that its erection had been a long process, lasting for around 30 years. Pits for mixing mortar and scatterings of the ragstone used in the foundations were found around the site. Regarding the sequence of construction, it became clear that the central nave of the basilica, the apse and eastern transept were constructed first. These were followed by the aisles appended to the north, and finally the portico on the south side which was run all round the great courtyard laid out to the south of the basilica. At this stage, dating to about 130 AD, the side walls of the main nave were replaced with piers. The demolition of the earlier post-Boudiccan basilica and its forecourt probably took place at this time rather than prior to the commencement of the new basilica project (fig. 4b).

The building was apparently maintained through most of the 2nd century, but went into decline at the end of the century and into the 3rd century. Nevertheless, repairs were undertaken following a mid-3rd century fire. However, by about AD 300 it had effectively been abandoned.

London's basilica and Heijo's Daigokuden contrast with each other in a number of ways: the former was more than twice the size of the latter, and was an arcuated masonry mural structure, where the latter was trabeated, columnar and timber-framed. Both, however, were

aisled halls of state set transversely across one end of great cloister-like enclosures to provide a setting for the drama and rituals of governance and administrative activity, though in states of very different political character.

With regard to the evidence left for modern archaeologists to discover, in the case of London's basilica, unlike the Daigokuden, traces of several floor levels and the bases of walls above ground level survived in addition to foundations. On the other hand, as it was impossible to excavate the entire site of the building, an overall picture had to be built up from many separate investigations. Indeed it was only when later investigators placed their plans alongside those of their forerunners that the pieces of the jigsaw coalesced to make a whole.

Both buildings have been reconstructed on paper, and, in the case of the Daigokuden, in model form, both in the Heijo Kyu museum and at the Museum of Japanese History at Sakura. These models are based on reconstruction drawings included in the excavation report (vol. IX) published in 1982. The reconstruction drawings depend heavily on deduction based on the details of surviving structures of the period, especially the 3-storey pagoda of Yakushiji and the Golden Hall of Toshodaiji. These were the source for details such as the bracket capitals. It was of course impossible to tell from the plan whether the building was single or two storey. However, the restorers noted that, according to contemporary records, the Golden Halls of major temples were in general two-storey in the Nara period and, reasoning that the Daigokuden was probably as elaborately conceived as these, accordingly restored it as a two storey structure (note 13). They noted that the distance between the outer row of posts and the edge of the platform was considerable, and assuming that the eaves probably projected beyond the edge of the platform to throw water clear of it, postulated a three tier bracket complex on the lowest floor. On the further assumption that such a complex would not have been used for a mere mokoshi, they reconstructed the building as a true two tier structure. The upper floor (just an external shell without a corresponding interior) was also reconstructed with three tier bracket capitals. The roof form caused some debate, and two reconstructions were prepared (fig. 3c & 3d), one hipped (yosemune) like Toshodaiji Kondo and the other gabled and hipped (irimoya). The latter form was preferred for the models. The existence of surviving structures of the period and the logic of the timber construction system allowed those engaged in the reconstruction to proceed to the level of architectural detail and overall proportioning with a degree of confidence in specificity not possible in the case of Londinium's basilica. Moreover, having already built a full size reconstruction of the Heijo palace gate (Suzakumon) on its former site, those responsible for the Heijo palace site are preparing to do the same with the Daigokuden.

There is no possibility of such a rebuilding taking place in the centre of the city of London and many in Britain were disappointed that more was not done to preserve the Roman foundations discovered when the site was redeveloped following excavation. The great basilica has, however, been reconstructed on paper in the Museum of London's publication "From Roman Basilica to Mediaeval Market" (fig. 5a & 5b). Details of form are more difficult to reconstruct with any confidence than in the case of the Daigokuden, because of the more

fragmentary survival of contemporary Roman buildings in this remote northern province. A structure such as the Aula Palatina at Trier in Germany is of some help, though it is over a century later in date (fig. 5c)(note 14). Moreover, although possessing an apsidal end, the Aula is not an aisled structure, so it offers little help with regard to the form of the roof. On the credit side, lengths of wall made up of brick courses and ragstone laid alternately, roof tiles and even fragments of internal plaster decoration have survived to offer clear indications of the materials and techniques used in building the walls. The positions of some doorways and buttresses are also known. Nevertheless it would be true to say that our image of this, one of the largest Roman structures north of the Alps, remains considerably hazier than that of the Daigokuden of the Heijo palace. It is of course six hundred years older, the ancient period in northern Europe preceding the dark age of state formation rather than following it as in Japan. Essentially, however, it is the lack of comparable surviving buildings that creates a strong caesura separating the Roman architecture of northern Europe from that of the mediaeval phase for which so much more evidence survives, at least with respect to religious architecture. This contrasts with the situation in Italy and the Mediterranean countries, where Roman remains survive in a much more complete condition. Sadly it is not possible to extrapolate directly from them with regard to the architecture of a northern province like Britain.

5) Rectangular timber-lined sunken-featured buildings at Kamakura and York

One of the surprises produced by the programme of excavations at Kamakura, seat of the first mediaeval Bakufu, was the existence whilst the city was at the height of its prosperity in the 13th - 14th centuries, of a class of semi-subterranean structures referred to collectively as 'rectangular sunken floored built remains' (*hokei tateana kenchikushi*). Typically these structures had a level floor sunk about a metre below the ground surface, and were square or rectangular in plan (note 15). The periphery of these structures was defined by ground sills (*dodai*), rectangular in cross-section and often laid on foundation stones, also squared to form rectangular blocks. There were slots cut in the ground sills at regular intervals (usually about 50 cm) to receive the tenoned ends of vertical posts (*tsuka bashira*), which served to hold in place horizontal boarding (*hameita*) wedged between the posts and the earth sides of the pit, a form of retaining wall construction closely resembling that used for wells. Sometimes fragments of a low timber floor survive, supported on the ground sills and other horizontal timber members laid on the earth floor beneath (fig 6.b). No hearths have been found, but in some cases, traces of charcoal and ash suggest portable fire boxes (*hibachi*) or hearths may have been used in the structures. A well-preserved example at the Suwa Higashi site measured 2.7m x 2.7m, and had a smaller appended space that may have been a later addition (fig. 6a).

Despite the remarkable survival in anaerobic conditions of the lowest part of the structure, the excavated remains at Kamakura shed no direct light on the character of the upper structure of this class of building. However, in this case the excavated material could be

supplemented by a contemporary illustration. There is a scene in the 12th century picture scroll Kokawa-dera Engi which seems to show a similar semi-subterranean rectangular building: the upper part of a figure is visible, leaning out of the doorway and resting her elbow on the ground, as if she is standing on a floor located about a metre below ground level (fig. 6c). This building has a simple gabled roof of timber which appears to extend to ground level, or perhaps 20 - 30 centimetres above it. The gable walls are of horizontal boarding, calling to mind the construction of the excavated examples at Kamakura. This illustration thus perhaps offers a hint as to what the sunken-featured rectangular buildings of Kamakura may have been like. Further hints are offered by a structure excavated at the Wakimoto Kotanichi site at Oga City in Akita Prefecture: it was a sunken floored rectangular dwelling 8m x 10m in area, mediaeval but later in date than the examples in Kamakura, with the remains of a roof of timber boarding which had apparently been covered with a layer of mud several centimetres thick.

The location of the excavated examples also offered clues as to the character and uses of this class of building. For example, the Suwa Higashi site lies to the west of Kamakura station, and in general examples of rectangular sunken-featured buildings were found from that area southwards, with quite a concentration close to the beach (Yuigahama). By contrast, none have yet been found on the sites of elite warrior residences. Admittedly, some have been excavated close to such upper-class mansions, as at the Imakoji Nishi Onari Shogakko site, but in this case the examples lay outside the perimeter of the elite residences in an area believed to have been occupied by commoners. The evidence therefore suggests that they were probably a type in use at the vernacular level. Their function is the subject of ongoing debate. Though there seems little doubt that they were in use among the lower strata of society, it is probable that they were neither conventional dwellings nor simply storehouses. The most plausible suggestion is that they may have been principally "sagyoba" or workshops used by a range of craftsmen.

It is interesting that in late 10th century York, or Yorvik as it was then known, remarkably similar structures, referred to by modern archaeologists as sunken featured buildings, appear to have been a relatively common type. Although already incorporated into the expanding kingdom of England, York at that time still had strong links with the Scandinavian world, a legacy of the recent past when it had been a major political centre of the Danelaw. York has been the scene of extensive archaeological activity, especially since the establishment of the York Archaeological Trust in 1972. However, one of the most exciting sites was at 16 - 22 Coppergate, excavated between 1976 - 81, where extensive foundations of 4 Viking age townsmen's properties were preserved in the oxygen-free cocoon provided by organic rich deposits, rather like a dryish peat bog, but representing the accumulated debris of 10 centuries of human occupation (fig. 7a). It was here that the remains of the late 10th century sunken featured timber buildings were discovered, their walls surviving in places up to 1.8 m above the foundations, making them the best preserved wooden buildings of this era anywhere in the Viking world. Tree-ring analysis has established that some of the timbers

were felled in 972-73, so it may be assumed the buildings were erected shortly after that (note 16).

The construction of the most deeply cut and best preserved of them could be clearly understood. First, a rectangular hole had been dug, averaging 7.5m long x 4m wide and up to 1.8m deep. Deeper slots ran round the edge of the hole to provide a seating for sill beams. The considerable quantities of earth excavated were spread out in the surrounding area. The sill beams were of oak, and were of rectangular cross section, with a raised lip along their inner edge. Horizontally-laid oak planks then placed as a lining against the sides of the cut, the lowest course resting on the sill. They were not joined together in any way, but were held in position by oak uprights placed at approximately 50 cm centres. The uprights usually rested on the sill, wedged at their base between its raised lip and the horizontal plank revetment. Occasionally the sill beams were dispensed with and the uprights were sunk directly into the slot around the periphery of the pit (fig. 7b).

There must have been elements at the top to hold the uprights in place, but as in the Japanese case, the upper structure does not survive. A clue as to how the structure was stabilised is provided by the detail at the top of the two best-preserved uprights. Each had the seating for a half lap joint, just above a circular hole right through the centre of the upright's face (fig. 7c). It thus seems likely that there was a horizontal top plate along each wall into which the half lap joints were keyed, and presumably a second horizontal member below held in place by pegs inserted through the circular holes.

What kind of upper framework does a hypothetical reconstruction suggest may have overlain these subterranean structures in York? There is no convenient contemporary image like the structure in Kokawa-dera Engi picture scroll to help with visualisation in the case of York. Certainly excavation has revealed that pit dwellings, known by the German term 'grubenhauser', existed in Britain during the early phases of the Saxon occupation, several centuries previously, and a delineation of such a structure may be preserved in the Book of Kells (fig. 7d), but it is not considered likely that the structures excavated in York were single-storey semi-subterranean structures with just a roof above extending to ground level. The structures replace lighter wattle-walled buildings with floors at ground level: what could have been the advantage of the change to such solidly built sunken rooms? The likeliest answer is considered to be an increase in usable space. In other words, the townspeople of Viking York were providing their houses with well-lined basements, underlying an upper floor of timber at or just above ground level. The total absence of hearths suggests the basements were not living rooms, so presumably they were used for storage or as workspaces, and the room above was a living room, perhaps with a fireproof clay-lined hearth. Taken together, the putative horizontal members set at the top of the timber uprights could have provided the seating for a floor and an upper continuation of the wall above ground level.

Thus, in both Britain and Japan, in the proto-mediaeval and mediaeval periods respectively, very similarly constructed timber-lined sunken structures, with ground sills and horizontal

boarding held in place by uprights, were built in an urban context, almost certainly by ordinary townspeople. Above ground level, the structures were perhaps rather different, the buildings at York having an upper floor while those at Kamakura probably did not. Nevertheless, the parallels noted bespeak a roughly comparable level of technology, and availability of similar building techniques. Whilst the most sophisticated architecture of the two cultures was diverging in terms of its specific features as it developed, at a more basic level there were important areas of overlap. An interesting and unanswered question is whether the similarities represent non-derivative parallel development, or whether a transfer of technology was involved, and if so, in what respects and which direction.

From the point of view of reconstruction, it is interesting that, despite the excellent state of preservation of the lower construction of both Japanese and British examples, the character of the upper structure is very much a matter of conjecture. This is particularly so in the English case, since, in Japan, the illustration in *Kokawa-dera Engi* offers a useful point of departure, though we cannot be entirely certain that it is the correct one. Nevertheless, in the English case very ambitious full size reconstructions of the Viking houses found on the Coppergate site have been made in the *Yorvik Viking Centre*, which famously offers a journey back in time to a street in Viking York. The houses are mainly simple thatched rectangles with timber walls, and no attempt has been made to simulate basements. How closely they correspond to the reality of the original inevitably remains an unanswered question.

6. Cloisters at Yamada-dera and Rievaulx Abbey

The cloister is the pre-eminent symbol of the monastic institution in the West, and an important element in the layout of early Buddhist monasteries in Japan also. Its function in the two contexts is rather different. In a European monastery, the cloister is an inner corridor surrounding an empty open space, with the main elements of the monastic complex - church, chapter house, dorter, frater etc - laid out around the outside of it and accessible from it. In the ancient Japanese monastery, the *kairo*, although taking the form of a corridor, acts as an enclosure, dividing the outer facilities of the monastery from the main image hall (*kondo*), pagoda(s), and sometimes the lecture hall contained within it. It thus divides a sacred inner realm from a profane outer one. Later, in the mediaeval monasteries of the Zen sect, the monks' living hall and kitchen, and the abbot's hall were set against the *kairo* on the outside, making it a covered way linking them in a way similar in certain respects to the western cloister, but the *Butsuden* and *hatto* remained in the centre. In this section, I want to consider two reconstructions - though in these cases re-erection would be a more appropriate term - of this potent symbol of monastic life, one in Britain, the other in Japan.

The Japanese example, the *kairo* of Yamada-dera, represents a very dramatic and unusual discovery (note 17). The temple, located at Asuka, the early heart of Japan's ancient state, was founded in 641 by Soga no Kura no Yamada no Ishikawamaro, head of an influential branch of the powerful Soga family. The *kondo* was complete by 643, and there were monks in

residence by 648. The temple was the site of the suicide of the founder and many of his family when he came under suspicion of planning treason in 649. A pagoda was begun in 673, and finished 3 years later by the future Empress Jito. The pagoda and kondo stood one behind the other on the central north-south axis within the enclosure of the kairo, with the kodo (lecture hall) outside it to the north, a layout resembling that of Shitennoji in Osaka. The pagoda and kondo were lost in a fire in the latter half of the 12th century, and at about the same time a 16ft bronze image of Buddha in the kodo was removed by a monk from Kofukuji and placed in the newly rebuilt Higashi Kondo of that temple (its head was found inside the platform bearing the later principal image in the Higashi Kondo, rebuilt in 1415, when the building was dismantled for repairs in 1937). By that time the temple appears to have been effectively defunct.

The site had first aroused academic interest in 1904, when the researcher Takahashi Kenji wrote a paper about it. A plan of the site showing the positions of the pagoda, kondo and kodo platforms was published in 1917 by Amanuma Shunichi, later a professor at Kyoto University. In 1923, the site was designated. Nara Kokuritsu Bunkazai Kenkyujo began excavations in the Asuka area in 1955, but work at Yamada-dera did not begin until 1976. The first structures to be excavated there were those which were already visible as platforms, the south gate, pagoda and kondo, on the central axis of the temple plan. Of these, the kondo in particular had a profound impact on the perception of Asuka period architecture.

It was not until the fall of 1982 that attention turned to the kairo. As excavation of its eastern arm got under way, a remarkable discovery was made. It was found that not just - as in the case of the other structures on the site - had the foundation stones for the posts to stand on survived, almost the entire timber frame of the structure and its heavy tiled roof lay buried beneath the surface. The kairo had been overwhelmed by a mud slide in heavy rain and collapsed, probably sometime in the 11th century, to be buried under virtually anaerobic conditions that permitted the preservation of the timber members. Initially 2 bays were discovered, but as excavation proceeded in the following year, a further 7 bays were uncovered, bringing the total to 9 bays (fig. 8). All the timber members were there: the posts, the jifuku, the koshi-kabe tsuka, the koshi nageshi at the base of the renji mado, the renji mado themselves, the kashira nuki, daito, hijiki, makito, the main cross beam (koryo), the rafters (taruki), the kaya oi along the eaves, the boarding below the tiles (yane noji ita) - everything, in fact, except the sasu that had supported the ridge (munagi).

It is very rare for the members of a major timber structure to become buried in this way and survive in the earth. Usually the architectural historian is dependent on standing buildings for a detailed understanding of the developing construction of the timber frame. Archaeology tends to supply details of plans through the disposition of foundation stones or the bases of earthfast posts. In this case however the frame survived complete. Moreover, both the foundation stones for the posts, with a distinctive petal motif around their edges, and the roof tiles were identical to those discovered at the site of the kondo, which is more or less securely dated to AD 643. It was concluded that the kairo must have been erected as part of

the same building campaign, thus making it older than the earliest surviving timber building in Japan (and indeed the world), Horyuji Kondo, believed to have been rebuilt after a fire in AD 670. Impregnated and strengthened, the timbers were carefully moved to the Historical Museum at Asuka, where a length of the kairo was re-erected, buttressed by a metal frame, and supplemented by new timber where fragments were missing. This was not so much reconstruction, as the re-erection of the actual building.

Something quite similar happened in the case of the cloister of Rievaulx Abbey in Yorkshire. Rievaulx was the foremost Cistercian monastery in Britain, and was founded in 1132. During the 400 years of its existence, the abbey was dominated by the reputation of its third abbot, Aelred (1110 - 67), who became one of the most prominent religious figures in England, a leader of skill and shrewdness who made Rievaulx a major monastic establishment. Much of what currently survives was built in his time, though the refectory is slightly later (c.1170 - 80) and the west end of the abbey church was extended in the early 13th century. The complex sits on a series of man-made terraces in the narrow valley of the River Rye. The course of the river was altered to create more space for the abbey buildings, of which those currently visible constitute only the nucleus (fig. 9a). Fewer than half the 72 buildings listed at the suppression in 1538 can be traced, and the 15 acres of the site presently administered by English Heritage are all that remains of 92 acres that were originally enclosed within the precinct wall. The outer area contained the abbey's courts, meadows, orchards, fishponds, mills, service and industrial buildings, none of which survive above ground. Yet they need to be taken into account in order to grasp the original extent of the abbey, which at its height supported some 400 men. After its suppression, the site of the abbey was granted to Thomas Manners, Earl of Rutland, and he began the systematic destruction of the abbey buildings. Even after he had finished however, much of the carcass of the complex survived, half buried by fallen debris, to await systematic investigation between 1920 and 1950 (note 18).

It was in the process of this investigation that the cloister was examined. About 42.5m square, it lies immediately to the south of the nave of the church. It was discovered that it is one of the oldest parts of the complex and had already been laid out before Aelred became abbot. It consisted of a broad alley with an open arcade surrounding a square garden in the centre. This garden was not originally laid down to grass as it is today: Aelred mentions flowers and fruit trees there in the 1160s in his treatise on friendship. Evidence for the timber roof over the cloister can be seen in the walls of the church and the facade of the refectory. The base of the structure survived in part, and when the debris was cleared, the shafts and capitals of columns, and voussoir stones for the arches of the arcade were uncovered. Some of these were used to re-assemble five bays of the arcade at the northwest corner of the cloister (fig. 9b). The slender columns are paired, with a cluster of four marking the corner, and have a variety of capital designs, mostly derived from a simplified form of classical Corinthian. The arches are round headed, with no sign of gothic pointing. Typically there are 7 voussoirs per arch, the lowest one serving two arches, and the wall above is of plain regular ashlar work.

Thus two lengths of cloister stand again in England and Japan, re-assembled and rescued from the ruin to which history had consigned them. In both cases, enough survived for them to be re-erected with minimal recourse to conjecture. In the a culture whose monuments were built of stone, such survival might seem no great wonder, but was in fact conditional on the material not having been robbed out and re-used. In the case of the timber monumental tradition of Japan, more ephemeral and vulnerable to the elements, the survival of the Yamada-dera Kairo must be considered a minor miracle, and one unlikely to be often repeated. The potential longevity of stone - the quality that recommended it to Western architects from the days of ancient Egypt - and the perishability of timber are cliches. What is interesting to note is that timber can, if protected in sealed subterranean deposits of the right sort, be quite as long-lasting as stone.

7) In Conclusion

The examples discussed above illustrate, I hope, the richness and variety of reconstruction activity based on archaeological material, and some of the potential and problems inherent in such activity. By juxtaposing parallel examples from the context of Japan and Britain, I have tried to go some way towards bridging the cultural divide between East and West. By looking beyond our immediate cultural spheres in this way, I would contend, we may move toward a more inclusive and integrated view of the world's architectural heritage and its history, as well as the activity of researching, unearthing, recording and analysing it, for parallel worlds illuminate each other, and the meaning of one is more clearly perceived through an understanding of the other.

- 1) See Martin N. Morris, "From the Ground Up: The Reconstruction of Japanese Historic Buildings from Excavated Archaeological Data" in "Nichibunken Japan Review, No. 11", 1999, p.26.
- 2) The basic data for the discussion of this site is derived from the excavation report, Gumma-ken Kyoiku Iinkai et al (ed), "Joetsu Shinkansen Kankei Maizo Bunkazai Hakkutsu Chosa Hokokusho 8, Mitsudera 1 Iseki", 1988, in particular chapters 6, 7 & 10.
- 3) See Tatsumi Kazuhiro, "Takadono no Kodaigaku", Shiromizusha, 1990, p.33 - 35.
- 4) See the excavation report, p.308 - 309.
- 5) See Brian Hope-Taylor, "Department of the Environment Archaeological Reports No.7, Yeavinger, an Anglo-British Centre of Early Northumbria", HMSO, 1977.
- 6) The historical background is well summarized in Martin Welch, "Anglo-Saxon England", Batsford/English Heritage, 1992, p.43 - 45.
- 7) See Mitsudera excavation report, p.293 - 94.
- 8) See Cecil A. Hewett, "English Historic Carpentry", Phillimore, 1980, p.5- 13.
- 9) This outline is largely based on Nara Kokuritsu Bunkazai Kenkyujo (ed), "Heijokyu Hakkutsu Chosa Hokoku XI", 1981, which includes an English outline (p.293 - 6).
- 10) See Okada Shigehiro (ed), "Fukugen Nihon Taikan 3, Tojo to Kokufu", Sekai Bunkasha,

1988, p.15.

11) See Okada Shigehiro (ed), "Fukugen Nihon Taikan 3, Tojo to Kokufu", Sekai Bunkasha, 1988, p. 41.

12) The account given here is based largely on Gustav Milne (ed), "From Roman Basilica to Mediaeval Market, Archaeology in Action in the City of London", HMSO, 1992, especially chapters 1, 2, 8, 9 & 10.

13) A discussion of the reasoning behind the reconstruction is to be found in the excavation report referred to above, p.236 - 37.

14) For an outline of the Aula Palatina see Frank Sear, "Roman Architecture", Batsford, 1989, p.265 - 66.

15) This account derives from Saiki Hideo, "Hokei Tateana Kenchikushi no Kozo" (p.130 - 33) & "Shomin no Tatemono" (p.133 - 36) in Amino Yoshihiro et al (ed), "Yomigaeru Chusei, 3, Bushi no Miyako Kamakura", Heibonsha, 1989.

16) The outline offered here is derived from Richard Hall, "Viking Age York", Batsford/English Heritage, 1994, p.55 - 66.

17) The account given of it here is derived from Tsuboi Kiyotari, "Kodai Nihon wo Hakkutsu Suru, 2: Asuka no Tera to Kokubuji", Iwanami Shoten, 1985, p.79 - 101.

18) The source for this account is Glynn Coppack & Peter Fergusson, "Rievaulx Abbey", English Heritage, 1994.

Sources of Illustrations:

1a. Mitsudera I Iseki Excavation Report, 1988.

1b~ c. Tsuboi Kiyotari (ed), "Fukugen Nihon Taikan 5, Kodai Jukyo to Kofun", Sekai Bunka, 1989.

2a~ b. Martin Welch, "Anglo Saxon England", Batsford/English Heritage, 1992

3a. Okada Shigehiro (ed), "Fukugen Nihon Taikan 3, Tojo to Kokufu, Sekai Bunka, 1988

3b~ c. Nara Kokuritsu Bunkazai Kenkyujo (ed), "Heijokyu Hakkutsu Chosa Hokoku XI", 1981

3d. Okada Shigehiro (ed), "Fukugen Nihon Taikan 3, Tojo to Kokufu, Sekai Bunka, 1988

4a~ 5b. Gustav Milne (ed), "From Roman Basilica to Mediaeval Market, Archaeology in Action in the City of London", HMSO, 1992.

5c. Frank Sear, "Roman Architecture", Batsford, 1989.

6a~ b. Amino Yoshihiro et al (ed), "Yomigaeru Chusei 3, Bushi no Miyako Kamakura", Heibonsha, 1989.

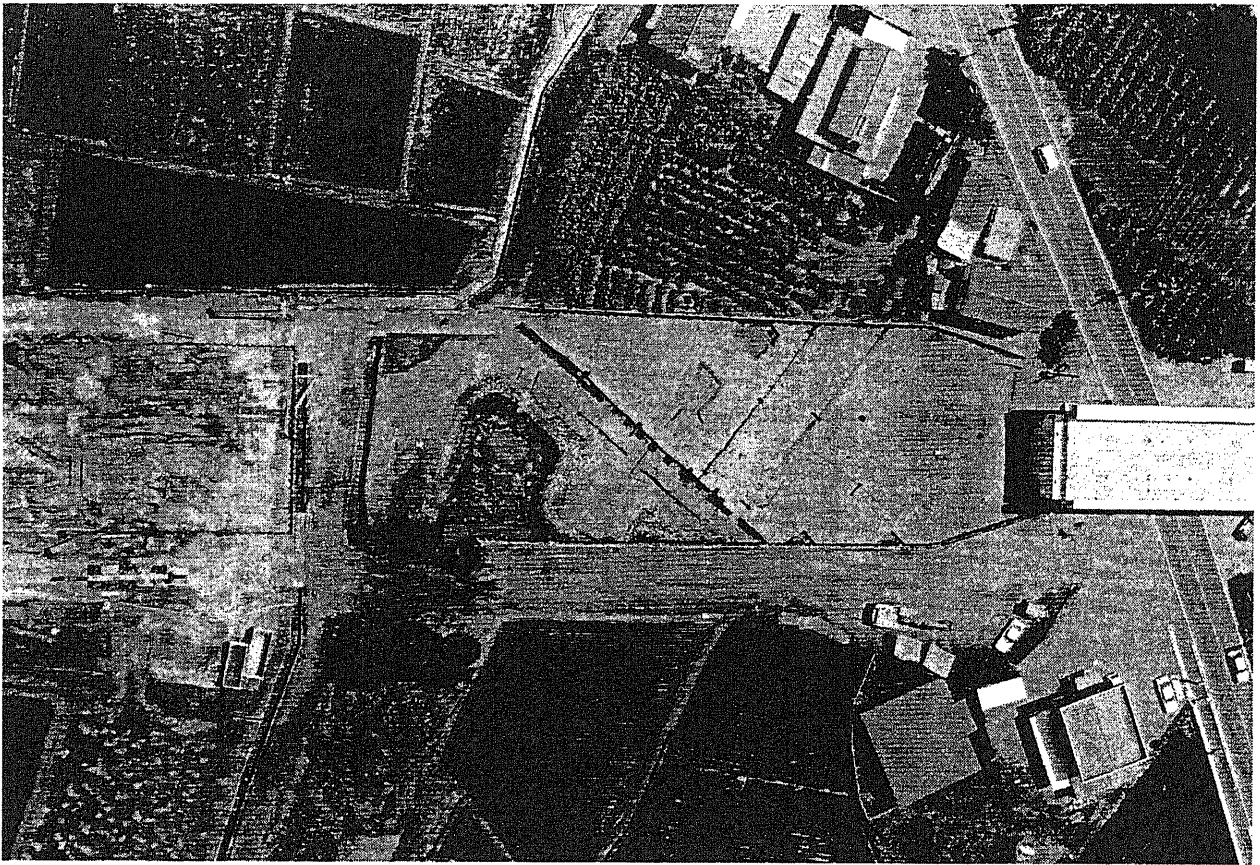
6c. Komatsu Shigemi (ed), "Nihon no Emaki 5, Kokawadera Engi", Chuokoronsha, 1987.

7a~ c. Richard Hall, "Viking Age York", Batsford/English Heritage, 1994.

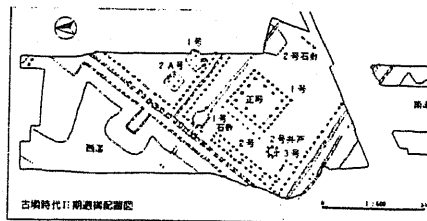
7d. Brian Hope Taylor, "Yeavinger, an Anglo-British Centre of Early Northumbria", HMSO, 1977.

8. Nara Kokuritsu Bunkazai Kenkyujo, "Yamadadera daigoji Hakkutsu Chosa Gaiyo", 1983.

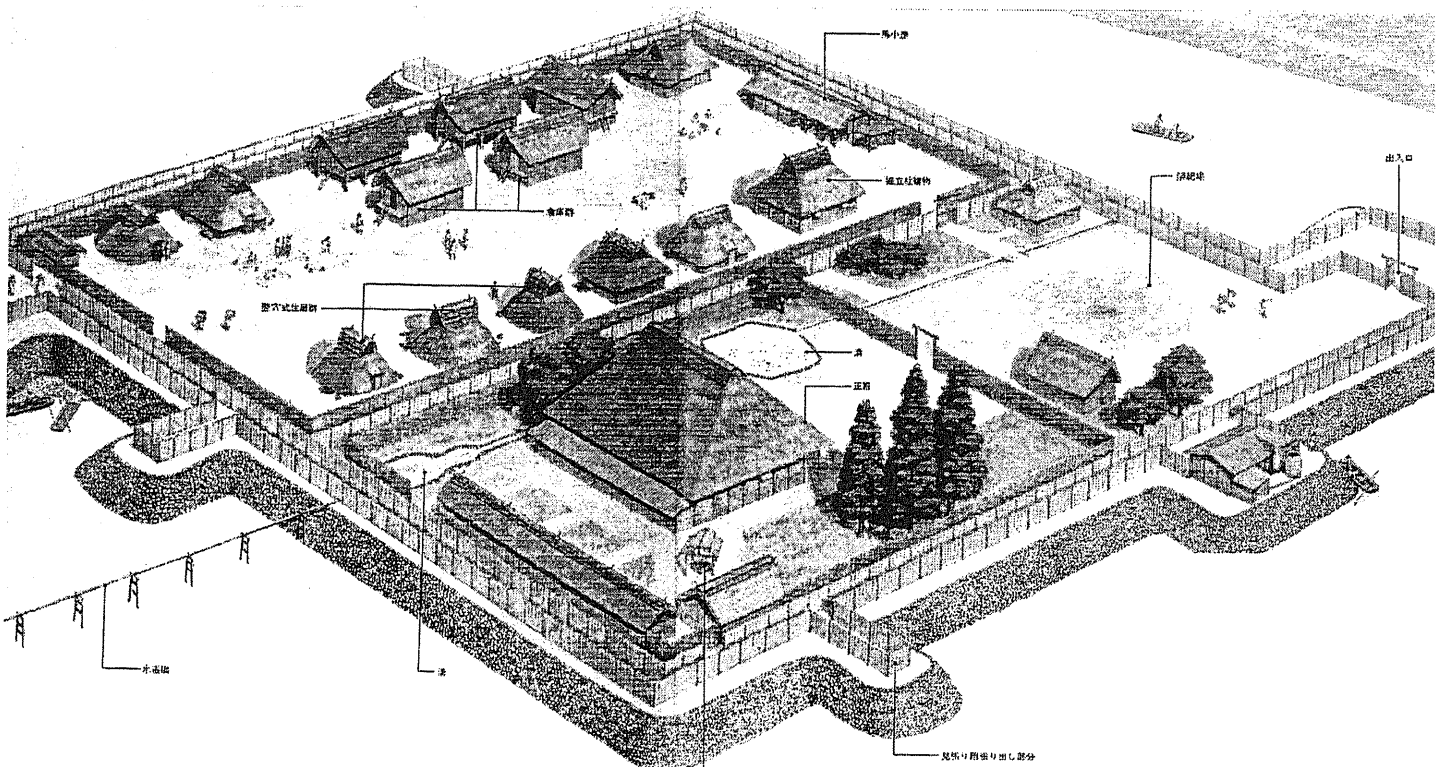
9a~ b Glynn Coppack & Peter Fergusson, "Rievaulx Abbey", English Heritage, 1994.



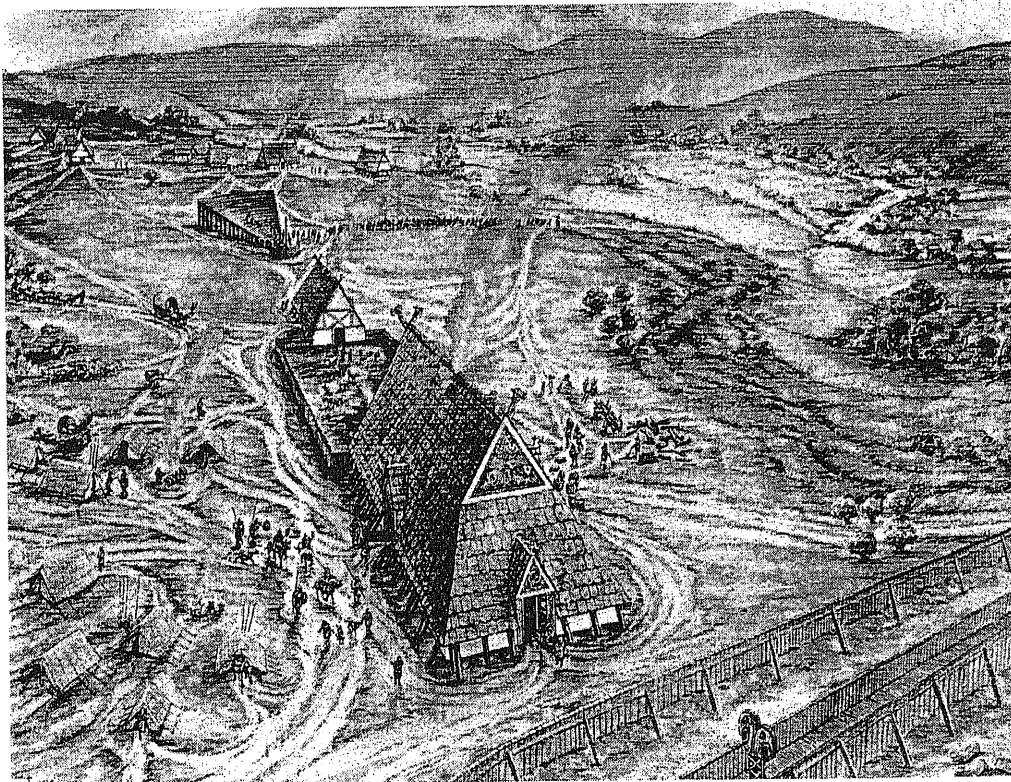
1a Mituidera site from the air.



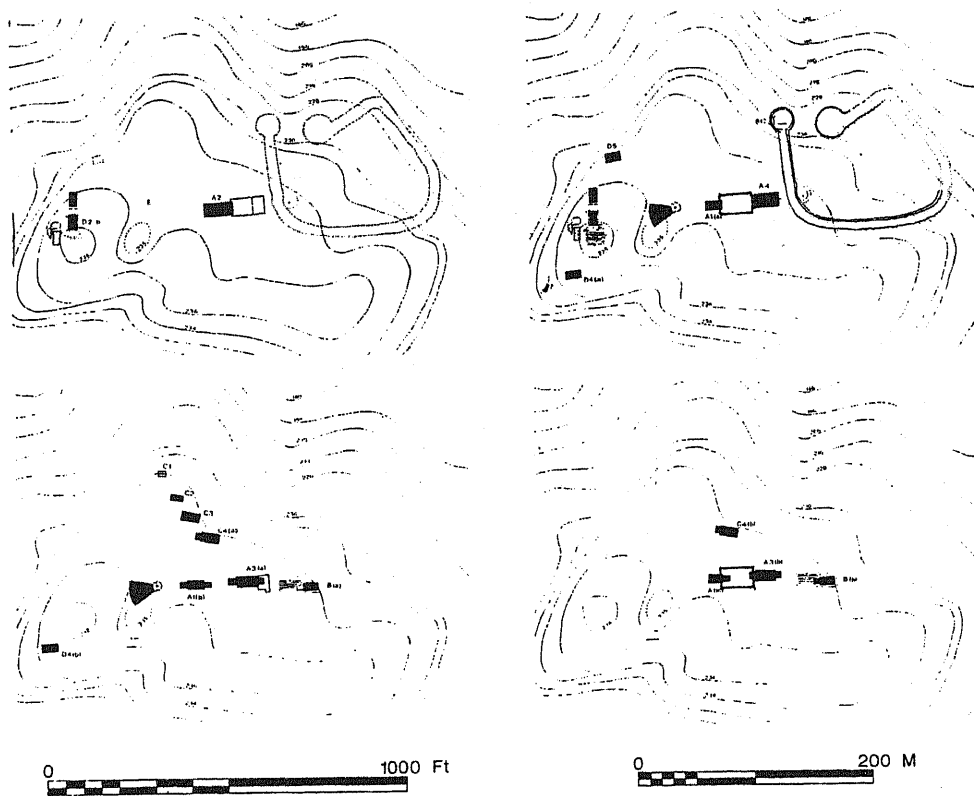
1b Plan of the excavated area of Mituidera, phase II .



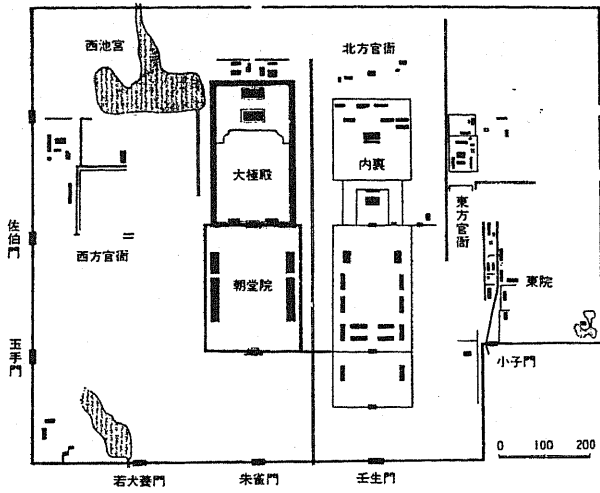
1c Conjectural reconstruction of the 6th century moated complex at Mituidera.



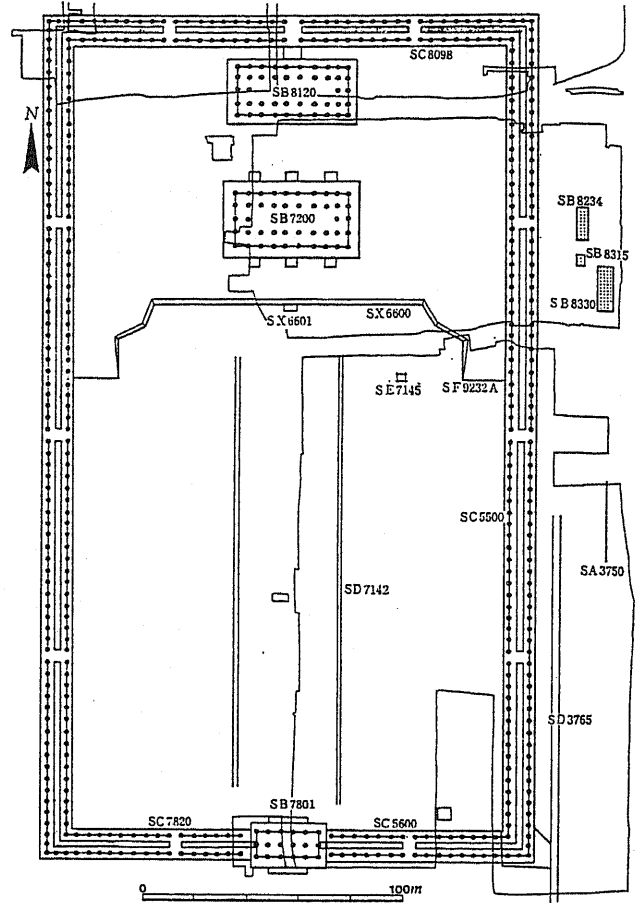
2a conjectural reconstruction of the royal villa at Yeavinger in the time of Edwin:
Hall A4 and the timber grandstand, with further halls in the background.



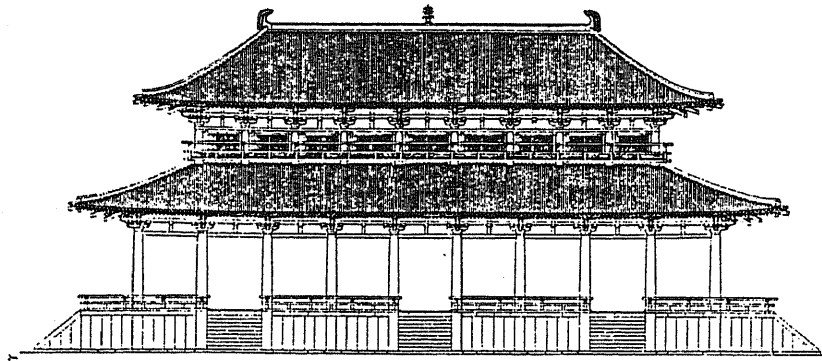
2b Phase plans of the Yeavinger site.



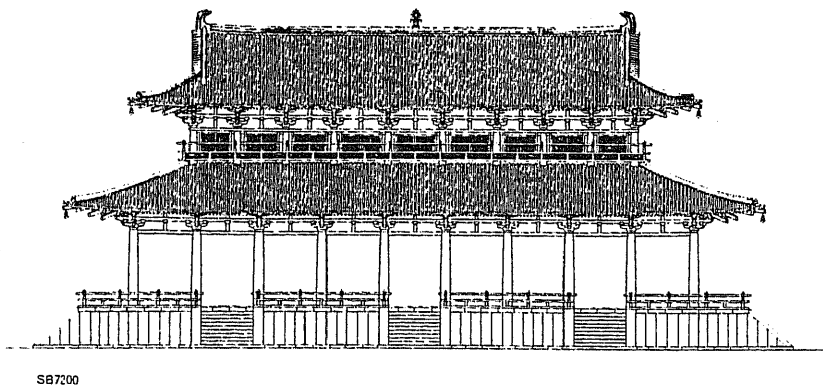
3a Heijyo palace site in the early Nara Period.



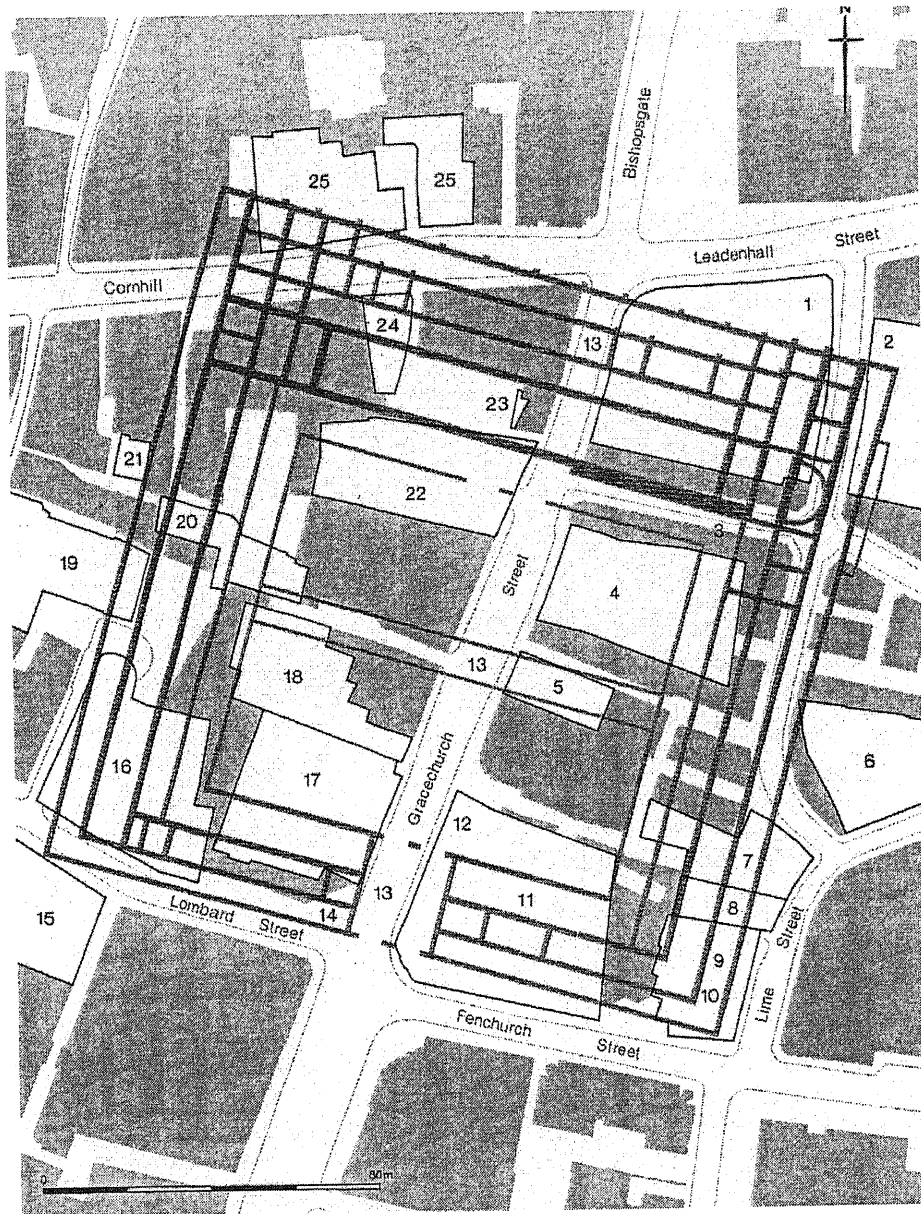
3b The first Daigokuden (SB7200) in its enclosure.



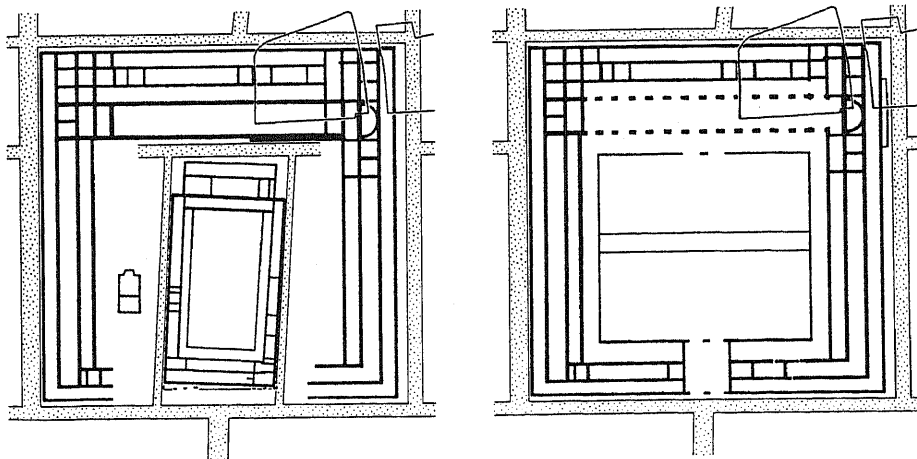
3c Conjectural reconstruction of Daigokuden (south facade) with hipped roof.



3d Conjectural reconstruction of Daigokuden (south facade) with gabled & hipped roof.



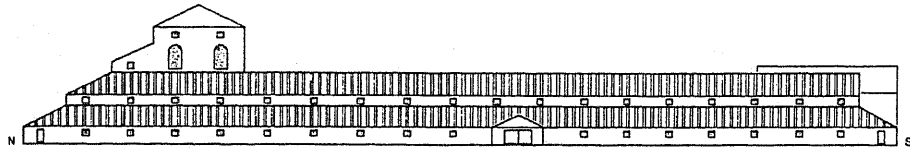
4a Reconstructed plan of basilica and forum superimposed on modern street map: excavated sites from which it was reconstructed are shown numbered.



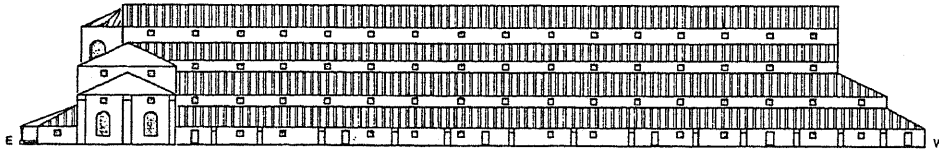
4b Reconstruction plans

Left: great basilica incomplete with first century basilica and forum still standing (c.120 AD).

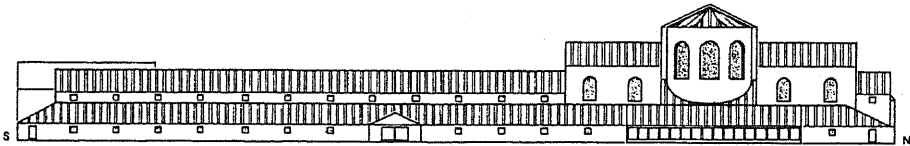
Right: great basilica and forum complete (after 130 AD).



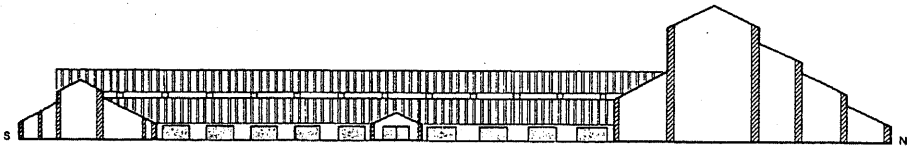
b) External facade of West Range



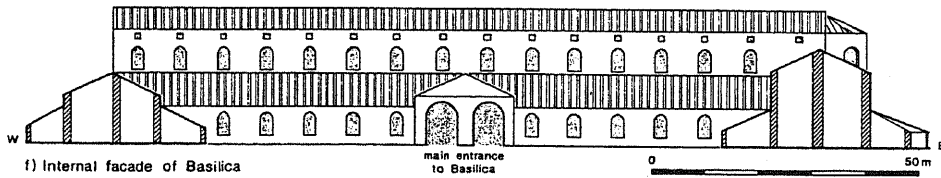
c) External facade of Basilica



d) External facade of East Range

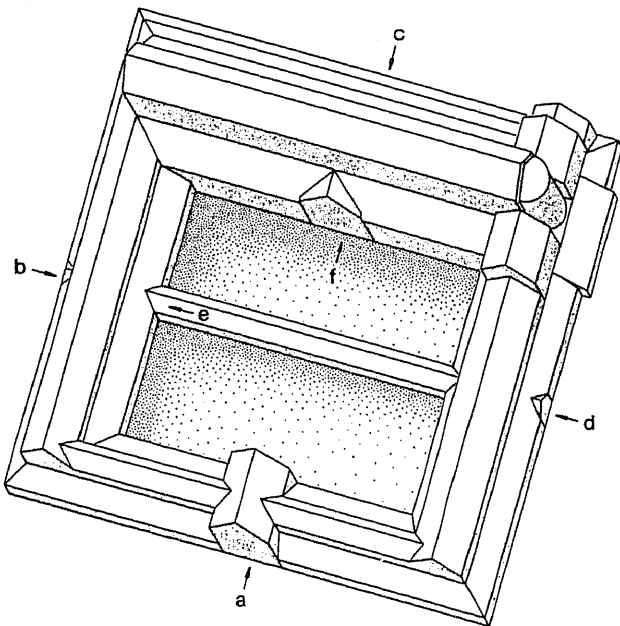


e) Internal facade of West Range

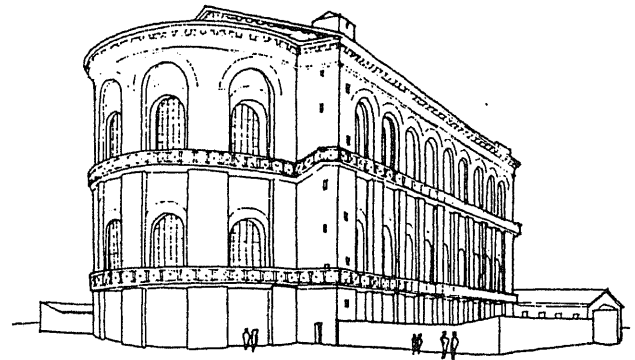


f) Internal facade of Basilica

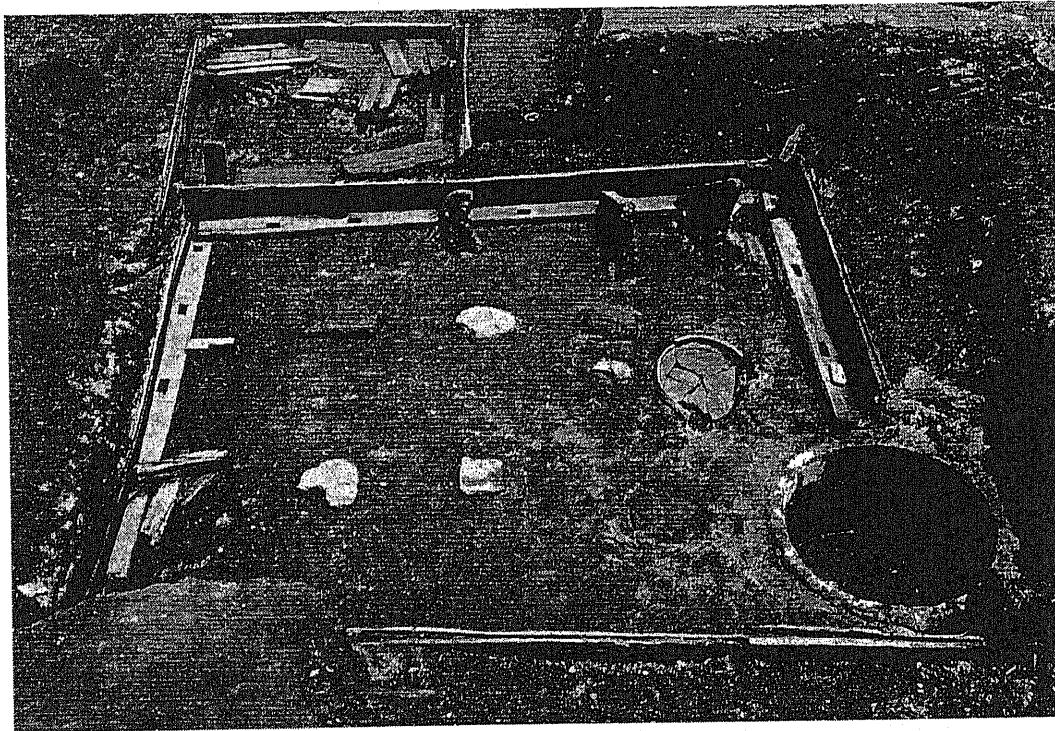
5a Conjectural reconstruction of the elevations of the basilica and forum.



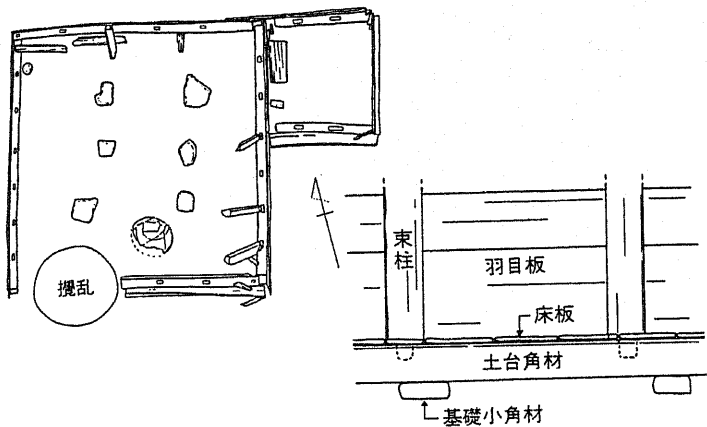
5b Axonometric reconstruction of the form of the basilica and forum.



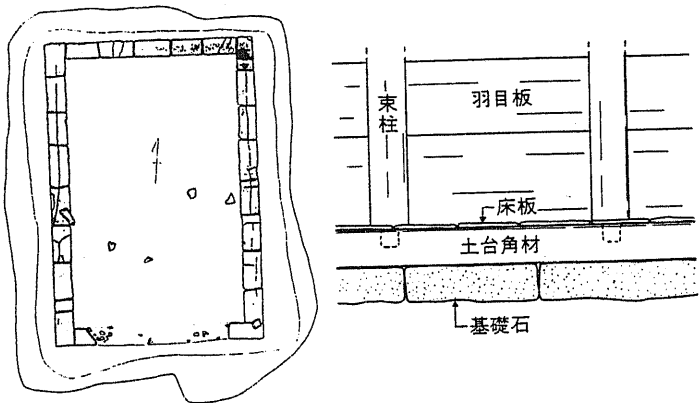
5c Exterior view of the Aula Palatina in Trier



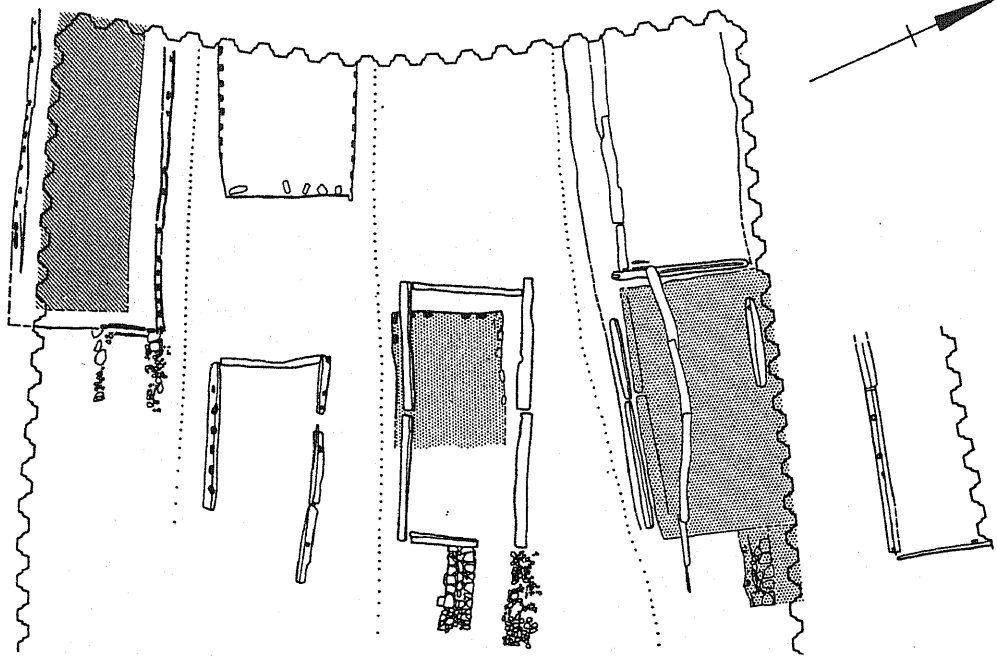
6a Sunken featured building from Suwa Higashi Site in Kamakura (13c).



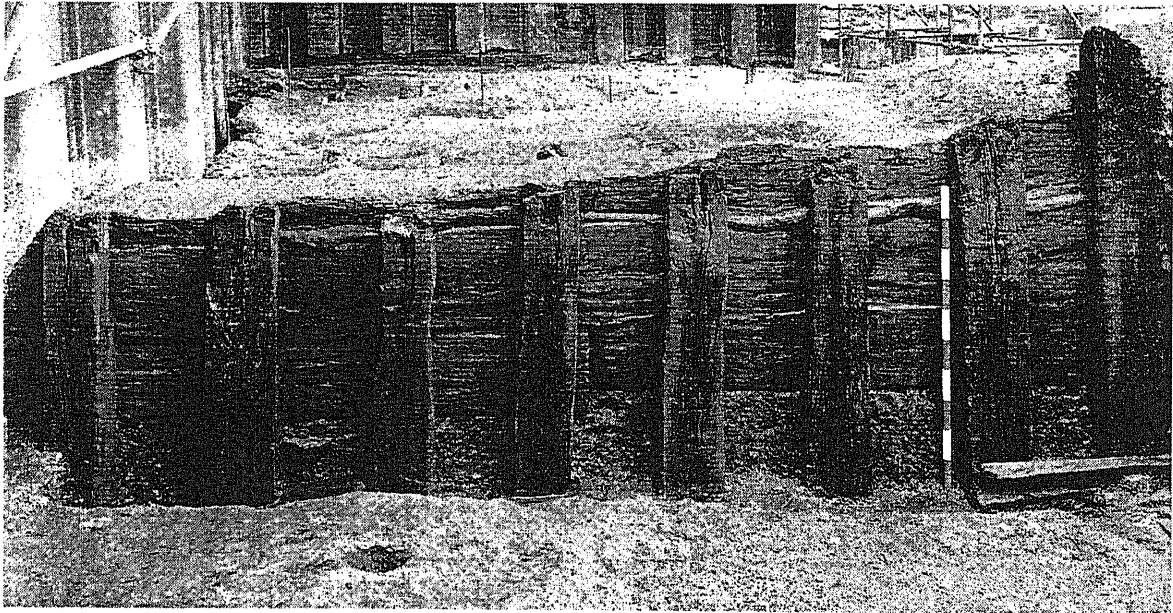
6c Dwelling with apparent sunken floor:
Kokawadera Engi (12c).



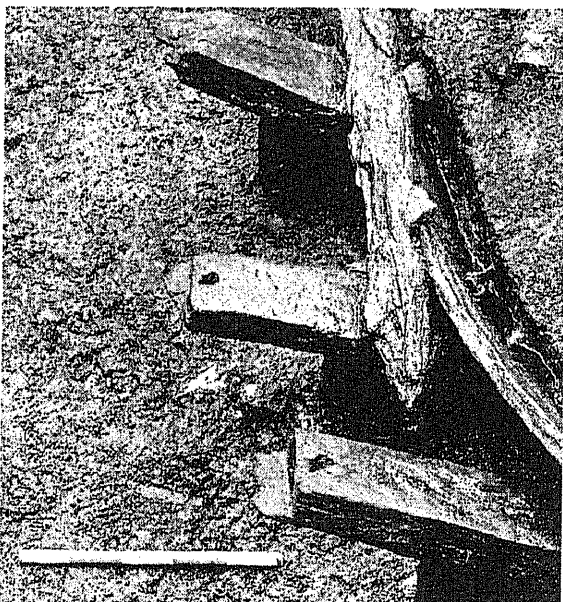
6b Details of sunken featured buildings excavated in
Kamakura.



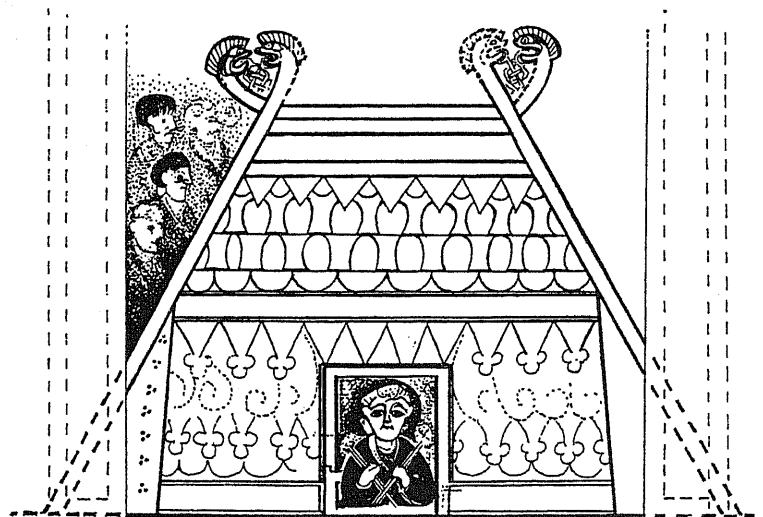
7a Plans of sunken buildings, Coppergate, York (late 10c)



7b The wall of a late tenth-century sunken building from 16-22 Coppergate. Scale: 1m (39in).



7c The collapsed wall of a sunken building at 16-22 Coppergate, surviving top of the uprights. Scale 0.5m.



7d Apparent sunken building (grubenhausa)

Book of Kells.

山田寺第5次発掘調査概要

昭和58年 7月16日
奈良国立文化財研究所

1, 調査期日 昭和58年5月10日～

2, 調査面積 420㎡

3, 調査目的

- a 東回廊建物の復原資料を得ること
- b 東回廊の南北規模を確認すること

4, 東回廊建物 主な出土部材

地覆(じふく) 腰長押(こしなげし) 連子窓(れんじまど) 頭貫(かしらぬき) 大斗(だいと) 卷斗(まきと) 肘木(ひじき) 虹梁(こうりょう) 円垂木(まるだるき) 桁(けた) 屋根木舞(やねこまい) 茅負(かやおい) など

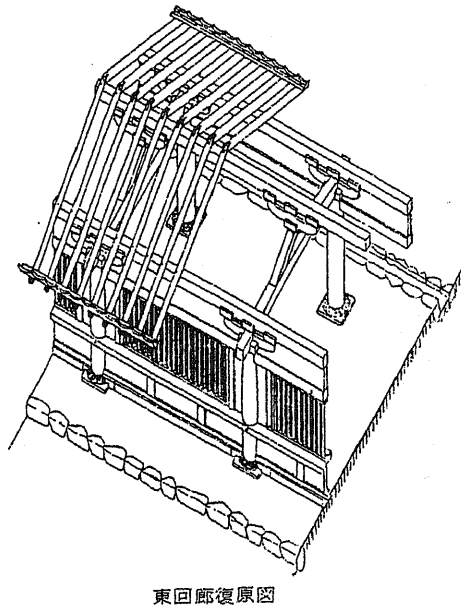
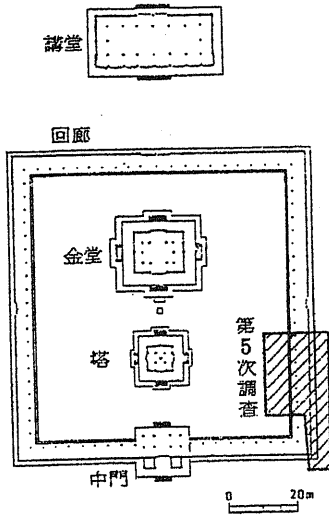
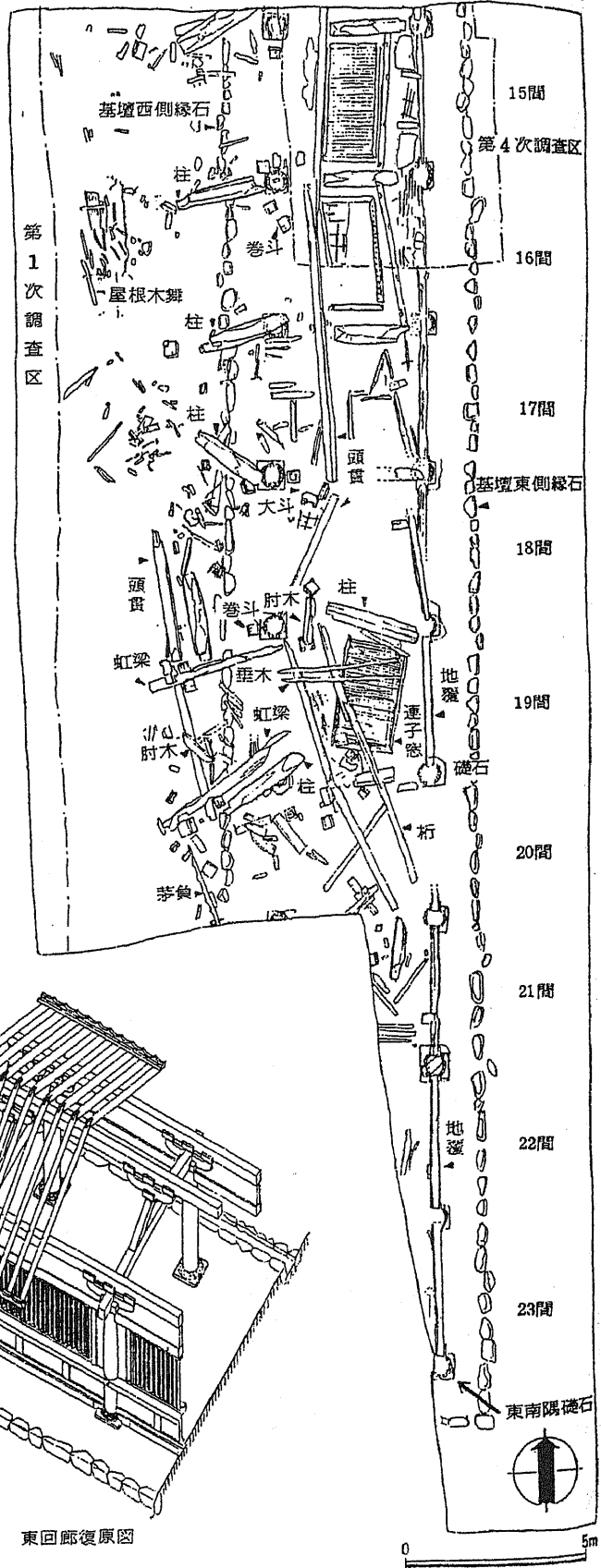
5, 法隆寺回廊との主な相違点

礎石に蓮弁がある。連子窓の面積が狭い。組物の細部形式が異なる。特に、大斗には皿斗盤がつかない。肘木の曲線部分に、舌(ぜつ)がつく。垂木は円垂木である。柱が短く、棟高が低い。

6, 東回廊規模 南北23間(総長約87m)

7, 建立年代 7世紀中頃

8, 倒壊年代 10世紀後半～11世紀前半

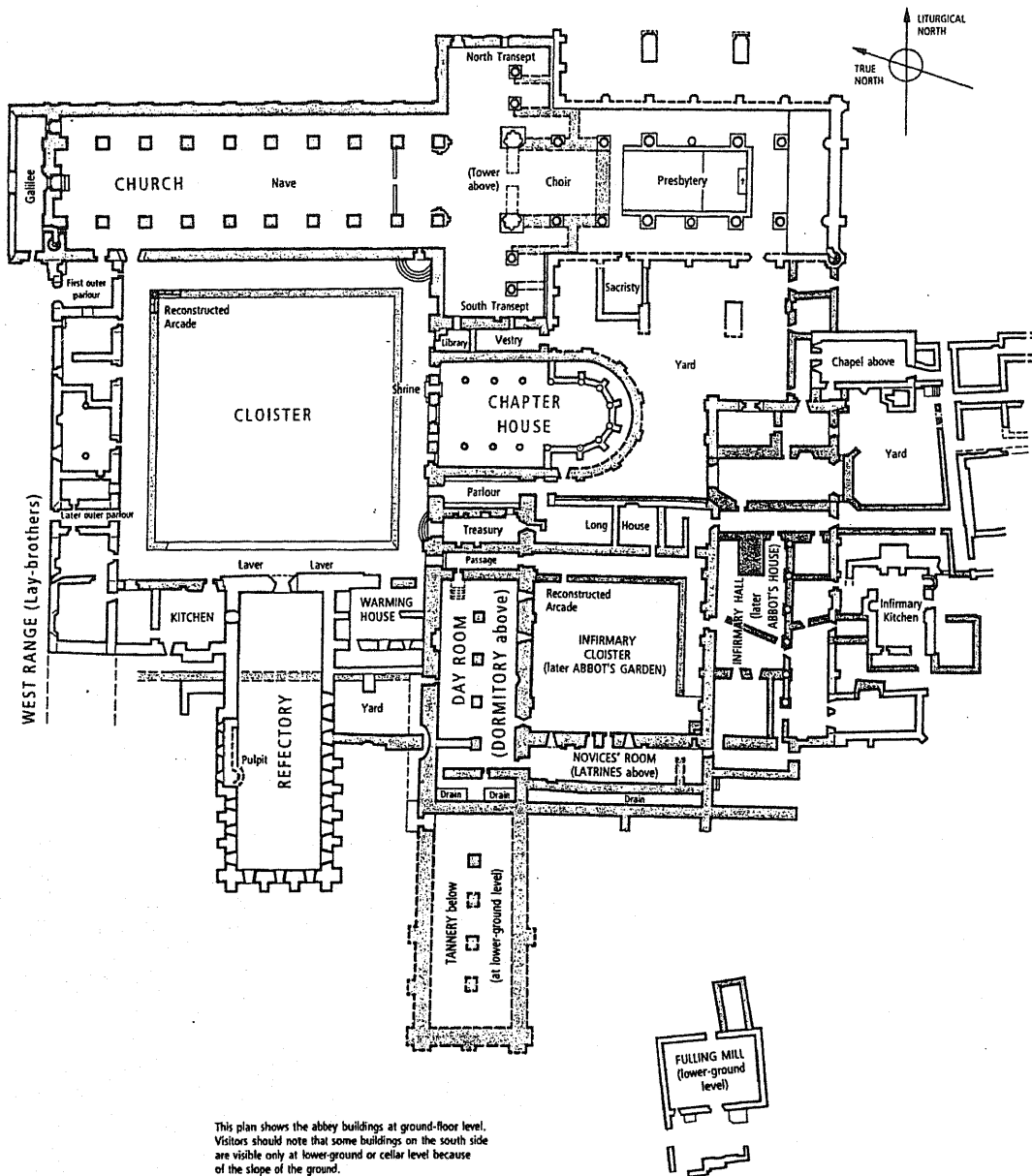


8 Explanatory leaflet illustrating the discovery of the eastern arm of the cloister at Yamada-dera.

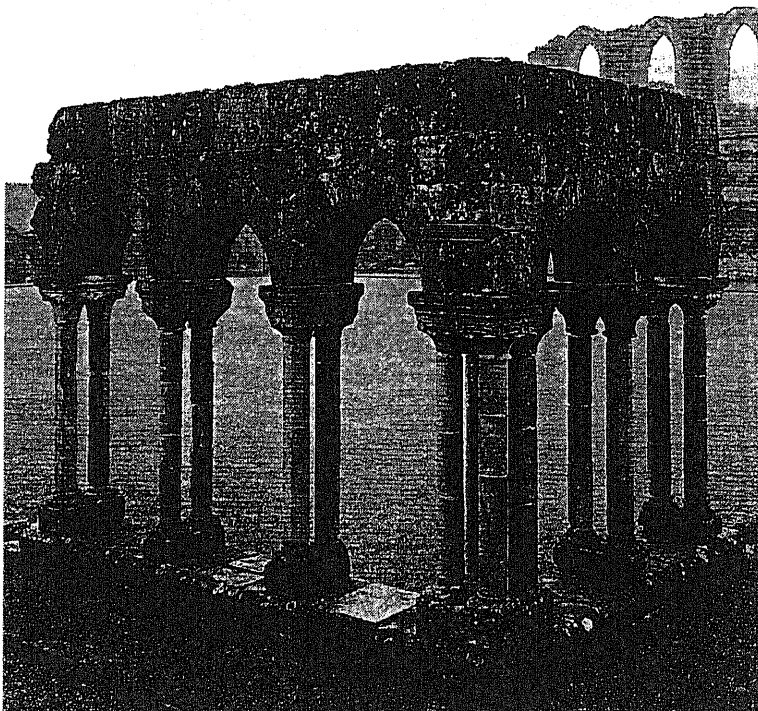
right: plan of excavations.

bottom centre; reconstruction of typical bay.

bottom left: reconstructed plan of temples showing position of excavated area.



9a Site plan of Rievaulx Abbey showing position of reconstructed cloister arcade.



9b In situ reconstruction of cloister arcade, Rievaulx Abbey, Yorkshire.